

豊 後 府 内 16

(第1分冊)

— 庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) —

(中世大友府内町跡第41・69・75・77調査区)

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 16

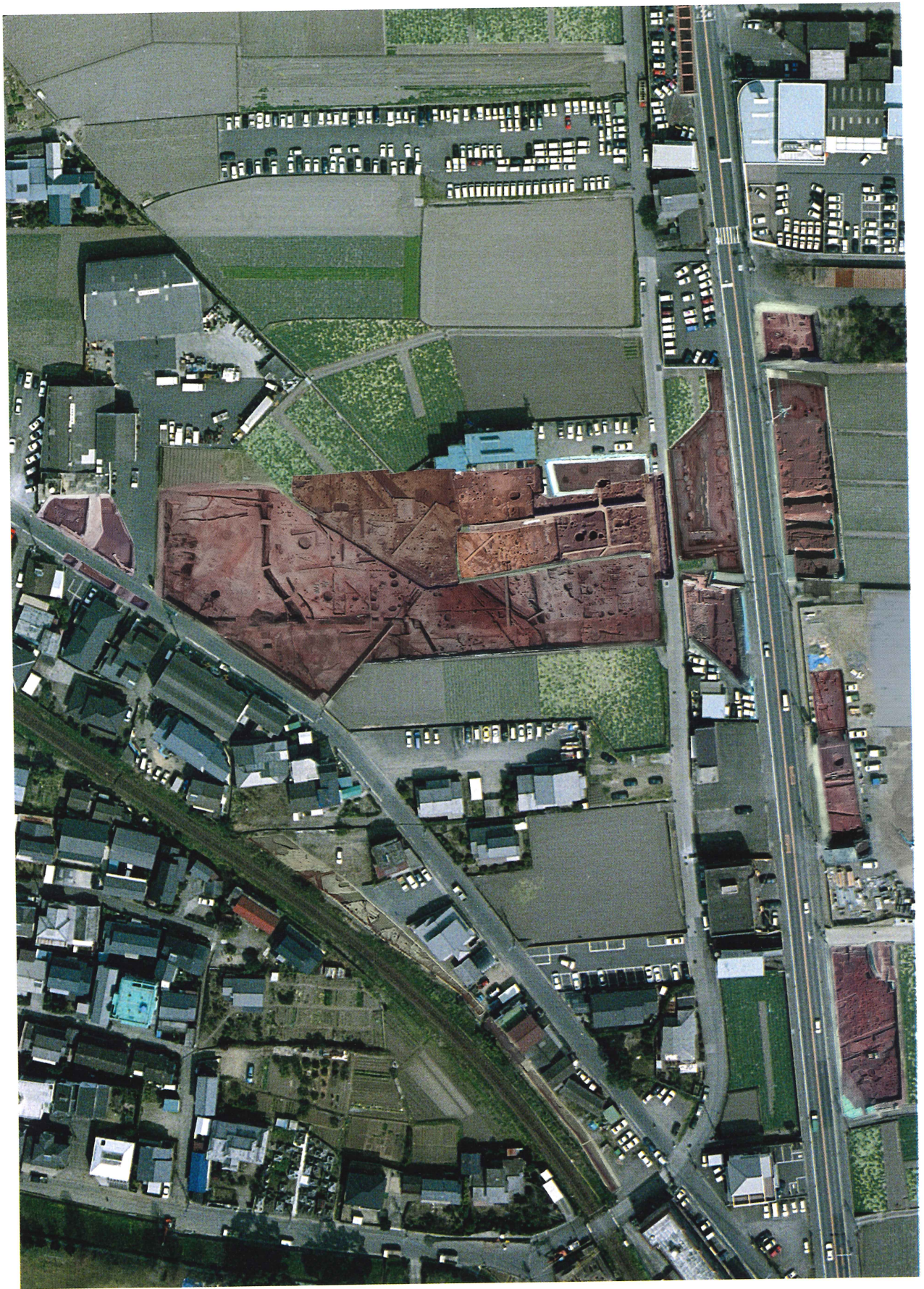
(第1分冊)

— 庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) —

(中世大友府内町跡第41・69・75・77調査区)

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター



真上からみた第41次調査区と周辺調査区



鳥瞰航空写真

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分駅付近連続立体交差事業に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した中世大友府内町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は豊後国の中心として、古代には豊後国府が置かれ、中世には守護大名であった大友氏の守護所がありました。この大友氏の城下町跡では平成11年以来、各種の開発や遺跡保存事業に伴う発掘調査が行われ、大友氏の館跡や菩提寺であった万寿寺跡、キリスト教会跡、それらを取り巻く町屋や道路・堀等の跡が次第に明らかになってきました。

本書に収録した第41次・69次・75次・77次調査区は、大友氏の城下町を描いた「府内古図」によれば、大友氏が領土内から集積した生産物を収納した「御蔵場」・その周辺にあった「魚ノ店」・「ノコギリ町」やそれらの周辺、当時の城下町中央を南北に貫く街路などの地域に該当します。

当該四ヶ所の調査区からは数百年間にわたる生活の跡や多数の遺構が検出されました。これらは、道路に面した建物群やその背後に設けられた井戸、ゴミ穴などに相当し、当時の町屋の状態をうかがうことができます。また、出土した多数の遺物には、備前や播磨その他の国内各地で生産された焼き物の他、中国大陸や東南アジアからもたらされた陶磁器・ガラス皿などの日常用具、キリスト教徒が首に掛けたメダイやガラス玉などの精神生活を示す遺物もあります。

また、中世都市の遺跡のすぐ下から平安時代前期の井戸や弥生時代の遺構・遺物が発掘されました。従来、井戸の底などの深い場所で見つかることのあったこの時期の生活の跡が場所によっては中世遺跡の直下に分布することが分かり、大分平野の発達史を解き明かす貴重な発見となりました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究の資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 佐藤 英一

例 言

1. 本書は大分県大分市六坊北町に所在する中世大友府内町跡第41・69・75・77次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
3. 中世大友府内町跡第41次調査は平成16（2004）年5月20日から平成17（2005）年3月9日にかけて実施し、高橋信武・矢部勝徳・三田尻令子・河原英明・古庄博之が担当した。
また、中世大友府内町跡第69次調査は平成18（2006）年7月13日から平成19（2007）年1月31日にかけて実施し、高橋信武・槇島隆二が担当した。中世大友府内町跡第75次調査は平成19（2007）年11月20日から平成20（2008）年3月12日にかけて実施し、高橋・綿貫俊一が担当した。中世大友府内町跡第77次調査は平成19（2007）年5月29日から平成19（2007）年10月30日にかけて実施し、高橋・江田 豊・横澤 慈が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は上記職員の他、民間調査機関の協力を得た(第41次調査：明大工業－調査員 牟田・佐藤。第69次調査：株式会社パスコー調査員岡本範之・秀嶋龍男・足達通夫・福山寿仁)。第75次調査：明大工業－調査員牟田健二・佐藤万里江。第77次調査：株式会社パスコー調査員秀嶋龍男・福山寿仁・土沼章一・首藤晴美)。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う現地調査終了後の諸作業については、平成20年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員が大部分行い、一部を平成21年度に九州文化財研究所に委託した。委託整理作業は埋蔵文化財センターの整理作業棟において実施した。遺物撮影は埋蔵文化財センターの河野真幸が撮影した。
6. 出土遺物ならびに凶面・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については世界測地系の数値を使用している。10m包含の調査区の区割りは、従来の中世大友城下町跡と共通のものである。
8. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SD（溝）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SE（井戸）、SF（道路）、SA（柱穴列）、SP（柱穴及び小穴）、SX（性格不明遺構及び集石遺構)
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前系陶器 乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
乗岡 実「近世備前焼播鉢の編年案」（『岡山城三之丸曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会 2000年）
中国南部製焼締陶器 吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.23 2003年）
京都系土師器 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）
在地系土師器 山本哲也「中世の土器」『丹生川坂ノ市条里跡・丹生遺跡群－経営体育成基盤整備事業（丹川地区）に伴う発掘調査報告書－』大分市教育委員会 2009年
10. 動物骨については、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に同定を依頼し、原稿を頂いた。
11. 金属については別府大学文化財研究所に分析を依頼し、平尾良光教授（代表）に原稿を頂いた。
12. 本書の執筆は高橋信武（第41次調査区・第69次A調査区）、後藤一重(第75次調査区)、横澤 慈（第69次B調査区・第77次調査区）が担当した。

総目次

第1分冊	第1章	はじめに(高橋信武)
	第2章	中世大友府内町跡第41次調査区 (高橋信武)
第2分冊	第3章	中世大友府内町跡第69次A調査区 (高橋信武)
	第4章	中世大友府内町跡第69次B調査区 (横澤 慈)
第3分冊	第5章	中世大友府内町跡第75次調査区 (後藤一重)
第4分冊	第6章	中世大友府内町跡第77次調査区 (横澤 慈)
	第7章	中世大友府内町跡から出土した金属製品と鑄造関連遺物の文化財科学的調査 (平尾良光 他)
		中世大友府内町跡第41次・69次・77次調査出土の動物遺体 (西本豊弘)
	第8章	まとめ (高橋信武・後藤一重・横澤 慈)

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	1
3.	調査の体制	3
第2節	遺跡の立地と環境	
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	5
第3節	報告書作成にあたって	
1.	府内古図と御蔵場	6
2.	中世大友城下町跡遺物編年を理解するために(土師器・備前焼・磁器の編年表)	9
第2章	中世大友府内町跡第41次調査区	12
第1節	調査の経緯	12
第2節	遺構の概要と基本層序	12
第3節	近世以降の遺構と遺物	15
第4節	中世の遺構と遺物	16
第5節	包含層の遺物	198
第6節	まとめ	258
	遺構一覧表	261
	遺物観察表	273
	写真図版	313

図 版 目 次

第1図	中世大友府内町跡位置図(1/10万) ……	2	第40図	SK18実測図……………	31
第2図	大分平野の地形と主要遺跡(1/5万) ……	4	第41図	SK18出土遺物実測図①……………	32
第3図	「府内古図」と第1～4南北街路……………	5	第42図	SK18出土遺物実測図②……………	33
第4-1図	今回報告する調査区……………	7	第43図	SX18出土遺物③……………	34
第5図	中世大友城下町跡の土師質土器編年図…	10	第44図	SX18出土遺物実測図④……………	35
第6図	第41次調査区位置図……………	11	第45図	SX18出土遺物実測図⑤……………	36
第7図	第41次調査区全遺構検出状況図……………	12	第46図	SX18出土銭貨拓影……………	35
第8図	上層検出遺構分布状況……………	13	第47図	SD19実測図……………	37
第9図	近世頃の遺構実測図……………	14	第48図	SD19出土遺物実測図……………	37
第10図	SD1実測図……………	15	第49図	欠番	
第11図	SD1出土遺物実測図……………	15	第50図	SK20出土銭貨拓影……………	37
第12図	SE2実測図……………	16	第51図	SK20出土遺物実測図……………	38
第13図	SE2出土遺物実測図……………	17	第52図	SK21出土遺物実測図……………	39
第14図	SE3実測図……………	17	第53図	SK21出土銭貨拓影……………	39
第15図	SE3出土遺物実測図……………	18	第54図	SK21・23・24実測図……………	40
第16図	SX4実測図……………	18	第55図	SK22実測図……………	41
第17図	SX4出土遺物実測図①……………	19	第56図	SK22出土遺物実測図……………	42
第18図	SX4出土遺物実測図②……………	20	第57図	SK22出土銭貨拓影……………	42
第19図	SX4出土遺物実測図③……………	21	第58図	SK23出土遺物実測図……………	42
第20図	SX4出土遺物実測図④……………	22	第59図	SK25実測図……………	42
第21図	SX4出土銭貨拓影……………	22	第60図	SK26実測図……………	42
第22図	SX5実測図……………	22	第61図	SK26出土遺物実測図……………	43
第23図	SK5出土遺物実測図……………	22	第62図	SK26出土銭貨拓影……………	43
第24図	SD6・15実測図……………	23	第63図	SK28・30出土遺物実測図……………	43
第25図	SD6出土遺物実測図……………	24	第64図	SX32実測図……………	44
第26図	SE7・10実測図……………	25	第65図	SK33実測図……………	44
第27図	SK7出土遺物実測図……………	26	第66図	SK33出土遺物実測図……………	44
第28図	SD8実測図……………	26	第67図	SX34実測図……………	45
第29図	SD8出土遺物実測図……………	26	第68図	SX34出土遺物実測図……………	46
第30図	SE10出土遺物実測図……………	26	第69図	SX35実測図……………	47
第31図	SE10出土銭貨拓影……………	27	第70図	SX36実測図……………	47
第32図	SK10B実測図……………	27	第71図	SX36出土遺物実測図……………	47
第33図	SK11～15出土遺物実測図……………	27	第72図	SK37実測図……………	47
第34図	SX13実測図……………	28	第73図	SK37出土遺物実測図①……………	48
第35図	SX13出土銭貨拓影……………	28	第74図	SK37出土遺物実測図②……………	49
第36図	SX14実測図……………	29	第75図	SX38実測図……………	50
第37図	SX14出土銭貨拓影……………	29	第76図	SX38出土遺物実測図……………	50
第38図	SK16実測図……………	30	第77図	SX38出土銭貨拓影……………	50
第39図	SK16出土遺物実測図……………	30	第78図	SD39・40出土遺物実測図……………	51

第79図	SK45実測図	51	第121図	SD84中部実測図	68
第80図	SK49実測図	51	第122図	Y63区東壁層序図	68
第81図	SK41～49出土遺物実測図	51	第123図	SD84出土遺物実測図①	69
第82図	SK55実測図	52	第124図	SD84出土遺物実測図②	70
第83図	SK55出土遺物実測図	52	第125図	SD84出土遺物実測図③	71
第84図	SK57実測図	52	第126図	SD84出土遺物実測図④	72
第85図	SK61・62実測図	52	第127図	SD84出土遺物実測図⑤	73
第86図	SK57出土遺物実測図	53	第128図	SD84出土遺物実測図⑥	74
第87図	SK58・59実測図	54	第129図	SD84出土銭貨拓影	74
第88図	F64区の土坑群実測図	54	第130図	SD84とSD103交点付近の検出面実測図	75
第89図	SK58～62実測図	55	第131図	SD123出土遺物実測図①	76
第90図	SX63実測図	56	第132図	SD123出土遺物実測図②	77
第91図	SX63出土遺物実測図	56	第133図	SD123出土遺物実測図③	78
第92図	SK64実測図	57	第134図	SD123出土銭貨拓影	78
第93図	SK64出土遺物実測図	57	第135図	SK105実測図	79
第94図	SK64出土銭貨拓影	57	第136図	SK105出土遺物実測図	79
第95図	SK66出土遺物実測図	57	第137図	SD103部分及び土層図	80
第96図	SX70実測図	57	第138図	SD103出土遺物実測図①	81
第97図	SK71実測図	58	第139図	SD103出土遺物実測図②	82
第98図	SK71出土遺物実測図	58	第140図	SD103出土遺物実測図③	83
第99図	SE72出土遺物実測図	58	第141図	SD103出土銭貨拓影	83
第100図	SE72実測図	59	第142図	SD113出土遺物実測図	84
第101図	SE73実測図	59	第143図	SD113出土銭貨拓影	84
第102図	SD74実測図	59	第144図	SK186実測図	85
第103図	SX74出土遺物実測図	60	第145図	SK85・86と周辺実測図	86
第104図	SK77・82と周辺実測図	60	第146図	SK85断面図	86
第105図	SK77出土遺物実測図	60	第147図	SK85出土遺物実測図	87
第106図	SE78出土銭貨拓影	60	第148図	SE87実測図	88
第107図	SE78実測図	61	第149図	SE87出土遺物実測図	88
第108図	SE79実測図	61	第150図	SK88・89実測図	89
第109図	SE79出土遺物実測図	61	第151図	SE88・89出土遺物実測図	89
第110図	SK80実測図	62	第152図	SD90・99・133実測図	90
第111図	SK80出土遺物実測図	62	第153図	SD90～92実測図	91
第112図	SK81実測図	62	第154図	SX93出土遺物実測図	91
第113図	SK81出土遺物実測図①	62	第155図	SK90出土遺物実測図	92
第114図	SK81出土遺物実測図②	63	第156図	SX93実測図	92
第115図	SK82出土遺物実測図	64	第157図	SK94実測図	93
第116図	SK81出土遺物実測図②	64	第158図	X～Z区遺構配置図	94
第117図	調査区西部の遺構配置図	65	第159図	SK94出土遺物実測図	95
第118図	SD84・103・114全体図	66	第160図	SK95実測図	96
第119図	SD84西部拡大図	67	第161図	SK95出土遺物実測図	96
第120図	SD84・103・SK140層序図	67	第162図	SK96・97実測図	96

第163図	SK99出土遺物実測図……………	96	第204図	SK115・116出土遺物実測図……………	131
第164図	SE100実測図①……………	97	第205図	SK118・119出土遺物実測図……………	131
第165図	SE100実測図②……………	98	第206図	SK117・118・124・125等実測図……………	132
第166図	SD100出土遺物実測図……………	99	第207図	SK119・120実測図……………	133
第167図	SE100出土銭貨実測図……………	99	第208図	SK120出土遺物実測図……………	133
第168図	A63区標高5m前後の遺構分布図……	100	第209図	欠番	
第169図	SK101～104出土遺物実測図……………	101	第210図	SK126実測図……………	134
第170図	SD104実測図……………	102	第211図	SK125・126出土遺物実測図……………	134
第171図	SE108実測図①……………	103	第212図	SK127実測図……………	135
第172図	SE108実測図②……………	104	第213図	SK127実測図……………	135
第173図	SE108出土遺物実測図①……………	105	第214図	SK125・126出土遺物実測図①……………	136
第174図	SE108出土遺物実測図②……………	106	第215図	SK127出土遺物実測図②……………	137
第175図	SE108出土遺物実測図……………	107	第216図	SK127出土遺物実測図③……………	138
第176図	SK109実測図……………	108	第217図	SK127出土銭貨拓影……………	138
第177図	SK109出土遺物実測図……………	109	第218図	SK128出土銭貨拓影……………	138
第178図	SK109出土銭貨拓影……………	109	第219図	SK127出土銭貨拓影……………	138
第179図	SD110出土遺物実測図……………	109	第220図	SD130実測図……………	139
第180図	SD110出土遺物実測図……………	110	第221図	SK131実測図……………	139
第181図	SK111実測図……………	110	第222図	SD132・SK133出土遺物実測図……………	139
第182図	SD112実測図……………	111	第223図	SK135実測図……………	140
第183図	SD112実測図……………	112	第224図	SK136実測図……………	140
第184図	SD112実測図……………	113	第225図	SK136出土遺物実測図……………	141
第185図	SD112出土遺物実測図①……………	114	第226図	SD137出土遺物実測図……………	141
第186図	SD112出土遺物実測図②……………	115	第227図	SD137実測図……………	142
第187図	SD112出土遺物実測図③……………	116	第228図	SK138・139出土遺物実測図……………	143
第188図	SD112出土遺物実測図④……………	117	第229図	SK140実測図……………	144
第189図	SD112出土遺物実測図⑤……………	118	第230図	SK140出土遺物実測図……………	144
第190図	SD112出土遺物実測図⑥……………	119	第231図	SK141出土遺物実測図……………	145
第191図	SD112出土遺物実測図⑦……………	120	第232図	SK141出土銭貨拓影……………	145
第192図	SD112出土遺物実測図⑧……………	121	第233図	SK142実測図……………	146
第193図	SD112出土遺物実測図⑨・⑩……………	122	第234図	SK142出土遺物実測図……………	146
第194図	SD112出土遺物実測図⑪……………	124	第235図	SK143実測図……………	147
第195図	SD112出土遺物実測図⑫……………	125	第236図	SK143出土遺物実測図……………	147
第196図	SD112出土遺物実測図⑬……………	126	第237図	欠番	
第197図	SD112出土遺物実測図⑭……………	127	第238図	SK144出土遺物実測図……………	148
第198図	SD112出土遺物実測図⑮……………	128	第239図	SK145出土遺物実測図……………	148
第199図	SD112出土銭貨拓影……………	128	第240図	SK146・147実測図……………	149
第200図	SD114実測図……………	129	第241図	SK146・147出土遺物実測図……………	150
第201図	SD114出土遺物実測図……………	130	第242図	SK149実測図……………	150
第202図	SD114出土銭貨拓影……………	130	第243図	SK148実測図……………	151
第203図	SK116実測図……………	130	第244図	SK155出土銭貨拓影……………	151
			第245図	SK151・155出土遺物実測図……………	152

第246図 欠番	第288図 SK179実測図	174
第247図 SK158~160出土遺物実測図	第289図 SK197実測図	175
第248図 SK158・163と周辺実測図	第290図 SK197・199出土遺物実測図	175
第249図 SK161・163出土遺物実測図	第291図 欠番	
第250図 SK163出土銭貨拓影	第292図 SD203実測図	176
第251図 SK164~166出土遺物実測図	第293図 調査区南端の南向き面層序図	176
第252図 SD170・233遺物出土状態実測図	第294図 SD203出土遺物実測図①	177
第253図 向かい合う斜軸柱穴実測図	第295図 SD203出土遺物実測図②	178
第254図 SK170出土遺物実測図	第296図 SD203出土遺物実測図③	179
第255図 SE171層序図	第297図 SD203出土遺物実測図④	180
第256図 SE171実測図	第298図 SD203出土銭貨拓影	180
第257図 SE171出土遺物実測図	第299図 SK204・205出土遺物実測図	180
第258図 SK172実測図	第300図 SK204出土銭貨拓影	181
第259図 SX173実測図	第301図 SK206実測図	181
第260図 SK172出土遺物実測図	第302図 SK206出土遺物実測図	181
第261図 SK174・179・180実測図	第303図 SE208実測図	182
第262図 SK174層序図	第304図 SE208・SK209出土遺物実測図	183
第263図 SK174出土遺物実測図	第305図 SD210と周辺実測図	184
第264図 SK175実測図	第306図 SD230・232出土遺物実測図	184
第265図 SK175出土遺物実測図	第307図 SK211・SD230等実測図	185
第266図 SK176実測図	第308図 SD210~212出土遺物実測図	186
第267図 SK177・38実測図	第309図 SD212実測図	187
第268図 SK177~181出土遺物実測図	第310図 SK216・217・225実測図	188
第269図 SK182・183実測図	第311図 SK217出土遺物実測図	188
第270図 SK182出土遺物実測図	第312図 SK218出土銭貨拓影	188
第270-2図 SE150実測図	第313図 SK219~221と周辺実測図	189
第271図 SK184~186・201・202・204・207実測図	第314図 SK223と同時検出面の柱穴類実測図	190
第272図 SK184・204等断面図	第315図 SP223~227出土遺物実測図	191
第273図 SK186層序図	第316図 SK231実測図	192
第274図 SK184出土銭貨拓影	第317図 SD223実測図	192
第275図 SK184出土遺物実測図	第318図 SD233出土遺物実測図	193
第276図 SK201出土遺物実測図	第319図 SD233出土遺物実測図	194
第277図 SK185出土遺物実測図	第320図 Z区東壁図	194
第278図 SK185出土銭貨拓影	第321図 SP234・235出土遺物実測図	195
第279図 SK202出土遺物実測図	第322図 SK236実測図	195
第280図 SK186・187出土遺物実測図	第323図 SK236出土遺物実測図	195
第281図 SK187実測図	第324図 SK238・239実測図	196
第282図 SK188・189実測図	第325図 SK237・240出土遺物実測図	196
第283図 SK190実測図	第326図 SK241実測図	196
第284図 SK188・190出土遺物実測図	第327図 SK241出土遺物実測図	196
第285図 SK191・192他実測図	第328図 SK242実測図	197
第286図 SK191・192出土遺物実測図	第329図 SK242出土遺物実測図	197
第287図 SK195出土遺物実測図		

第330図	SK228・243出土遺物実測図……………	198	第376図	Y63区出土遺物実測図①……………	228
第331図	SK249・252と周辺実測図……………	199	第377図	Y63区出土遺物実測図②……………	229
第332図	SK244～257出土遺物実測図……………	200	第378図	Y64区出土遺物実測図……………	230
第333図	SD260～262実測図……………	201	第379図	Y62区出土遺物実測図……………	231
第334図	SD263実測図……………	202	第380図	Z64区出土遺物実測図……………	232
第335図	SD263・283出土遺物実測図……………	202	第381図	Z63区出土遺物実測図①……………	233
第336図	C区西壁図……………	203	第382図	Z63区出土遺物実測図②……………	234
第337図	A・B区遺構重複状況……………	204	第383図	A63区出土遺物実測図①……………	235
第338図	A・B63・64区遺構重複状況……………	205	第384図	A63区出土遺物実測図②……………	236
第339図	SD213出土遺物実測図……………	206	第385図	A63区出土遺物実測図③……………	237
第340図	SK216層序図……………	206	第386図	A64区出土遺物実測図①……………	238
第341-1図	……………	207	第387図	A64区出土遺物実測図②……………	239
第341-2図	A63・64区の遺構重複状況……………	208	第388図	A区東壁内出土遺物実測図……………	240
第342図	SB1実測図……………	209	第389図	B63区出土遺物実測図①……………	241
第343図	SB2実測図……………	210	第390図	B63区出土遺物実測図②……………	242
第344図	SB3実測図……………	211	第391図	B64区出土遺物実測図①……………	243
第345図	SP1019～1088出土遺物実測図……………	212	第392図	B64区出土遺物実測図②……………	244
第346図	SP1115～1260出土遺物実測図……………	213	第393図	C63区出土遺物実測図①……………	245
第347図	SP1262～1313出土遺物実測図……………	214	第394図	C63区出土遺物実測図②……………	246
第348図	SP1324～1403出土遺物実測図……………	215	第395図	C64区出土遺物実測図……………	247
第349図	SP1408～1832出土遺物実測図……………	216	第396図	D62区出土遺物実測図……………	248
第350～353図	銭貨拓影……………	217	第397図	D63区出土遺物実測図……………	249
第354～357図	W61～Z64区出土銭貨拓影……………	218	第398図	D64区出土遺物実測図……………	250
第358-359図	A63区出土銭貨拓影……………	219	第399図	E64区出土遺物実測図……………	250
第360-361図	Y63・Z63区出土銭貨拓影……………	220	第400図	E63区出土遺物実測図①……………	251
第362-363図	B63・C63区出土銭貨拓影……………	221	第401図	E63区出土遺物実測図②……………	252
第368図	D・E・F3区出土銭貨拓影……………	222	第402図	E63区出土遺物実測図③……………	253
第369図	B64区出土銭貨拓影……………	223	第403図	E63区出土遺物実測図④……………	254
第370図	B64区銭貨出土状態実測図……………	224	第404図	F63区出土遺物実測図①……………	255
第371図	C64区出土銭貨拓影……………	224	第405図	F63区出土遺物実測図②……………	255
第372・373図	41次調査区一括採上げ銭貨拓影……………	225	第406図	表面採集の遺物実測図……………	256
第374図	T/V60・W61/63/65区出土遺物実測図……………	226	第407図	メダイ・銅製品実測図……………	257
第375図	X61～64区出土遺物実測図……………	227	第408図	調査区と町割復元図の関係……………	260

表 目 次

遺構一覧表 1	……………	263
遺構一覧表 2	……………	264
遺構一覧表 3	……………	265

遺構一覽表 4	266
遺構一覽表 5	267
遺構一覽表 6	268
遺構一覽表 7	269
遺構一覽表 8	270
遺構一覽表 9	271
遺構一覽表 10	272

第41次調査区遺物観察一覽表

遺物観察表 1	275
遺物観察表 2	276
遺物観察表 3	277
遺物観察表 4	278
遺物観察表 5	279
遺物観察表 6	280
遺物観察表 7	281
遺物観察表 8	282
遺物観察表 9	283
遺物観察表 10	284
遺物観察表 11	285
遺物観察表 12	286
遺物観察表 13	287
遺物観察表 14	288
遺物観察表 15	289
遺物観察表 16	290
遺物観察表 17	291
遺物観察表 18	292
遺物観察表 19	293
遺物観察表 20	294
遺物観察表 21	295
遺物観察表 22	296
遺物観察表 23	297
遺物観察表 24	298
遺物観察表 25	299
遺物観察表 26	300
遺物観察表 27	301
遺物観察表 28	302
遺物観察表 29	303
遺物観察表 30	304
遺物観察表 31	305

遺物観察表32	306
遺物観察表33	307
遺物観察表34	308
遺物観察表35	309
遺物観察表36	310
遺物観察表37	311

写真図版目次

巻頭写真図版1

真上からみた第41次調査区および周辺調査区

巻頭写真図版2

鳥瞰航空写真

遺構写真図版

写真図版1

第41次調査区東部と第43次調査区の空撮

写真図版2

第41次調査区東半分の真上からの空撮

写真図版3

第41次調査区中央部の空撮

写真図版4

SD1 (西から)

写真図版5

SD1遺物出土状況

写真図版6

SK5メダイ出土状況

SE2半裁状況 (北部)

写真図版7

SE2調査中の状況

SE2土層断面

写真図版8

SK3上部遺物出土状況

K3調査状況 (北西から)

写真図版9

SK4上部検出状況 (南東から)

SK4上部遺物出土状況 (北東から)

写真図版10

SK4下部遺物出土状況 (南東から)

SX5遺物出土状況 (南から)

写真図版11

SX5遺物出土状況 (南から)

SE7遺物出土状況 (北から)

写真図版12

SE7・10遺物出土状況 (西半分)

SE7・10近接写真

写真図版13

SD8遺物出土状況 (東から)

SX13銭貨出土状況

写真図版14

SK15完掘状況 (北から)

SK18遺物出土状況 (西から)

写真図版15

SK18調査状況（南から）
SK18遺物出土状況近接写真

写真図版16

SK18完掘後の土坑状態（東から）
SK18完掘状況（南から）

写真図版17

SK18遺物出土状況（近接写真）
SK18（西から）
（D64区最終段階状況）

写真図版18

SK20上部遺物出土状況
（北から）
SK20中部遺物出土状況
（北から）

写真図版19

SK20下部遺物出土状況（北から）
SD21遺物出土状況（西から）

写真図版20

SD21遺物出土状況（東から）

写真図版21

SK22完掘状況（南から）

写真図版22

SK26・SK34検出状況（A64区）
（北から）
SK26遺物出土状況（東から）

写真図版23

SK26完掘状況（北から）

写真図版24

SX34全景（北から）
SX34近景（北から）

写真図版25

A63区メダイ出土状況
SK37検出状況（北西から）

写真図版26

SK37遺物出土状況（西から）

写真図版27

SK37床面付近
（西から）

写真図版28

A64区SK45検出状況（北から）
A64区SK45（北から）

写真図版29

SK45半割状況・土層写真（西から）
SK46・47・48土層断面写真（東から）

写真図版30

SK46・47・48土層断面写真（東から）
SK49遺物出土状況（東から）

写真図版31

SK55調査状況（南から）
SK58調査状況（南から）
SK59遺物出土状況（東から）

写真図版32

SK59遺物出土状況（西から）
SK61・62調査状況（西から）

写真図版33

SK61・62調査状況（北から）
SK64遺物出土状況（東から）

写真図版34

道路遺構検出状況（南東から）
調査状況（北から）

写真図版35

道路遺構舗装状況（北から）
道路遺構舗装状況近接写真（北から）

写真図版36

道路遺構舗装状況近接写真（北から）
道路遺構舗装状況近接写真（東から）

写真図版37

道路遺構全景（南東から）
SE73南部半割状況（北から）

写真図版38

SK78半割土層写真（東から）
SK81遺物出土状況（南から）

写真図版39

SK81遺物出土状況（南西から）
SD84（中央部）調査状況（東から）

写真図版40

SD84遺物出土状況（南から）
SD84遺物出土状況（南から）

写真図版41

SD84遺物出土状況近接写真（北から）
SD84遺物出土状況近接写真（西から）

写真図版42

SD84遺物出土状況（南から）
SD84遺物出土状況（南から）

写真図版43

SD84遺物出土状況（西から）

写真図版44

SD84（V63・64区）遺物出土状況（東から）
SD84（V63・64区）遺物出土状況（北から）
SD84（V63・64区）調査状況（東から）

写真図版45

SD84（Y63・64区）上部調査状況（北から）
SD84（Y63・64区）中部調査状況（東から）

写真図版46

SK85遺物出土状況近接写真
（北から）
SK85遺物出土状況
（北から）

写真図版47

SB1（X61区）掘立柱建物跡（北から）
A・B区柱穴類出土状況（南から）

写真図版48

SK4の下位検出遺構（SK88・89）の状況
（南から）
SK88・89の近接写真（西から）

写真図版49

SK88遺物出土状況
（南から）
SK88遺物出土状況
（北から）

写真図版50

SK90・91遺物出土状況
（北から）
SK92検出状況
（北から）

写真図版51

SK94完掘状況
（西から）
SK94土層断面

写真図版52

SE100遺物出土状況（南から）
SE100石組基礎出土状況（南から）

写真図版53

SE100最下部の井筒出土状況
(南から)
SD103遺物出土状況 (Z63・64区)
(北から)
SD103 (Y63区) 遺物出土状況
(東から)

写真図版54

SD103土層断面写真
(西から)

写真図版55

SD104遺物出土状況
(南から)

写真図版56

SD104遺物出土状況
(北から)

写真図版57

SK105遺物出土状況
(東から)

写真図版58

SE108石組井側出土状況
(東から)
SE108石組井側出土状況
(南から)

写真図版59

SE108石組下部出土状況
(南から)
SE108石組井側・最下部石組出土状況
(南から)

写真図版60

SE108石組最下部・井筒出土状況
(北から)
SK109遺物出土状況
(北から)
SD110検出状況
(北から)

写真図版61

SD110遺物出土状況
(北から)

写真図版62

SD112遺物出土状況
(南から)
SD112下部遺物出土状況
(南から)
SD103B遺物出土状況
(西から)

写真図版63

SD103南北溝土層写真
(北から)
SD103・114分岐地点付近
(北西から)
SD116遺物出土状況
(東から)

写真図版64

SD116遺物出土状況近接写真
(西から)
SD116完掘写真
(南から)
SK123 (SD112埋土上部) 遺物出土状況
(南西から)

写真図版65

SK123下部の状況
(東から)
SK126遺物出土状況(南西から)

写真図版66

SK126土層断面写真 (南から)
SK127遺物出土状況 (東から)

写真図版67

SK127遺物出土状況
(東から)
SK127下部遺物出土状況
(北から)

写真図版68

SK131・135遺物出土状況
(西から)
SK131・135遺物出土状況
(南東から)

写真図版69

SD132・133近景
(南東から)

写真図版70

SK136遺物出土状況
(北から)
SK136遺物出土状況
(南から)

写真図版71

SK109・137調査状況(北から)
SK137床面の状況(東から)

写真図版72

SK137床面の凹凸
(南西から)
SK109・137完掘状況
(南から)

写真図版73

SK138遺物出土状況(南から)
SK142遺物出土状況(東から)

写真図版74

SK142遺物出土状況(東から)
SK142遺物出土状況(南から)

写真図版75

SK143遺物出土状況(南から)
SK143全景

写真図版76

SK144半割・土層写真(東から)
SE7遺物出土状況(東から)

写真図版77

SK146遺物出土状況(東から)
SK146遺物出土状況近景写真(南から)

写真図版78

SK148半割状況(南から)
SK148遺物出土状況(南から)

写真図版79

SE150土層断面写真(西から)
SK157断面写真(東から)

写真図版80

SD165検出状況(西から)
SE171全景

写真図版81

SE171井筒出土状況
SE171井側出土状況

写真図版82

SE171遺物出土状況
SE171方形井側出土状況

写真図版83

SE171井側検出状況
SK172・173遺物出土状況
(北から)

写真図版84

SK175遺物出土状況(北から)
SD176遺物出土状況(西から)

写真図版85

SD176遺物出土状況(南西から)
SD176遺物出土状況(北から)

写真図版86

SK182・183遺物出土状況(南から)
SK187遺物出土状況(南から)

写真図版87

SK190遺物出土状況
SD112・170・233 (T59・U60・V60区)
(東から)

写真図版88

SD213・240近景 (東から)
SD240・246～248完掘状況 (南東から)

写真図版89

SD240・246・247・256完掘状況
(北西から)
SD213・246～248完掘状況 (北西から)

写真図版90

SD230完掘状況 (北から)
SK242完掘状況 (南東から)

写真図版91

SK242調査途中状況 (南から)
SK242完掘状況 (南から)
SK242完掘状況近景 (南から)

写真図版92

SK242完掘状況 (南西から)
SK242完掘状況 (西から)

写真図版93

SK242調査途中状況 (北西から)
SK242完掘状況 (北西から)
SK242完掘状況 (北から)

写真図版94

SK242完掘状況 (北から)
SK242完掘状況 (北東から)
SK242完掘状況近景 (北東から)

写真図版95

SK242調査途中状況 (南東から)
SK242完掘状況 (南東から)
SK242完掘状況 (東から)

写真図版96

夏の作業風景・上層遺構面の調査 (西から)
上層遺構面の調査状況 (西から)
上層遺構面の調査 (北西から)

写真図版97

SK18実測風景 (北から)
夏の作業風景・上層遺構面の調査 (東から)

写真図版98

上層遺構面の調査 (南西から)
上層遺構面の調査 (東から)

写真図版99

上層遺構面の調査 (井戸の調査中)
遺構検出状況 (B64区)

写真図版100

遺構検出状況 (X63区)
遺構検出状況 (X61区)

写真図版101

SK18発掘作業風景 (西から)
作業風景・上層段階 (東から)

写真図版102

上層遺構完掘状況 (柱穴類)
西部作業風景 (北から)

写真図版103

鉄製品出土状況 (Z64区)
青銅製品出土状況

写真図版104

遺物(京都系土師器) 出土状況 (A64区)
遺物(土製鈴) 出土状況 (D64区)

写真図版105

A63・64、B63・64区下層遺構 (北西から)
柱穴類調査状況 (A63・64区)
(北から)

写真図版106

A63・B64区上層遺構状況
(南東から)
SD114・SD84付近調査風景
(南から)

写真図版107

SE100付近調査風景 (北西から)
SK137付近調査風景
(北西から)

写真図版108

調査区西部作業風景
(東から)
調査区東部上層遺構
(北から)

写真図版109

コンクリート壁の状況
(調査区中央部)
SD112南部調査風景
(東から)

写真図版110

調査区南西部
(西から)
X62区の下層溝状遺構検出
(北から)

写真図版111

調査区全景
(東から)
SE7東から見た調査区
(東から)

遺物写真図版

写真図版112

SK4 (華南三彩・青花碗・青花皿・青花猪口)

写真図版113

SK4 (京都系土師器)・SK4 (京都系土師器)

写真図版114

SK4 (青花碗・青花皿・埴・石製紡錘車)

写真図版115

SK18 (青花皿・青花皿・鉄製斧)
SK10 (青花皿)

写真図版116

SK18 (青磁碗・青磁碗・青花碗)

写真図版117

SK18 (備前焼鉢・備前焼甕・備前焼播鉢・中国南部製焼締陶器鉢・備前焼播鉢・備前焼播鉢)

写真図版118

SK18 (六太郎石・六太郎石・中国製陶磁器・備前焼壺・砥石)

写真図版119

SK20 (砥石・砥石・青花皿)

写真図版120

SK21 (中国南部製陶器)

写真図版121

SK33 (青花・白磁)
SX34 (羽口)

写真図版122

SK37 (石臼・凝灰石製品・凝灰石製品)

写真図版123

SK38 (土師器・在地系土師器)
SK57 (在地系土師器)

写真図版124

SK39 (白磁皿)
SK72 (瓦質土器茶釜)
SD84 (京都系土師器・青花皿・青花皿・石臼)

写真図版125

SD84 (青花碗・青花皿・青花碗・白磁皿)

写真図版126

SK85 (京都系土師器)
SK87 (在地系土師器・京都系土師器)

写真図版127

SK88 (京都系土師器・京都系土師器)

写真図版128

SK88 (青花皿・青花皿・磁器・青花碗)

写真図版129

SD103 (在地系土師器・京都系土師器)

写真図版130

SD103 (京都系土師器・青花・青磁)

写真図版131

SK105 (青花碗・青磁皿)
SK108 (京都系土師器)

写真図版132

SK108 (青磁皿・砥石)

写真図版133

SD112 (青花皿・青花碗・青磁碗)
SD110 (白磁皿)

写真図版134

SD112 (京都系土師器・在地系土師器)

写真図版135

SD112 (青花皿)

写真図版136

SD112 (白磁皿・五彩碗・中国製陶器3点)

写真図版137

SD112 (青磁碗・華南三彩・砥石・埴)

写真図版138

SD112 (青花皿・青磁碗・青花碗・翡翠釉皿)

写真図版139

SD112 (陶器碗・五彩皿・古代平瓦)

写真図版140

SD112 (青花皿)

写真図版141

SD112 (青花猪口・青花碗・青花皿・青花皿・
唐津・陶器皿)

写真図版142

SD112 (備前焼播鉢)

写真図版143

SD112 (備前焼播鉢・中国南部製陶器鉢・備
前焼播鉢・備前焼壺・砥石)

写真図版144

SK120 (瓦質土器・青花碗・青花猪口・白磁皿)

写真図版145

SK125 (青花碗)
SD123 (ガラス皿)

写真図版146

SK127 (青花碗)
SK125 (青花皿)
SK126 (青磁碗)

写真図版147

- SK136 (青花碗)
- SK127 (青花碗・華南三彩・華南三彩鳥形水注)

写真図版148

- SK145 (青磁皿)
- SK144 (青磁碗)
- SK136 (六太郎石製火打石)

写真図版149

- SD170 (青花碗)
- SK164 (青磁皿・凝灰石製容器)

写真図版150

- SK174 (青花皿・青花碗・青花碗)

写真図版151

- SK182 (在地系土師器)
- SK185 (白磁皿・青花碗)

写真図版152

- SK185 (五彩碗・翡翠釉皿・陶器瓶)
- SK192 (青花皿)

写真図版153

- SK197 (鉄製紡錘車)
- SK203 (凝灰岩製石臼)

写真図版154

- SK203 (在地系土師器
在地系と京都系土師器)

写真図版155

- SK204 (在地系土師器)
- SK212 (白磁皿)
- SK208 (青磁皿)

写真図版156

- SK213 (在地系土師器)
- SK213 (青磁皿)

写真図版157

- SK223 (青花皿)

写真図版158

- SK233 (中国製陶器壺)
- SK241 (在地系土師器と京都系土師器)
- SP1043 (青花皿)

写真図版159

- SP1076 (青花皿・白磁皿)
- SP1242 (ガラス容器)

写真図版160

- X62区 (青磁碗)
- X61区 (青磁・瓦質土器鉢)

写真図版161

- Y63区 (青花皿)
- Y64区 (青花皿)
- Y63区 (青花碗・青花碗)

写真図版162

- Y64区 (青花碗・青花皿)
- Y63区 (青花碗・五彩碗)

写真図版163

- Y63区 (青花碗・天目碗・青磁碗)
- Y63・64区 (青磁碗)

写真図版164

- Y63区 (砥石)
- Y64区 (華南三彩・華南三彩)
- Y63・Y64区 (華南三彩)
- Y64区 (ガラス玉)

写真図版165

- Y64区 (砥石)
- Y63区 (砥石・砥石)

写真図版166

- Z64区 (青花碗・青花皿)
- Y63区 (青花碗・五彩・青花皿・青花皿)

写真図版167

- Z63区 (中国南部製陶器)
- Z64区 (青花碗)
- E64区 (五彩)
- Z64区 (中国製陶器)
- Y63区 (青花碗)

写真図版168

- Z63区 (青磁碗・翡翠釉皿・翡翠釉皿)
- Z64区 (翡翠釉皿・華南三彩鳥形水注)
- Y63区 (青磁碗)

写真図版169

- Z63区 (白磁皿・白磁皿)
- Z64区 (白磁碗・白磁蓋)

写真図版170

- Z61区 (陶器)
- Z63区 (鉄製容器・石臼)

写真図版171

- A64区 (青花碗・青花碗)
- A63区 (青花皿・青花碗)

写真図版172

- A63区 (青花碗)
- A64区 (青花皿)
- A63区 (青花碗・青花碗)

写真図版173

- A63区 (青花皿)

写真図版174

- A63区 (初期伊万里皿)

写真図版175

- A63区 (唐津焼溝縁陶器皿・陶器白沈泥皿)

写真図版176

- A63区 (陶器碗・華南三彩鳥形水注蓋)
- A64区 (白磁碗・五彩鳥形製品)

写真図版177

- A64区 (華南三彩・翡翠釉皿)
- A63区 (華南三彩)
- A64区 (華南三彩)

写真図版178

- A63区 (青磁碗・青磁碗)

写真図版179

- A63区 (青磁碗・青磁皿・青磁碗)

写真図版180

- A63区 (砥石・硯・石英製火打石・砥石)

写真図版181

- B63区 (青花皿)
- A63区 (青銅製目貫・青銅製小柄)

写真図版182

- A63区 (初期伊万里碗・青花皿)

写真図版183

- B64区 (青花皿・青花皿)

写真図版184

- B64区 (青磁瓶・翡翠釉皿・陶器碗)
- B63区 (華南三彩)

写真図版185

- B63区 (青磁盤・青磁碗)

写真図版186

- B64区 (青磁碗)
- B63区 (白磁皿・青磁碗)

写真図版187

- B64区 (初期伊万里碗・石臼)

写真図版188

- C64区 (青花皿)
- C63・64区 (五彩碗)
- B63区 (砥石・六太郎製火打石)

写真図版189

C63区 (青花碗・青花碗・初期伊万里碗)

写真図版190

C64区 (翡翠釉皿)

C63区 (翡翠釉皿・華南三彩琴高仙人の魚)

写真図版191

C64区 (磁州窯壺)

C63区 (青磁碗)

C64区 (朝鮮陶器碗)

写真図版192

C63区 (唐津焼溝縁皿)

C64区 (瀬戸美濃製そぎ皿)

C63区 (銅付着るつぼ)

写真図版193

D63・64区 (五彩皿)

D63区 (青花皿・青花皿・青磁碗)

D62区 (青花碗)

写真図版194

D64区 (瓦器椀・瓦器椀)

D63区 (備前焼)

写真図版195

E62区 (青花皿)

E63区 (青花皿・五彩碗・青花皿)

写真図版196

E63区 (青磁皿)

写真図版197

E63区 (白磁皿・硯)

F64区 (古墳時代の円筒埴輪)

写真図版198

SP235 (タイ製陶器クロッ)

写真図版199

D63区 (瓦質土器)

SK94 (凝灰岩製石臼)

写真番号200

SK5 (メダイ)

包含層出土メダイ

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経過

発掘調査の発端となった庄の原佐野線は、大分自動車道の椎迫ICから東に向かってまっすぐ延びる県道である。道路は現在、椎迫ICから国道10号と接合する地点まで完成しているが、将来的には大分川を越え、古代大分郡衙（今でいう大分市役所）所在地に想定されている下郡の平野地帯を抜け、明野丘陵を通り、大野川を渡り、大分市東部の佐野に至る計画である。

路線は国道10号に合流する直前に六坊北町の水田地帯を通過する。この地域には中世、豊後守護として豊後、一時はさらに九州六カ国をも支配した大友氏の城下町があった。大友氏の館跡を含んだ範囲を中世大友城下町跡と呼び、館跡以外を中世大友府内町跡と呼び分けている。

この町は中世末期1587年に薩摩の島津氏による侵攻のため焼亡し、以後大きな復興がないまま時は経過し、大友氏が廃された際に豊後の中心は別の場所、北西方向の海岸寄りに移された。府内城をはじめとした近世府内城下町は中世の大友府内町とは別の場所に造られたのである。庄の原佐野線と中世大友府内町跡の位置関係を考える上で参考となるのが、近世に描かれた「府内古図」及びそれを基に復元された現在地との比定案である。比定案は昭和63年に大分市史の中で示されたものである。それによれば中世大友城下町跡は、大分川の左岸沖積地に東西700m、南北2,200mの規模で存在したとされ、大友氏館や菩提寺である万寿寺、諸寺社、町、東西南北の諸道、キリスト教会等が展開した。庄の原佐野線が中世の町跡を通過する場所は「御藏場」及びその西側から南側、東側に該当する。そのため、大分県教育委員会は県土木部と取扱について協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

庄の原佐野線と中世大友府内町跡に関連した発掘調査は、平成14（2003）年10月から平成15（2004）年3月に実施した府内町跡第36次調査が最初である。以後、要地買収の進展に対応し逐次発掘調査を重ねてきた。平成15年5月から平成16年3月にかけて第41次調査、平成17年5月から10月にかけて第55次調査、平成18年7月から平成19年1月にかけて第69次調査、平成19年11月から平成20年3月にかけて第75次調査、平成19年5月から平成19年10月にかけて第77次調査を実施し、国道10号までの発掘調査を終了した。以上は西方から国道10号接続部までの道路建設の事業計画に対応したものであり、これよりも東方は現時点では工事計画はあるものの、要地買収等の開始予定は未確定である。なお、中世大友城下町跡の外側地域でも調査は行われており、庄の原佐野線路線内では第69次調査区の西方約200mにある若宮八幡宮遺跡において平成15・16・18年度に発掘調査が行われ、縄文時代後期・弥生時代早期～後期・古代・中世の遺跡が現れている。

ところで、中世大友城下町跡地域では近年開発行為が増加している。城下町跡中央を南北に貫く「一般国道10号古国府拡幅事業」に対する発掘調査を平成12年6月から開始し、現在に至っている。また、城下町中央を東西に貫くJR日豊本線・豊肥本線の、南西部を貫くJR久大本線の「大分駅付近連続立体交差事業」が行われている。これはJR線路の高架事業であり、これらは県教育委員会が対応し、発掘調査を実施してきた。さらに、市道工事や大友氏館跡の国史跡化に伴う発掘調査を大分市教育委員会がこの地域で実施しており、同じ遺跡を二つの組織が発掘調査する事態となっている。そこで大分市教育委員会と協議を行い、調査次数を両方で重複しないよう調整している。

3. 調査の体制

庄の原佐野線発掘調査以前から中世大友城下町跡の発掘調査では、県及び大分市教育委員会が文化庁と協議して専門家による調査指導者会を平成12年度以来開催してきた。年2回開催し、指導者会の指導を受けながら調査を実施してきた。

本書に報告する平成16（2004）年度・平成18（2006）年度・平成19（2007）年度の調査は、以下の体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

調査指導者 河原純之（千葉大学文学部教授）
後藤宗俊（別府大学文学部教授）
小野正敏（国立歴史民俗博物館教授）
坂井秀弥（文化庁記念物課文化財担当調査官）

平成16（2004）年度（府内町第41次調査）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長	伊藤正行
次長	益永孝則
調査第一課長	栗田勝弘
大型事業担当主幹	高橋信武
主査	矢部勝徳

平成18（2006）年度（府内町第69次・75次調査）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長	小玉学司
次長	岡本義博
調査第一課長	栗田勝弘
大型事業担当主幹	高橋信武
副主幹	槇島隆二
一般事業担当副主幹	綿貫俊一

平成19（2007）年度（府内町第77次調査）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

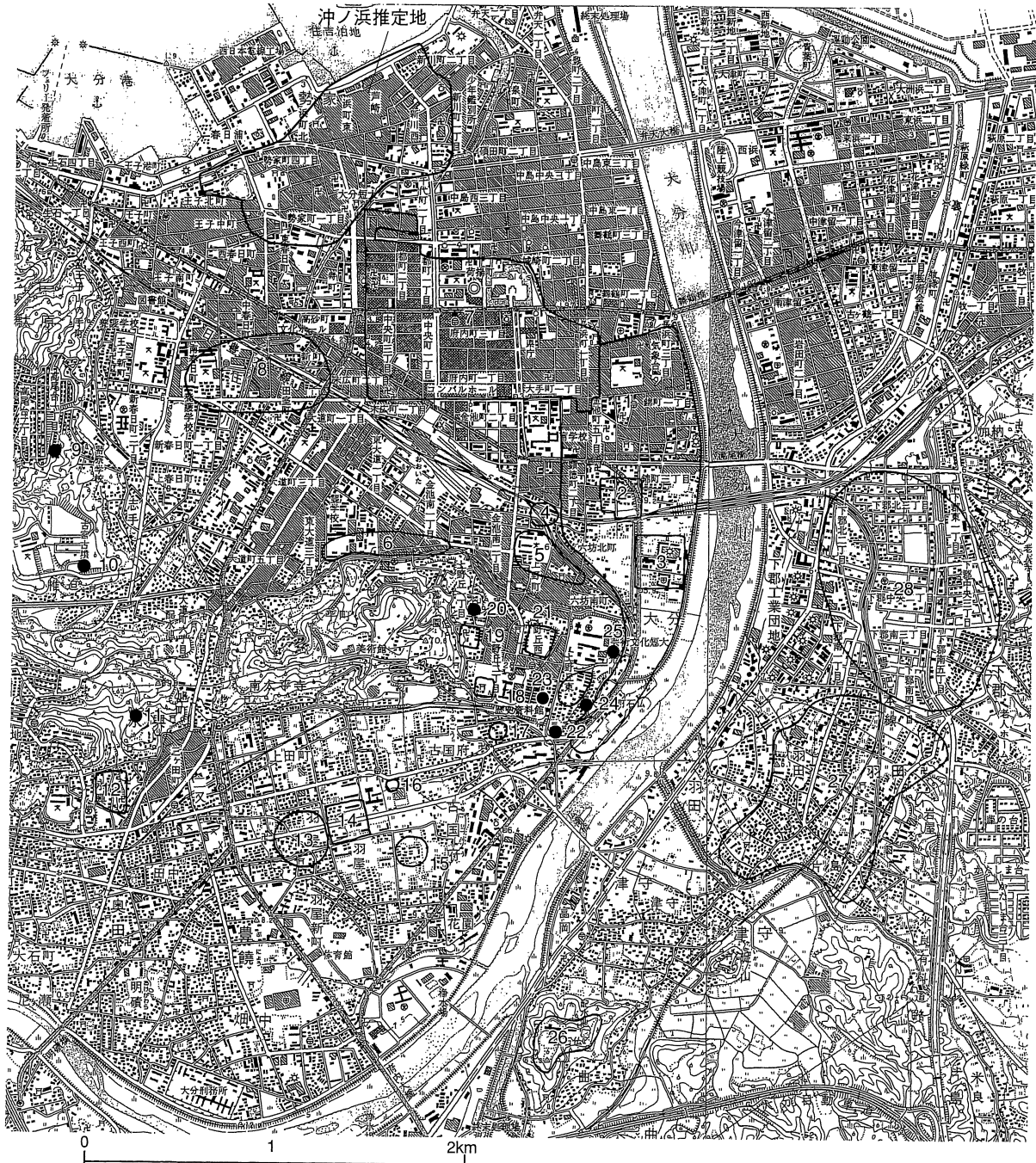
所長	福田快次
次長	坂本嘉弘
次長	岡本義博
調査第一課長（兼）	坂本嘉弘
大型事業担当主幹	高橋信武
主幹	江田 豊
主事	横澤 慈

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

中世大友府内町跡が位置するのは大分川下流域である。下流域左右には標高約100m以下の段丘地形が展開する。中世大友城下町跡は大分川下流域の左岸沖積地にあり、別府湾に面していて豊後水道・瀬戸内海を介して広く国内外との交流が可能である。

中世の大友城下町を描いた古図があり、それを原地形に当てはめた想定によれば、中世大友城下町跡は現在の標高で4m～6mの部分に立地している。城下町の南西部には一段低い平面が残されており、大分川の支流がかつてこの場所を流れていたとみられる。中世の地面の下からはそれ以前の遺物が出土するが、場所によって数mの標高差がある。この付近の大分川左岸の低地では縄文後期くらいからの遺物が認められるので、その頃から人が住める環境に変化したようである。



1. 中世大友城下町跡
2. 大友氏館跡
3. 万寿寺跡
4. 上野町・顕徳寺遺跡
5. 若宮八幡宮遺跡
6. 東大道遺跡
7. 府内城・城下町
8. 東田室遺跡
9. 亀甲古墳
10. 古宮古墳
11. 永興千人塚古墳
12. 永興寺遺跡
13. 羽屋園遺跡
14. 金剛宝戒寺跡
15. 石名遺跡
16. 町口遺跡
17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺
19. 金剛宝戒寺
20. 上野廃寺
21. 大友上原館跡
22. 岩屋寺石仏
23. 上野龍王畑遺跡
24. 元町石仏
25. 大臣塚古墳
26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡
28. 下郡遺跡群

第2図 大分平野の地形と主要遺跡（国土地理院1/25000「大分・鶴崎」）

第3節 報告書作成にあたって

1. 府内古図と御蔵場

左図は近世に描かれた中世府内町絵図を模式化し、南北を貫く道路を第1～4南北街路と仮称したものである。今回報告する調査区はノコギリ町・魚之店・柳町・御蔵場の周辺に該当するとみられる。

豊後国守護としての大友氏は現在の大分市に守護所を置いて、領国を支配していたと考えられるが、豊後に下向した当初の当主の居住地やそれに伴う各種施設の所在地については今のところ明確ではない。16世紀後半に戦国大名として知られる大友宗麟が拠点としたのは府内町と呼ばれ、現在の大分市街中心部からは東方の大分河沿いの沖積地帯である。

この地域では開発に伴う発掘調査が10年以上継続的に行われているが、古代の時期でまとまって遺構が発見された場所がある。第7次調査区である。第7次調査区は後に府内町となる地域の東部に位置し、平安時代初期にあたる8世紀末から9世紀中葉の大型掘立柱建物群が登場している。調査者の田中祐介によれば、大分川を東西に横切る「海部路」の渡河地点に設けられた交通路に関わる官衙であろうという。河を渡ると対岸の大分川右岸沖積地には大分郡衛想定地があり、魅力的な解釈である。

室町時代の府内町がどこまで古くさかのぼるのかについて考察した中で、鹿毛敏夫は次のように記している(鹿毛2001)。

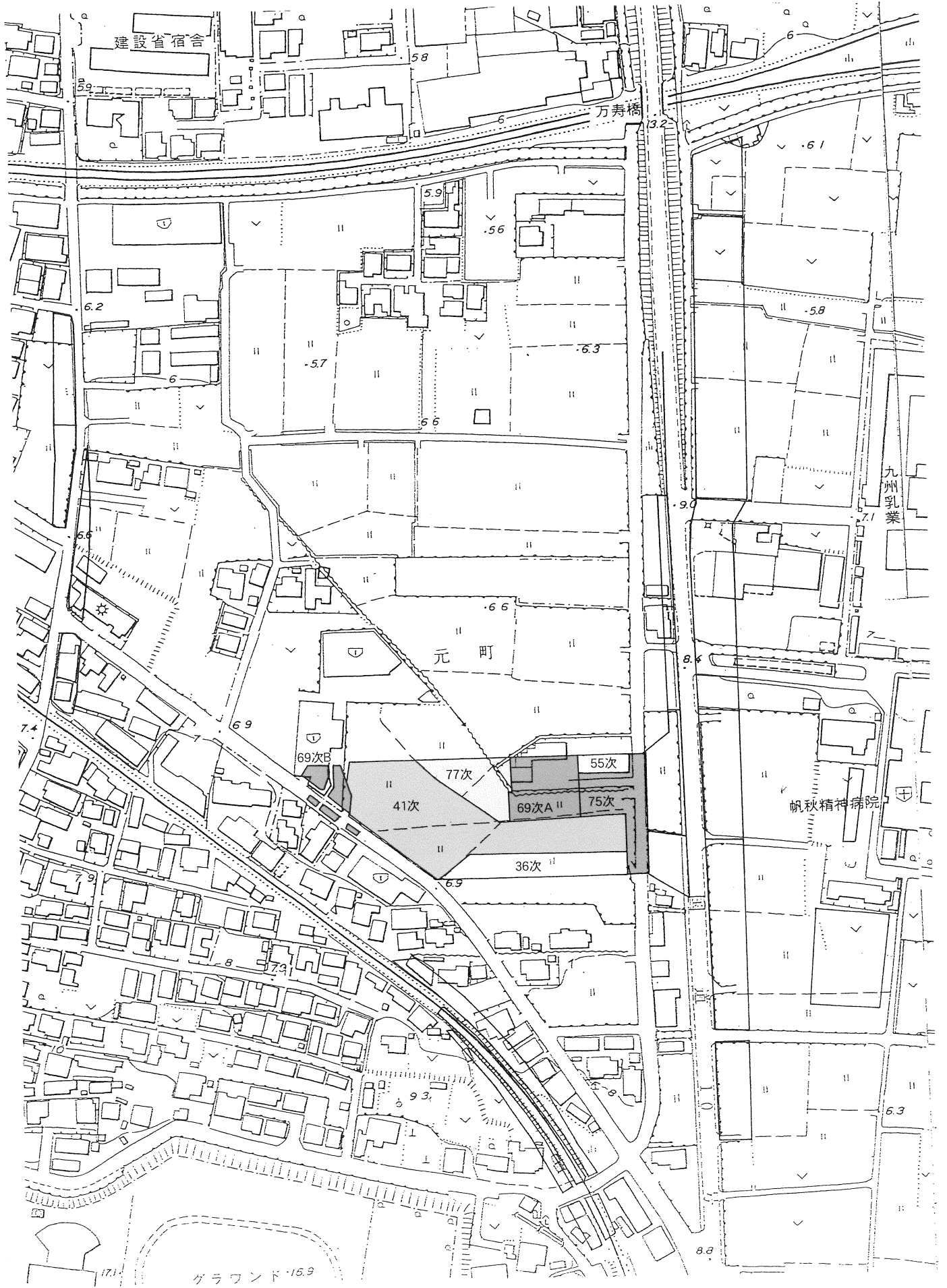
11世紀半ば平安末期のこの大分川河口西岸付近の様子については、宇佐宮御神領大鏡の大分郡勝津留の四至記載が注目され、勝津留は荏隈・笠和・判太の三郷の境に11世紀半ばに形成された別符であり、やがて鎌倉期に豊後に入部した大友氏が降国府勝津留に守護所を設置したことにより、豊後支配の中核機能を担うことになる。現大分市においては、上野丘台地東端部とその東北平野部に該当する。宇佐宮御神領大鏡の天喜元(1053)年の申文によるその四至は「東限北廻る二方市河也、南石屋崎際、限西高国府岸上額畠際」、また承保(1077)年の申状でも「東限市河、南限石屋寺前、西限高坂并横道、北限市河并田中寺」とある。この記述によると、11世紀後半の勝津留東部・北部には「市河」と呼称される地域があり、しかもそれは「東限北廻る二方市河也」の記載のように勝津留の東部から北部へと巡るように形成されていたことがわかる。

戦国期の府内の町を描いたものとされる複数の古図によれば、上野大地東岸を北流する大分川は、現長浜町付近で大きくうねり西流して別府湾に注いでいる。つまり府内の町並みを東から北へ取り囲むように流れており、市河の「河」とはこの大分川の流れを指すものと思われる。そして、「市河」との呼称から推し測れば、西に大きくうねるこの大分川河口西岸に河原市が形成されていた可能性が指摘できる。

※鹿毛敏夫2001「文献・絵図からみた大友館と府内の町～都市と国際性～」『中世大友再発見フォーラム 南蛮都市・豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会

以上のように、平安時代末期には室町時代に府内と呼ばれた大分川左岸の河口部には市が形成されていたようである。11世紀から13世紀の遺物はほとんど見られず、各地域で散発的に出土するようになるのは14世紀からである。中世大友府内城下町の立地する大分川西岸の地域は、二つの微高地から構成され、年代的にも利用の仕方に差があるのではないかと坂本嘉弘は記している(坂本2001)。

要約すると「府内古図」にある万寿寺・清忠寺・工座町・上市町は東側の微高地に立地し、府内町の重要な施設である大友氏館と御蔵場は西側の微高地に立地するという。「府内古図」の道路網については街路軸線の方位の違いから二時期に分けて考えられることも指摘されている(坂本・河野2001)。坂本



第4-1図 今回報告する調査区



2008年12月末現在

第4-2図 中世大友府内町跡調査地区

は次のようにまとめている。

中世大友城下町跡の発掘調査で検出された溝や道路・石列や土塁状の遺構を、都市計画にかかわるものと理解すると、N-10° -EとN-4° -Eの二つの基本軸があることがわかる。これを方位ごとに概略すると、N-10° -Eは、14世紀後半から15世紀中頃までは、大分川沿いの大路を軸とし、これに直角に交わる区画で町づくりが行われている。御所小路町や名ヶ小路町の道路はW-10° -Nで、東の大路に直交する。大友氏館から東側の小路は、変更されることなく、16世紀末まで存続する。

N-4° -Eの軸線は、15世紀後半から出現し、16世紀前葉から各地域で見られる。御蔵場の周辺の土塁状遺構や、万寿寺の北境にある幅20m近い堀など大形土木事業も、この方位に直交する。

※坂本嘉弘2001

「考古学から見た中世大友府内
城下町の成立と構造」

はじめに述べたように、今回報告する中世大友府内町跡第41次・第69次・75次・77次調査区の位置は当時のノコギリ町・魚之店・柳町・御蔵場の周辺に該当するとみられる。すでに報告済みである第55次調査区(第69次調査区の東側であり、第77次調査区の北側)は、大分市史では御蔵場の南部に含まれるが、そのような遺構は検出できず、通常の町屋と考えられる掘立柱穴類建物跡・井戸・長方形竪穴土坑等が出土しているため、御蔵場南端の範囲はもう少し北側か、西側にあると考えるべきかも知れない。

第75次調査区は15世紀後半～出現するとされる第二南北街路を含んでおり、その規模や出現時期、それに先行する遺構の性格等が明らかになる場所である。報告済みの第36次調査区では14世紀の大きな溝状遺構がみられたが、調査範囲が狭小だったので性格は不明であった。その延長上にある第41次・77次調査区の調査成果により、14世紀の本地域の様相が明らかにできると考えられる。

2. 中世大友城下町跡遺物編年を理解するために(土師器・備前焼・磁器の編年表)

中世大友城下町跡から出土する遺物の大部分は14世紀から16世紀である。下図に報告書の記述を理解するために、本地域の土師質土器の編年図を掲げる。本図は「豊後府内1」において使用されたものであるが、その後の調査においても14世紀以前はほとんどみられないので、この図を踏襲する(坂本2005)。

図で最上段においてある遺物は府内町跡第35次調査区S017出土品である。これに14世紀前葉でも古い段階の吉備系土師器が共伴することから14世紀初頭に位置づけられている。

14世紀前葉の遺物は府内町跡第30次調査区S115一括廃棄遺物である。吉備系土器の共伴により時期が決められている。

14世紀中葉～後葉は第30次調査区S109出土品である。右欄に掲示した京都系土師器系土師器と備前焼播鉢の共伴遺物から時期が想定されている。

14世紀末～15世紀前葉は第20次調査区S1505の遺物である。前後の時期から想定された。

15世紀後葉の遺物は、大友氏館跡第1次調査区S008の遺物である。共伴した大内系の白色土師器から年代を想定している。この時期までの土師器は橙褐色系・淡褐色系である。

16世紀第1四半期の遺物は、大内系白色土師器の影響を受けたと見られる府内町跡第5次調査区出土品である。中世6基の備前焼播鉢や青磁碗が共伴すること、京都系土師器が伴わないことから時期を想定している。

16世紀第2四半期は在地の赤色系土器に白色系の京都系土師器が伴う。京都系土師器系土器を模倣したものが現れる。

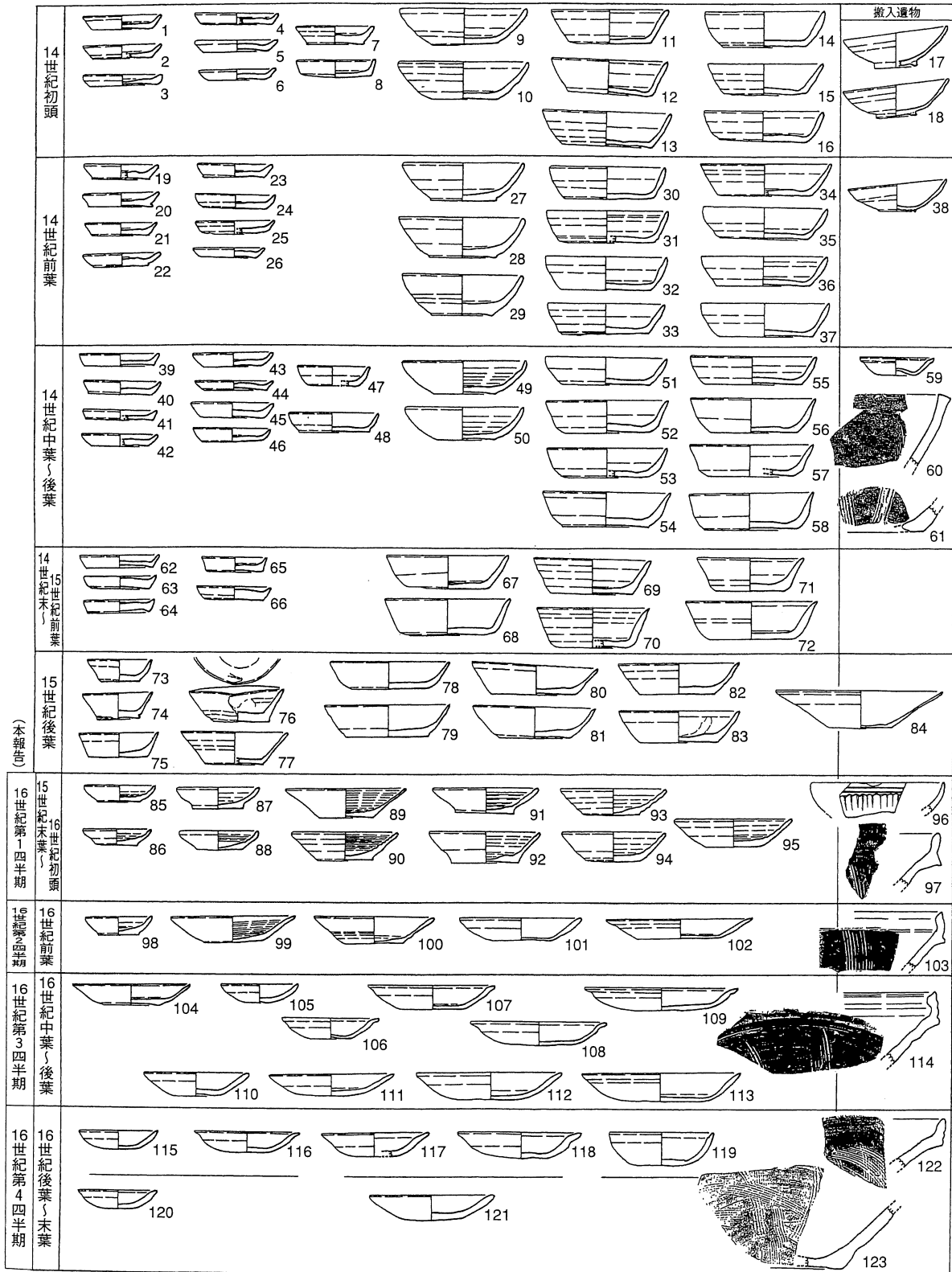
16世紀第3四半期は共伴する備前焼播鉢から年代を想定している。土師器は京都系土師器にとって替

われ、在地系土師器は府内町から消える。

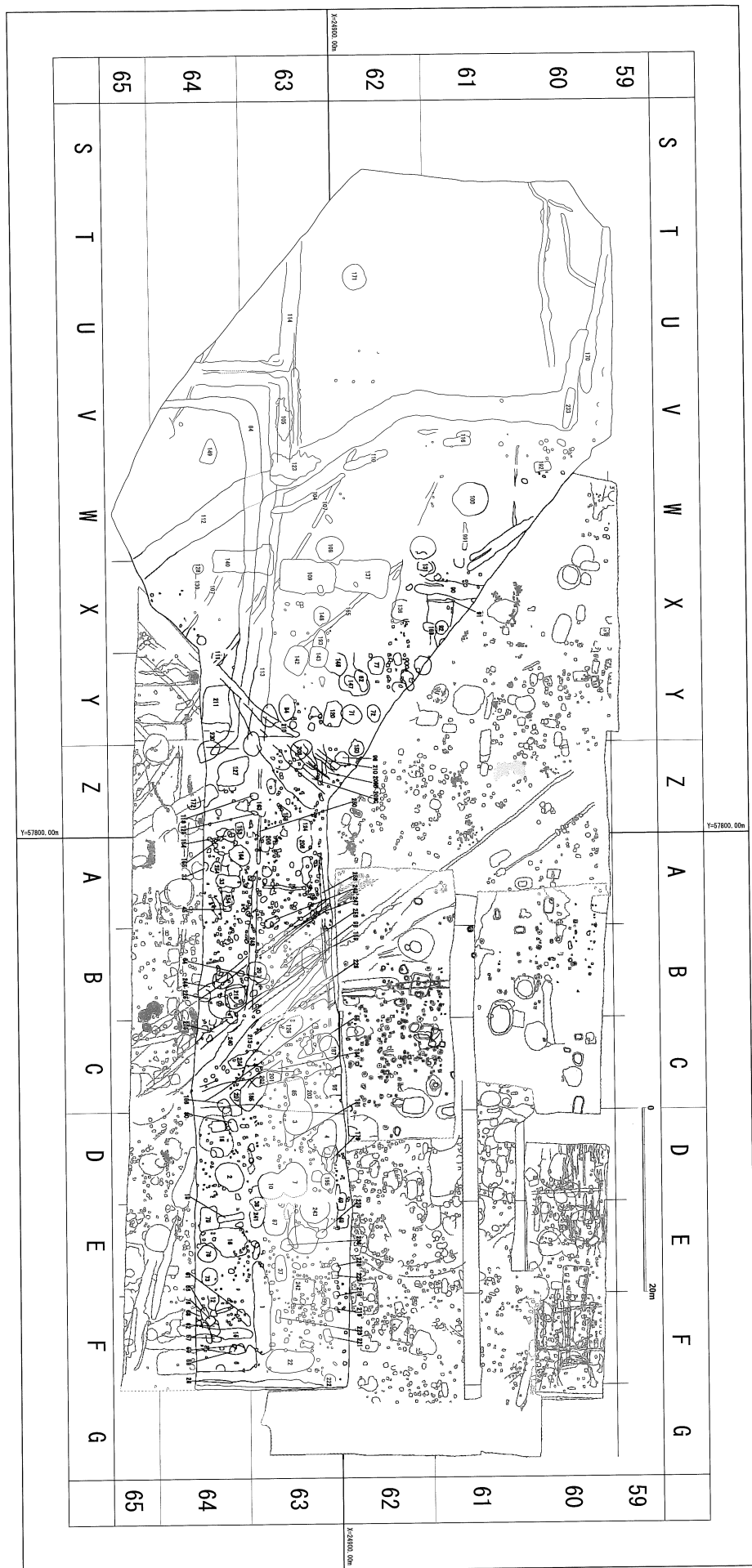
16世紀第4四半期は前段階の遺物との相違と斜め播り目備前焼播鉢の共伴から考えられている。

京都系土師器は器壁がくなり、口径に比べ器高が高くなる。

※坂本嘉弘2005「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」

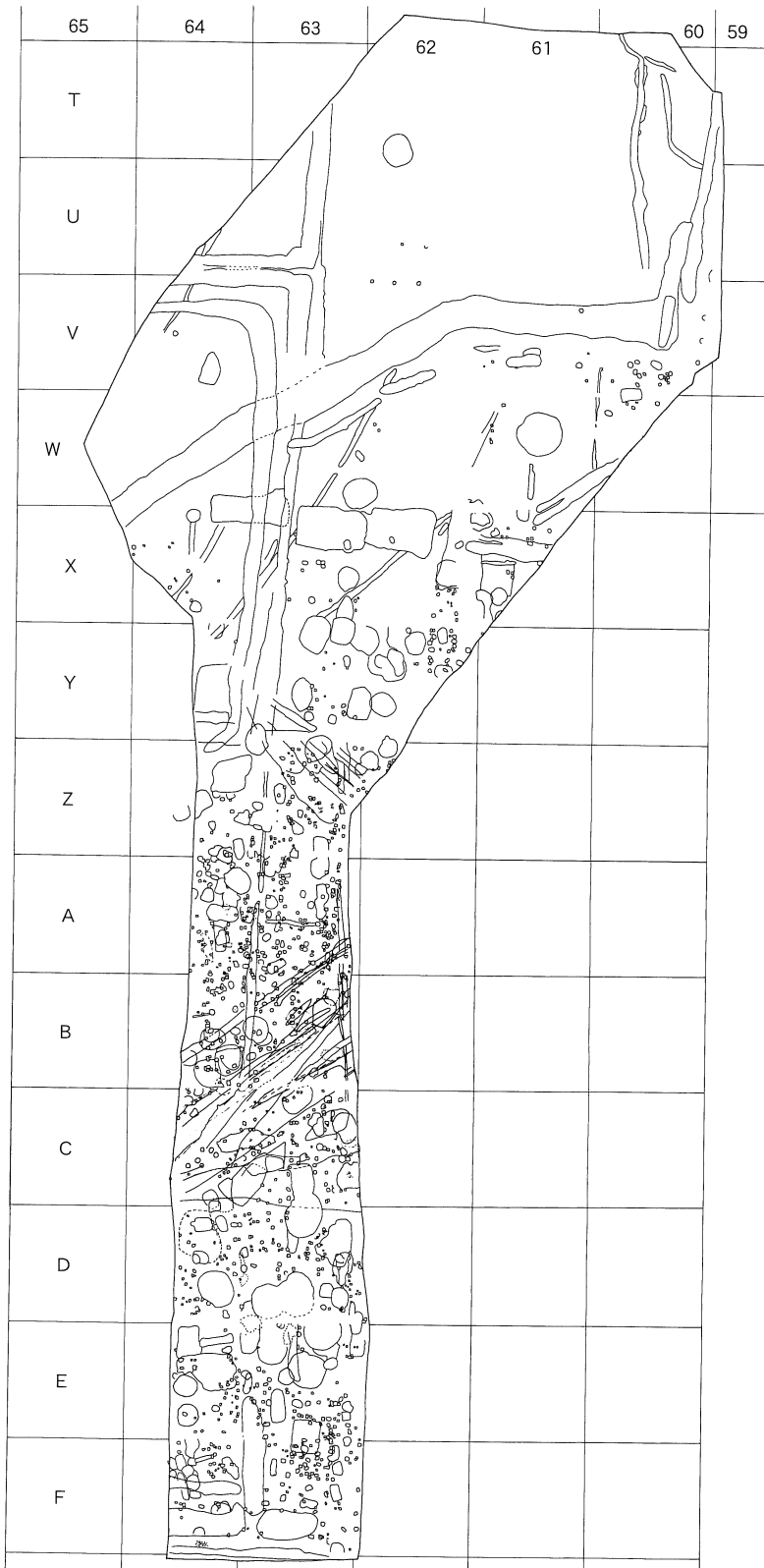


第5図 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図(坂本2006)



第6図 各調査区位置図

第2章 中世大友府内町跡第41次調査区



第7図 全遺構検出状況

第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第41次調査区は大分県大分市六坊北町に所在し、最上面は標高約5.2mの沖積低地上に立地する。1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は大友氏館の南側に描かれている「御蔵場」南端一帯に該当する。

発掘調査は県道庄の原佐野線建設に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所からの委託を受け、2005年（平成15年）5月20日～平成16年3月9日までの約10ヶ月間行った。発掘面積は約3400㎡である。調査にあたり国道10号関係やJR高架関係の発掘調査で使用している旧国土座標に基づいた10m方眼の区画を踏襲し、西から東に向かってT～G区、北から南に向かって59～64区の地区割を用いた。

調査中、梅雨時期の大雨のため調査区周辺に広がる水田地帯の水が押しかけ、調査区全体が池のように満杯になり、排水に一週間を要したりした。調査区の北側にあつて平面形が変速的な三角形を呈する御蔵場想定地は調査区よりも若干高く、さらにその西側に広がる水田地帯もことごとく標高が高いので、掘り下げて調査中の遺跡が丁度よい配水池となった。半割状態の井戸などは崩落し、土砂の撤去や修復作業に手間取ったりした。

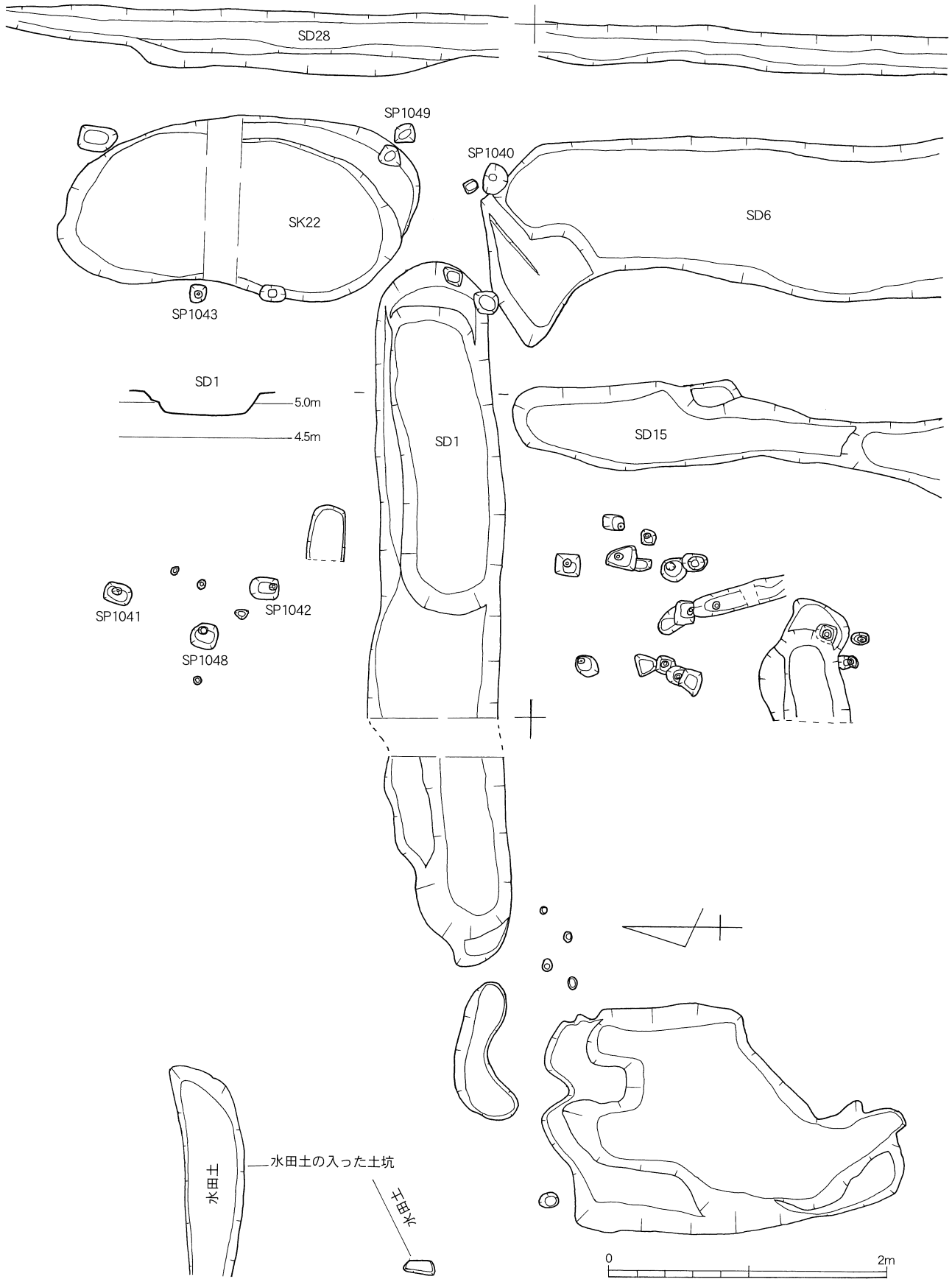
第2節 遺構の概要と基本層序

2 遺構と遺物

(1) 遺構の概要と基本層序列A区の基本層序をもとに、第41次調査区の一般的層序について説明する。



第8図 上層検出遺構分布状況 (左は床土の下で検出)



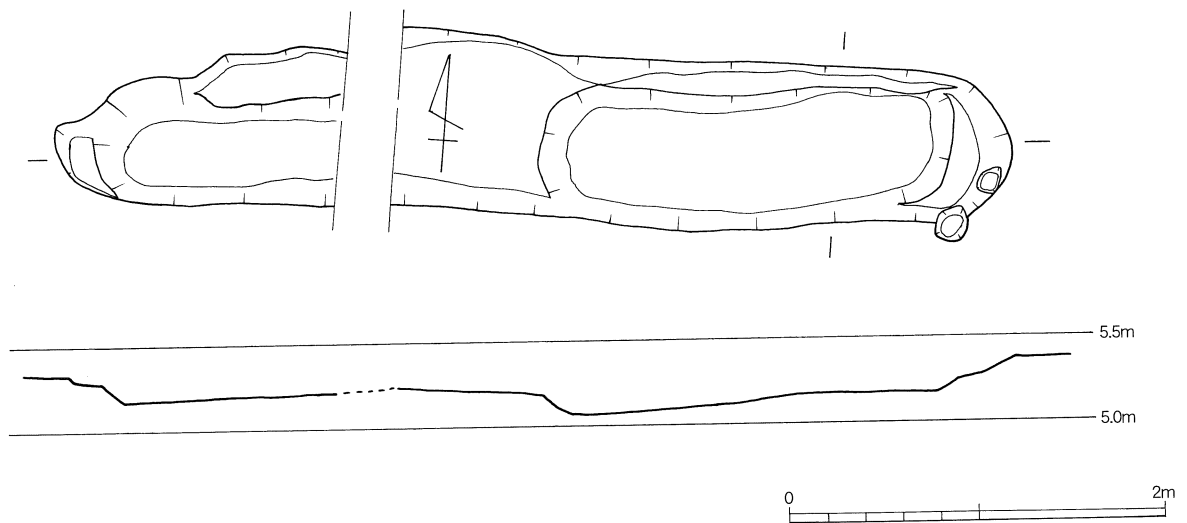
第9図 近世頃の遺構実測図

現耕作土 この地域で水田耕作が可能になったのは数十年前からであり、中世末以来畑地であった。現耕作土下面は水田の床土化し、酸化して硬い面となっている。耕作土は重機で除去し、床土を現した面から手掘りで発掘を進めた。床土を剥いだ段階で、水田化以前の畑地の痕跡やそれに掘り込まれた中世最上部の遺構が検出できる。

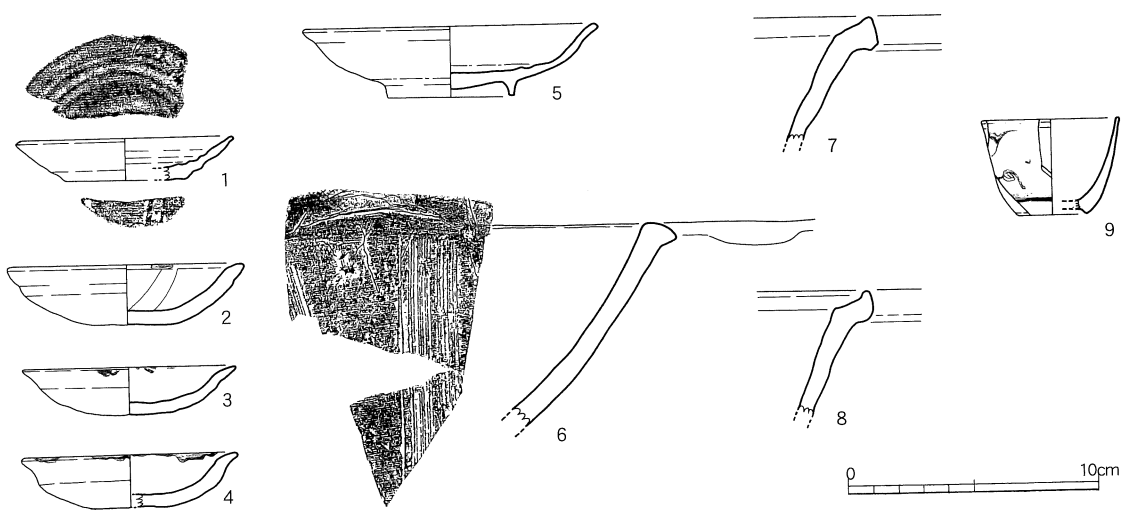
第3節 近世以降の遺構と遺物

SD 1 (第10図) E63区からF63区にかけて存在した遺構である。長さ5m、幅1mで東西方向に検出した。

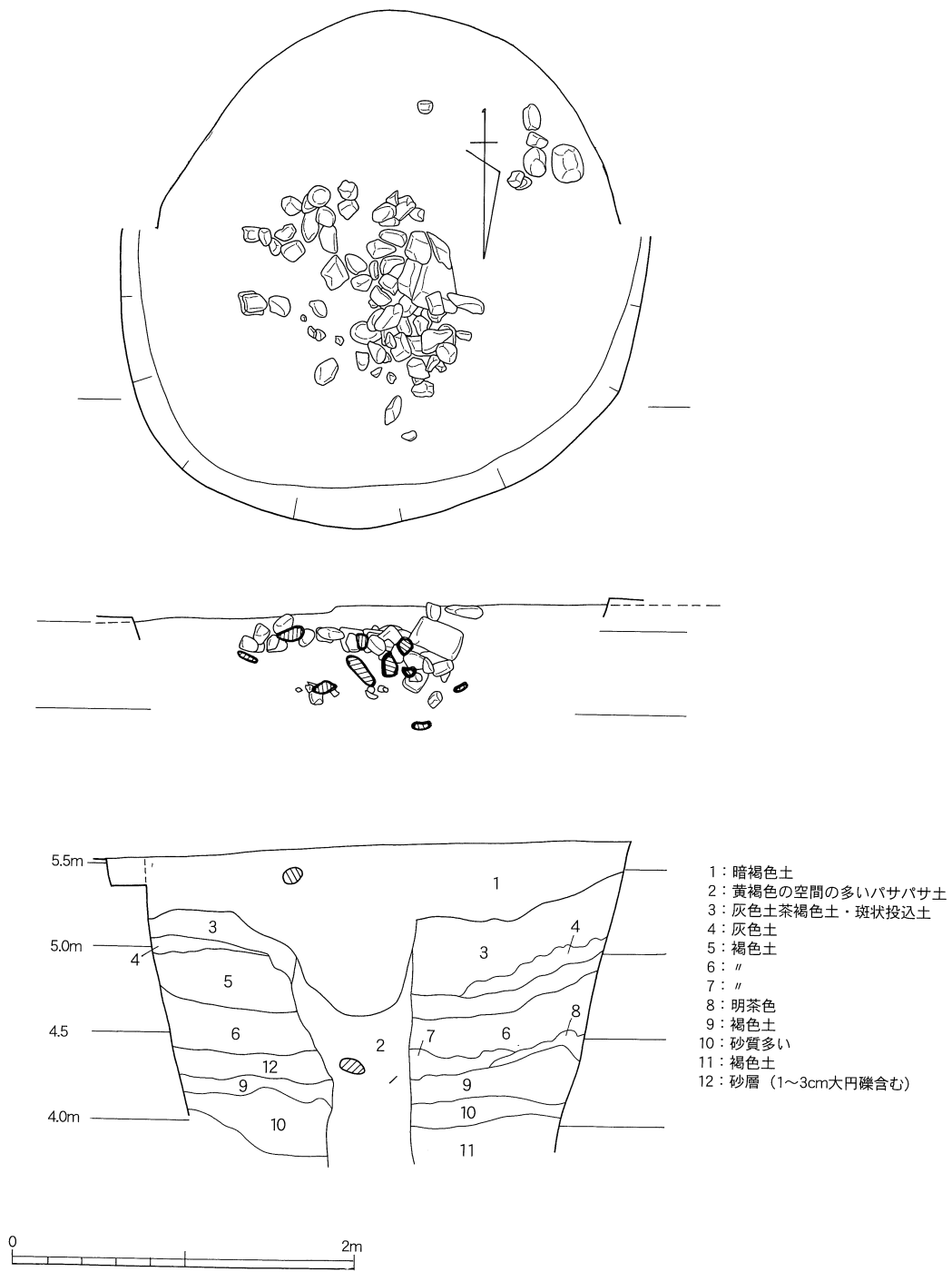
出土遺物 (第11図1~9) 1は在地系土師器、2~4は京都系土師器で灯明皿として使われている。5は白磁皿。6は肥前系陶器播鉢。7・8は瓦質鍋。9は景德鎮小杯。口径5.4cm、底径2.6cm、器高3.8cm。外面の最下部だけが露胎である。



第10図 SD1実測図



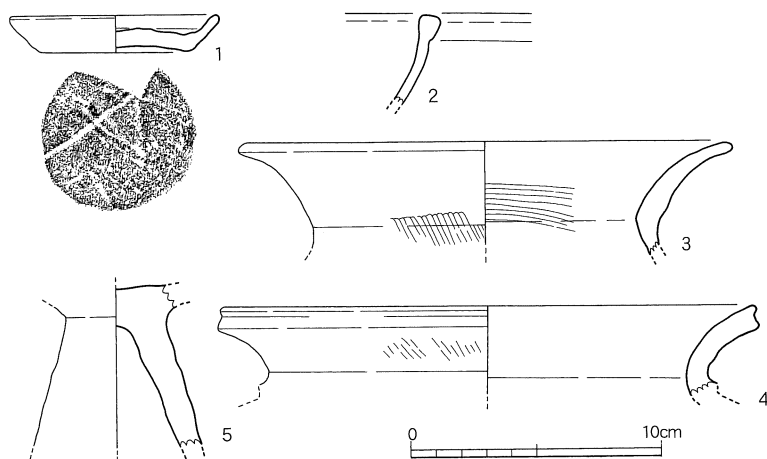
第11図 SD1出土遺物実測図



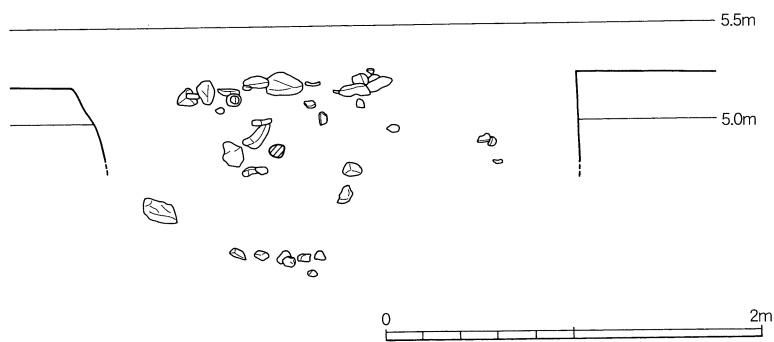
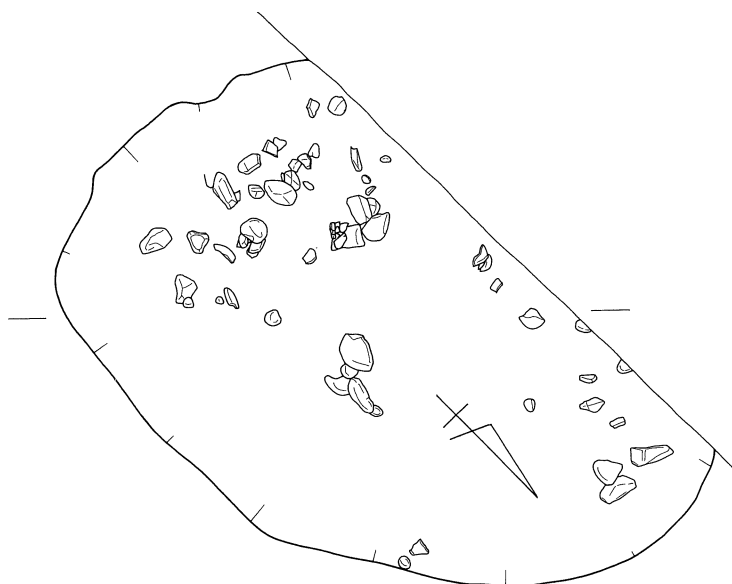
第12図 SE 2 実測図

第4節 中世の遺構と遺物

SE 2 (第12図) D64区北東部の井戸である。中央部に井側があり、そこを中心に礫が投げ込まれていた。層序断面は検出面から1.8m観察したが桶井側が消滅したようである。掘り方はほぼ水平に何段にも分かれて積み重ねている。この井戸の時期は出土した在地系土師器から考えるべきだが、検出標高が高いので遺物よりも新しい16世紀後葉頃と考えておきたい。



第13図 SE2出土遺物実測図



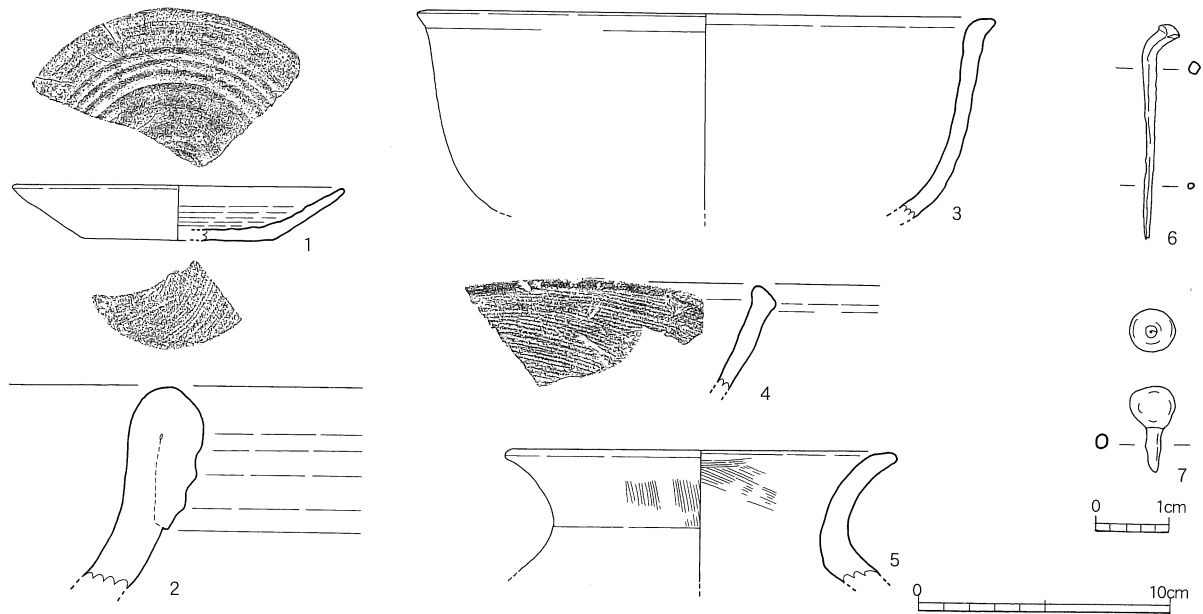
第14図 SK3実測図

出土遺物 (第13図1~5) 1は在り系土師器皿で口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.4cm。2は備前焼鉢。3・4は弥生時代後期末の甕形土器。3は口径19.6cm。4は21.4口径cm。5は古墳時代前期の高坏。

SK 3 (第14図) D63区の土坑である。16世紀後葉の遺構と考えられる。

出土遺物 (第15図1~7) 1は内面に段状のロクロ目を残す在地系土師器で体部は強く傾いている。口径13.2cm、底径7.4cm、器高2.2cm。16世紀第1四半期に属する。2は備前焼の大甕で、中世6期の遺物である。3・4は瓦質土器の鉢で、3は口径22.8cm。口縁端部が外反し尖る。4は口縁端部の断面が三角形で、内面には器面調整の刷毛目が残る。5は古墳時代前期の甕形土器である。頸部から口縁部への移行部は丸く外湾し、胴部内面はへら削り、外面は刷毛目調整で頸部はそれをなで消している。口径15.5cm。6・7は鉄製釘。

SX 4 (第16図) D63区北西部にあり、標高5.1mで検出した土坑である。平面規模で5m×3mの広がりがある。内部に多量の礫が捨てられていた。礫とともに16世紀第4四半期頃の遺物が出土した。多量の礫は板葺き屋根に載せられていた重しであるとみられ、共に出土した人口遺物は火事で焼けた家にあつたものと思われる。遺構の性格はゴミを廃棄した廃棄土坑と考えられる。



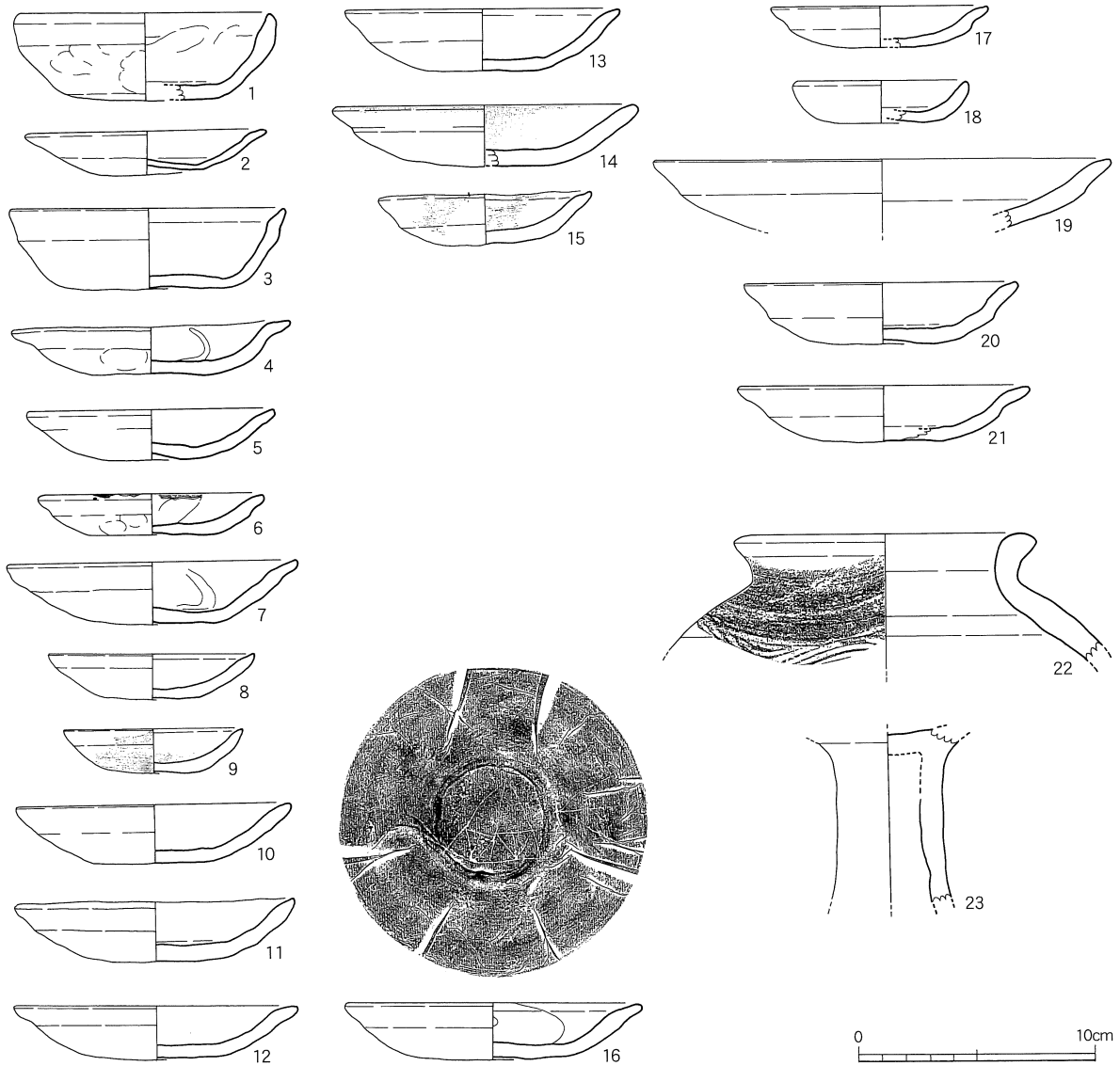
第15図 SK3出土遺物実測図

出土遺物（第17図） 1～21は16世紀第4半期頃の京都系土師器皿である。1は口縁部だけが特に厚く、口径10.4cm、器高3.6cmである。2は1期あるいは2期の京都系土師器と思われる薄手の皿で、底部の中央は内側に窪んでいる。口径10.3cm、器高1.8cmである。3は口縁部内面に平坦面があり、深い皿で口径11.6cm、器高3.4cmである。4は口縁部が強く外反し、内面に粘土接合痕が残る。口径11.8cm、

器高2.0cmである。5は底部が窪み体部は直線的に外反する。口径10.4cm、器高2.1cmである。6は口縁部外面を強く横なでし、口縁部には煤が付着しており灯明皿として使われている。口径9.4cm、器高1.7cmである。7は比較的大型で内面に粘土接合痕が残る。口径12.3cm、器高2.6cmである。8は口縁部が内湾気味に尖る小型の皿である。口径8.6cm、器高1.9cmである。9も小型の皿で灯明皿として使われている。口径7.6cm、器高1.9cmである。10・11は口縁部が直線的に長い皿で、10は口径11.6cm、器高2.6cmで、11は口径11.9cm、器高2.6cmである。12は口縁部が少し外反する口径12.0cm、器高2.3cmの皿である。13は口径11.6cm、器高2.5cmである。14は口径12.8cm、器高2.6cmである。



第16図SX4実測図

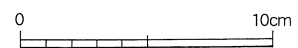
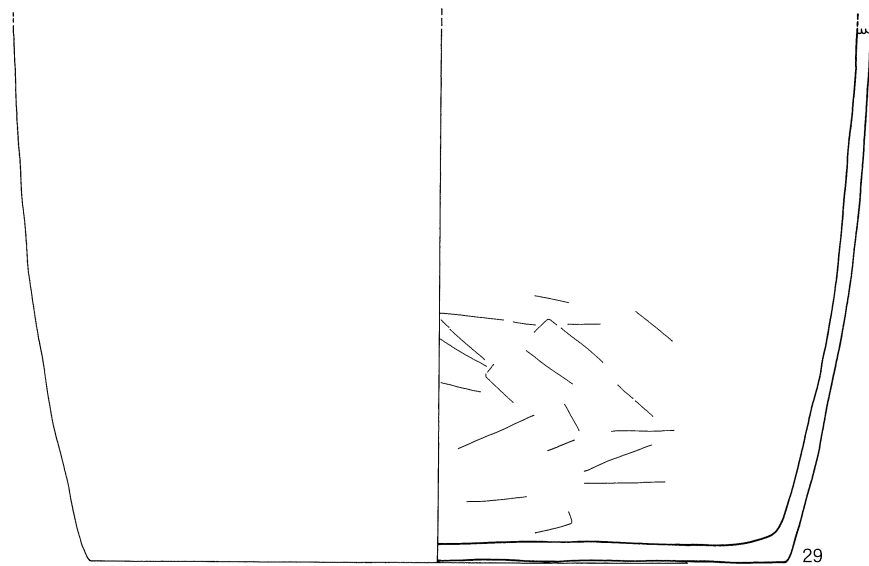
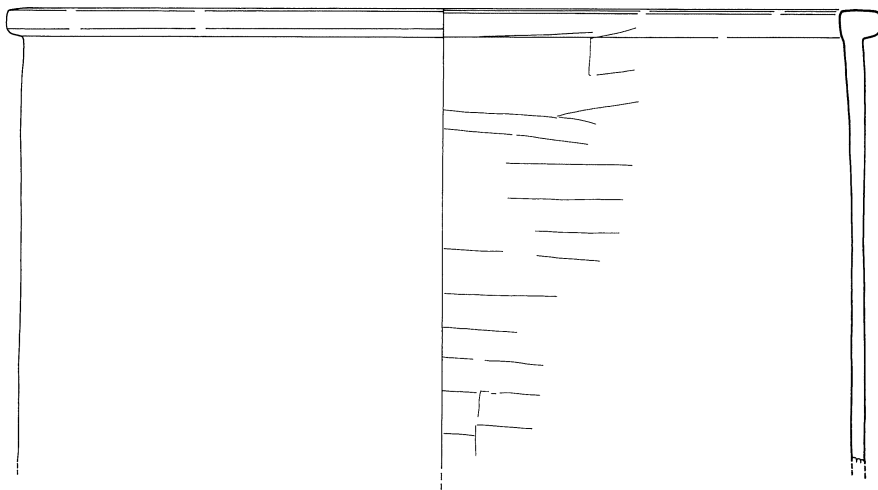
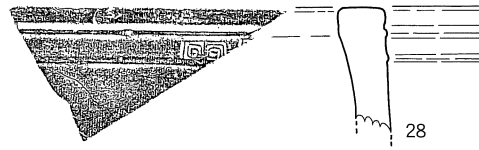
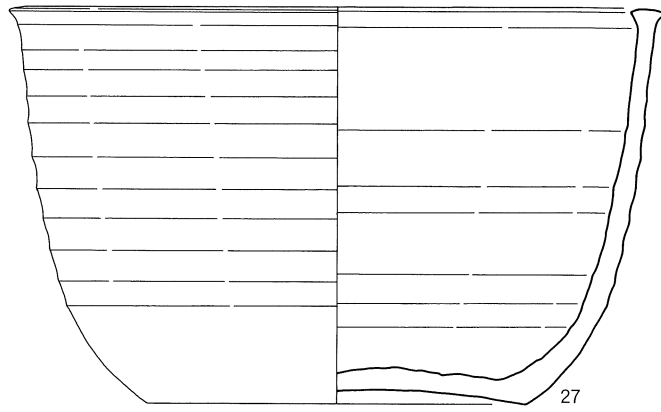
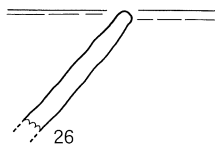
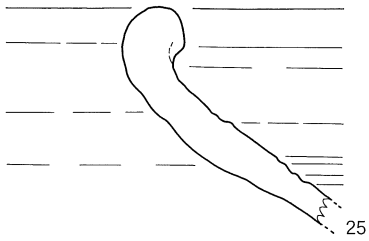
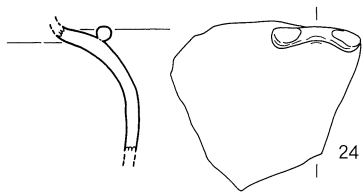


第17図 SX4出土遺物実測図①

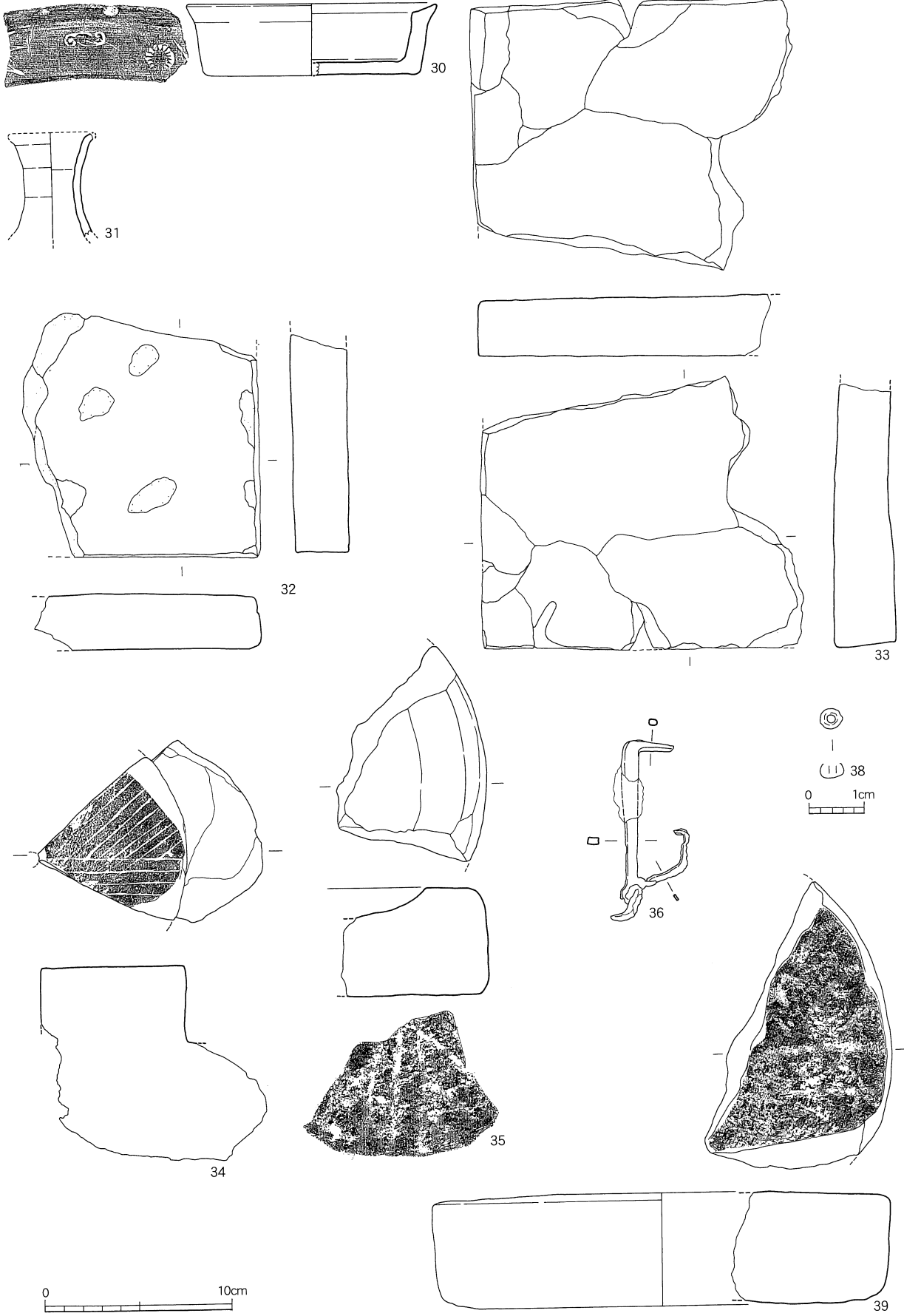
15は口径9.0cm、器高2.3cmである。14・15は煤が付着し灯明皿である。16は破損していない完全な皿で口径12.5cm、器高2.4cm。見込み中心部の円形部分に焼成後の沈線による三角紋が、外周の一箇所にも三角紋がある。17は口縁部下端に段をもつほど強く横なでされ口径9.3cm、器高1.7cm。18は小型で口縁部が内湾気味にたつ。口径7.4cm、器高1.7cm。19は大型の皿で口径19.2cm。20は口径11.7cm、器高2.6cm、21は口径12.4cm、器高2.3cm。

22は波状文をもつ備前焼の小型壺で口縁部最大径12.8cmである。23は高坏の脚部である。弥生時代か。24は中国南部製の焼締め陶器壺で、帯状の粘土紐を貼り付けた耳が付く。耳は器体に密着しており、紐を通す空間は空いていない。25はタイ製四耳壺で、外面下半には自然釉が付着する。器面には回転なで痕が残る。

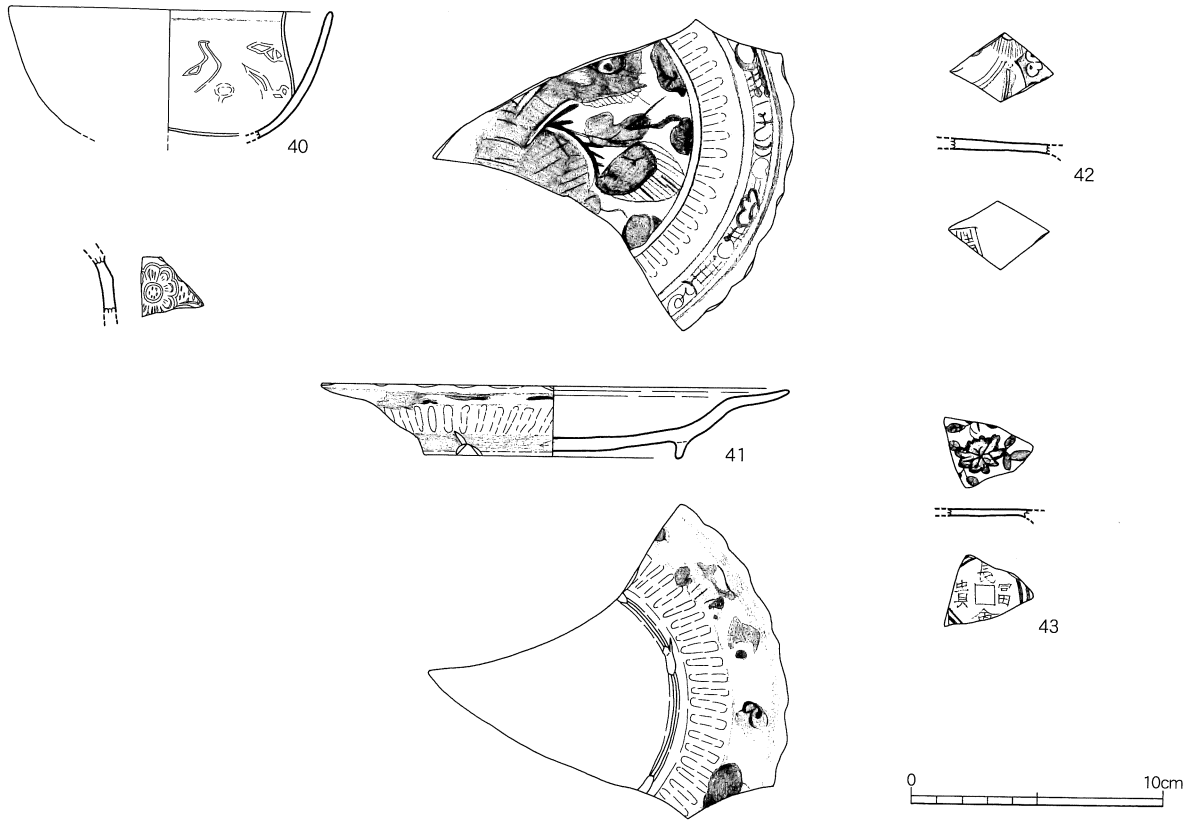
26～30は瓦質土器。26は鉢。27は横なで調整で仕上げられた鉢で、口縁部断面はが内外に向かって突き出る。口径25.9cm、底径15.0cm、器高15.7cmである。色調は暗赤褐色。28は在地系火鉢で口縁部外面上部に二条の低い突帯を貼り付けた間に雷文の刻印がある。



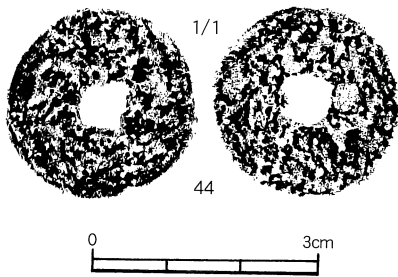
第18図 SX4出土遺物実測図②



第19図 SX4出土遺物実測図③



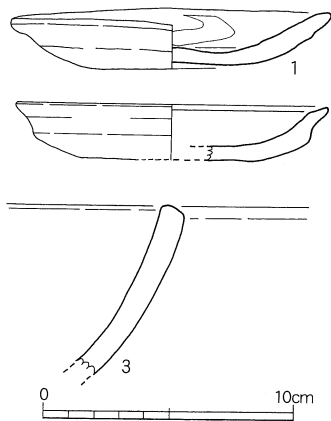
第20図 SX4出土遺物実測図④



第21図 SX4出土銭貨拓影



第22図 SX5実測図



第23図 SK5出土遺物実測図

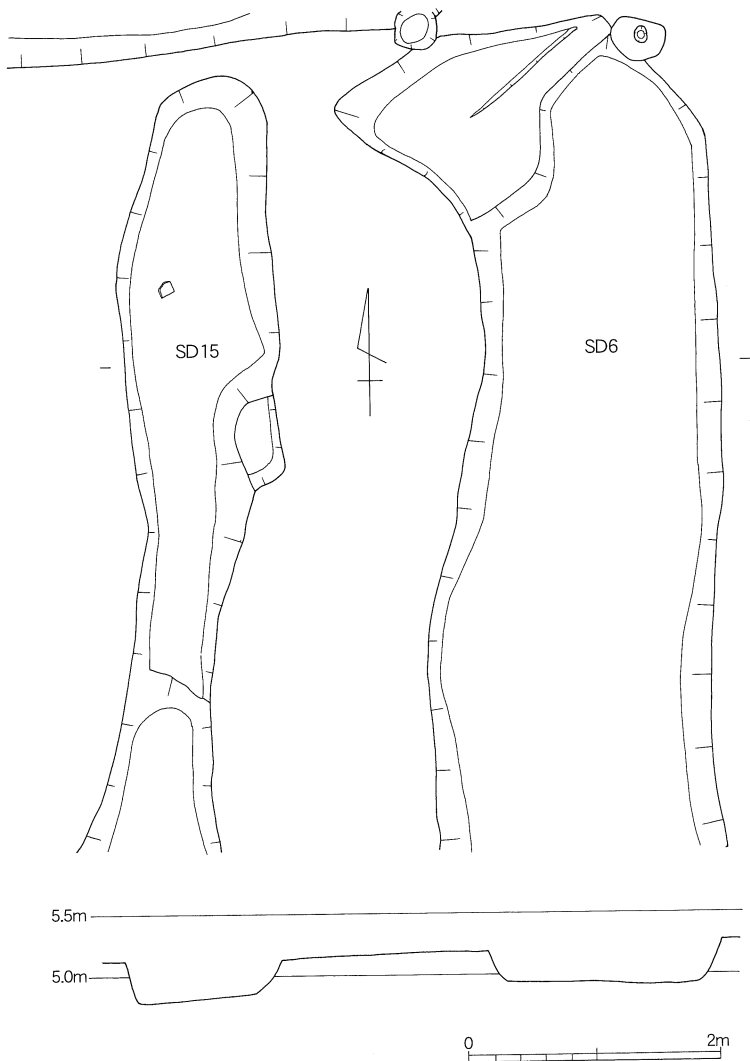
29も火鉢で、接合しないが口縁部から底部まで出土した。口縁部断面は長方形気味で内側に少し張り出し、外側に屈折する。器面の調整は板状の工具による横方向のなで、内外面を仕上げ、内面の底部付近はそれで斜めになで上げている。器面の色調は暗灰色である。口径34.6cm、底径27.6cm、器高約40cm前後である。30は瓦質土器の小

鉢で、口径13.5cm、底径11.2cm、器高3.8cmである。31は大友特有の非対称屈曲文と花紋の刻印がつく。31は古代の須恵器高坏。32・33瓦と同じ焼成の埴。厚さは32が3cm、33が3.2cm。34・35・39は石臼で、縮尺は1/4で図示している。34・39は下臼、35は上臼。35の磨面は二次的に焼けて黒変している。安山岩製。39も安山岩製で最大直径は32.8cm。36は鉄製品で、二つの部品が組み合っている。

37は華南三彩で、蓮華紋様がある。38は緑色のガラス玉。直径4mm、緑色である。40～43は中国製青花。40は内面上部に横方向の一本線が染付けで、他に陽刻による紋様を施している。景德鎮製。口径12.8cm。41は州窯の皿。口径18.4cm、底径10.1cm、器高2.8cm。42・43は景德鎮窯系の皿。43は中心部の四角を囲んで「長命富貴」とあり、外周を圏線で囲み銭貨のようにしている。44は方形の穴があいた銘文不詳の銭貨。

SX 5 (第22図) C63区の礫群である。標高5.2m付近を地面として2.5 m×1.5mの範囲に礫が密集し、周辺にも広がった部分である。礫に混じって京都系土師器2点と瓦質土器が出土した。遺物から16世紀第4四半期の遺構と考えられる。

出土遺物 (第23図1～3) 1・2は3期(16世紀第4四半期)の京都系土師器である。両者とも厚手で、1は口径12.7cm、器高2.5cm、2は口径12.4cm、器高2.2cmである。2は口縁部外面が窪んでめぐり、端部は急激に細くなっている。3は瓦質土器の鉢口縁部である。色調はにぶい黄橙色である。4は鉛製のメダイである。円盤状部分の上部に逆台形の部分があり、さらに上方に半円形の突起がついている。突起には正面から穿孔がある。長さ1.65cm、幅1.31cm、厚さ0.3cm、重さ3.6gである。



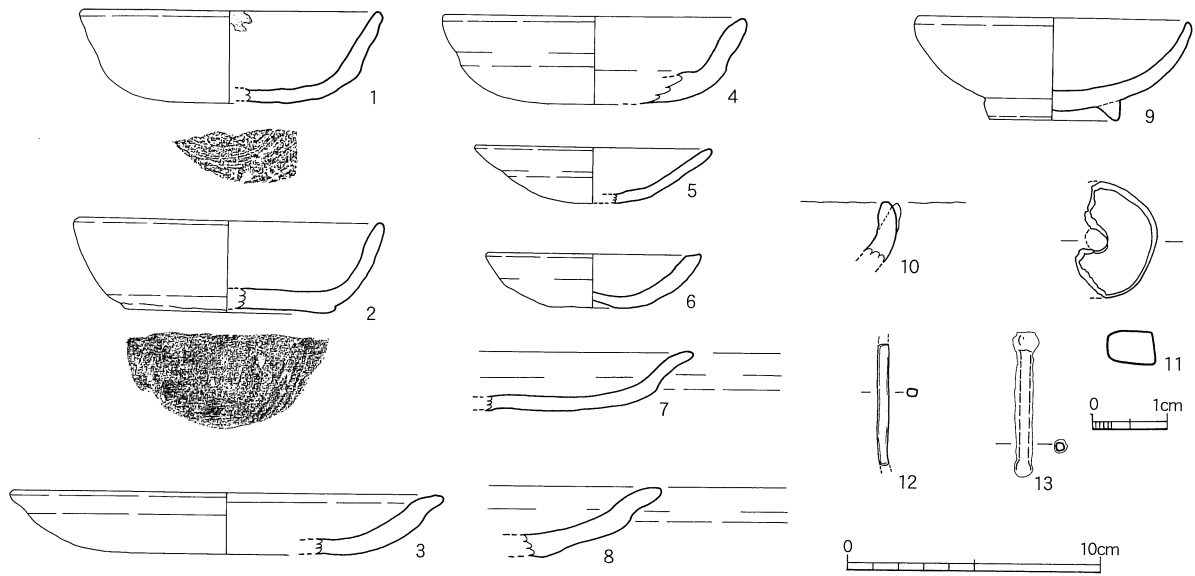
第24図 SD6・15実測図

SD 6 (第24図) F63区・64区に存在した南北方向長い土坑である。第36次調査区のSK1の北側延長部にあたる同一の遺構である。標高5.2mで検出した。

第41次調査区内での長さは6.8m、幅は2.5m、床面は平坦で深さ約20cmである。第36次調査区でのあり方と出土遺物からみて16世紀後葉以降の遺構と考えられ。

出土遺物 (第25図1～13) 1・2は在地区土師器皿で糸切り底。

1は底部は糸切り離したが、底部から体部への移行部はまるく連続しており、京都系土師器を模倣した可能性がある。2は底部と体部の違いが明確で、15世紀後葉頃の遺物が混入したものであろう。3～8は京都系土師器皿である。3は口径17.2cm、器高2.4cm、4は深い皿で口径12.0cm、器高3.5cm、5は口径9.4cm、器高2.1cm、6は



第25図 SD6出土遺物実測図

口径8.6cm、器高2.2cm、7と8は口縁部下端に明瞭な段をつける。9は土師質の椀で器面調整はなで、断面三角で底部が尖る高台は貼り付けている。口径11.0cm、底径5.0cm、器高4.1cmである。10は埴埴の注ぎ口部の破片である。11は凝灰岩製の紡錘車で、直径4.1cm、厚さ1.4cm、現状の重さは9.0gである。12は棒状の青銅製品で断面は長方形である。長さ4.8cm、断面は3mm×4mm、重さは5.8gである。13は両端が膨らんだ棒状の鉄製品である。性格には錆びているので分からない。

SE 7（第26図） D63区に位置する。SE 7とSE10は一部重複した平面円形の井戸らしい遺構である。検出した標高は5.1mである。大雨の時、丁度半分まで断ち割って調査中であつたが、雨水のために崩落したので、途中までしか図化していない。内部には円錐形の掘り窪め痕をもつ緑泥片岩の礫大型品1個を含んだ大小の礫が投げ込まれていた。遺構の壁は垂直に立ち上がり、平面形、規模から見ても井戸跡であろうと考えた。16世紀後葉の遺構と考えられる。

出土遺物（第27図1～4） 1は3期の京都系土師器皿。口縁部外面には横なでによる段差が付く。口径12.8cm、器高2.5cm。2・3は瀬戸美濃製の天目椀で、外面下部から外底面は露胎である。2は口径2cm、底径4.5cm、器高6.0cm、3は口径11.8cmである。4は鉄製の斧である。側面は柄挿入する部分から刃先に向かって反り返っている。柄を挿入する穴は四角い。刃先の幅は6.1cm、全体の長さは11.5cm、重さは308.5gである。

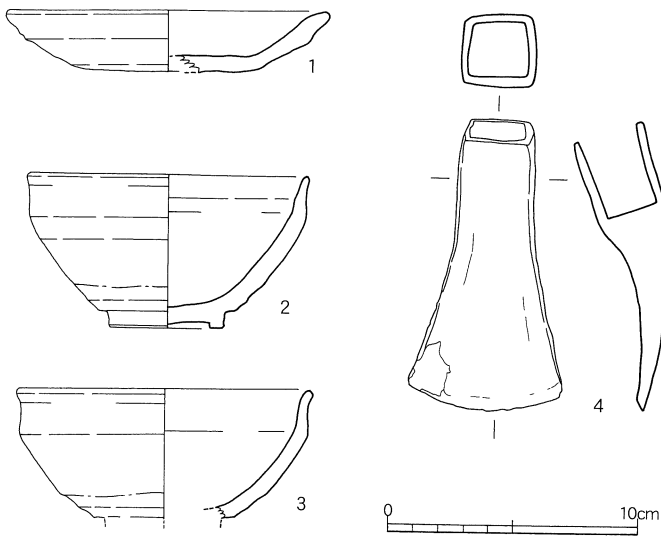
SK 9 C63区にあり、SK3に切られた土坑である。出土遺物はない。

SD 8（第28図） D63区に位置する土坑である。標高5.06mで検出した。

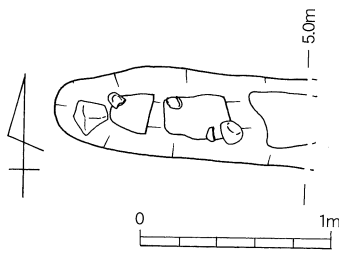


第26図 SE7・SE10実測図

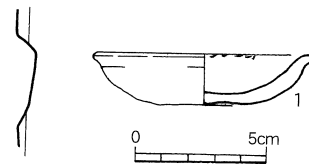
出土遺物（第29図1）は京都系土師器皿である。口径8.4cm、器高2.0cmの小型皿で口縁部には煤が付着し灯明皿として使われている。



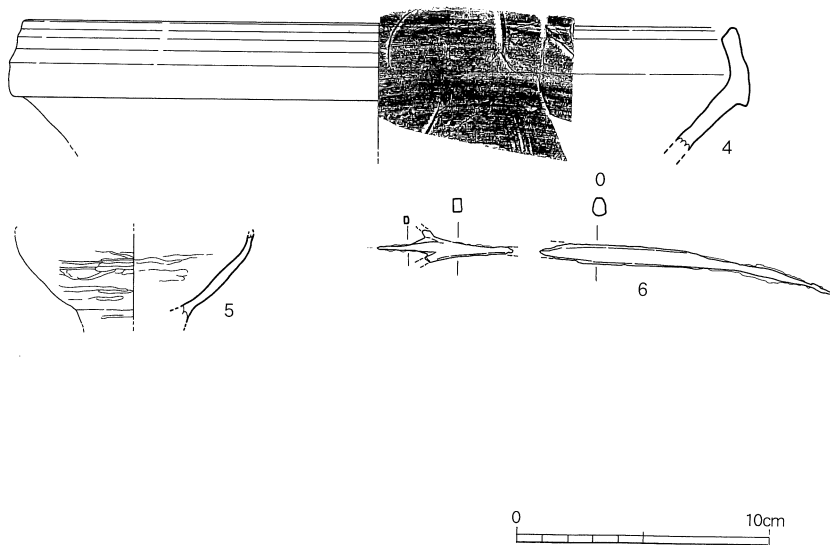
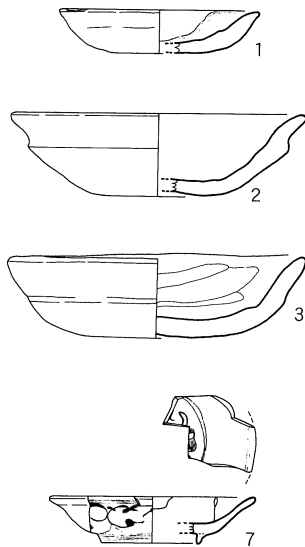
第27図 SE7出土遺物実測図



第28図 SD8実測図



第29図 SD8 出土遺物
実測図

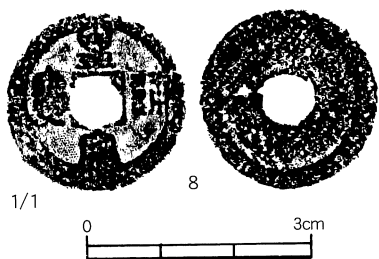


第30図 SE10出土遺物実測図

SE10 (第26図) D63区に位置し、SE7の南にあり、SE 7と一部重複した平面円形の井戸と思われる遺構である。半割して調査している最中に大雨が溜まった時に崩落したので、途中までしか調査していない。出土遺物と検出標高からみて16世紀後葉から末葉の遺構である。

出土遺物 (第30・31図1~8) 1~3は3期(16世紀第4四半期)の京都系土師器皿である。1は内面に煤が付着しており灯明皿として使われたことが分かる。口縁部外面をわずかに横方向になでている。口径8.0cm、器高1.7cmである。2は口縁部外面を強く横なでし、鋭い稜線を形作っている。3は全体に厚手の作りで、内面はなで上げた痕跡が残る。口縁部外面は他の京都系土師器同様横方向になでている。口径11.9cm、器高3.4cmである。4は近世1期(16世紀第2四半期~17世紀第1四半期)の備前焼き播鉢で、内面の一部に異方向の播り目がある。5は土師質の椀で器面はヘラ磨きされている。色調は茶褐色を呈する。6は鉄製品で、先端が三つ又状に分かれており、漁具あるいは武器とみられる。7は景德鎮製青花皿。口径8.9cm、器高1.9cm。8は皇宋通宝(北宋1038年初鑄)。

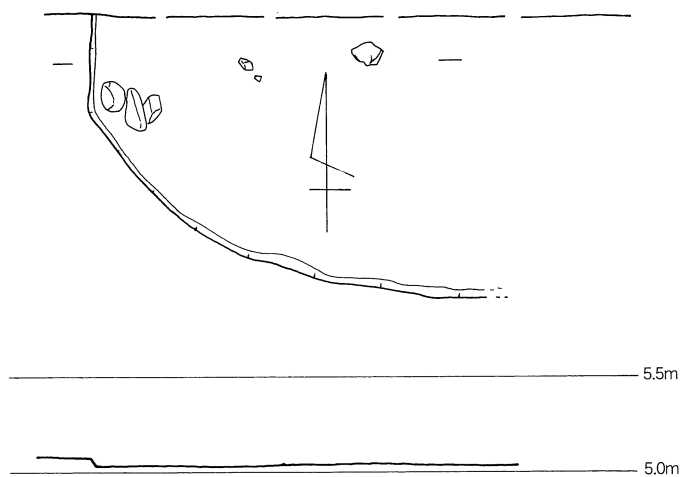
SK10 (第32図) A62区・63区の調査区北縁にある浅い大型の円形土坑である。年代の分かる出土遺物はなかったが、検出標高は5.1mであり、16世紀後葉の遺構であろう。



第31図 SE10出土銭貨拓影

SD11 (第8図) F64区にある溝状遺構で、SP1023に切られる。

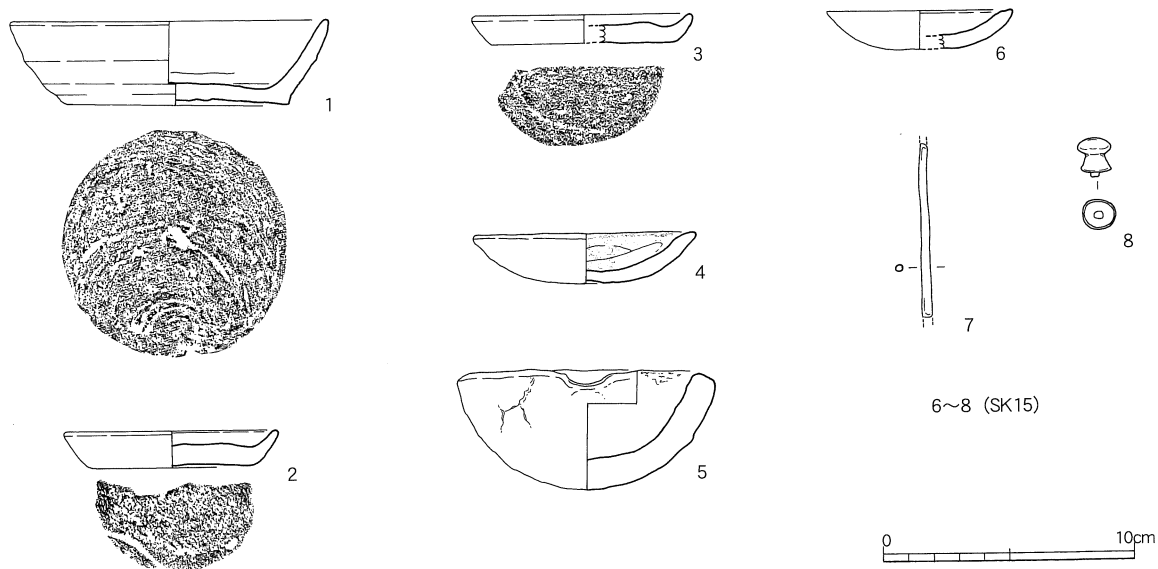
出土遺物 (第33図1・2) 2点とも在地系土師器で、1は体部の中程外面が厚くなり稜線をもつ皿で、口径12.7cm、底径8.9cm、器高3.4cmである。明黄色を呈する。2は口径8.5cm、底径3.4cm、器高1.4cmの杯である。淡灰褐色を呈する。主に1の特徴から見て14世紀中葉から後葉の遺物である。



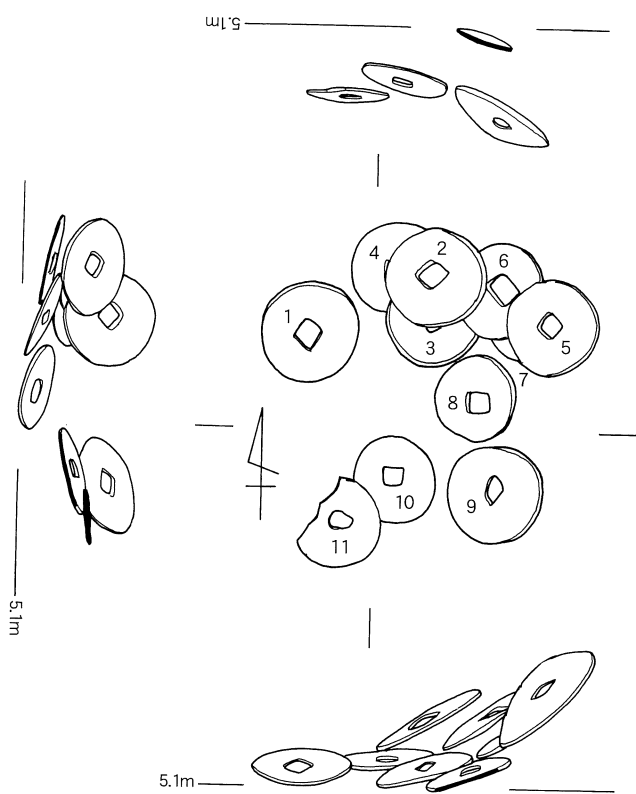
第32図 SK10実測図

SK12 (第6図) F64区にある土坑で、標高5.10mで検出した。

出土遺物 (第33図3~5) 3は在地系土師器杯で口径8.5cm、底径7.2cm、器高1.2cm。4は京都系土師器小皿で内面に煤付着しており、灯明皿として使われている。口径8.8cm、器高2.0cm。5は手づくねの坩堝で口縁部に焦げ付きがある。口径10.2cm、器高4.8cm。



第33図 SK11~15出土遺物実測図



第34図 SX13実測図 (1/2)

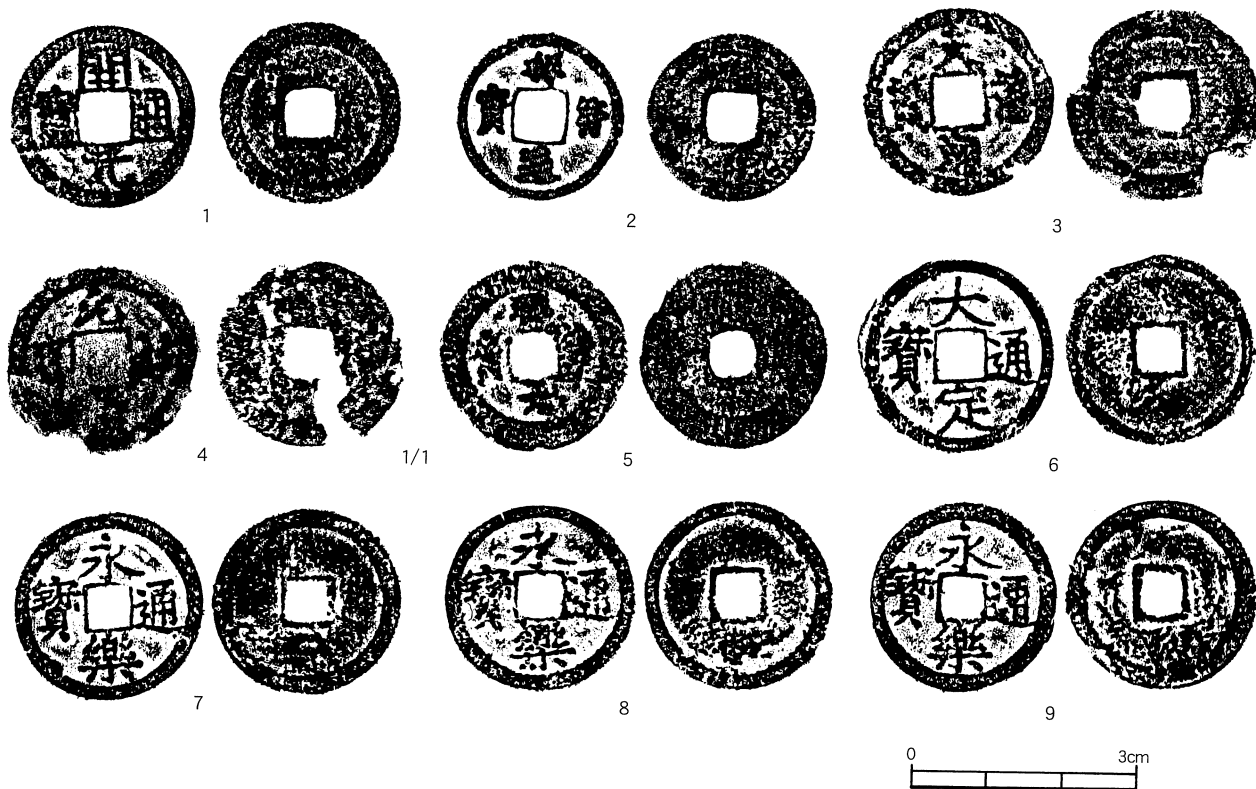
SD15 (第6図) F63区・64区の溝状遺構。

出土遺物 (第33図6~8) 6は京都系土師器杯、7・8は青銅製品で、7は断面が円い棒状、8はボタン状になっており、先端が丸く下部は未広がりであり中央に小さい突起がつく。

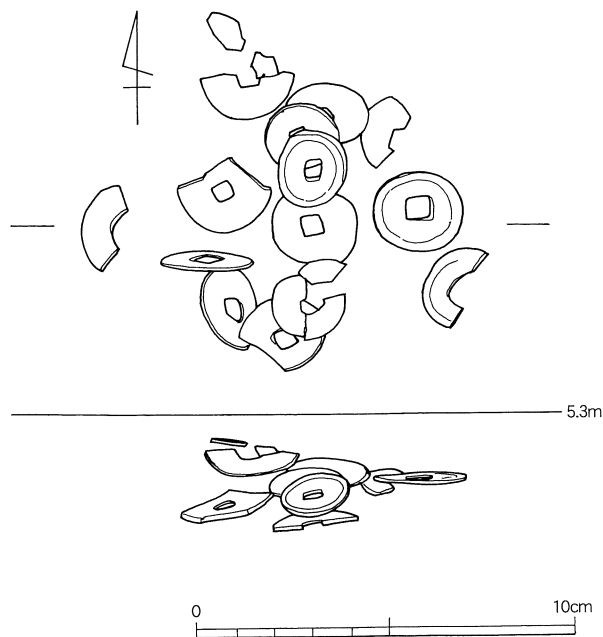
SX13 (第34図) E64区にあり、他の散在する遺物同様に通常の包含層中であつた。標高5.1mの面に下底を置いて11枚の銭貨が土坑内に置かれたように面的に分布した。

出土遺物 (第35図1~9) 1は開元通宝 (唐621年初鑄)、2は祥符通宝 (北宋1009年初鑄)、3は天禧通宝 (北宋1017年初鑄)、4は元祐通宝 (北宋1086年初鑄)、5は紹聖元宝 (北宋1094年初鑄)、6は大定通宝 (金1178年初鑄)、7~9は永樂通宝 (明1408年初鑄)。

SX14 (第36図) E64区の中央部にあつた銭貨集中箇所である。標高約5.3mで検出した。13枚の銭貨がばらばらの状態で出土した。



第35図 SX13出土銭貨拓影

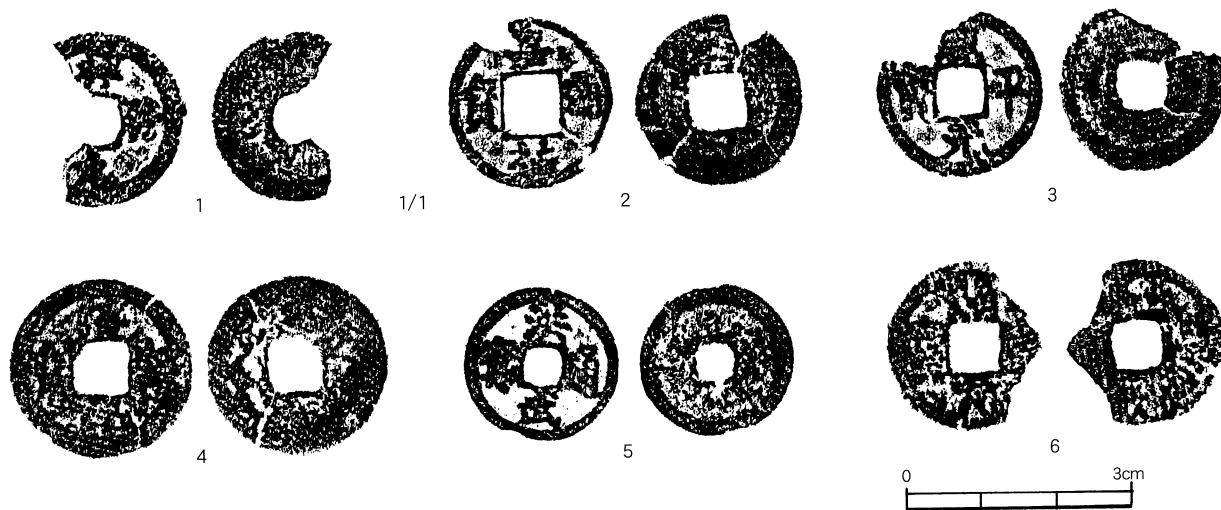


第36図 SX14実測図 (1/2)

出土遺物 (第37図1~6) 1は祥符元宝、2・4は治平元宝 (北宋1064年初鑄)、3は咸平元宝 (北宋1056年初鑄)、5は洪武通宝 (明1368年初鑄)、6は銘文不詳。

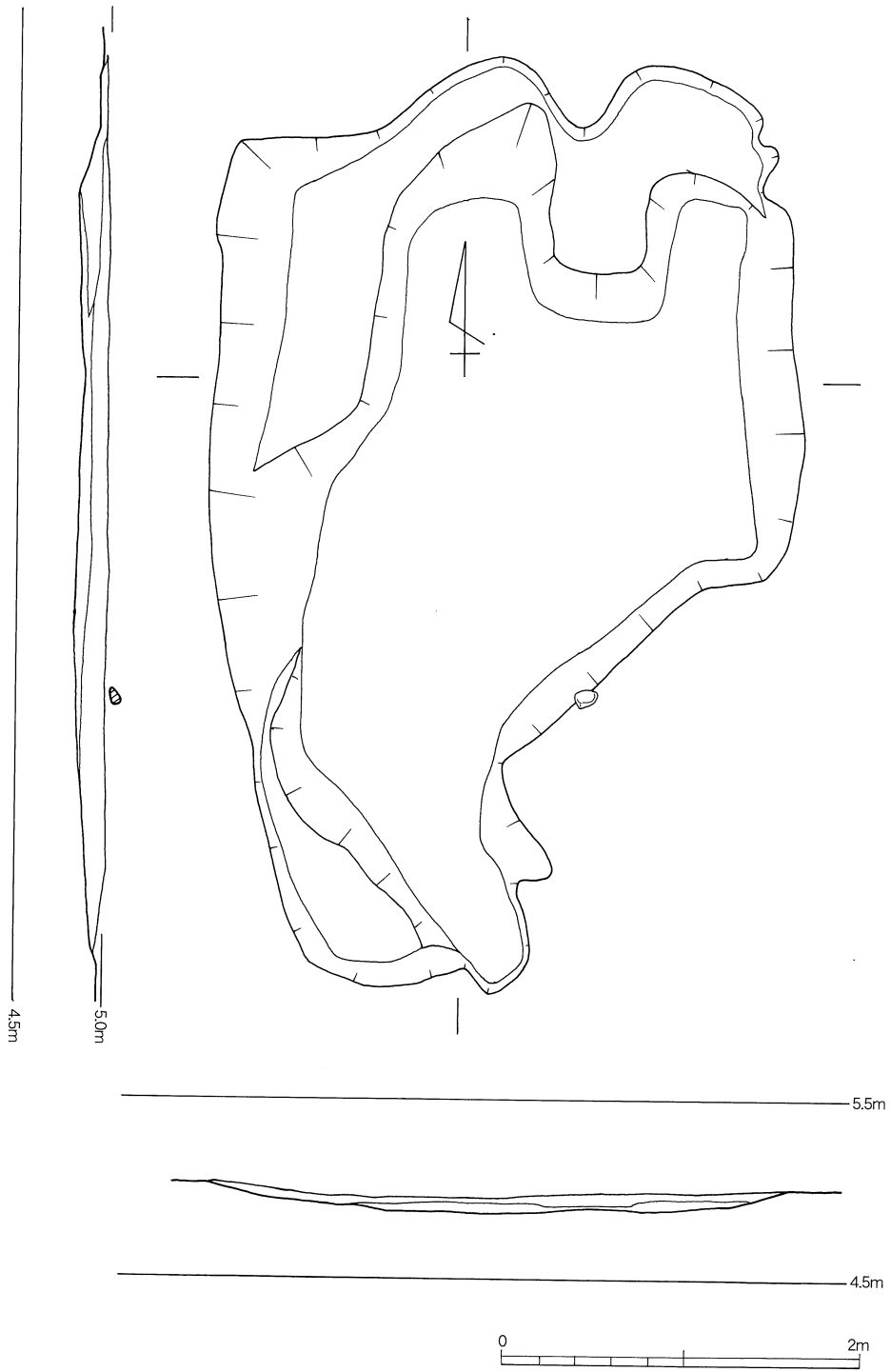
SK16 (第38図) E64区北西部にある不整形土坑である。標高5.0mで検出した。浅い土坑であり、全体の形は南北に長く、床面では北部に二箇所、南部に一箇所の外方向への突出部分がある。何度かの掘り込みがこの場所で繰り返された集積の結果がSK16になったものとみられる。16世紀後葉前後の遺構であろう。

出土遺物 (第39図1・2) 1は在地系土師器皿で口径6.6cm、底径6.6cm、器高1.2cm。短い口縁部が外湾し、口縁部の厚さは底部よりも薄い。2は3期の京都系土師器坏である。口径19.6cm。

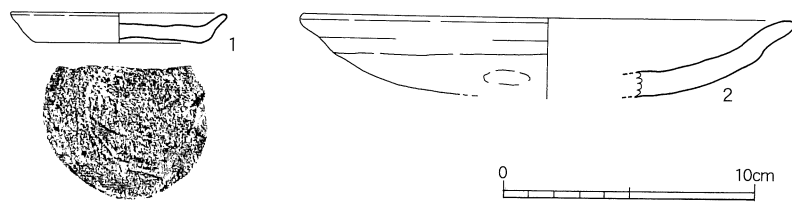


第37図 SX14出土銭貨拓影

SK17 (第6図) E64区の土坑である。出土遺物はないが、検出面の標高が5.02mであり、16世紀後葉前後の遺構であろう。



第38図 SK16実測図

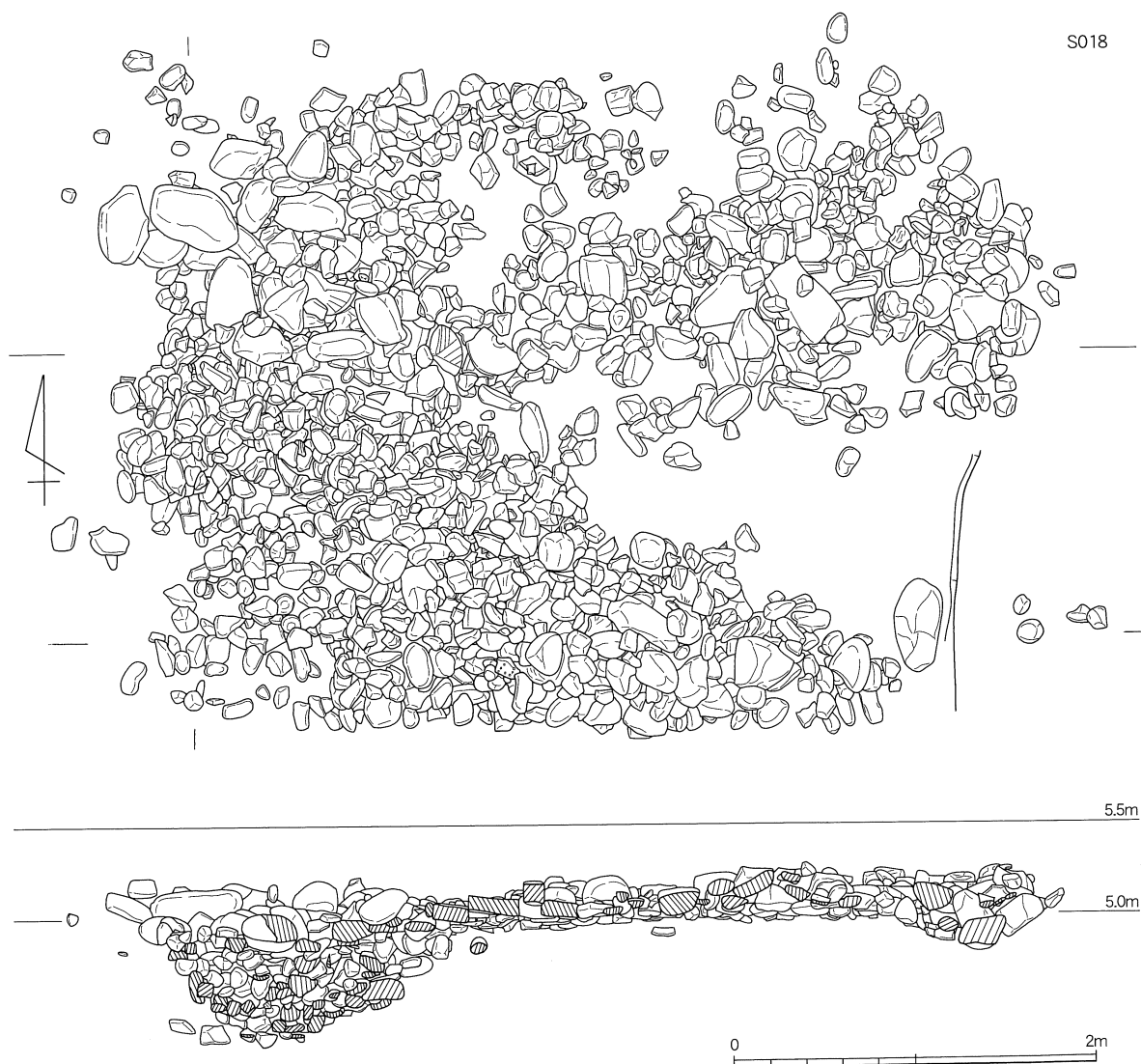


第39図 SK16出土遺物実測図

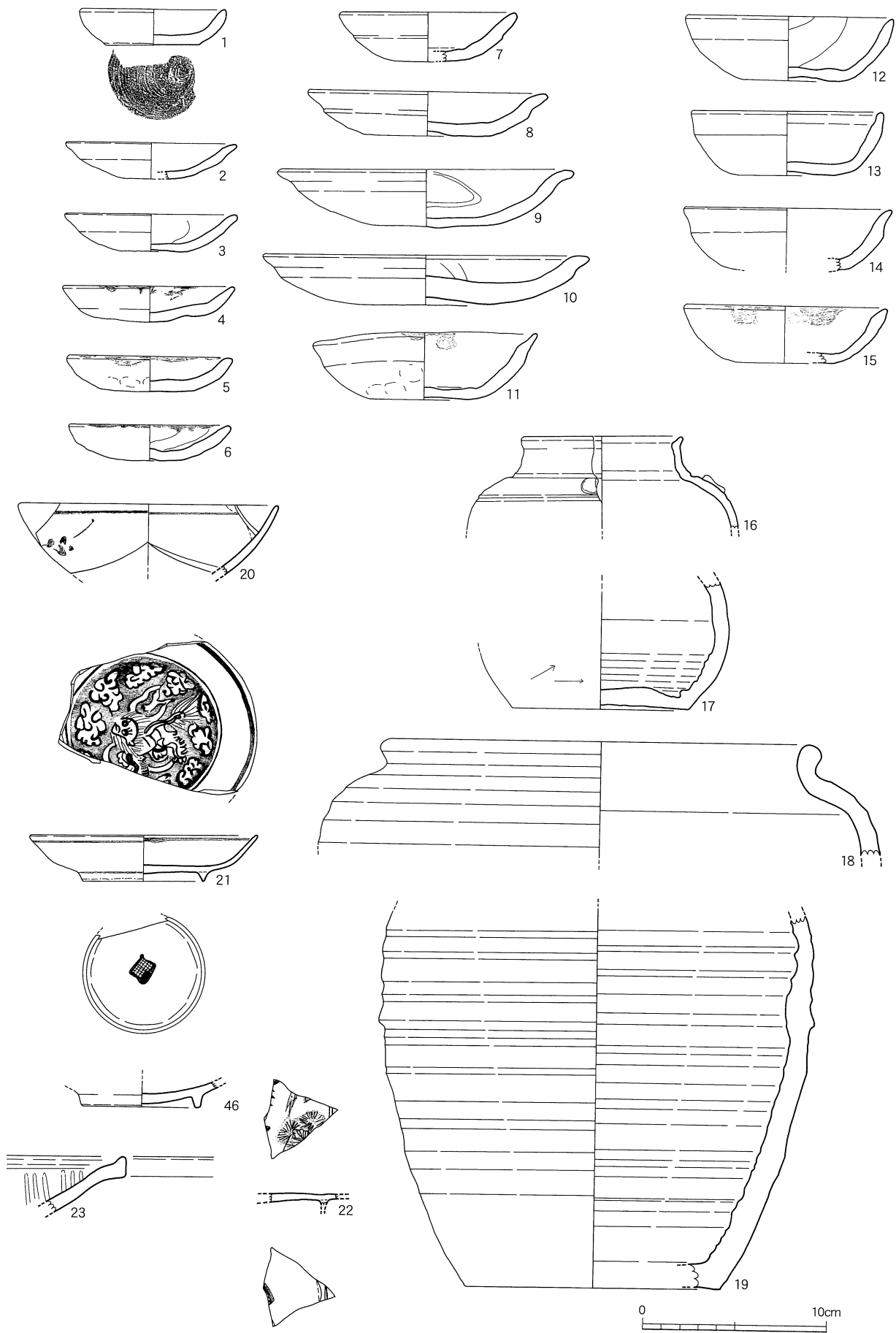
溝SD013は
第51次・
第52次調査区まで
伸びない

SK18 (第40図) D63区・64区西端部にある多量の礫・遺物の詰まった土坑で、遺構の半分は第36次調査区にあり、第36次調査区でもSK18の遺構名を付けている。第41次調査区では長さ5m×4m程度の広がりを示し、中央部分は深くなっていた。土坑の中に火事跡の廃棄物を投棄したような遺構である。標高4.70mで検出した。

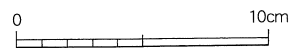
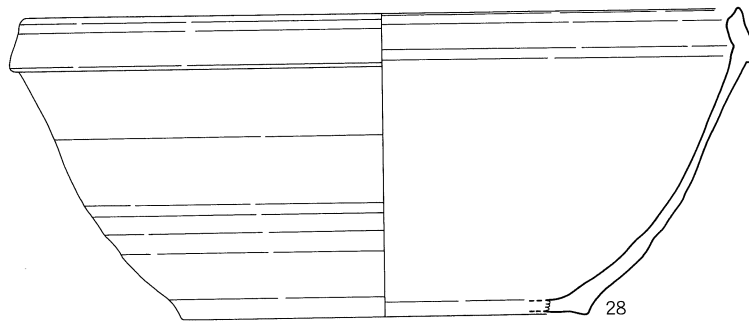
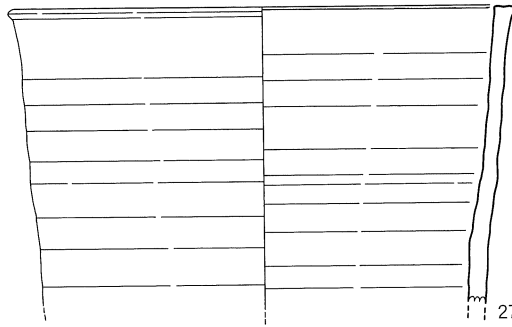
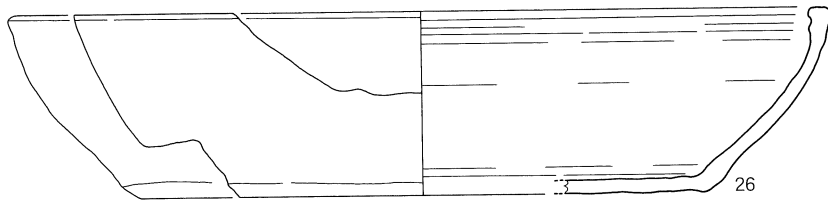
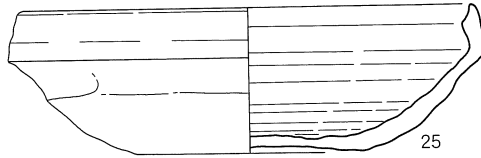
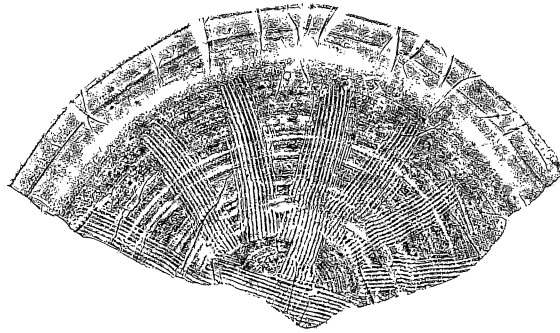
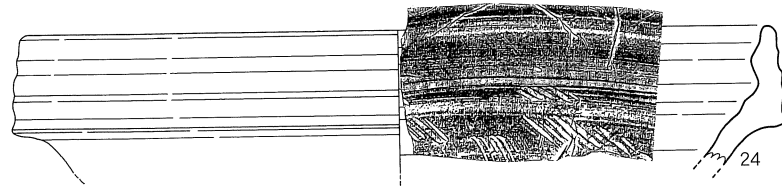
出土遺物 (第41～45図 1～46) 1は在地系土師器皿、2～15は3期の京都系土師器である。1は底部糸切り離しで、口径8.0cm、底径5.0cm、器高2.0cm。2～7は小型の皿で、このうち4～5は口縁部に煤が付着しており灯明皿として使われている。京都系土師器の場合は小型の皿が灯明皿に使われる事が多い。口径・器高は次のとおりである。2 (9.3cm・2.0cm)・3 (9.4cm・2.0cm)・4 (9.4cm・2.0cm)・5 (9.0cm・1.9cm)・6 (9.2cm・2.0cm)・7 (9.6cm・2.7cm)。8～15は相対的に大型の京都系土師器皿である。灯明皿とされたのは11・15の2点だけである。



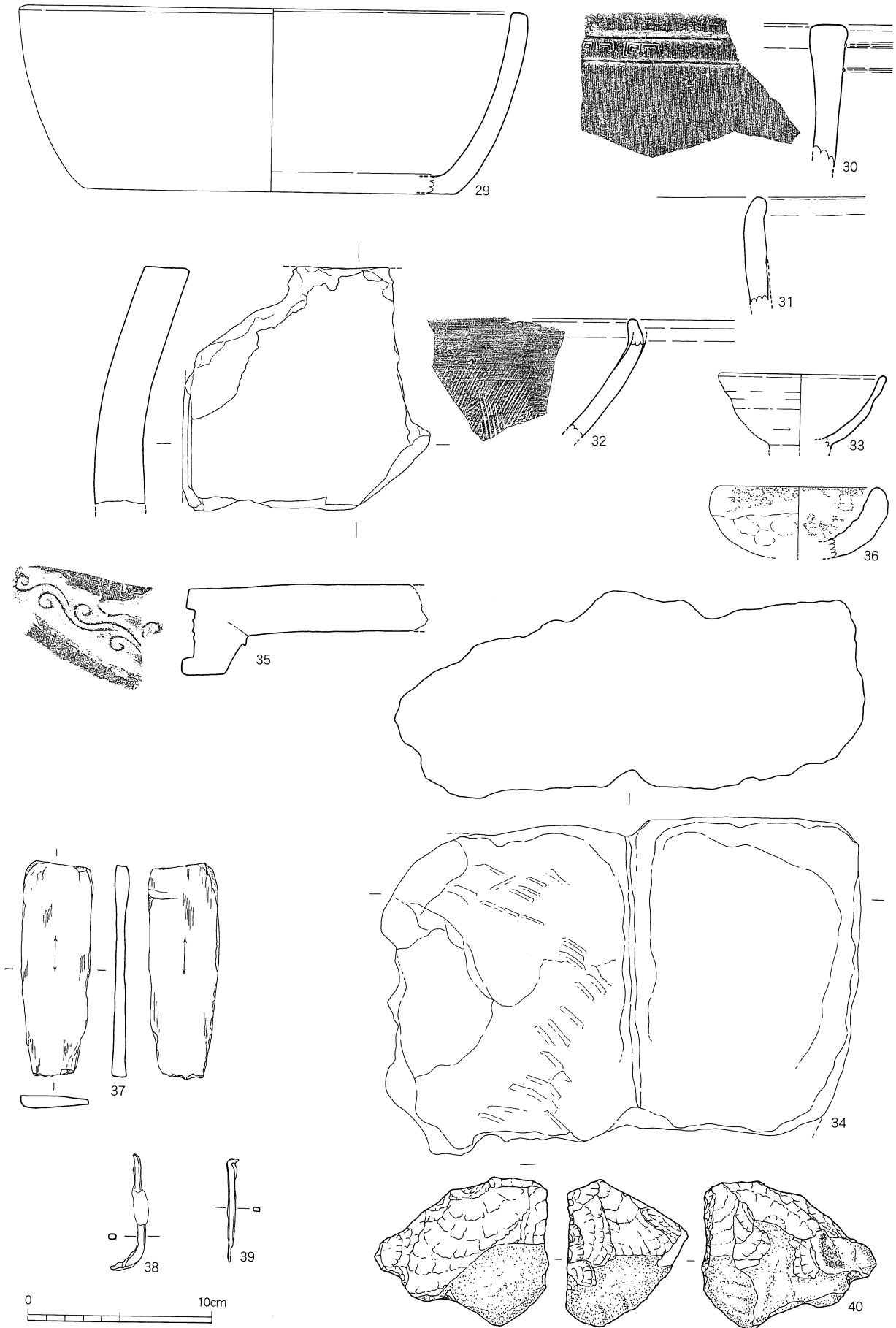
第40図 SK18実測図



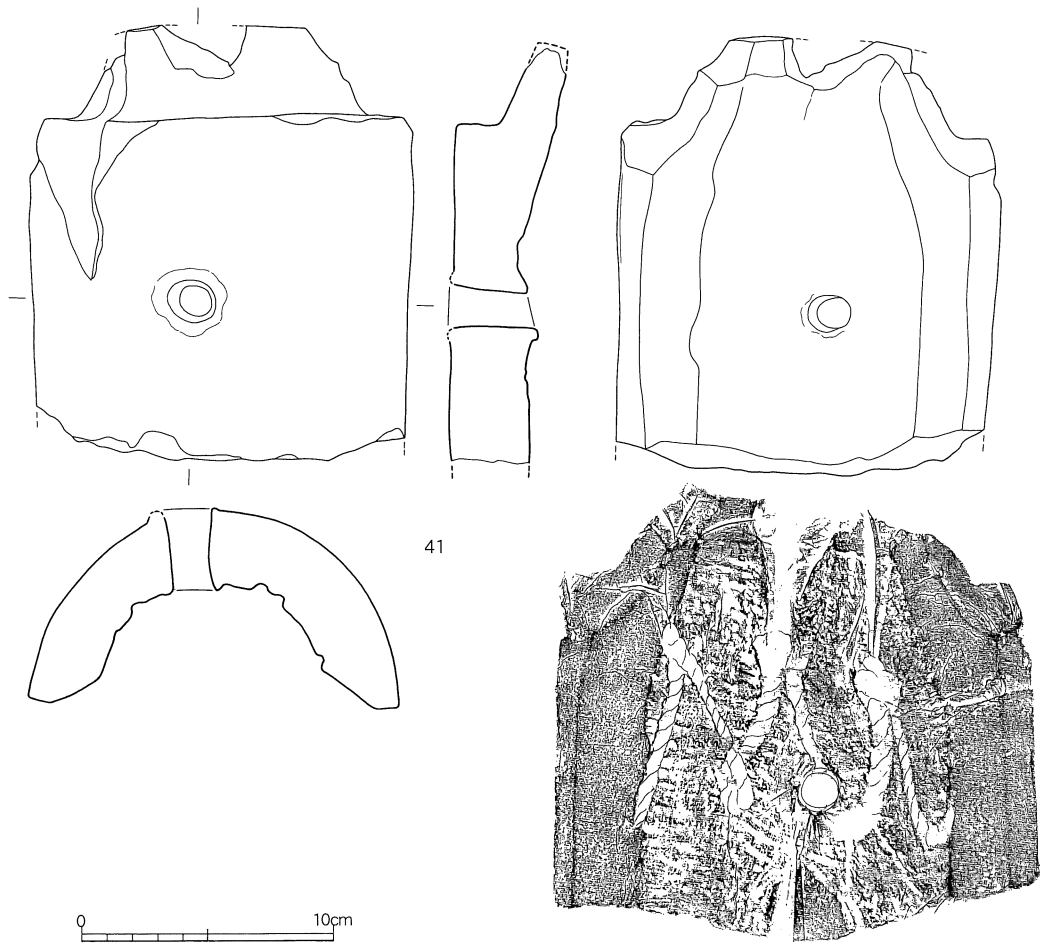
第41図 SK18出土遺物実測図①



第42図 SK18出土遺物実測図②



第43図 SX18出土遺物③



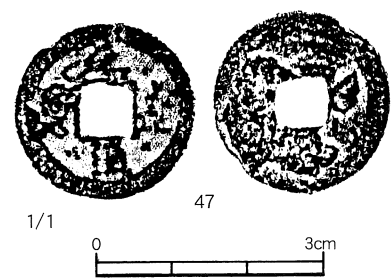
第44図 SX18出土遺物実測図④

16～19は中世6期の備前焼で、16・17は壺、18・19は甕である。16は口径8.8cmで口縁端部は外側に張り出す。肩部には把手が残る。17は小型壺の底部である。底部径は9.6cmあり、外面下半はヘラ削りし、他は回転などで調整している。18は口径23.0cm、胴部最大径は上部にあり30.8cmの甕である。19は底径13.9cmの甕である。

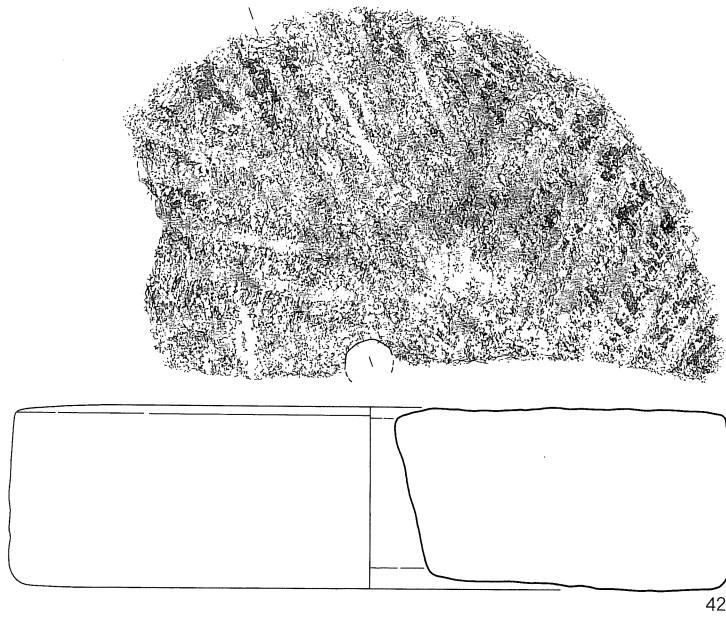
20～22は青花で、20は中国南部の州窯系の碗で口径14.0cm、21は景德鎮窯系の皿で口径12.2cm、底径6.5cm、器高2.5cmである。22は景德鎮窯系の皿。23は口縁部を折り返し、端部を上に向けた青磁鉢で器面には貫入がある。

24・25・27も備前焼で、24は口縁部上端が上側に突き出し、挿り目が斜行するもの。25は見込みの部分に十字型に挿り目を入れている。口縁部の特徴は24に似ておりこの2点も中世6期。26は32.2cm、底径22.4cm、器高7.2cmの鉢。中国南部製の焼締陶器であると思われる、外面に緑釉がかかる。外面には沈線紋様がある。27は筒型の水指で口径20.1cm。

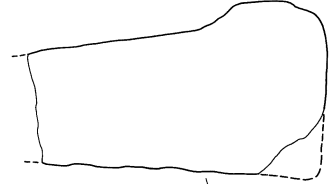
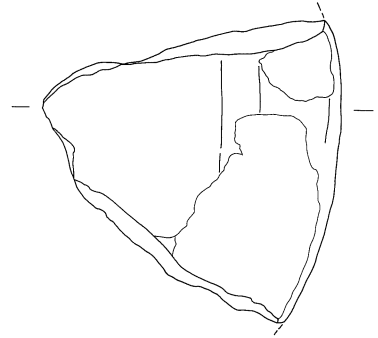
28は中国南部製の焼締陶器の鉢。厚い口縁部を帯状に折り返し口径28.4cm、底径16.2cm、器高12.0cm。29～32は瓦質土器。



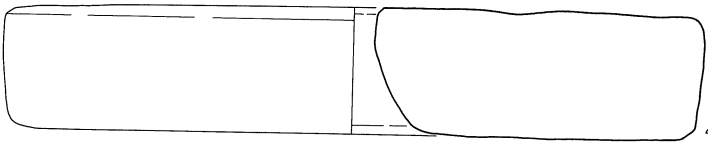
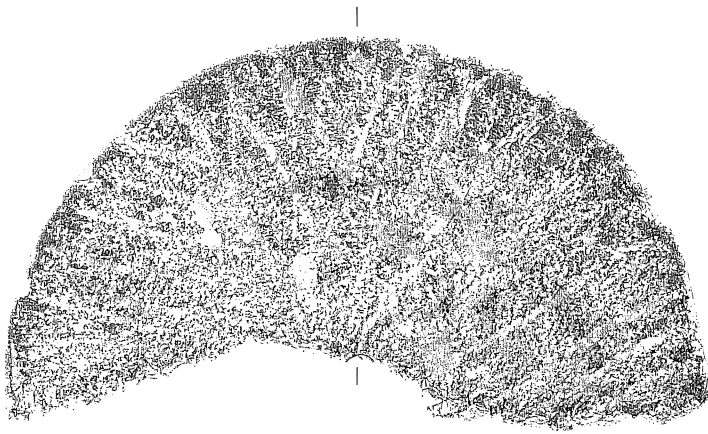
第46図SX18出土銭貨拓影



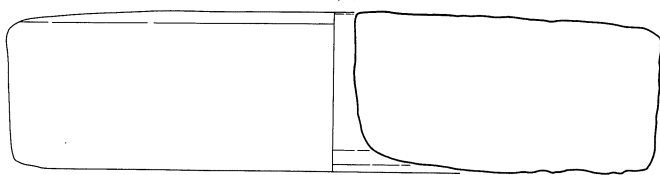
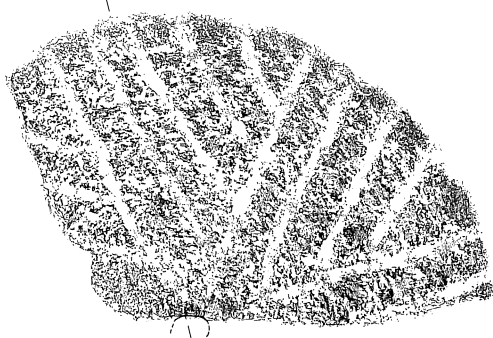
42



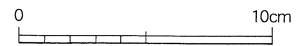
44



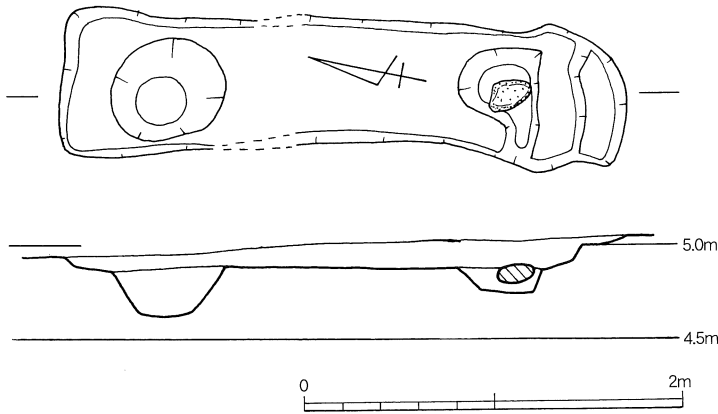
43



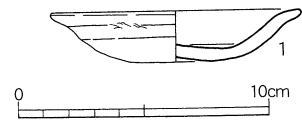
45



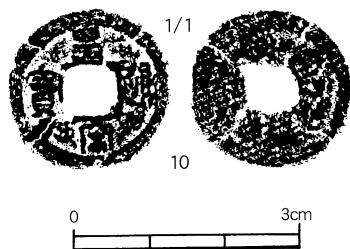
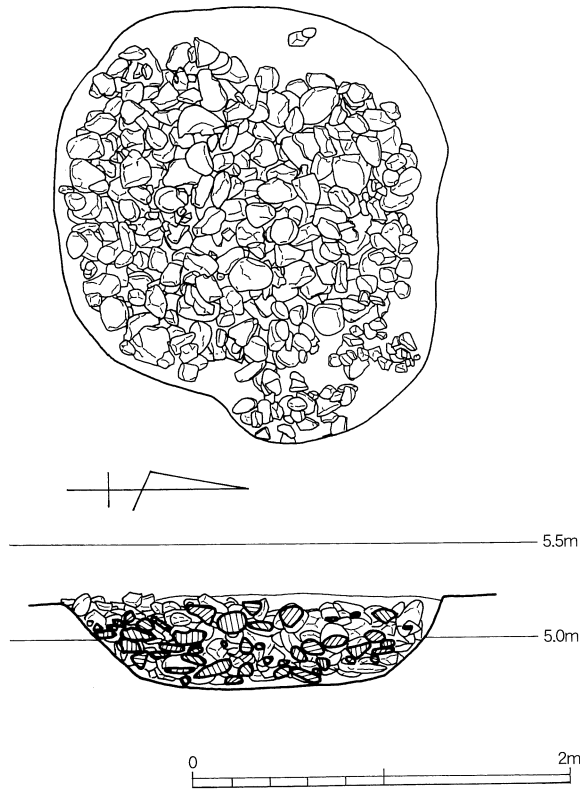
第45図 SX18出土遺物実測図⑤



第47図 SD19実測図



第48図 SD19出土遺物実測図



第50図 SK20出土銭貨拓影

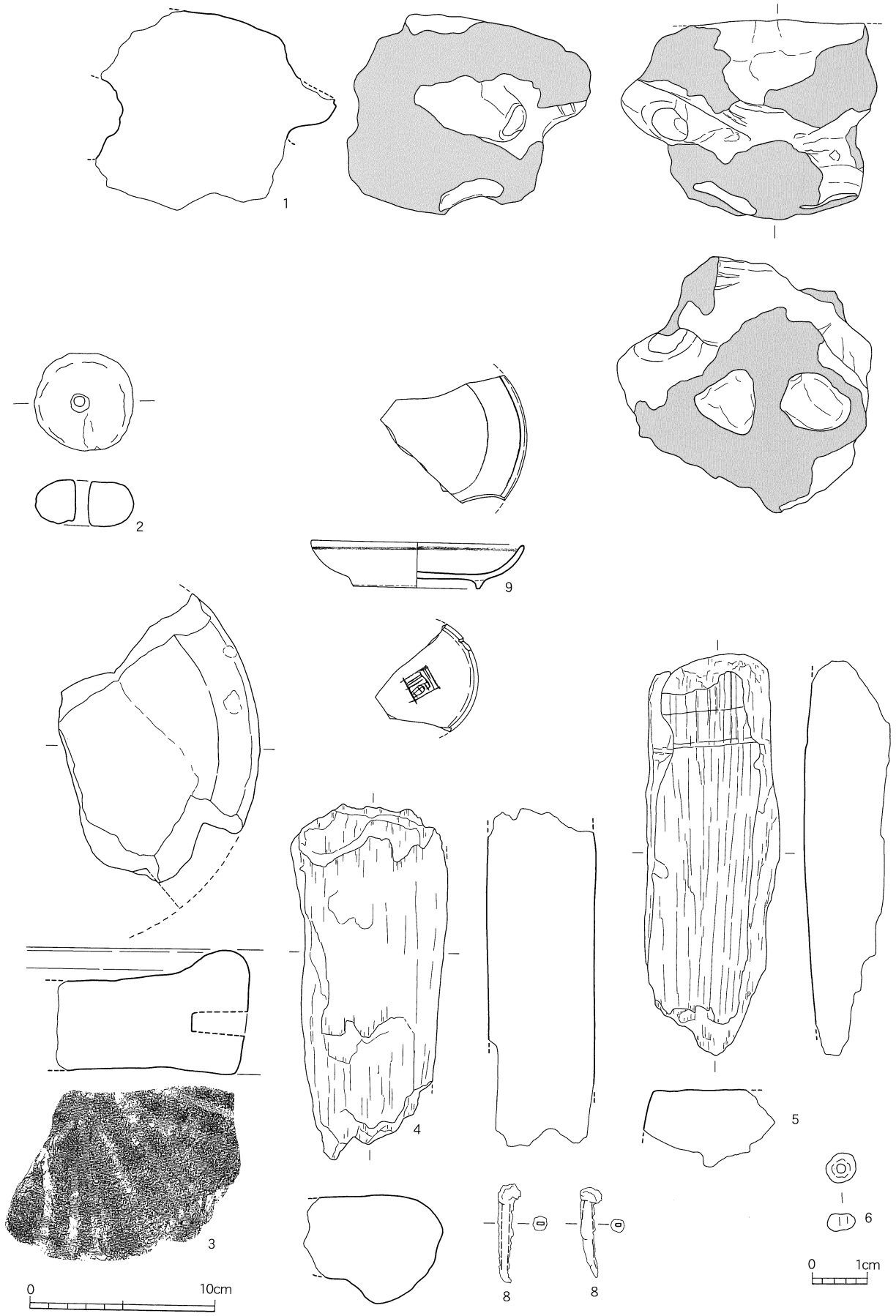
29は器面が丁寧な横方向のなで調整がなされた鉢。30は火鉢、31は胎土に石英を含み縄文土器の可能性もある。32は内面に挿り目があり、挿鉢である。33は瓦器碗で、外面下半は横方向のへら削りし、その他は回転ナデである。

34は凝灰岩製で、一面には溝が入れられている。35は軒平瓦。唐草紋をもつ。36は埴塙で口縁部周辺は焼け爛れている。37は結晶片岩製の砥石。両面を使用している。38・39は鉄製品。40は大分県山香六太郎産の火打ち石。41は丸瓦。42～45は石臼で、44が上臼、他は下臼である。46は元豊通宝（北宋1078年初鑄）。

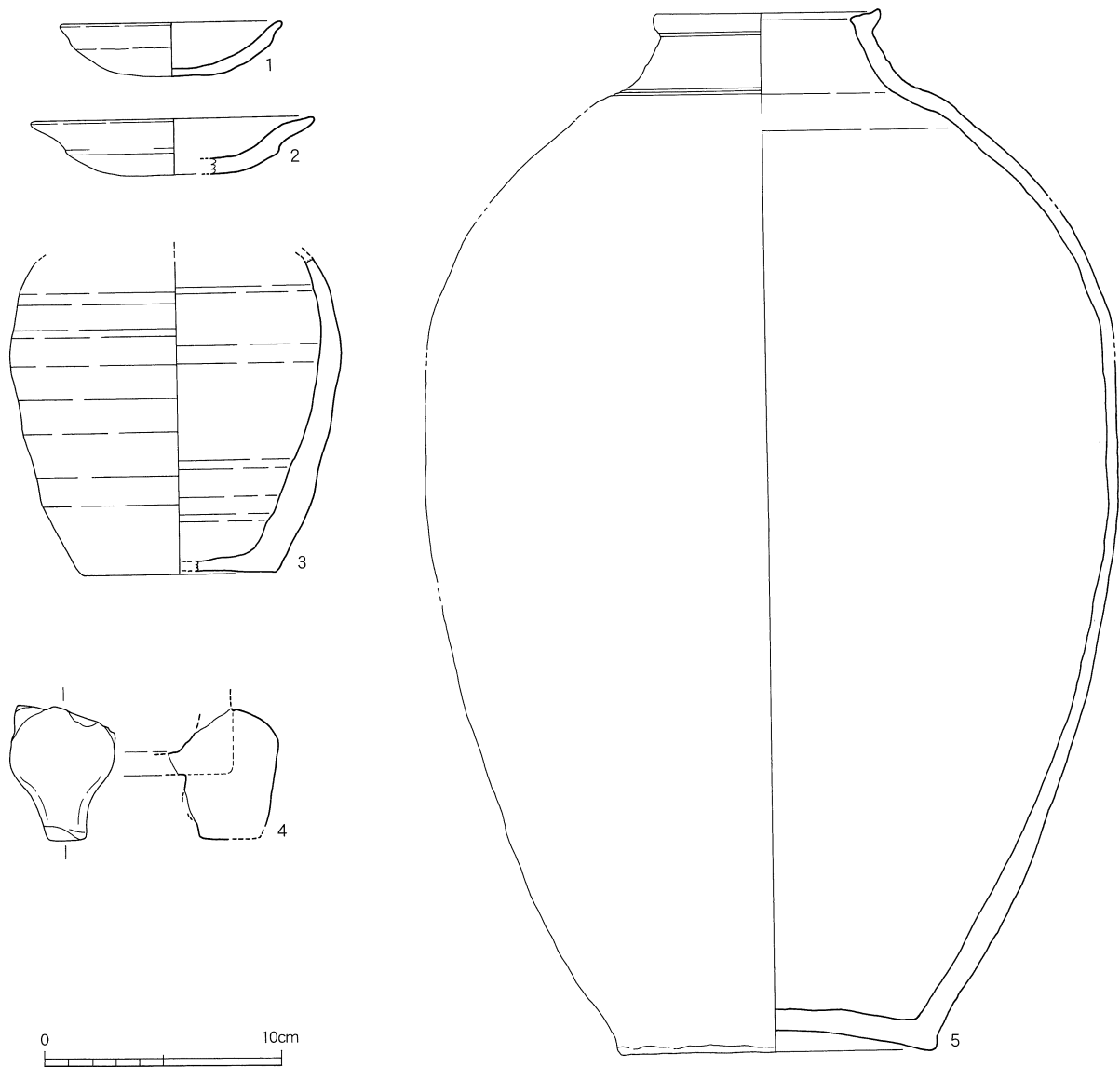
SD19（第47図） E64区にある溝状遺構で、水田の土のような青灰色の土が充満していた。標高5.05mで検出した。出土遺物は16世紀であるが、遺構はその後に掘られたとみられる。床面には両端に2個の穴があるが、SD19に先行する可能性がある。

出土遺物（第48図1） 1は3期の京都系土師器坏である。口径10.0cm、器高2.0cm、色調は淡黄色を呈する。

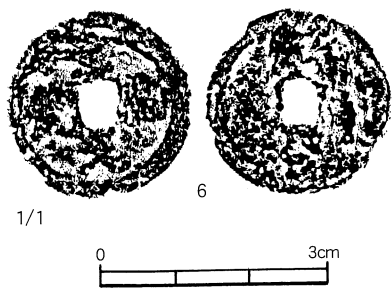
SK20（第49図） B63区にある平面円形の土坑。標高5.22mで検出した。規模は2.32m×2.1m、深さは50cm。内部にぎっしり礫が詰まっていた。16世紀後葉の廃棄土坑である。



第51図 SK20出土遺物実測図

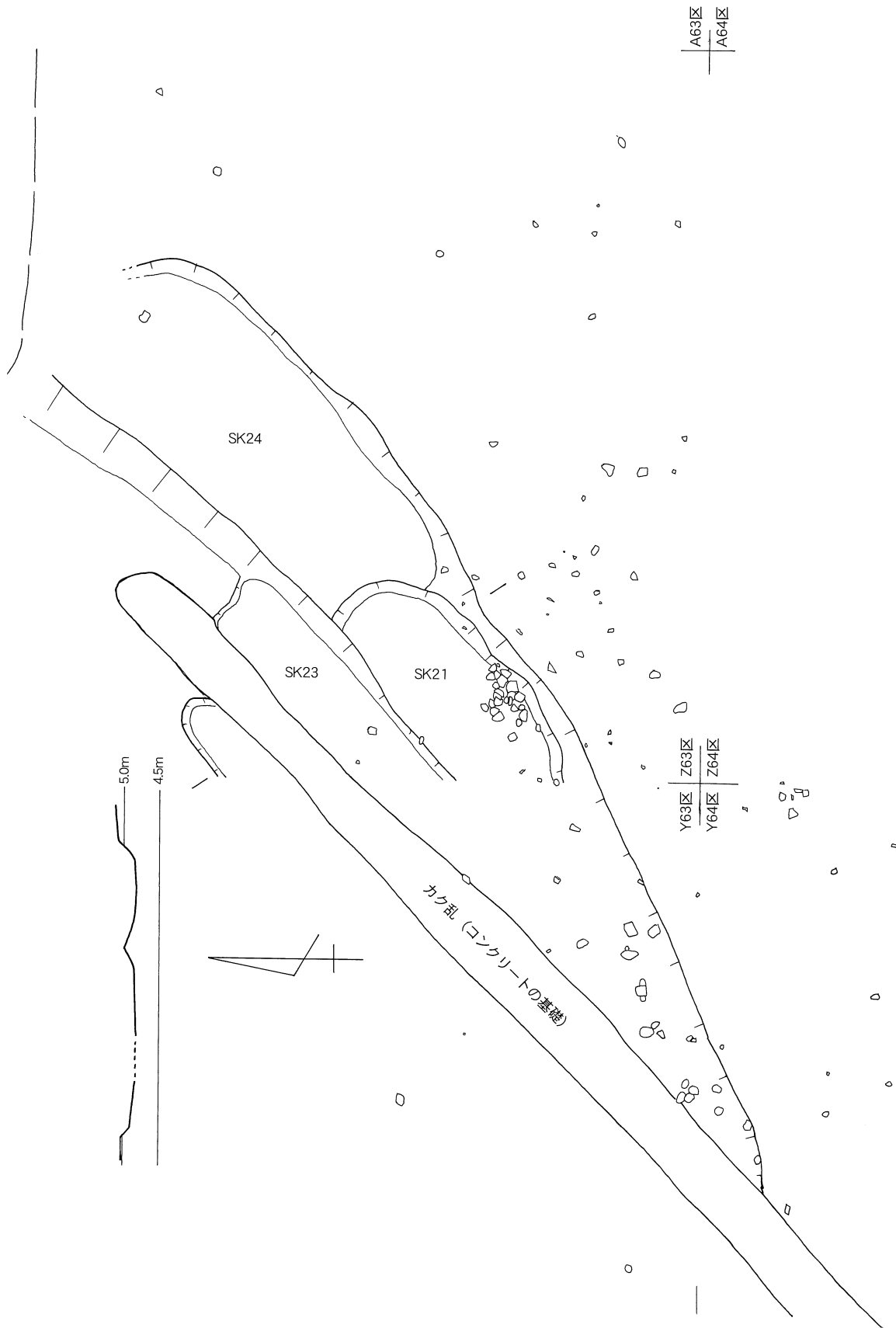


第52図 SK21出土遺物実測図

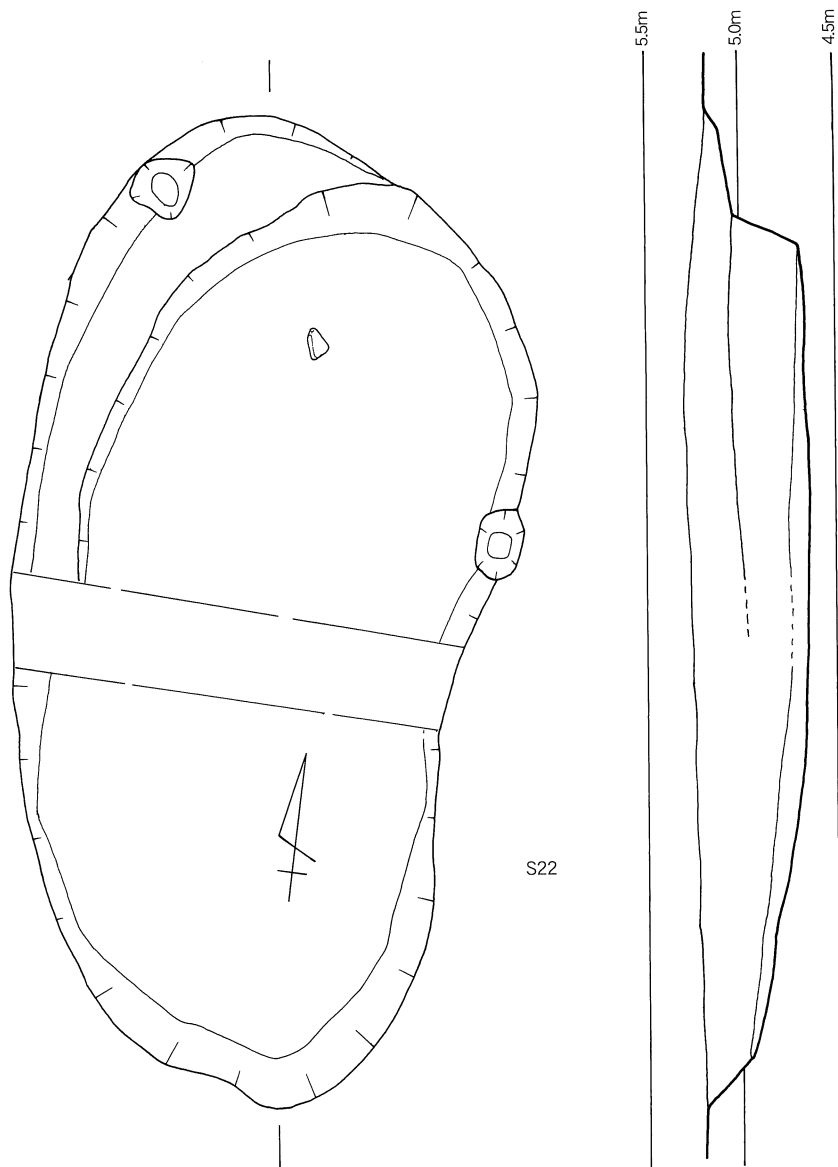


第53図 SK21出土銭貨拓影

出土遺物（第50・51図1～10） 1は鬼瓦。右上図は顔の正面で、右目が残り、鼻は欠損している。残存部の大きさは正面（図の上右）で、幅13.6cm、高さ10.6cm、厚さ13.1cmで、色調は濃灰色を呈する。2は白い凝灰岩製紡錘車。直径5.5cm、厚さ2.4cm、重さ66.6gである。3は凝灰岩製上臼。残存部の大きさは高さ8.9cmである。4・5は結晶片岩製の砥石。4は自然の棒状円礫を利用したもので、両端を欠損する。現状の長さは18.2cm、幅7.5cm、厚さ5.9cm、重さ1,100gである。

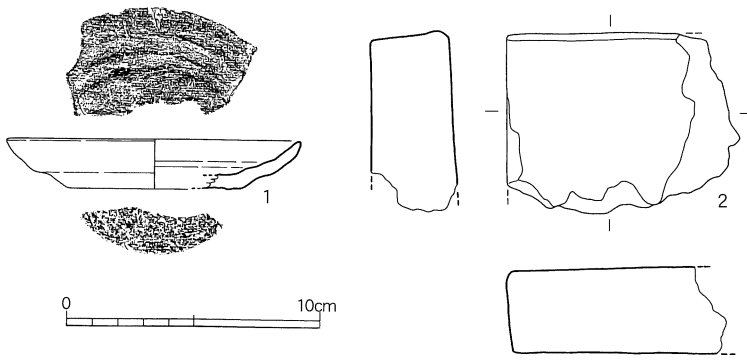


第54図 SK21・23・24実測図

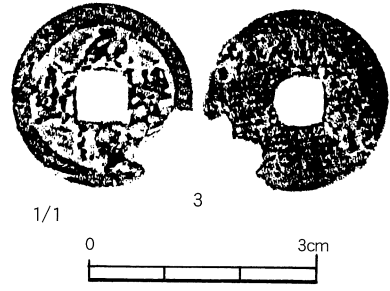


第55図 SK22実測図

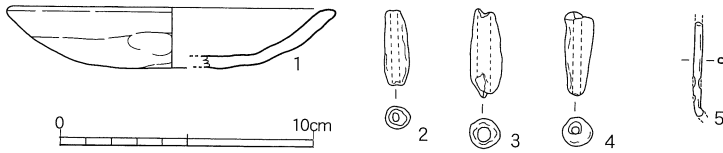
5は一端に溝が2条巡る。溝のある端は打ち欠いて整形し、他端は欠損している。また、図化した使用面と左側面の一部以外は欠損する。現状の大きさは長さ21.7cm、幅7.1cm、厚さ4.2cm、重さ762.6gである。6は緑色のガラス玉。直径6mm、厚さ3mmである。7・8は鉄製釘。7は長さ5.3cmで、先端は曲がっている。身の断面は長方形で、重さは5.2gである。8も断面が長方形で全体に片側に反っている。長さ4.9cmで主さは3.5gである。9は中国景德鎮窯系青花皿E群である。口縁部内外に一本線を描き、外底面には福字を方形枠に入れている。口径11.4cm、底径6.3cm、器高2.4cm。



第56図 SK22出土遺物実測図

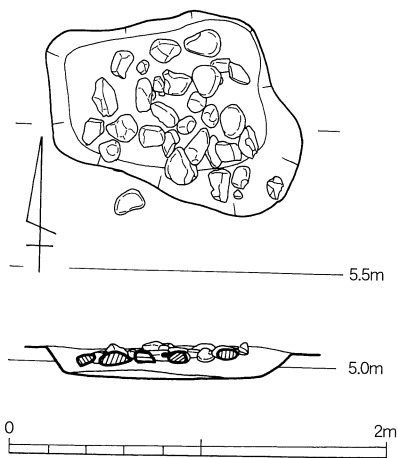


第57図 SK22
出土銭貨拓影

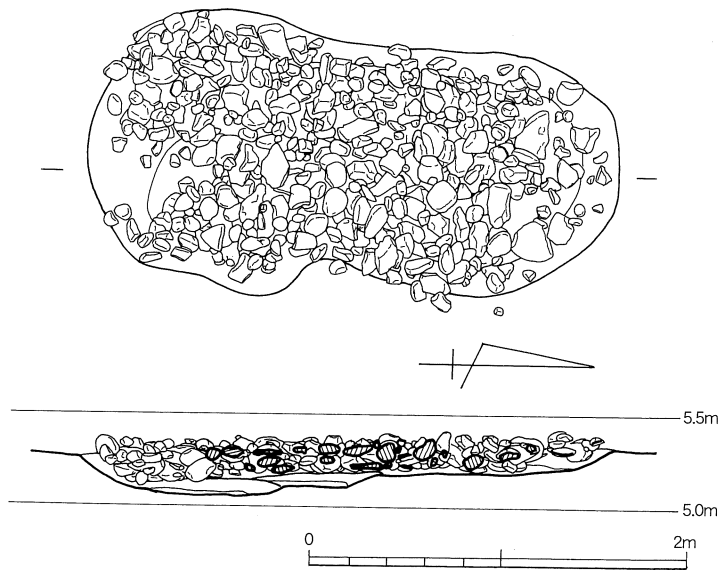


第58図 SK23出土遺物実測図

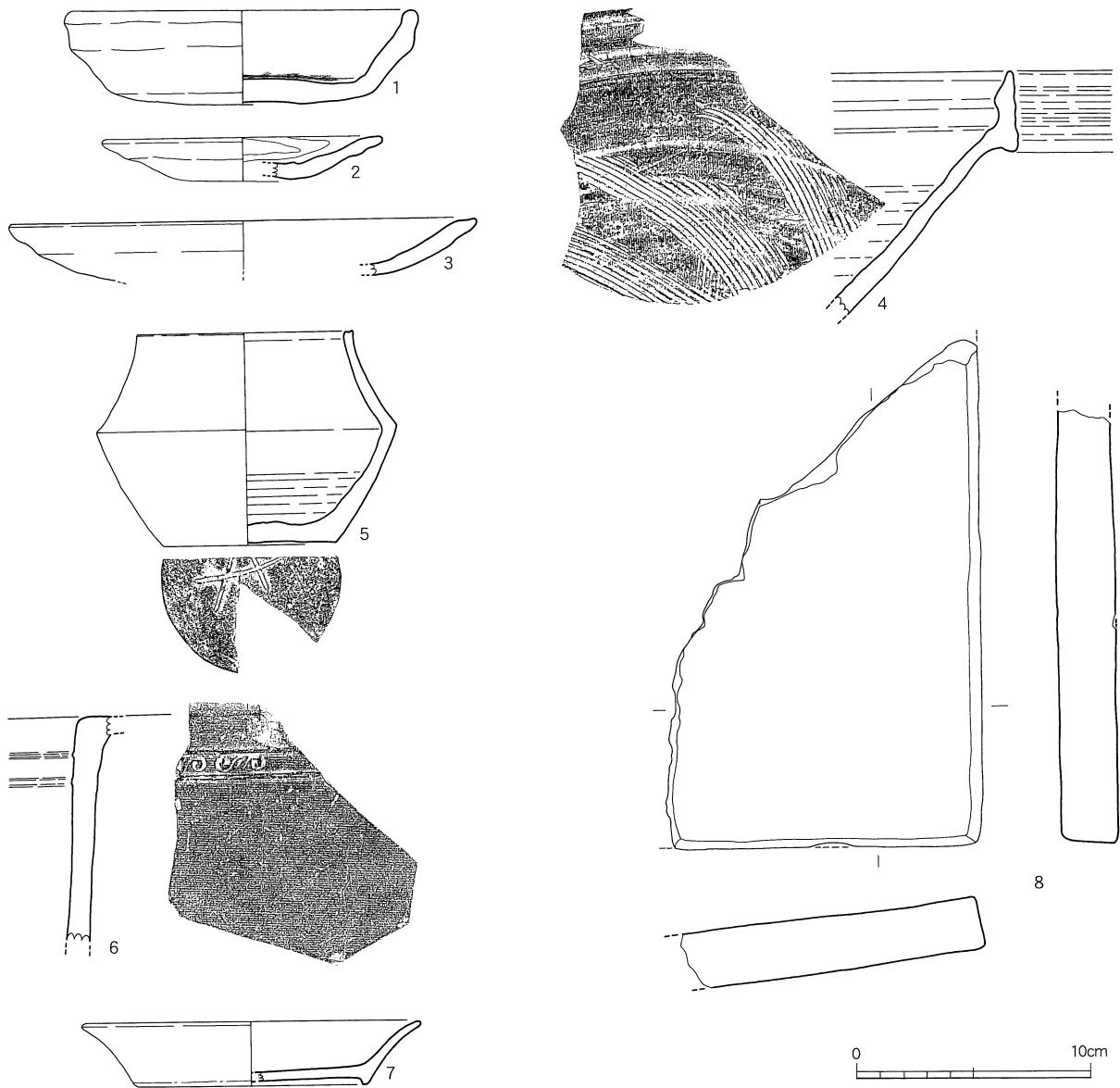
SK21 (第53図) SK21・23・24はZ63区・Y63区に位置し、重複した状態の耕作地の端に作られた遺構とみられる土坑群である。SK24とした部分の壁が南西に延びた内側にSK21はある。SK21の土坑の深さは20cm前後で西部では輪郭がはっきりしない。SK23の西部に重複する溝状の攪乱部は調査前に水田の境界をなしていたコンクリート製壁の基礎部分である。コンクリート壁を境に西側が一段低くなっており、壁の東側だけに平行な遺構が見られる点から、壁建設以前はこの周辺には微妙な段差



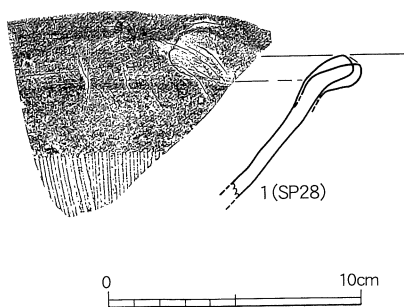
第59図 SK25実測図



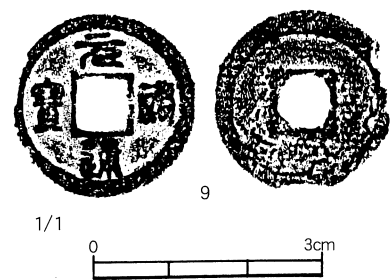
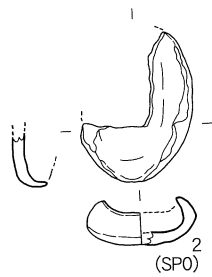
第60図 SK26実測図



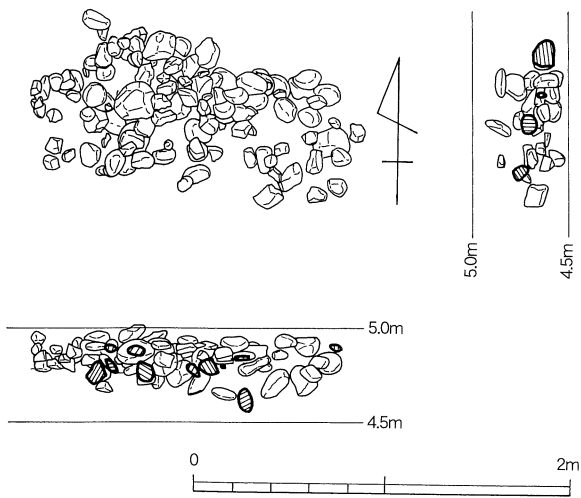
第61図 SK26出土遺物実測図



第63図 SK28・30出土遺物実測図



第62図 SK26出土銭貨拓影



第64図 SX32実測図

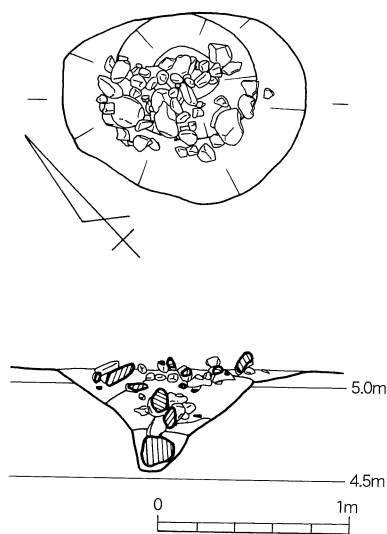
をもつ段々状の地形が存在したことを推定させる。SK21の検出標高は5.19m。SK21出土遺物の所属時期は16世紀第4四半期である。

出土遺物（第52図1～6） 1・2は3期の京都系土師器で、1は小皿で口縁部外周を横なでしている。口径9.4cm、器高2.3cmである。色調は灰褐色を呈する。

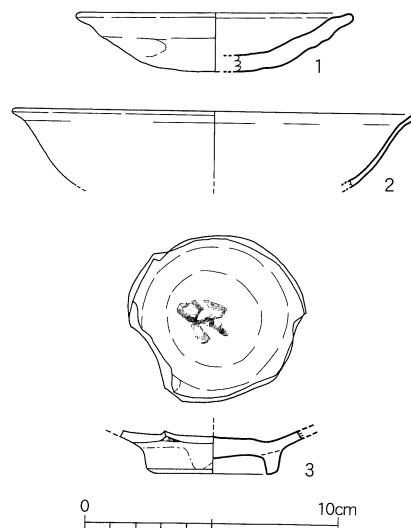
2は皿で横なでにより口縁部を強く折り曲げている。口径12.0cm、器高2.4cmで色調は茶灰色を呈する。3は備前焼の甕で、胴部最大径は14.1cm、底径は8.2cmである。4は瓦質土器火鉢の脚である。灰色を呈する。5は器高44cmの大型壺で中国南部製の焼締陶器である。破片はSK21の他、SK84・SK103・SK164・SK233・SP1290からも出土した。口縁部は上面が平らでやや内側に傾斜する。口縁部最大径は10.2cm、内側の内径は7.6cmである。頸部短く内側に直線的に傾く。胴部は長く、最大径は中位よりもやや上にあり30.0cmである。器高は44.0cm。色調は暗茶褐色を呈する。6は景德元宝（北宋1004年初鑄）。

SK22（第55図） F63区にある楕円形の土坑で、SD19同様に水田の土のような埋土であった。検出標高は5.28m。

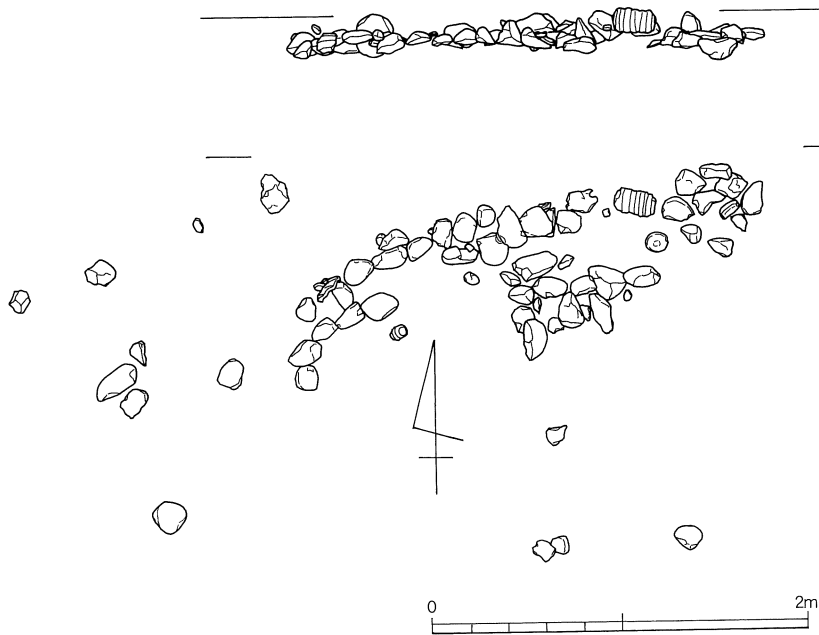
北西部は段差があり、同様の穴を同じ場所で掘り返した様子が窺える。全体の規模は長さ5.28m、幅2.65m、深さ70cmである。近世の耕作関係の遺構であろう。



第65図 SK33実測図



第66図 SK33出土遺物実測図



第67図 SX34実測図

出土遺物 (第56図1~3) 1は底部を糸切り離した在地系土師器皿であるが、体部は微妙に屈曲し、口縁部端部が尖る。京都系土師器の模倣土器の可能性はある。色調は明黄色を呈する。口径11.6cm、底径6.8cm。器高2.0cm。2は瓦と同じ焼成の磚で厚さは3.3cmである。3は元豊通宝（北宋1078年初鑄）。

SX23 (第54図) Z63区にあり、SK21の西部に重複する状態で同じ向きに主軸をもつ土坑である。全体の輪郭は北東部では存在するが、南西部で不明である。一辺は南東から北東に走る。

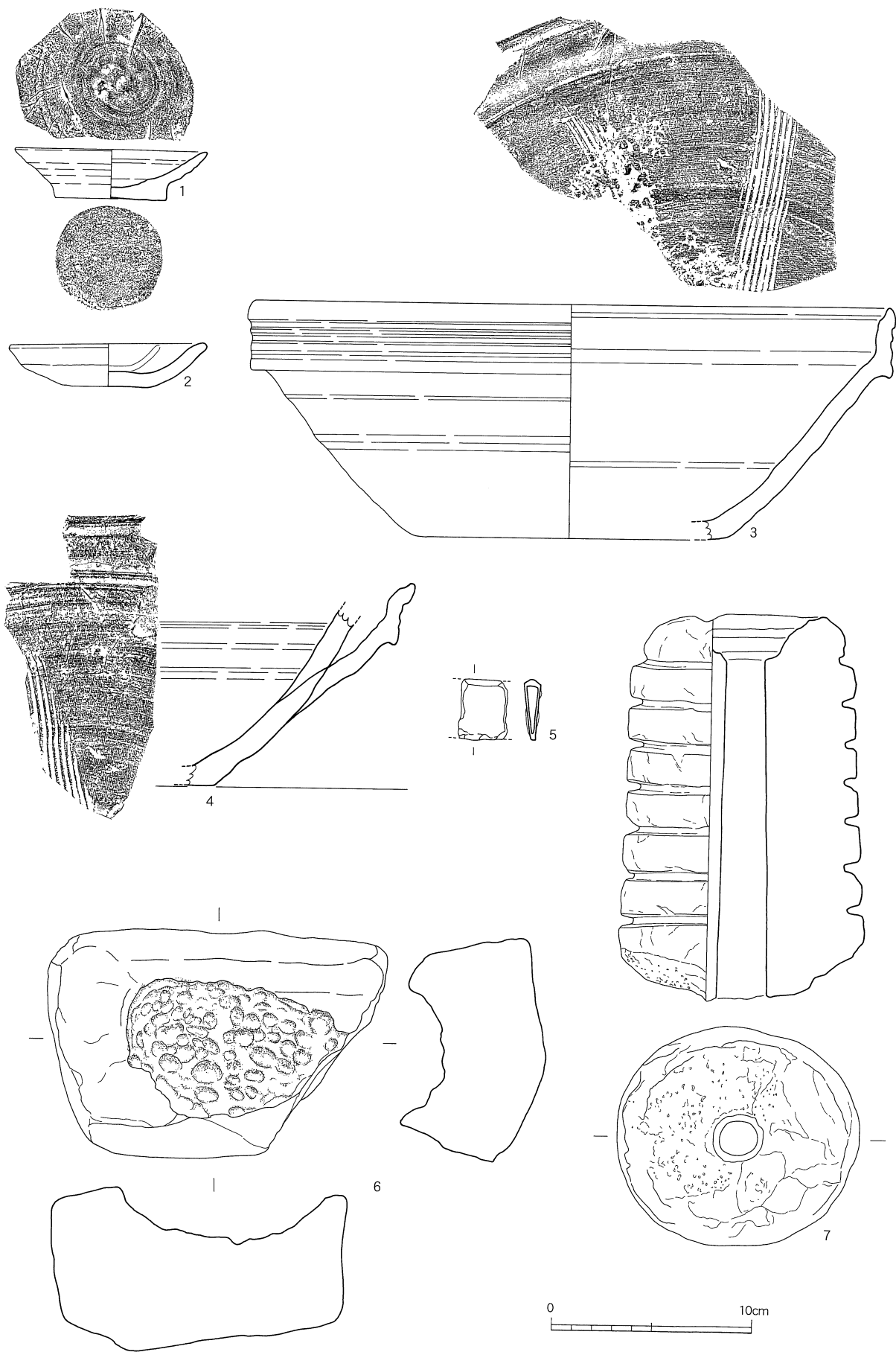
この付近は北西側が微妙に低くなっており、地形の段差部分にあった水田だと思われる。SK21・24の西側にあり、より低い位置にある。SK23には先述のコンクリート壁が重複し、基礎部分が遺構を壊している。

出土遺物 (第58図1~5) 1は2~3期の京都系土師器皿、2~4は土師質の土錘、5は青銅製品。

SK24 (第54図) Z63区にあり、SX23に切られる。

SK25 (第59図) A64区にある礫の詰まった土坑であり、標高5.1mで検出した。平面は不整形で1.5m×1.0m、床面は平坦で深さ35cmである。年代の分かる出土遺物はない。

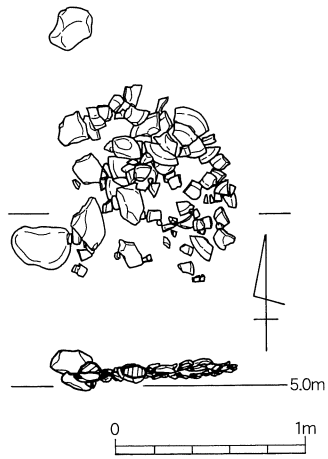
SK26 (第60図) A64区にある礫の詰まった土坑である。標高5.4mで検出した。全体の平面形は楕円形で満遍なく多量の礫が集積されていた。床面は三段に分かれるので廃棄土坑の重複であろう。



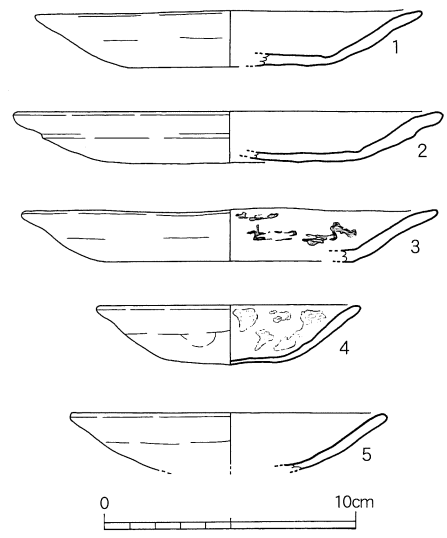
第68图 SX34出土遺物実測図



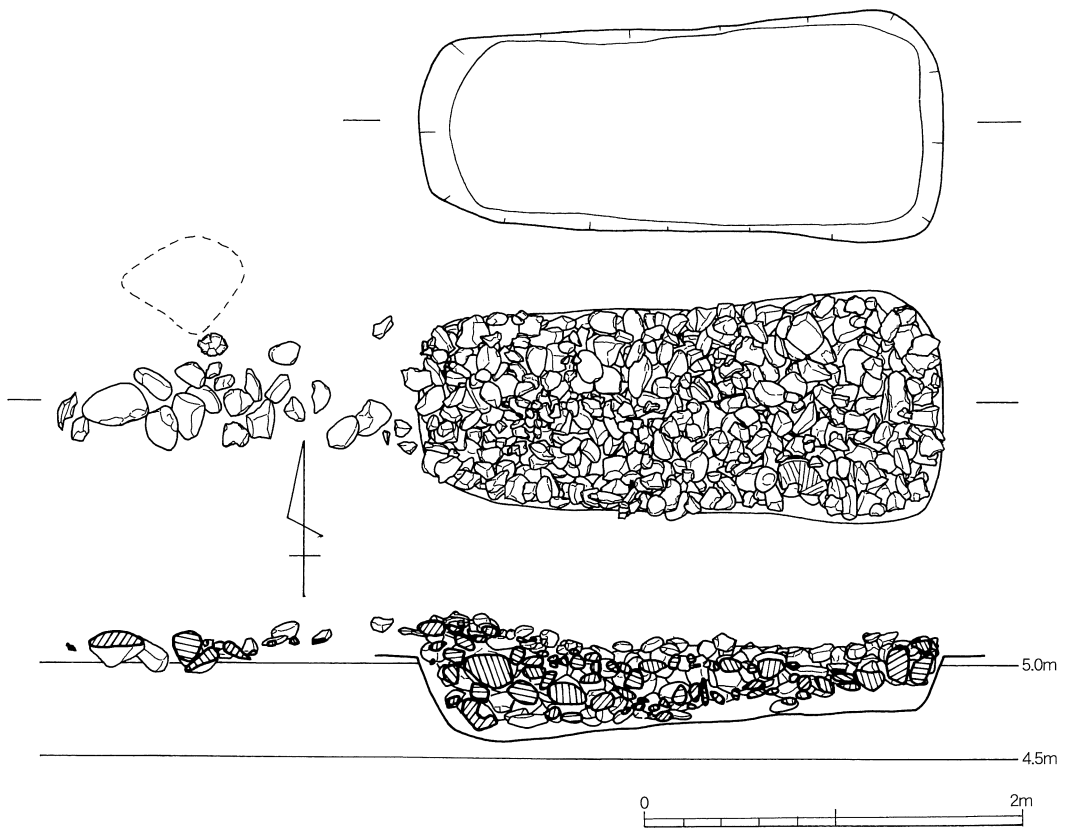
第69図 SX35実測図



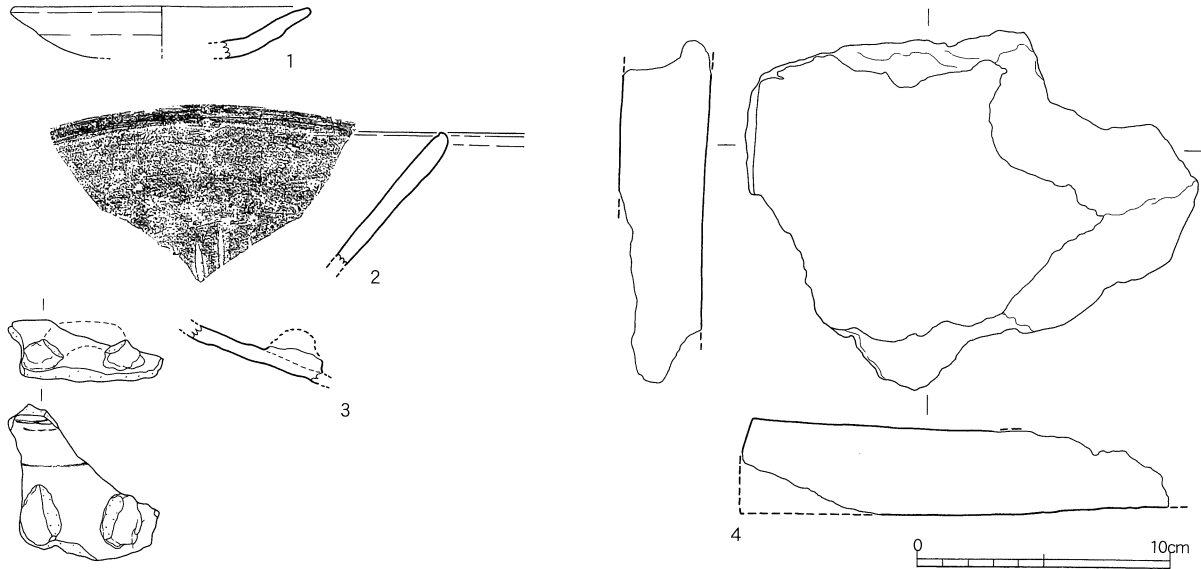
第70図 SX36実測図



第71図 SX36出土遺物実測図



第72図 SK37実測図



第73図 SK37出土遺物実測図①

SD27 (第7図) A63区からB63区の北部を東西に走る溝状遺構である。近世以降の耕作に伴うものであろう。検出標高は5.32m。幅は50cm、深さは5cm前後。西端の床面標高は5.23m、東端は5.28mであり、内部の水は東から西に流れたのであろう。

SK28 (第7図) F63区・G63区に位置する溝状遺構。標高5.34mで検出した。出土遺物から近世に属する耕作関係の遺構である。

出土遺物 (第63図1) 1は江戸時代の肥前系播鉢である。拓影の右部に注ぎ口のへこみがある。内面には密に挿り目が入れられており、色調は茶褐色を呈する。

SK30 (第7図) A63区にある土坑である。標高5.06mで検出した。

出土遺物 (第63図2) 2は京都系土師器耳皿。全形は不明だが、現状で長さ6.2cm、器高1.8cm。

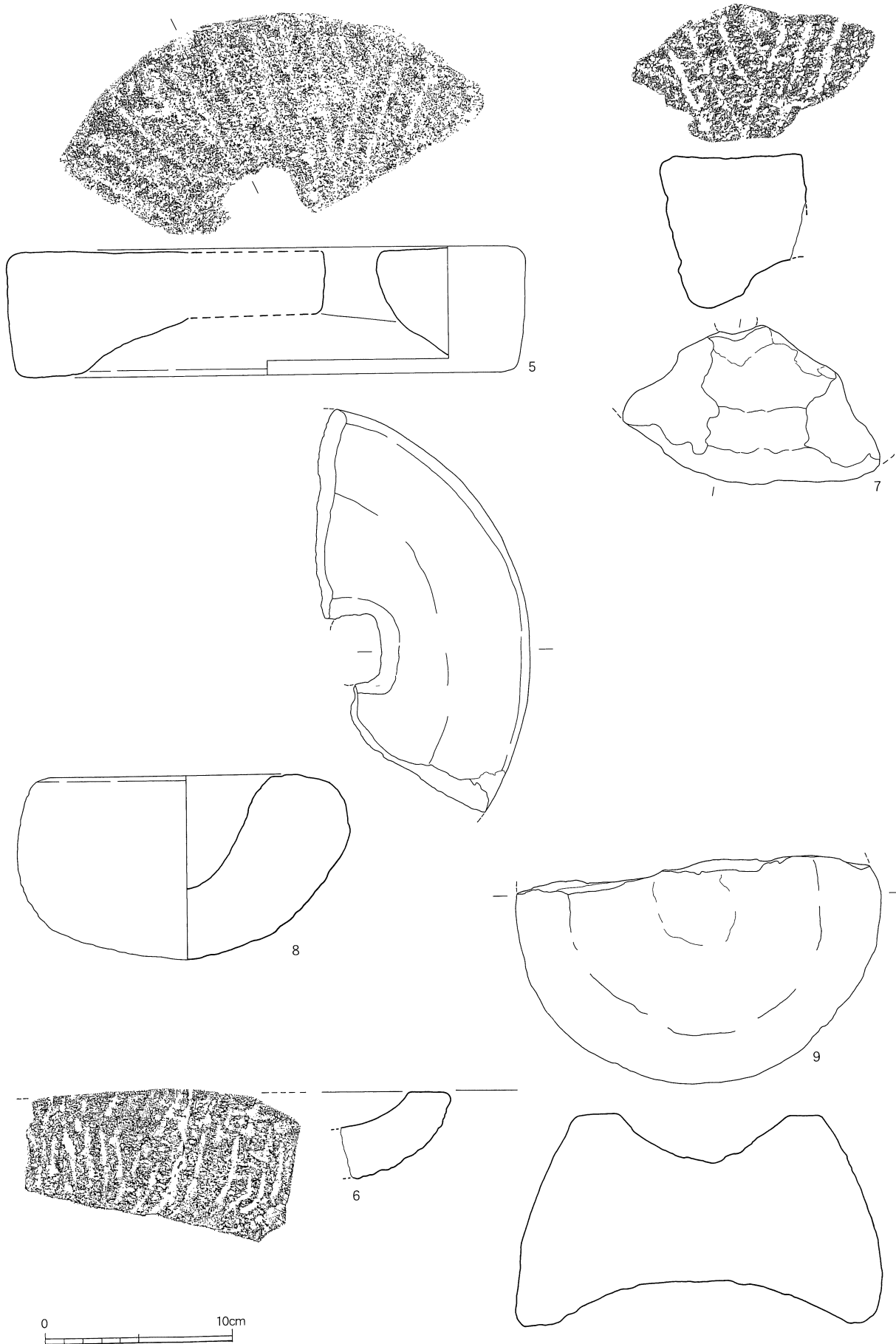
SK32 (第64図) E63区の標高4.96mで検出した礫群である。長さ1.8m×1.4mの範囲に厚さ約40cmにわたって出土したので、本来は土坑内に廃棄されたものとみられる。年代の分かる遺物は出土しなかった。

SK33 (第65図) E63区、SK26の南側にあり礫群を入れた土坑である。

出土遺物 (第66図1~3) 1は3期の京都系土師器杯、口径11.0cm、器高2.3cm、淡黄灰色。2は白磁碗、3は漳州窯製の青花碗。見込み蛇の目釉剥ぎ。高台外面下半から外底面は無釉。

SX34 (第67図) A64区包含層中で検出した石列である。同一平面に長さ1.68m×0.9mにわたり礫が分布した。石の分布状態は北部縁辺は一行にまとまるが、南部には乱れがある。

検出した標高は上面が5.2m、礫の下面が5.05m前後である。検出標高と出土遺物からこの礫群は16世紀第3四半期頃の遺構である。



第74図 SK37出土遺物実測図②

出土遺物 (第68図1~7)

1は在地系土師器皿、2は京都系土師器皿、3・4は備前焼播鉢。播鉢は2点とも播目相互の間隔が空いたもの。5は刀の青銅製の鍔(はばき)、6は凝灰岩製品。片面を窪ませているが、用途不詳。7は凝灰岩製の宝塔の九輪。中心部を貫通させ、フイゴの羽口として転用しており、熱のために大部分は橙褐色に変色し、図の下端面は黒くなり、一部には高熱で溶けた部分がある。

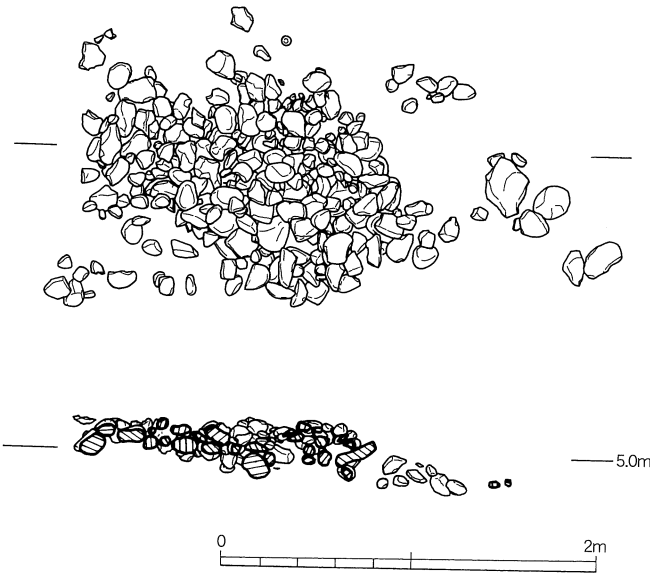
SX35 (第69図) Z64区にある1m×0.9mの範囲に平面的に出土した礫群で、第36次調査区のSK23の延長部分である。標高5.2mで検出した。年代の分かる出土遺物はない。

SX36 (第70図) A63区に位置する土師器皿が下向きに集中していたもの。遺物は粉碎した状態で出土した。標高5.05mに下底がある。

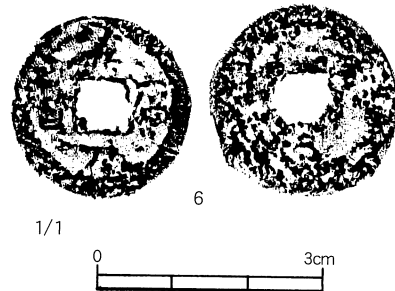
出土遺物 (第71図1~5)

1~5は1期の京都系土師器である。すべて薄手の作りである。口径・器高・色調は次のとおりである。

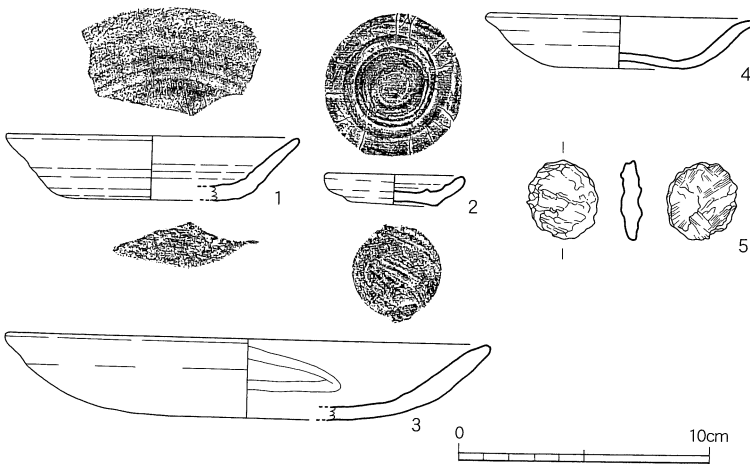
1(15.3cm・2.2cm・淡黄色)、2(17.0cm・2.0cm・淡



第75図 SX38実測図



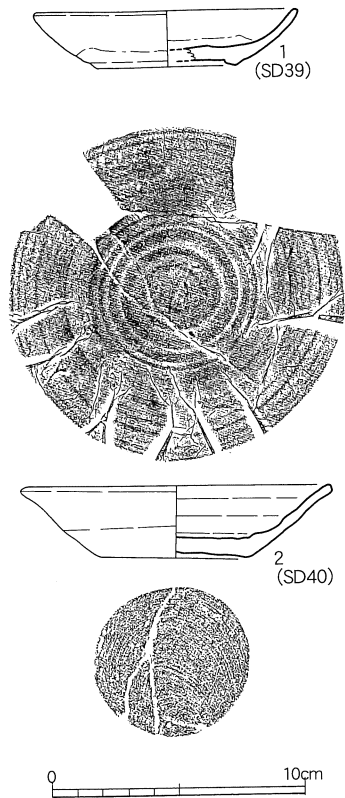
第77図 SX38出土銭貨拓影



第76図 SX38出土遺物実測図

黄色)、3(16.5cm・2.0cm・淡黄色)、4(10.4cm・2.4cm・淡黄赤色)、5(12.6cm・—・暗灰色)。

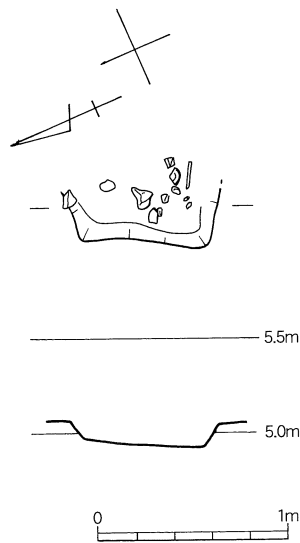
SK37 (第72図) E63区に位置する礫が多量出土した長方形平面の土坑である。検出標高は礫が5.2m、土坑が5.05mである。遺構の



第78図 SD39・40出土遺物実測図

規模は2.77m×2.23m、床面は西側が深く最大の深さは50cmである。礫は土坑がある程度埋まった段階になって入れられており、全体にぎっしり詰まった状態ではなく、周囲から投げ込まれたように中央部分が窪んだような集積状況であった。土坑を検出する面よりも上で礫群は始まる。第72図に示すよ

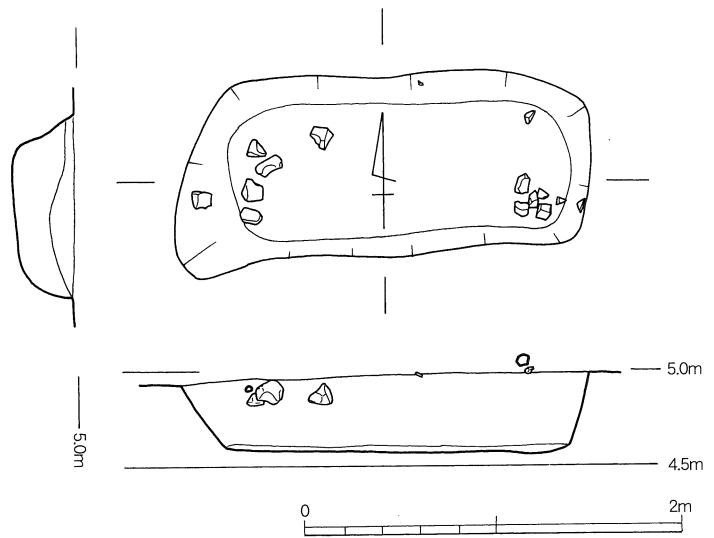
うに、SK37の西側にも少しだけ礫が分布していた。



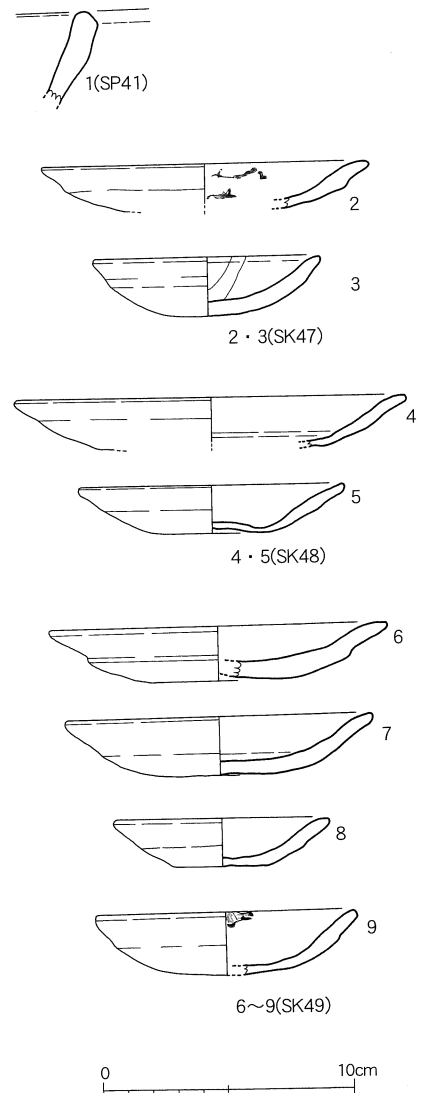
第80図 SK49実測図

出土遺物 (第73・74図1~9) 1は2期~3期の京都系土師器坏で、口径は11.8cm、色調は黄橙色を呈する。2は陶器插鉢で口縁部は体部から直線的に連続するもの。内面下部に播り目が認められる。3は中国南部製の褐釉四耳壺陶器の破片である。色調は淡い灰色を呈する。4は瓦同様の焼成による磚で、厚さ2.5cm。

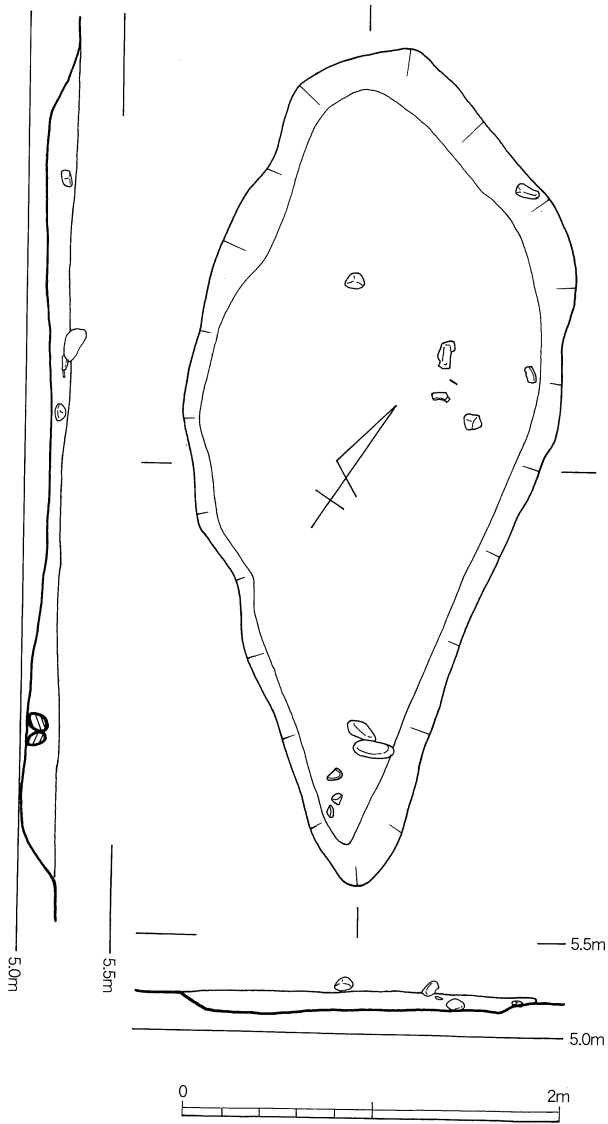
5~7は石臼で、5・7は下臼、6は上臼である。石材は5は安山岩製、6は粒子の細かな砂岩製で、外面には整で



第79図 SK45実測図



第81図 SK41~49出土遺物実測図



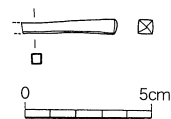
第82図 SK55実測図

刻んだ状態が縦方向の線状に残る。7は凝灰岩製。8は凝灰岩製の容器。9は凝灰岩製の平面円形製品で、断面は上下から窪ませている。塔部品か。

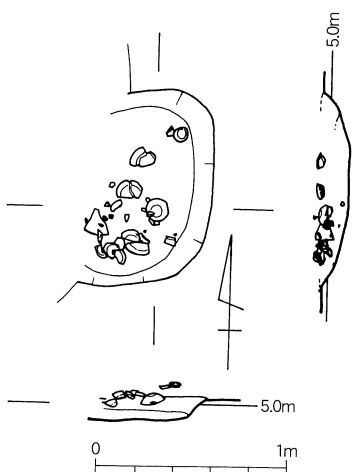
SK38 (第75図) D63・64区・E63区に位置する礫群である。標高5.2mで上面が現れ始める。礫が南北方向に長く分布し、中央部では重なっている。平面の規模は3.1m×1.5m程で、礫群の厚さは30cm強である。

出土遺物 (第76図1~6) 1・2は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。底部は糸切り。1は口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.6cmで底部と体部との境界は一つの斜めに傾いた面をなし、口縁部は外湾する。京都系土師器を在地系技術で模倣した製品である3・4は京都系土師器で、3は大型の皿、4は小型皿で胎土に金色の雲母を少量含む。5は円盤状の青銅製品である。6は熙寧元宝(北宋1068年初鑄)。

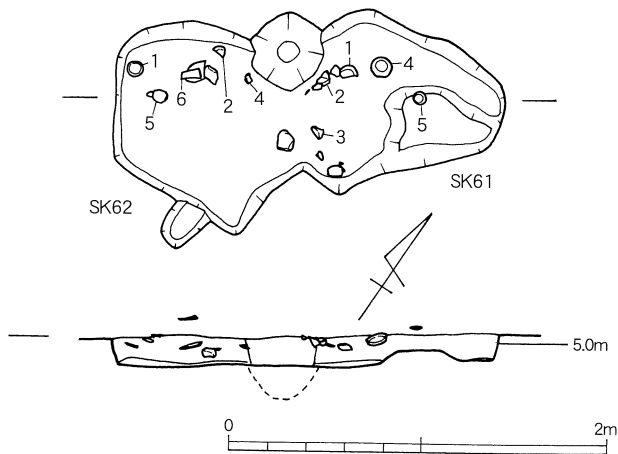
SD39 Z62・63区にある浅い溝状遺構である。SD40と並んで存在する。



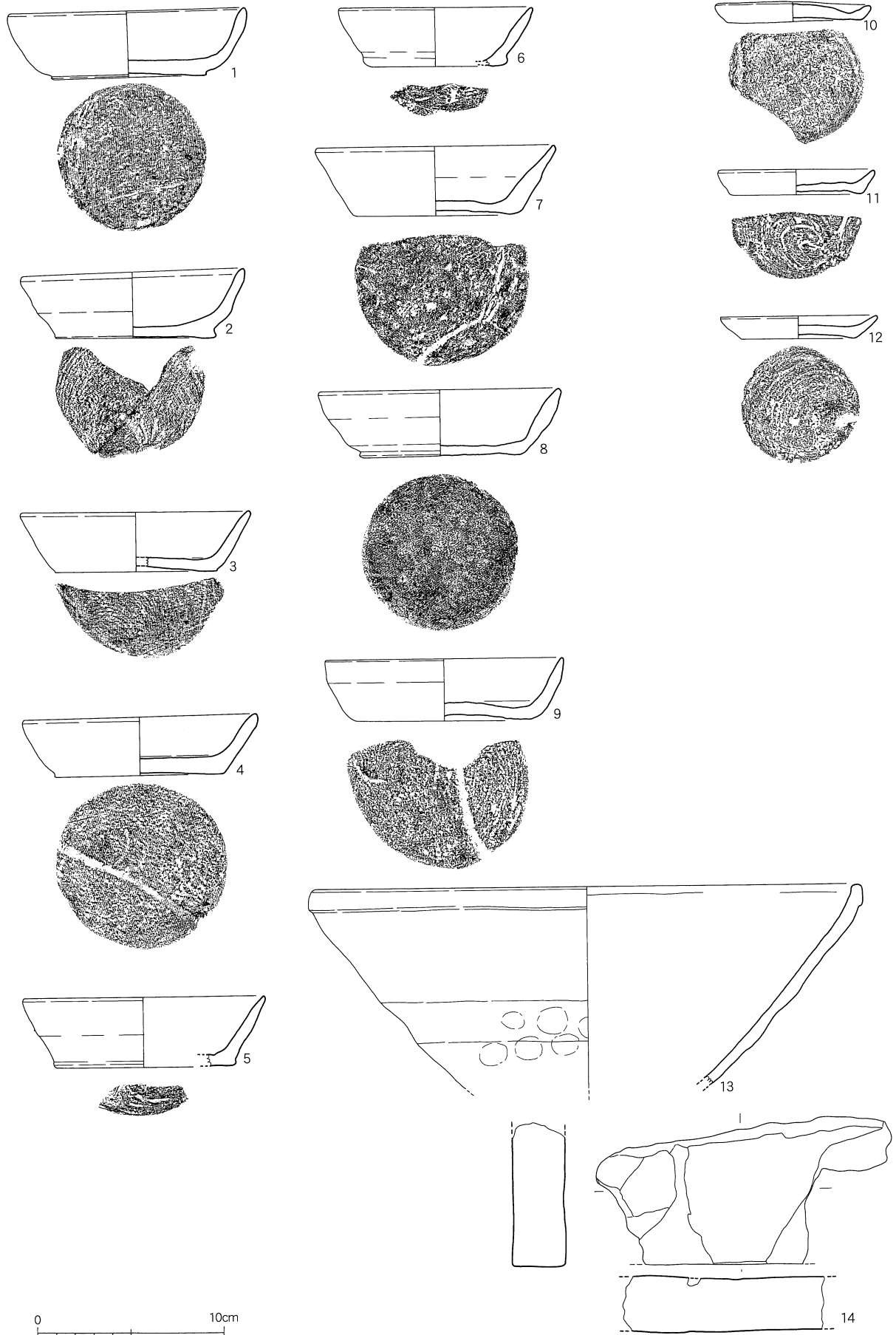
第83図 SK55
出土遺物実測図



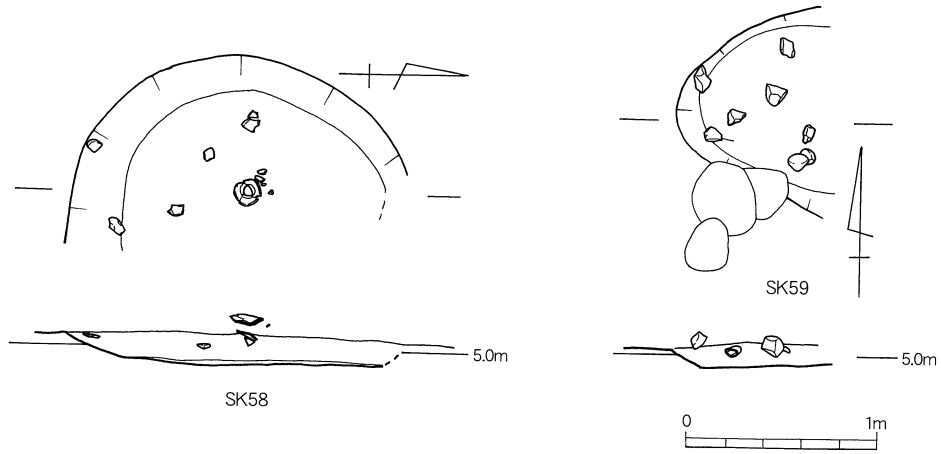
第84図 SK57実測図



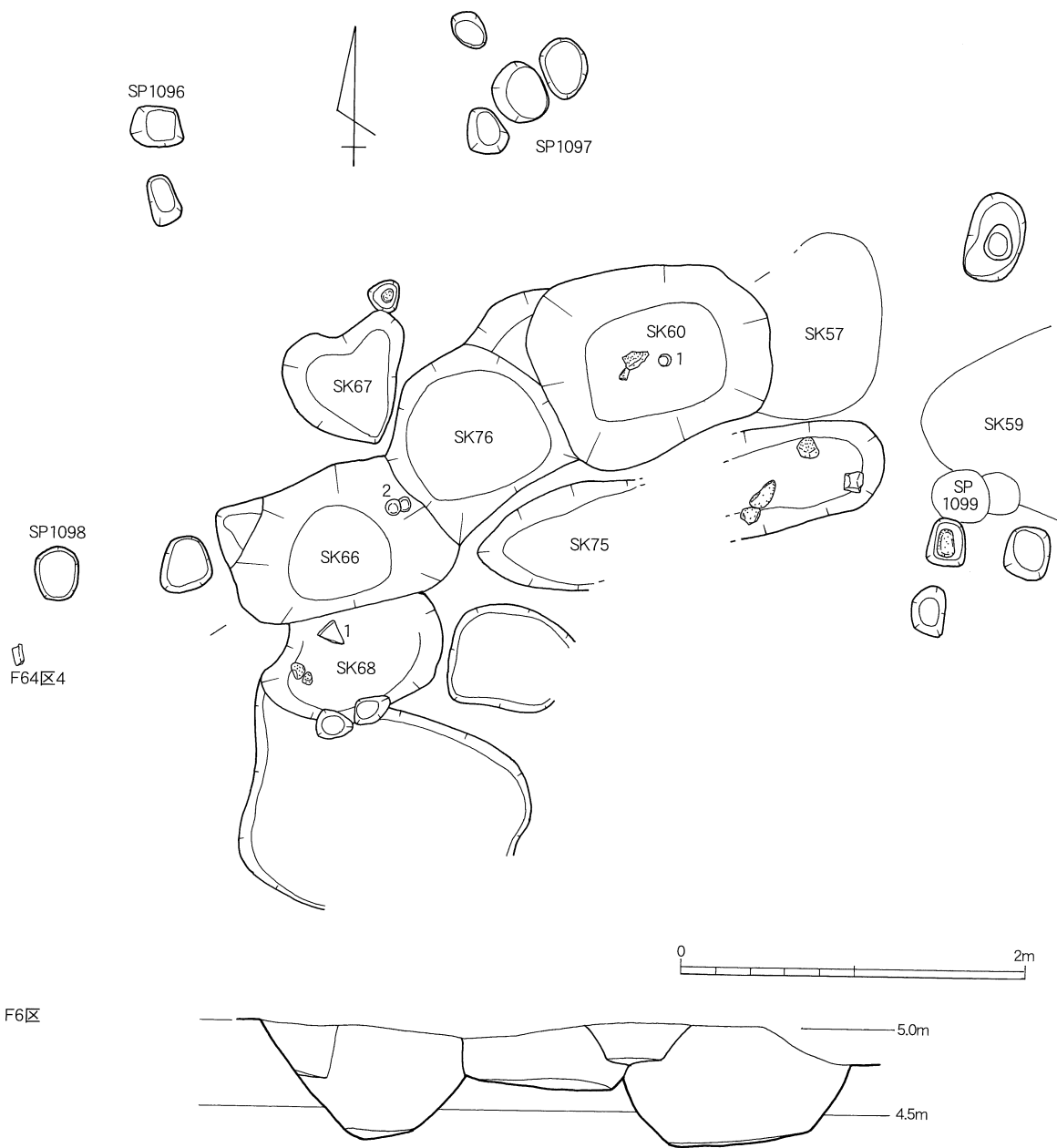
第85図 SK61・62実測図



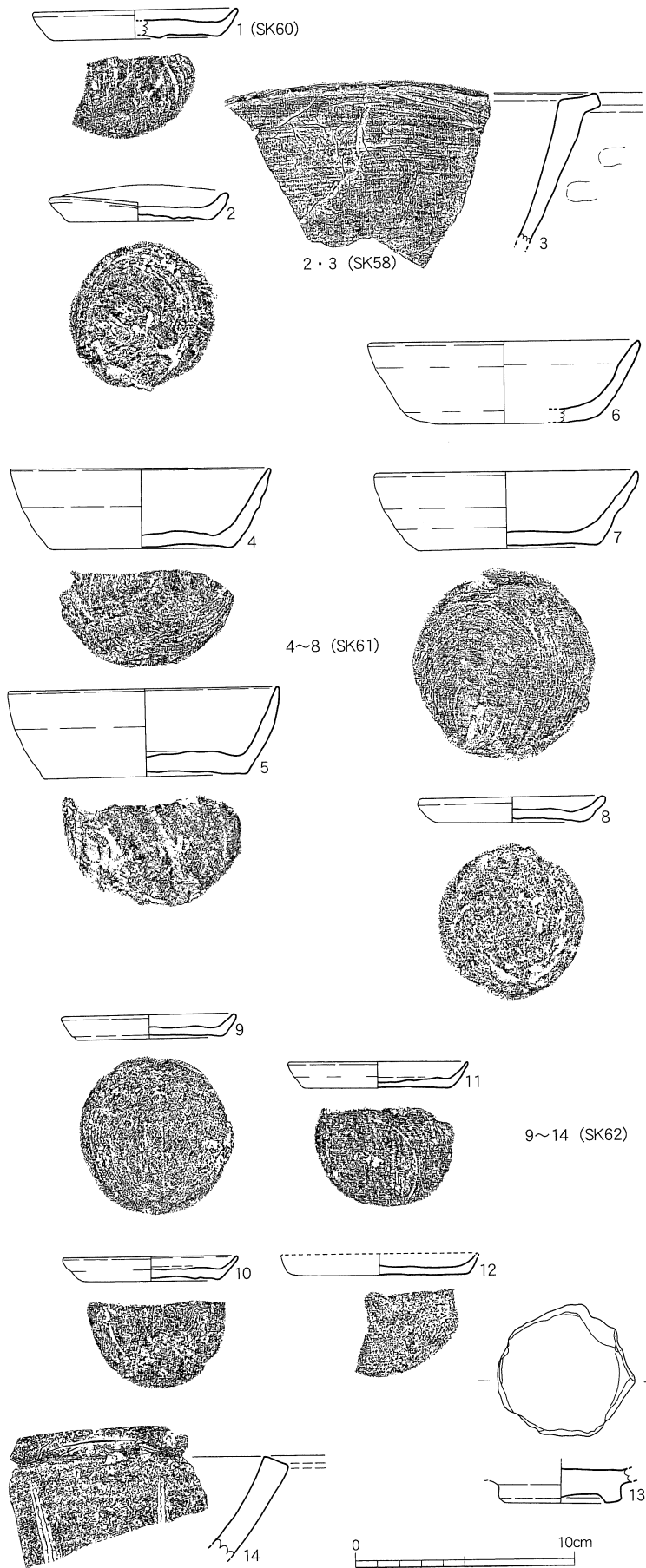
第86図 SK57出土遺物実測図



第87図 SK58・59実測図



第88図 F64区の土坑群実測図



第89図 SK58~62実測図

出土遺物 (第78図1) 1は白磁皿。

SD40 Z62・63区の細い溝である。

出土遺物 (第78図2) 1は内面に段状のロクロ目を残す在地系土師器皿である。

SK41 A64区にある礫の詰まった土坑である。

出土遺物 (第81図1) 1は瓦質土器の鉢。

SK42 A63区に位置する。SK27の下位にあり、焼土が入っていた。

SD43 E63区にある土坑である。

SK44 E63区にある土坑。

SK45 (第79図) A64区にある土坑で埋土に多量の炭化物を含む。平面計は長方形気味で、長さ2.47m、中央部の幅90cm、深さ80cmである。

SK46 E65区にある土坑で埋土に多量の炭化物を含む。

SK47 E62・63区にある土坑である。

出土遺物 (第81図1・2) 2点とも3期の京都系土師器である。1は大型の皿で内面に煤が付着する。2は小型の皿。

SK48 E62・63区にある土坑である。

出土遺物 (第81図4・5) 2点とも京都系土師器皿である。

SK49 (第80図) D62・63区東部にある土坑である。検出標高は5.08m。炭化物が入る。



第90図 SX63実測図

出土遺物（第81図6～9） すべて京都系土師器で、9の口縁部内面には煤が付着する。

SK50 E63区にある土坑。SK44のことか？

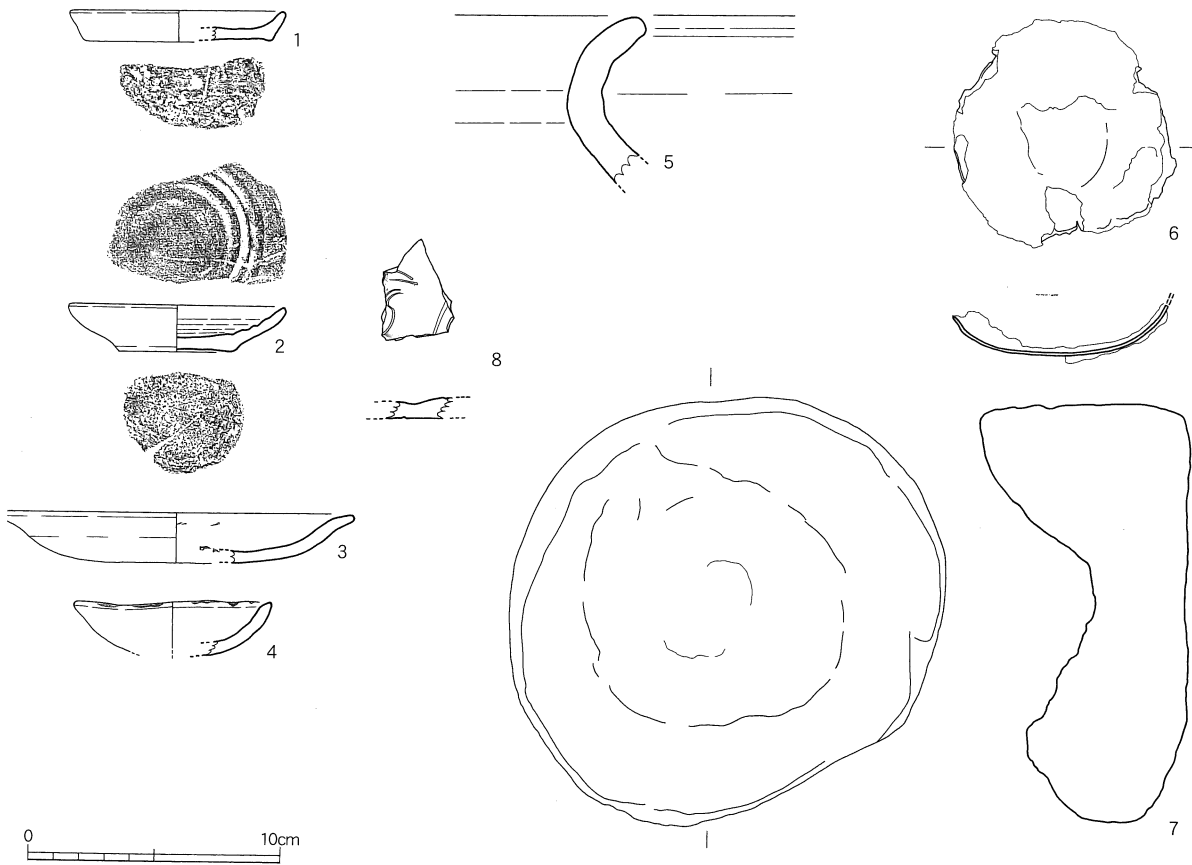
SK51 A63区に位置する礫が詰まった土坑である。

SK52 (図なし) A63区にあり、SK51と重複する。

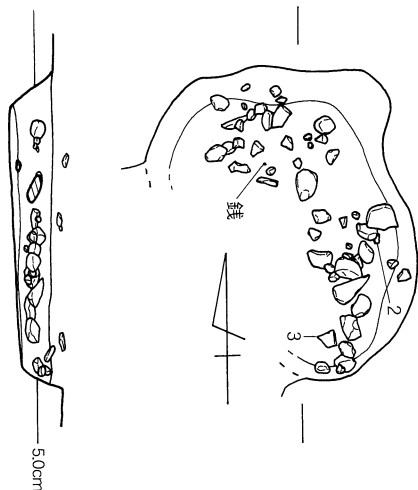
SK53 (図なし) B63区にある溝状遺構である。

SK54 (図なし) C60区にある土坑である。

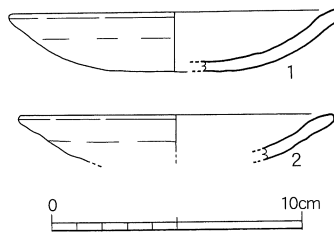
SD55 (第82図) A62区にある不整楕円形の土坑である。床面は中央部が浅く、細い部分がやや深い。



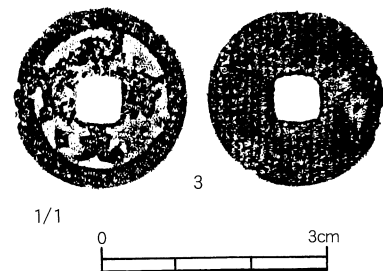
第91図 SX63出土遺物実測図



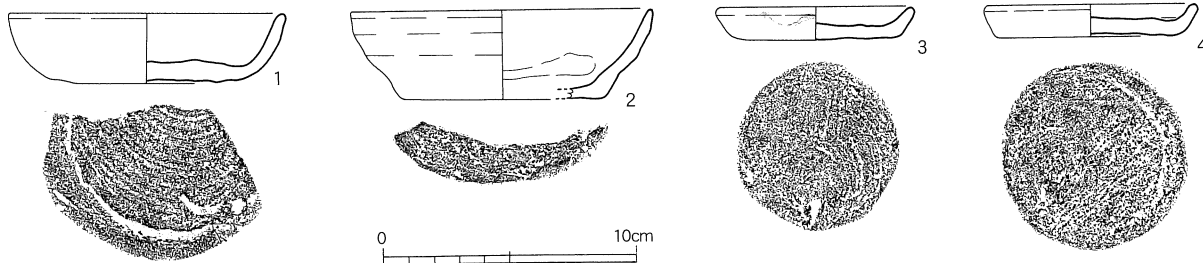
第92図 SK64実測図



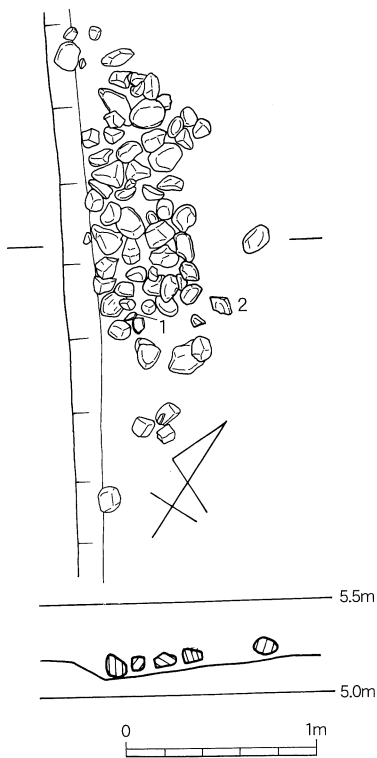
第93図 SK64出土遺物実測図



第94図 SK64出土銭貨拓影



第95図 SK66出土遺物実測図



第96図 SX70実測図

出土遺物 (第83図1) 1は断面が四角で全体が棒状の青銅製品である。端部が大きく、他端に向かって細くなるので、火箸である可能性がある。

SD56 A62区にある

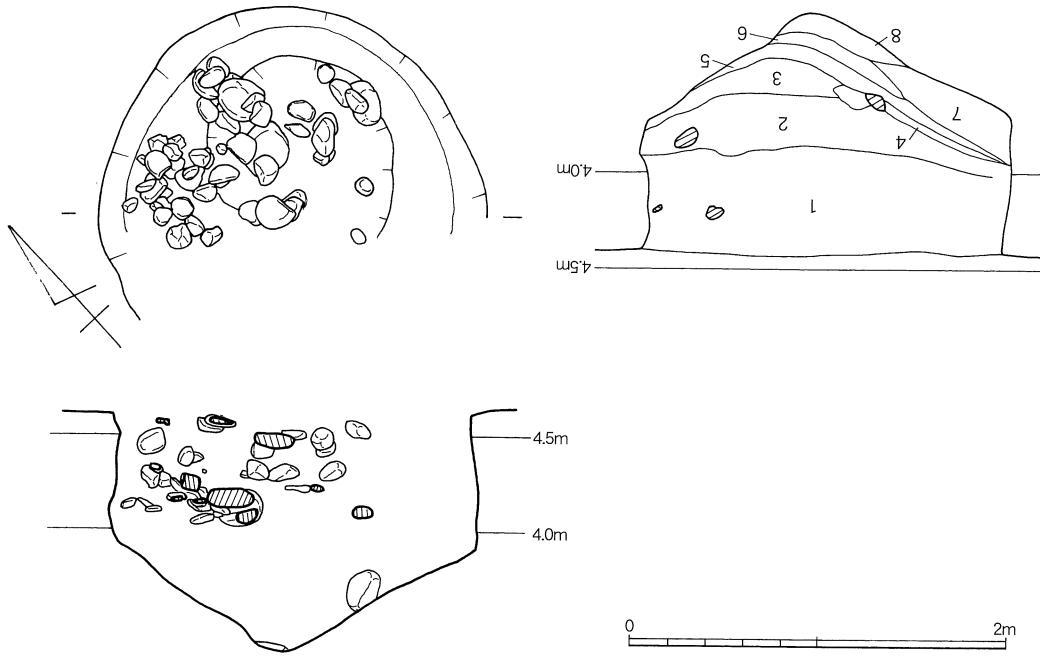
SK57 (第84図) C62区にある浅い土坑で、SD15に切られている。

出土遺物 (第86図1~14) 1~12の土師器大型皿・小型皿類はすべては在地系である。13は瓦質土器の鉢で、口縁部が玉縁状に丸くなる。外面中位には指押さえ痕がある。

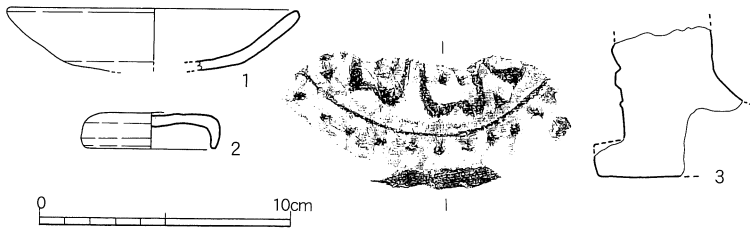
14は埴瓦。

SK58 (第87図) C62区にある土坑で、東部をSK6に切られている。現状では浅い半円形である。

出土遺物 (第89図2・3) 2は在地系土師器杯。3は瓦質土器鉢で、短い口縁部が外側に向けて屈折している。器面調整は口縁部上面から内面は横方向の刷毛目、外面は指ナデしている。



第97図 SK71実測図



第98図 SK71出土遺物実測図

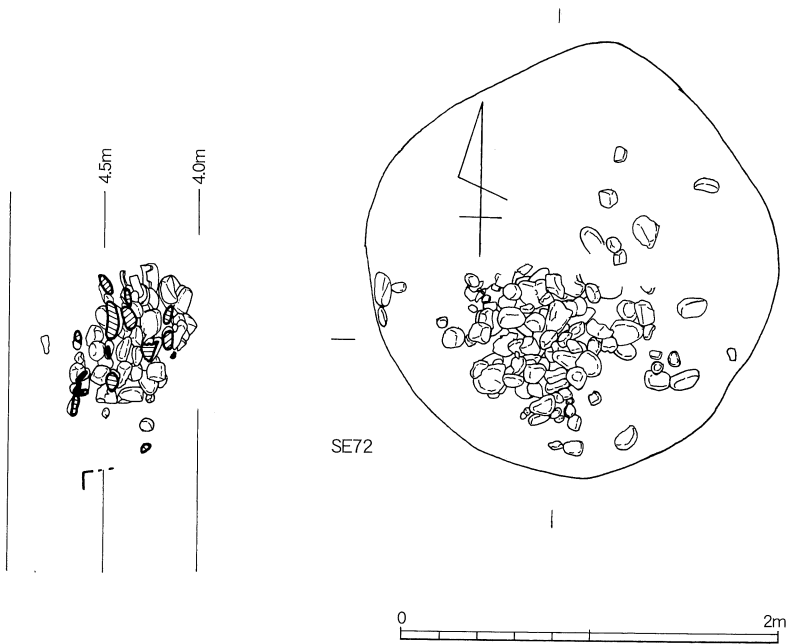
SK59 (第88図) F64区にありSK6を切られる土坑である。検出標高は5.08m。

SK60

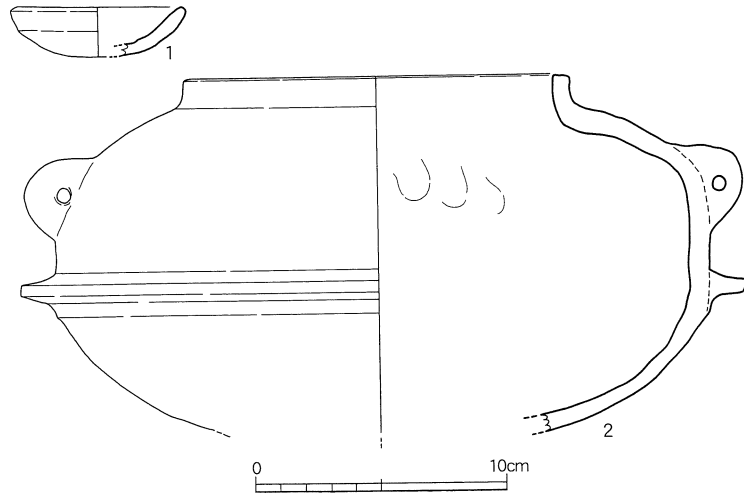
出土遺物 (第89図3) 3は在地系土師器杯である。

SK61 (第85図) F64区北部にあり、SK62と重複しているが、相互の先後関係は分からない。2基の床面の高さは差がない。検出標高は5.04mである。14世紀中葉から後葉の遺構である。

出土遺物 (第89図4~8) 全て在地系土師器であり、4~7が杯、他は皿である。4・5は体部が円く屈曲し、上端が尖る特徴をもち、14世紀中葉から後葉の特徴をもち、3・4は体部の中程が細く、14世紀前葉的である。



第99図 SE72出土遺物実測図



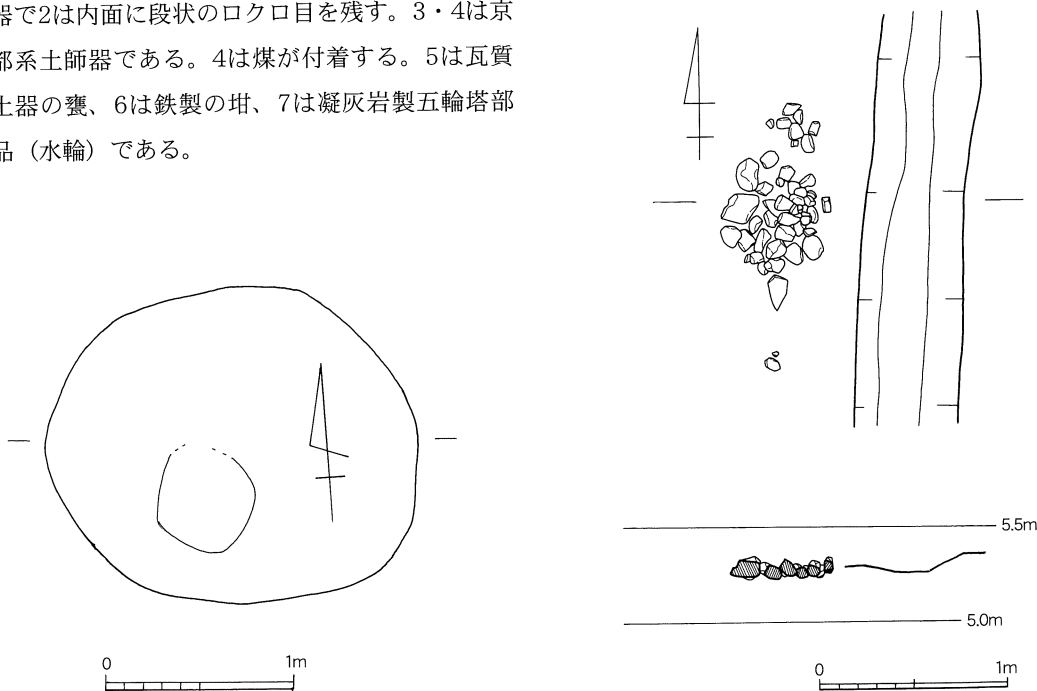
第100図 SE72実測図

SK62 (第85図) SK61の西部と重複する浅い土坑である。検出標高は5.02mである。

出土遺物 (第89図1~6) 1~4は在地系土師器の杯で、1を除いて口縁端部が細くなる特徴をもつ。5は青磁碗の底部片で、円形に加工されている。6は備前焼播鉢である。口縁端部は四角く、体部はやや内向きに立ち上がる。

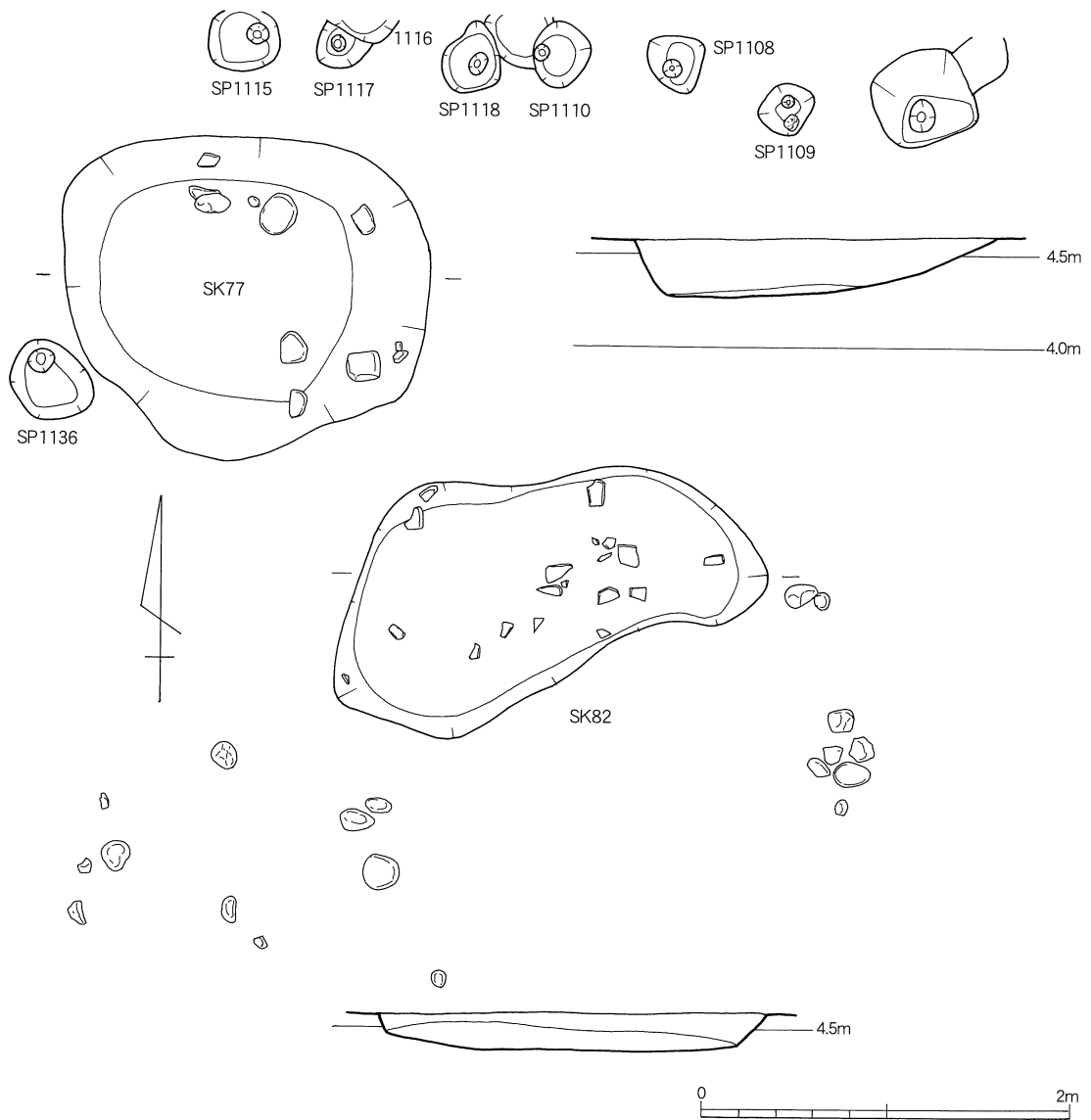
SX63 (第90図) R64区にある一面に敷き詰めたような礫群である。礫群下面の標高は5.0m前後にある。礫に混じって人工遺物が出土した。16世紀前葉の遺構である。

出土遺物 (第91図1~8) 1・2は在地系土師器で2は内面に段状のロクロ目を残す。3・4は京都系土師器である。4は煤が付着する。5は瓦質土器の甕、6は鉄製の坩、7は凝灰岩製五輪塔部品(水輪)である。

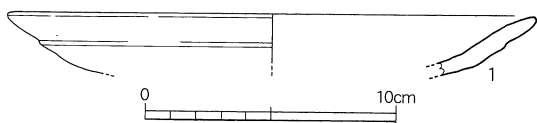


第101図 SE73実測図

第102図 SD74実測図



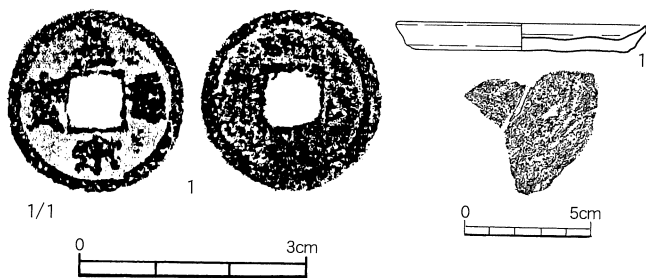
第104図 SK77・82と周辺実測図



第105図 SK77出土遺物実測図

SK64 (第92図) B63区にある土坑である。

出土遺物 (第93・94図1~3) 1・2は京都系土師器皿である。3は祥符元宝 (北宋1009年初鑄)。



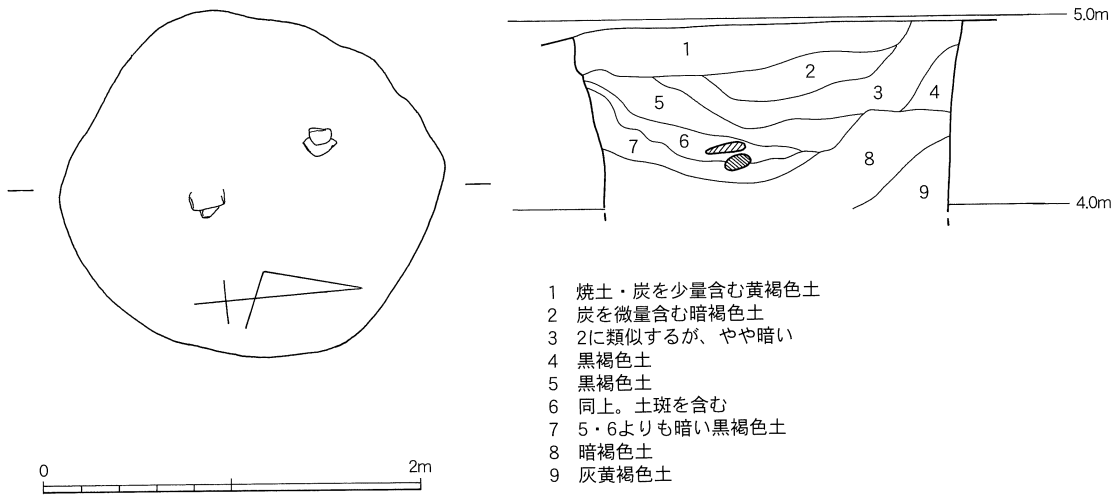
第106図 SE78出土銭貨拓影

第103図 SX74
出土遺物実測図

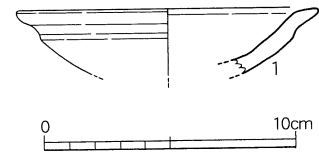
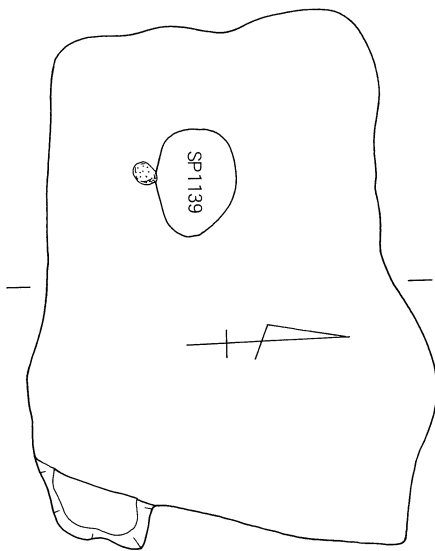
SK66 (第88図) F64区にある土坑である。

SK63の下で検出し、SK60に切られるらしい。

出土遺物 (第95図1~4) すべて在地区土師器で、1・2は体部の上半部が厚い特徴があり、14世紀初頭・前葉的である。



第107図 SE78実測図

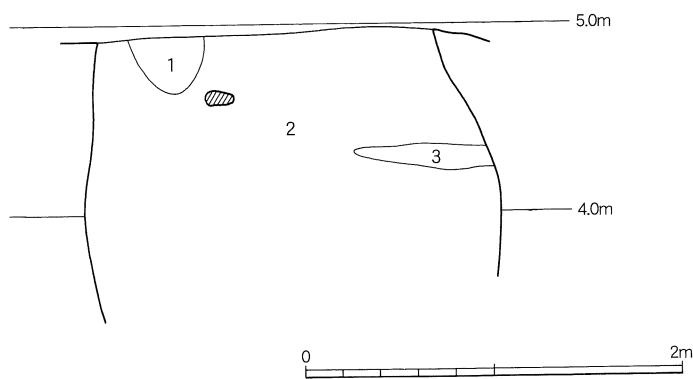


第109図 SE79出土遺物実測図

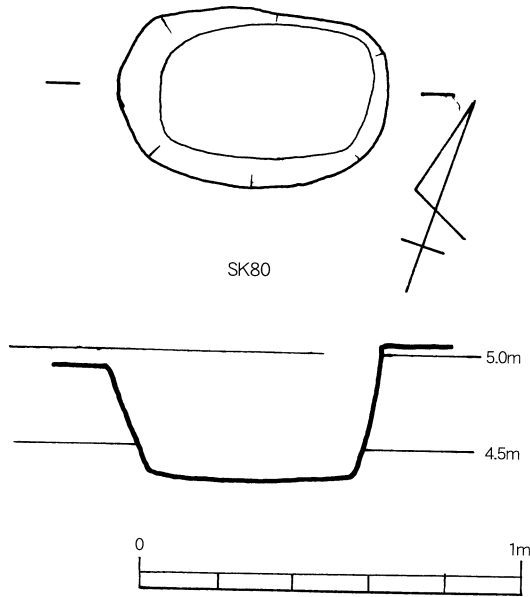
SX70 (第96図) B63区中央部の標高5.30m以下で検出した礫群である。中世の斜行道路のくぼみに沿って内側から出土した。

SK71 (第97図) Y62区に位置する円形の土坑で、南西部をSK120に切られている。

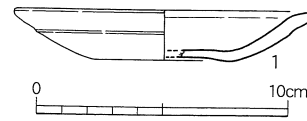
出土遺物 (第98図1~3) 1・2は京都系土師器で、1は皿、2は耳皿である。3は軒丸瓦で瓦頭の周辺部に珠紋、その内側に蓮華紋配している。



第108図 SE79実測図



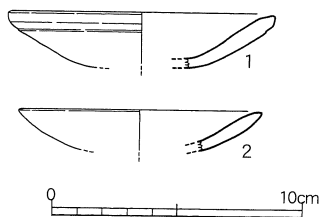
第110図 SK80実測図



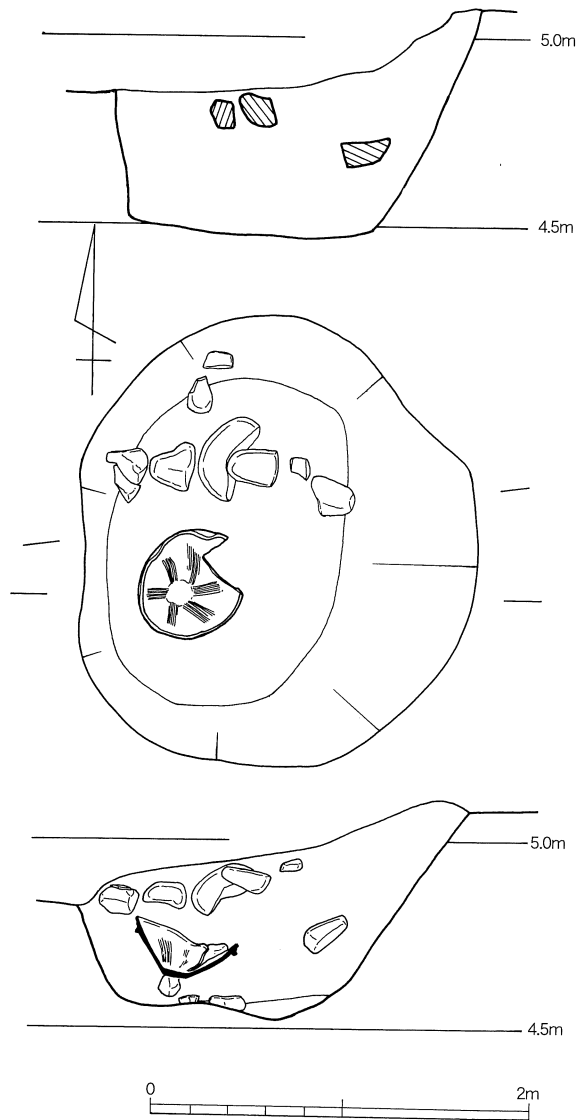
第111図 SK80出土遺物実測図

SE72 (第99図) Y62区にある井戸である。平面は円形で半割りして掘り下げ中に崩壊したので、それ以下は図化していない。一部では検出面から下に向かって礫が厚さ70cmほど堆積し、さらに層序断面を見ると中心から西側に寄って井戸本体が据え付けられたことが分かる。井側は検出できなかった。井筒の様子は把握していない。

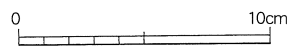
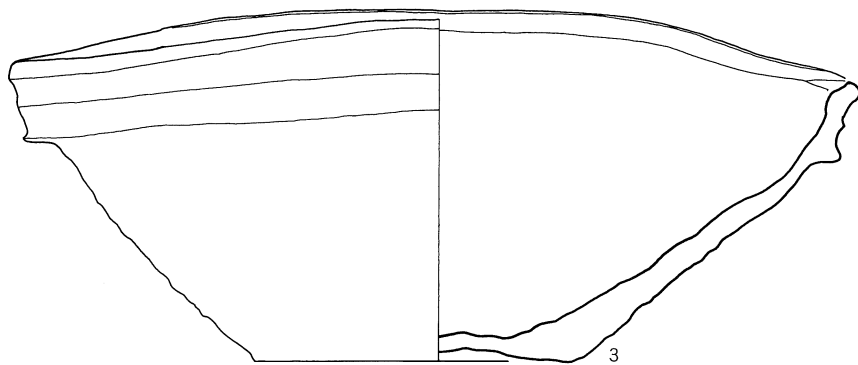
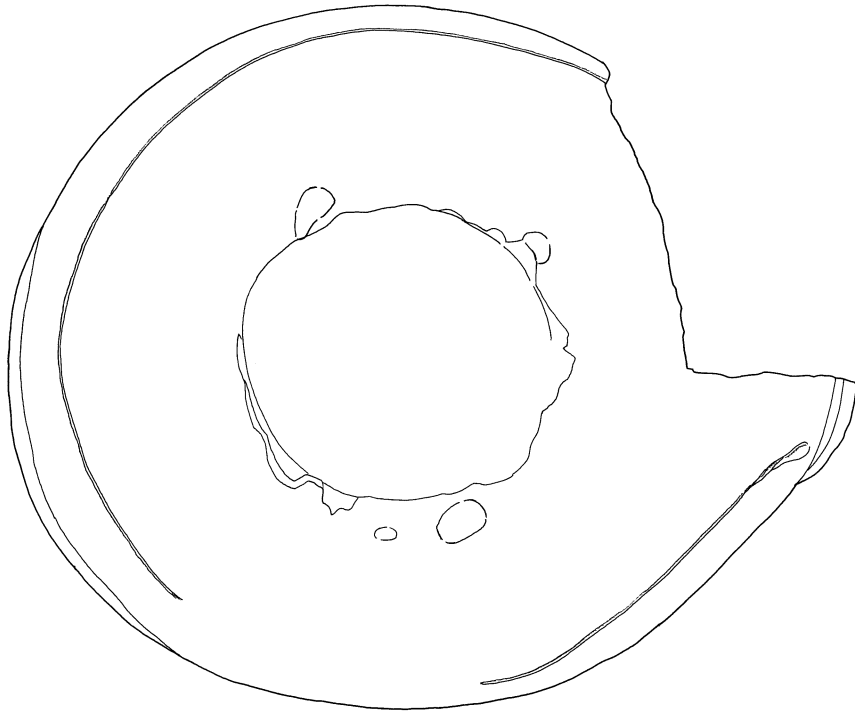
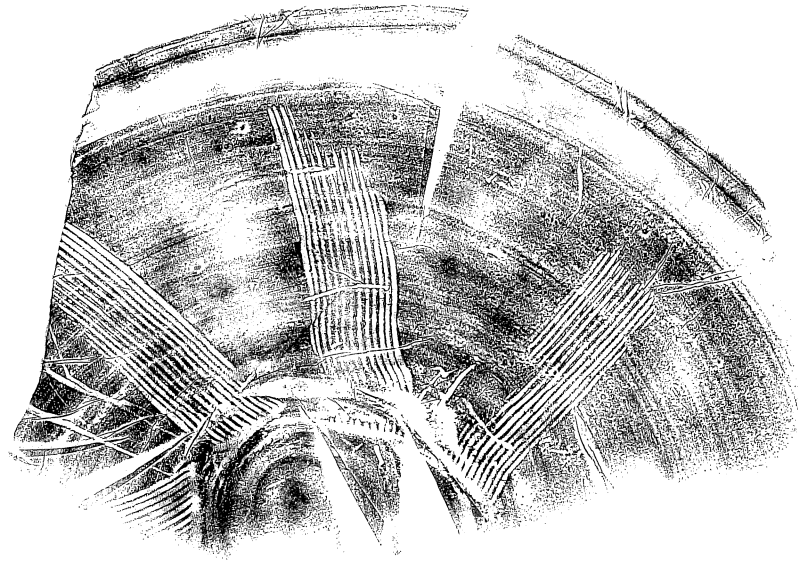
出土遺物 (第100図1・2) 1は京都系土師器小皿、2は瓦質土器の茶釜である。胴部に廻る帯の下位は煤が付着する。肩部に穴の空いた把手が一对付く。



第113図 SK81出土遺物実測図①



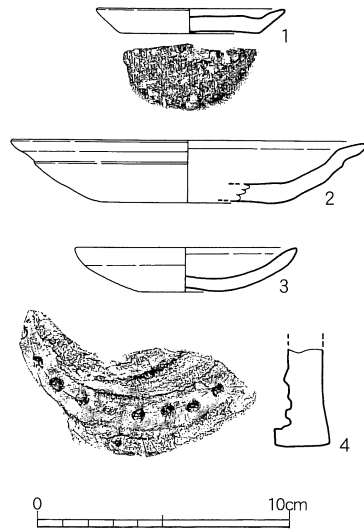
第112図 SK81実測図



第114図 SK81出土遺物実測図②

SD74 (第102図) F64区東端部にあり、南北方向に走る幅約60cm、深さ約15cmの溝状遺構である。調査区外のすぐ東側を走る南北道路(中世の第二南北街路)に接する位置にあること、最上層で検出したことから近世の水田に伴う水路とみられる。

出土遺物(第103図1) 1は在地系土師器杯である。口径は10.0cm、底径は8.5cm、器高は0.9cmと浅い点が特徴的である。体部は上端に向かって薄くなる特徴がある。SD74に伴う遺物とは思えず、下位の遺物が混入したものであろう。

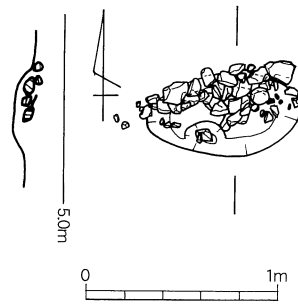


第115図 SK82出土遺物実測図

SK77 (第104図) Y62区にある円形土坑である。

出土遺物(第105図1) 1は京都系土師器の皿。外面口縁部は板で横ナデし、下端に鋭い稜線を残す。

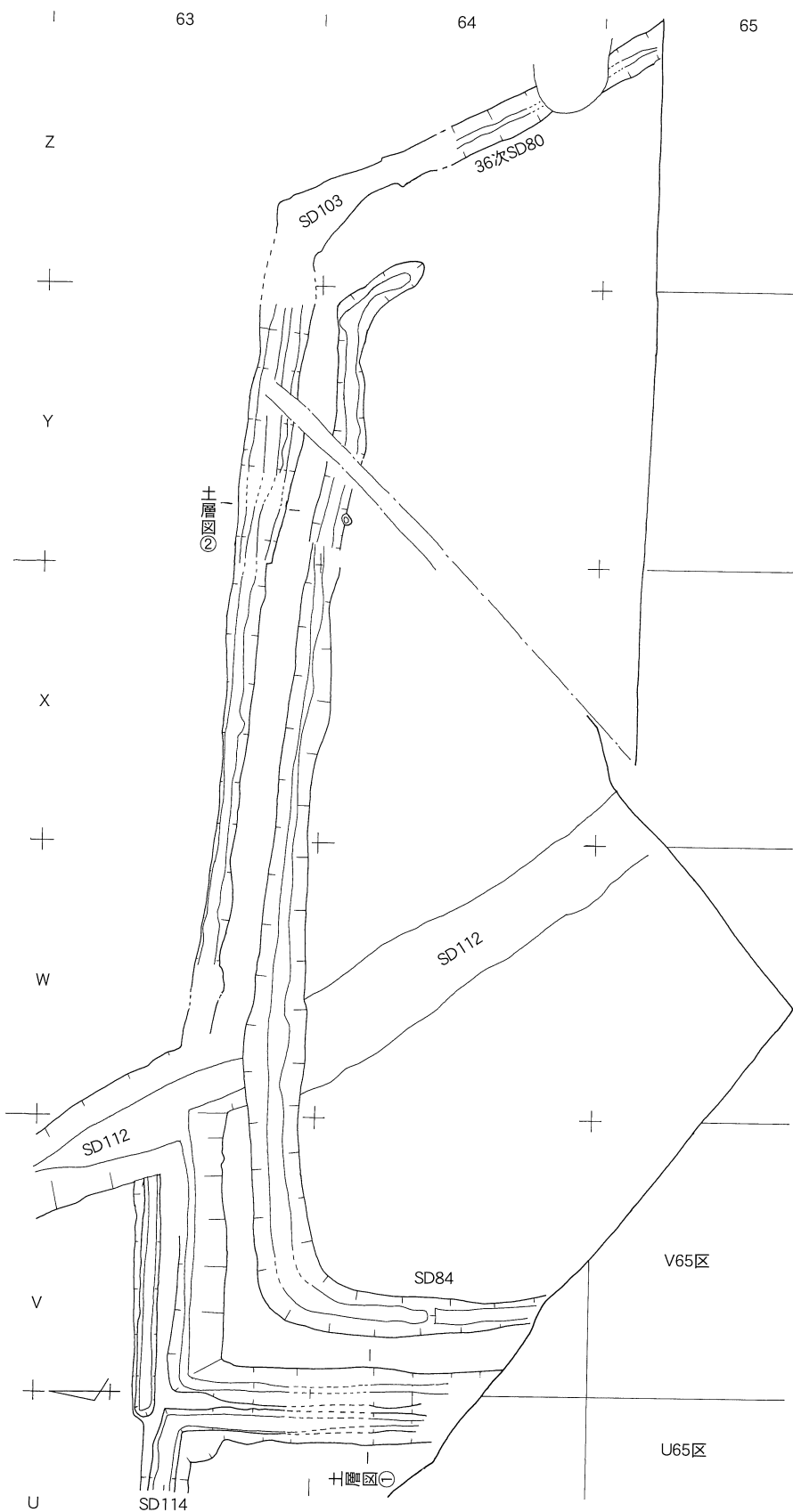
SK78 E64区にある平面円形の井戸である。



第116図 SK81出土遺物実測図②



第117図 調査区西部 (S~W区) の遺構配置図



第118図 SD84・SD103・SD114全体図

出土遺物 (第106図1)

1は皇宋通宝(北宋1038年初鑄)。

SK79 (第108) E64区にある平面方形の井戸である。

出土遺物 (第109図1)

1は京都系土師器の皿。

SK80 (第110図) D64区にある平面楕円形の土坑である。

出土遺物 (第111図1)

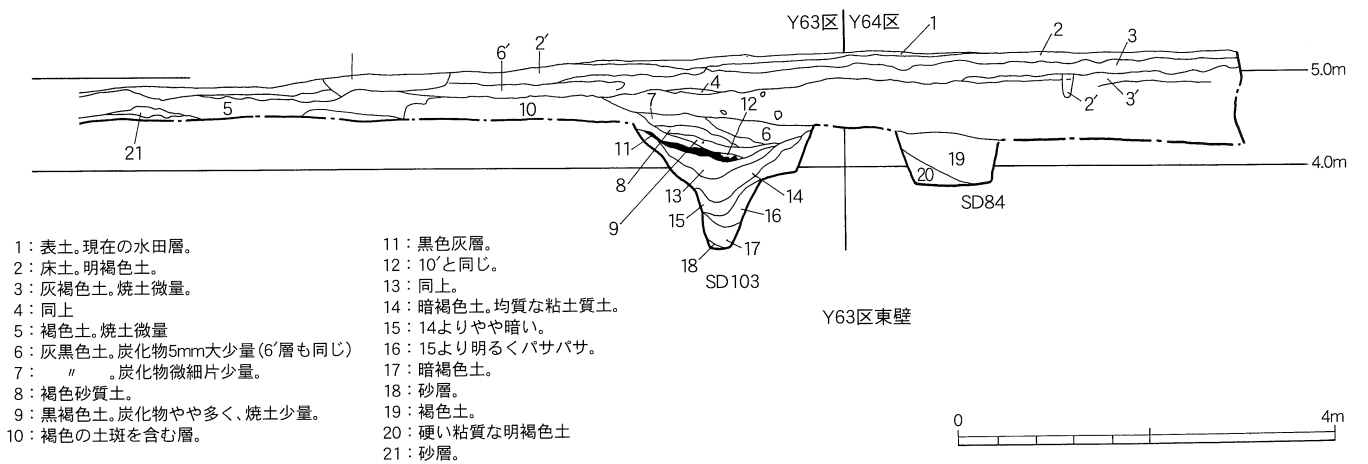
1は京都系土師器の皿。

SK81 (第112図) D64区にある平面楕円形の平面楕円形の土坑で、SK198の北側に位置する。内部から廃棄された状態で遺物が出土した。

出土遺物 (第113・114図1~3) 1・2は京都系土師器の小皿。1は口縁部外面を横なでし、段差をつけている。口径10.4cm。2は口縁部外面に段差は認められないが、該当部分を横なでし、その下位は手づくね痕を残す。3は中世6期の備前焼き挿鉢で、注ぎ口付近が欠損するだけで大部分は存在する。内面に6箇所13条の播り目が放射状にあり、外底面には粘土塊から切り離した際の指の跡が残る。口縁部細大径33.8cm、底径12.3cm、器高14.0cmである。



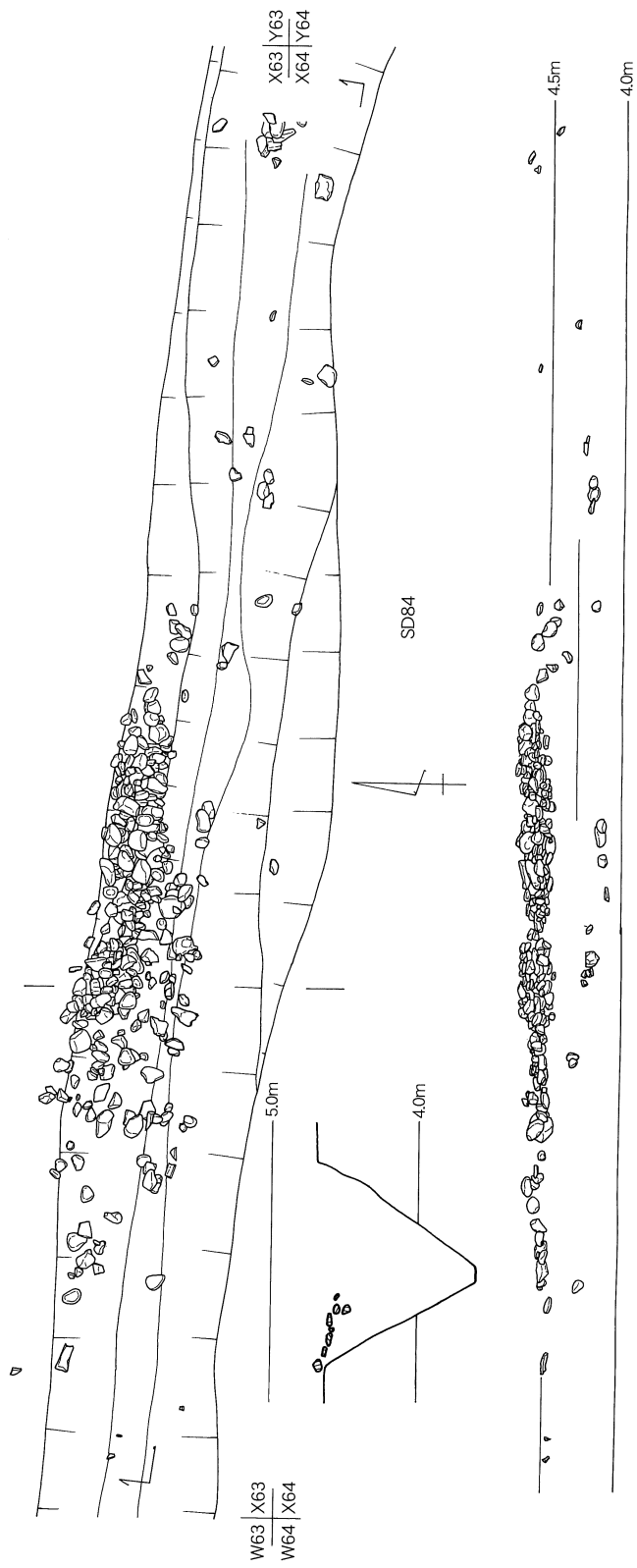
第119図 SD84西部拡大図



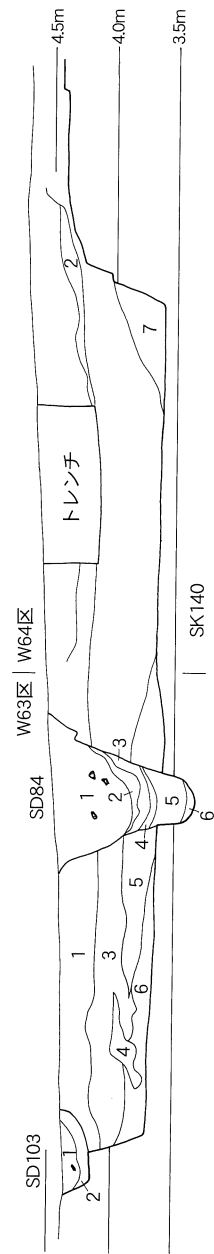
- 1: 表土。現在の水田層。
- 2: 床土。明褐色土。
- 3: 灰褐色土。焼土微量。
- 4: 同上
- 5: 褐色土。焼土微量
- 6: 灰黒色土。炭化物5mm大少量(6'層も同じ)
- 7: "。炭化物微細片少量。
- 8: 褐色砂質土。
- 9: 黒褐色土。炭化物やや多く、焼土少量。
- 10: 褐色の土斑を含む層。

- 11: 黒色灰層。
- 12: 10'と同じ。
- 13: 同上。
- 14: 暗褐色土。均質な粘土質土。
- 15: 14よりやや暗い。
- 16: 15より明るくバサバサ。
- 17: 暗褐色土。
- 18: 砂層。
- 19: 褐色土。
- 20: 硬い粘質な明褐色土
- 21: 砂層。

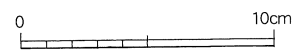
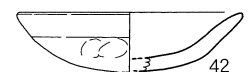
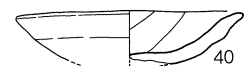
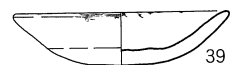
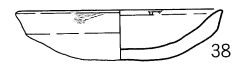
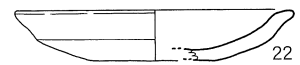
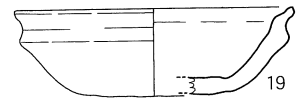
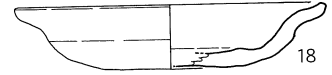
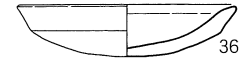
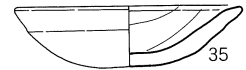
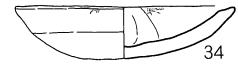
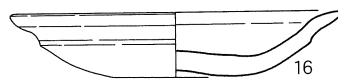
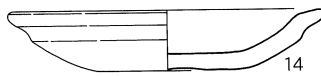
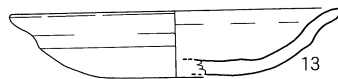
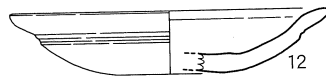
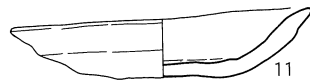
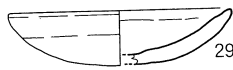
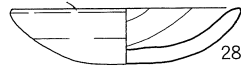
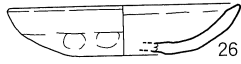
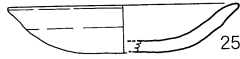
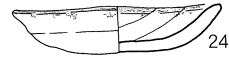
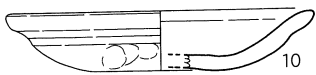
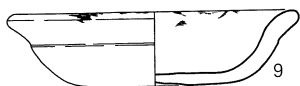
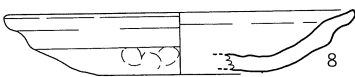
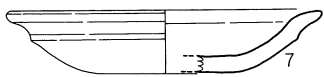
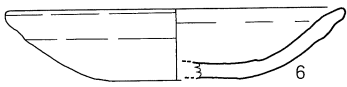
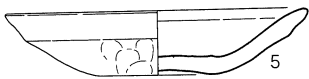
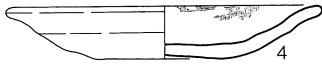
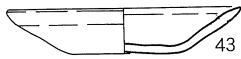
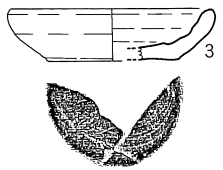
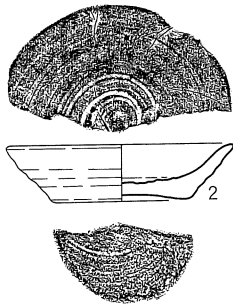
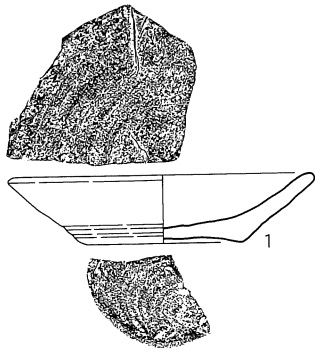
第120図 SD84・SD103・SK140層序図



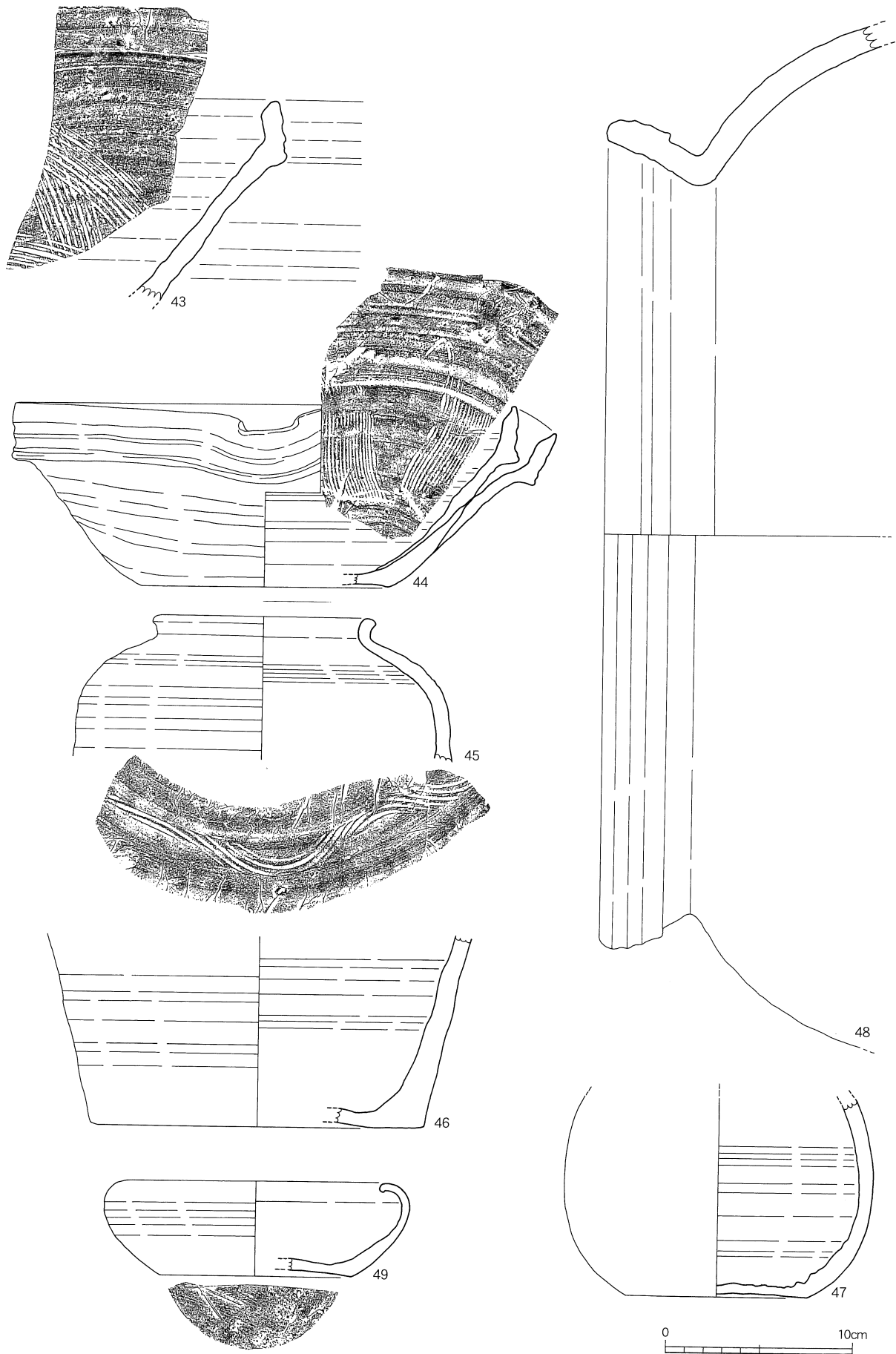
第121図 SD84中部実測図



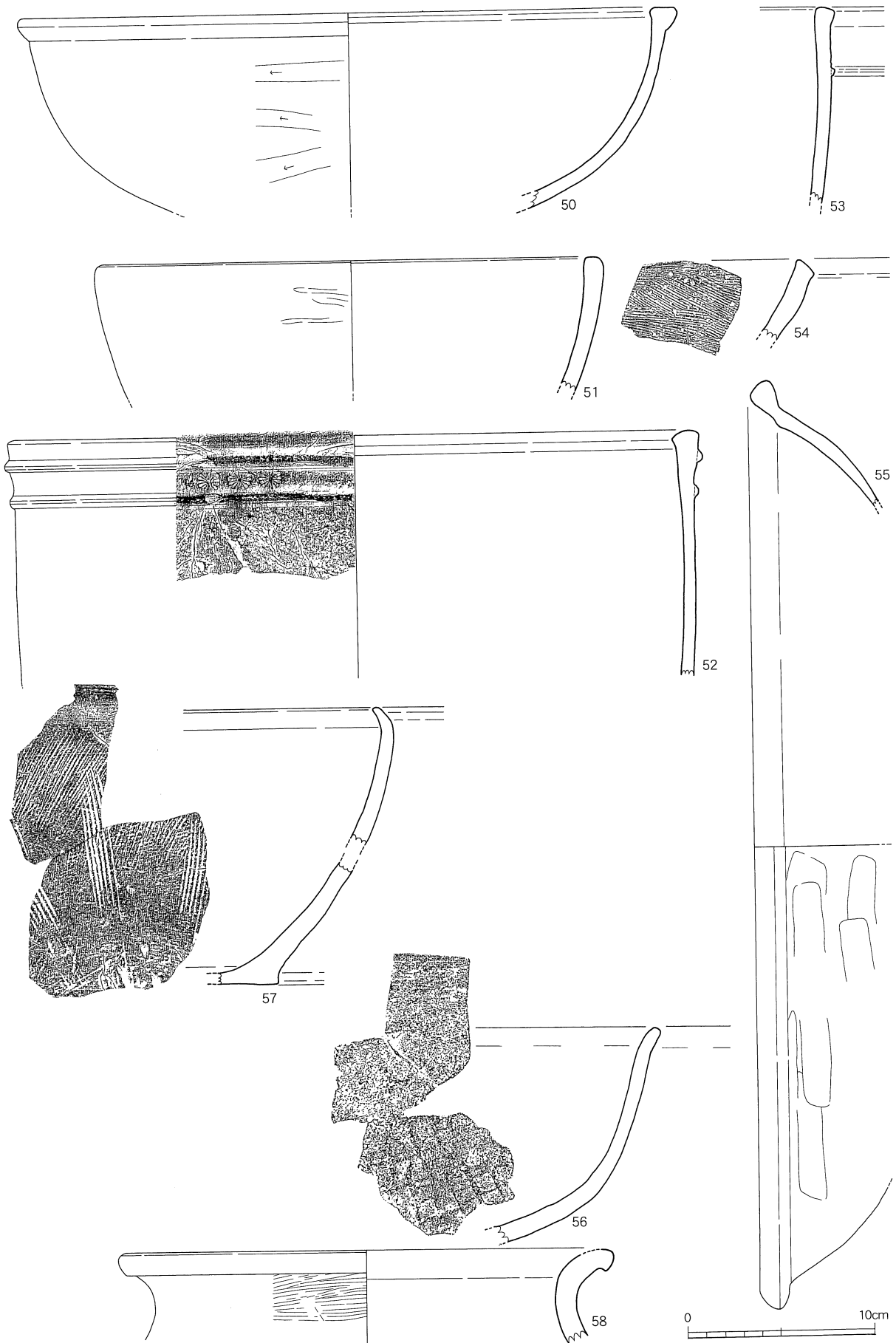
第122図 Y63区東壁層序図



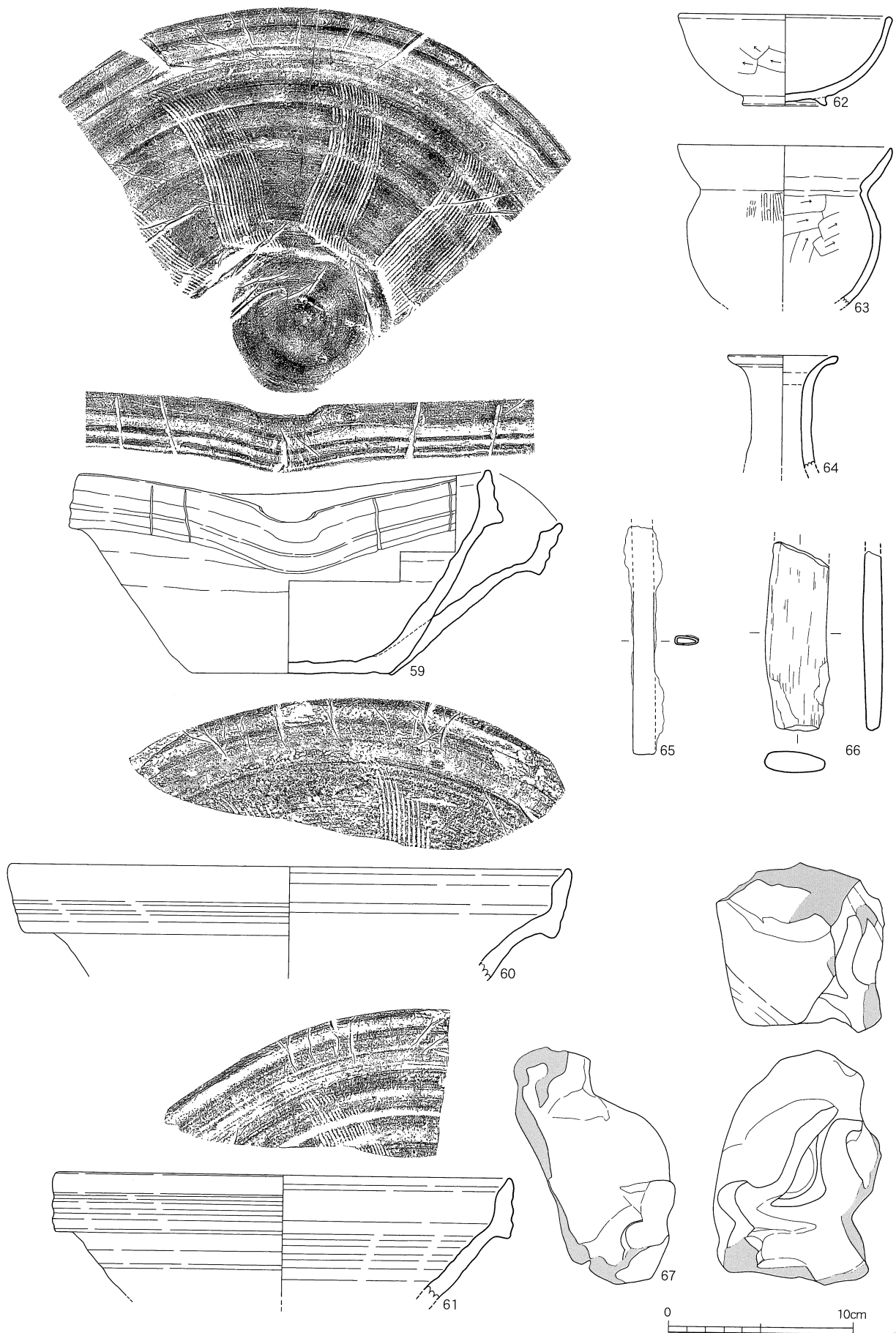
第123图 SD84出土遺物実測図①



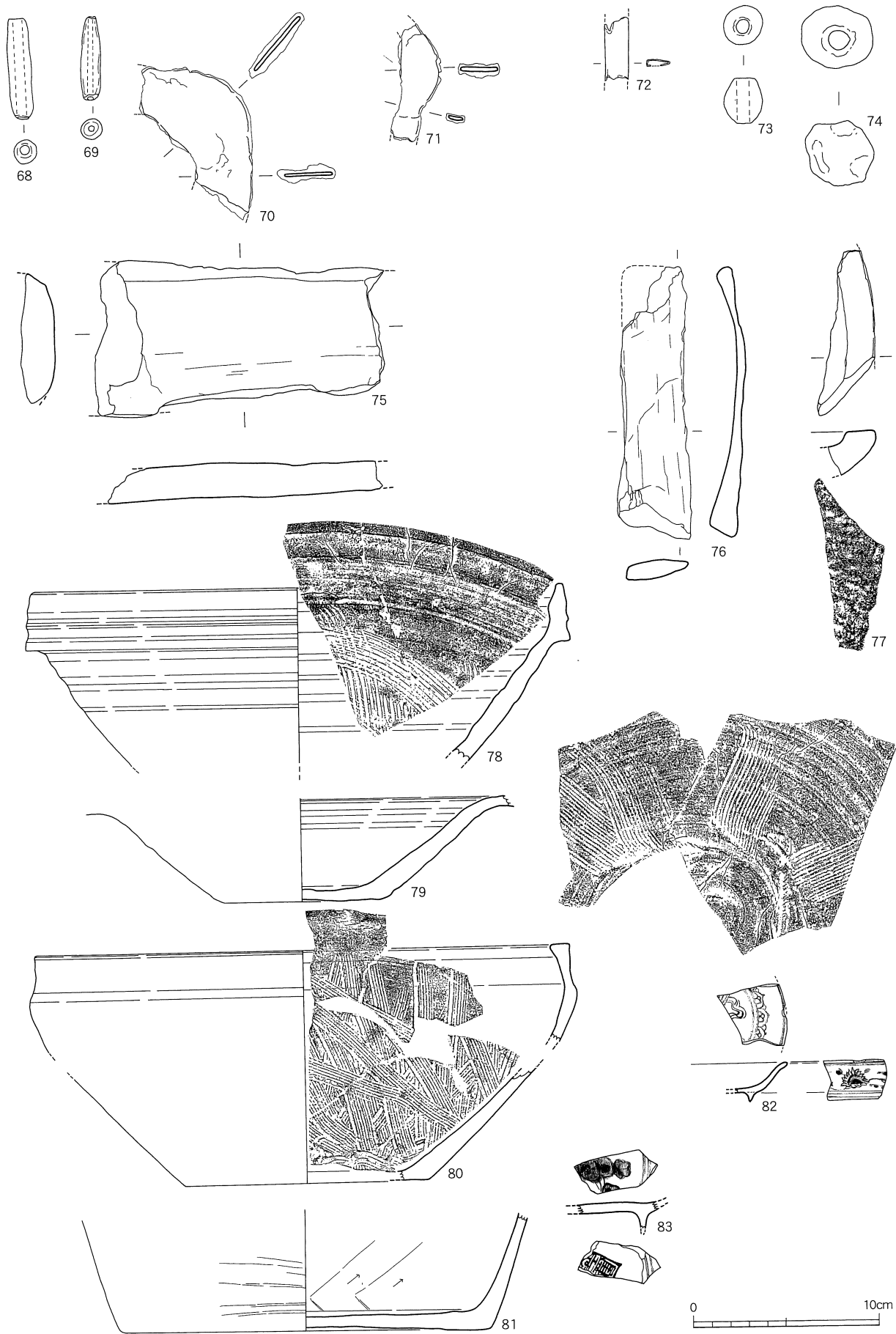
第124図 SD84出土遺物実測図②



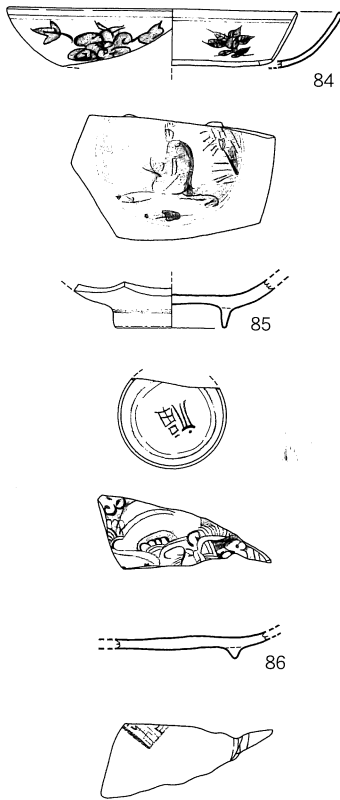
第125図 SD84出土遺物実測図③



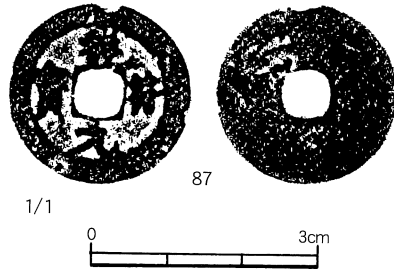
第126图 SD84出土遗物实测图④



第127图 SD84出土遺物実測図⑤



第128図 SD84出土遺物実測図⑥



第129図 SD84出土銭貨拓影

混入した遺物である。2は京都系土師器の小皿で、口縁部は強い横なでによって段差を付け、口縁端部を外側に折り曲げている。口径13.8cm、器高2.5cm。色調は灰褐色を呈する。3は同じく京都系土師器の小皿である。内面から口縁部外面は横なでし、口径8.8cm、器高1.8cmである。4は軒丸瓦で、瓦頭の周縁に珠紋、内側に巴紋の尾が残る。平均的な位置での厚さは1.3cmであり、周縁部の厚さは2.3cmである。

SK83 (第116図) Z63区北部で検出した礫の詰まった土坑である。図化した遺物はない。

SD84 (第118図) 調査区西南部、V64区からZ64区にかけて分布する溝状遺構である。V64区では南北方向、V63区で東方向に屈折しそこから35mほど直線的に延び、端は緩やかに南東方向に曲がる。SD84に平行するように外側1m強の幅を保ってSD103が取り巻いている。二つの溝の間の空白域には土塁が存在したのであろう。SD84の深さは115cm~130cm程度である。

溝の終末期には廃棄物捨て場とされたく所々で集中的に礫を主体として遺物が出土した。遺物の底面は溝の中程に及んでいる。X63区ではやや西よりに北側から投げ込まれた状態の集中部があり、西部の屈曲箇所にある集中部でも外側から投げ入れられた状態であった。

第120図によりSD84とSD103・SK140を南北方向に断ち割った層序を説明する。SD84の1層は1層は3層は4層は5層は6層は。SD103の1層は暗褐色土、2層は褐色土。SK140の1層は暗茶褐色土、2層は明褐色土、3層は褐色土斑を疎らに混入した茶褐色土、4層は茶味の強い褐色土、5層は褐色土、6層は黄褐色土斑主体、7層は黒褐色土である。

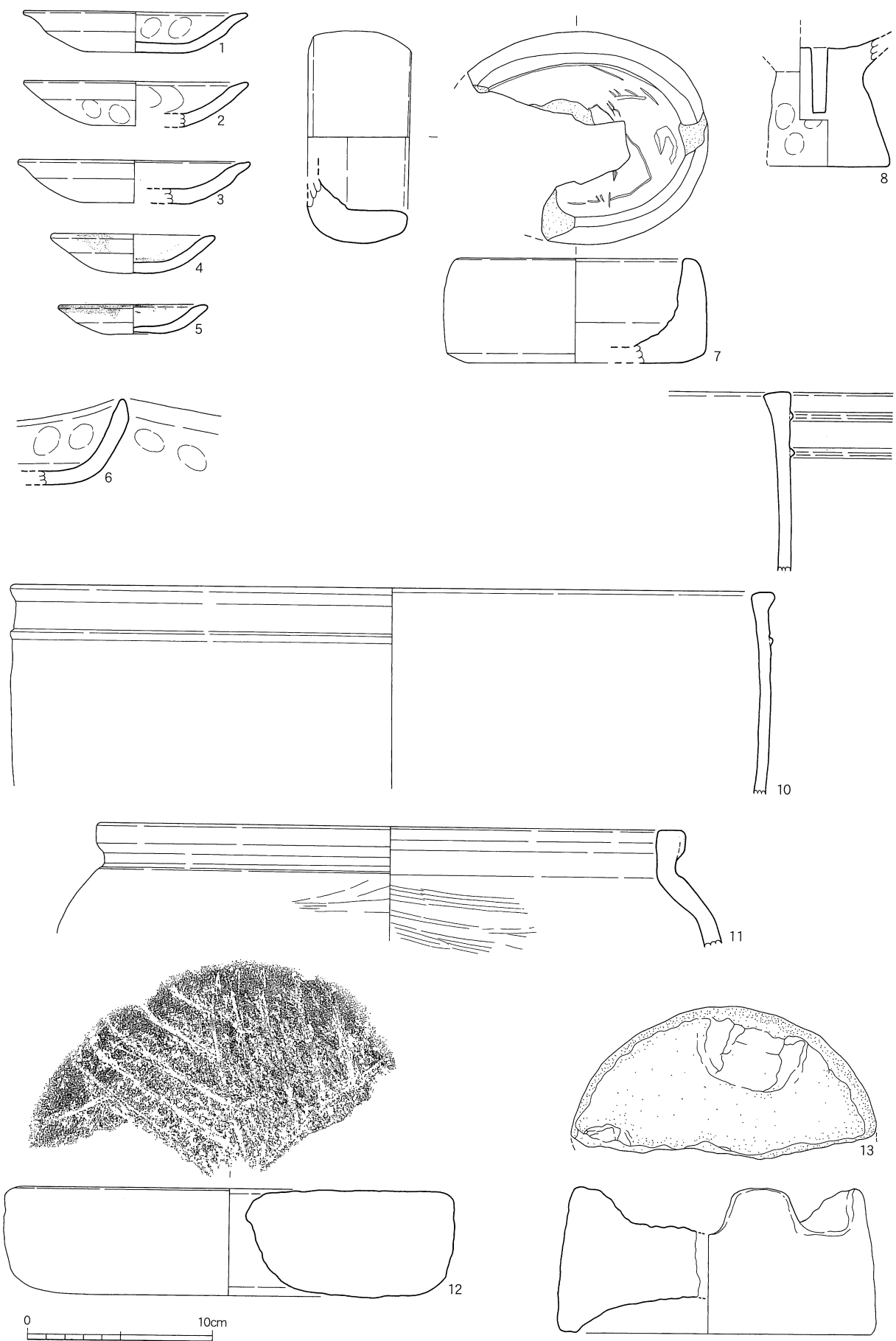
出土遺物 (第123~129図1~87)

1~3は在地系土師器皿である。いずれも糸切り底で、内面に段状のロクロ目を残す15世紀末葉から16世紀初頭の型である。4~42は京都系土師器で、4~22の19個が大型皿、23~42の20個が小型皿である。大型皿と小型皿の割合はほぼ半数ずつである。口縁部に煤が付着する例は大型皿では4・9・11・15の4個、小型皿では24・30・31・33・34・38・39の7個であり、やや小皿に煤付着例が多い。

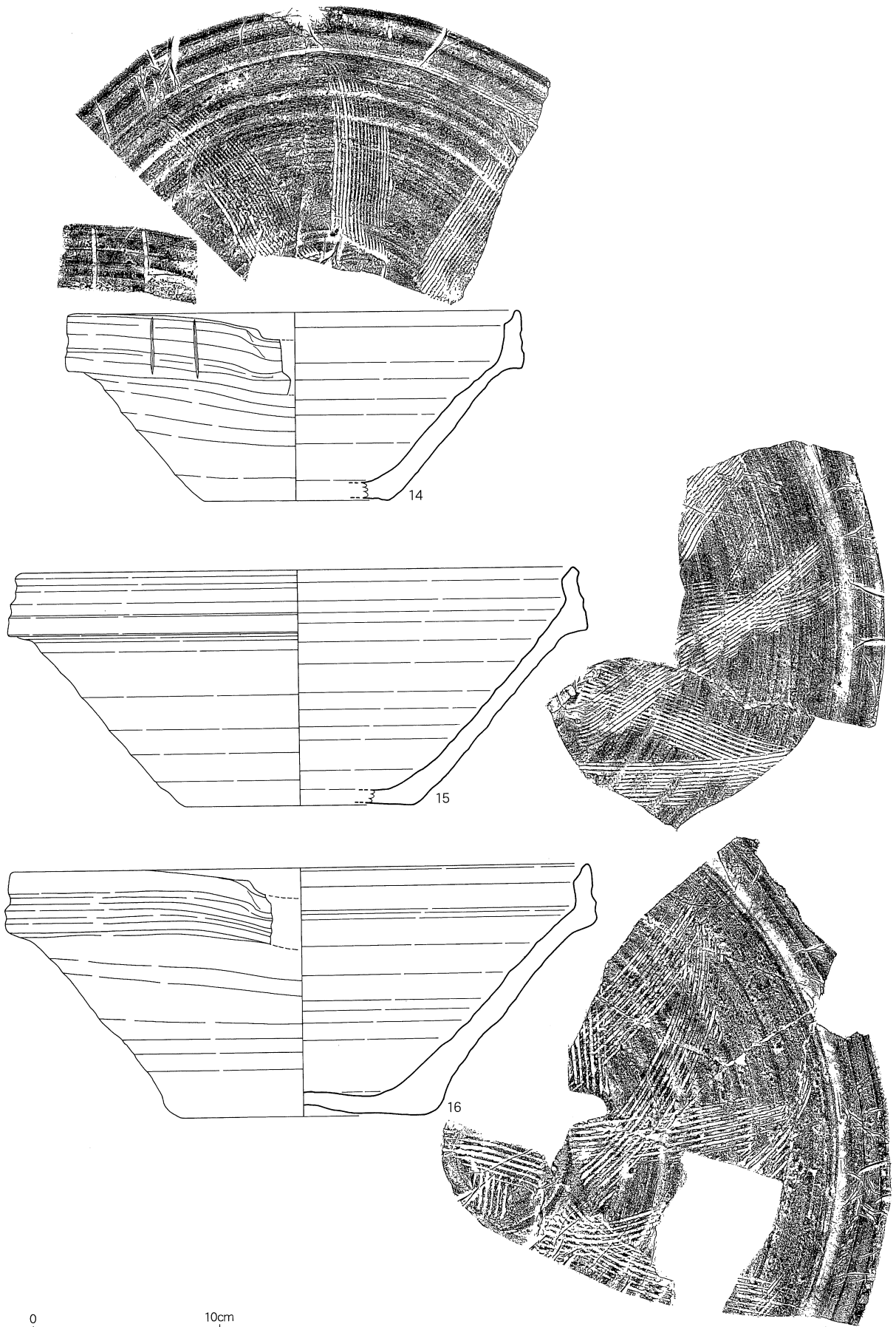
43~49・59~61・79・80は備前焼である。播鉢の内、43・79は播り目が交叉する16世紀第四四半期以降の型、その他の播鉢はそれ以前の16世紀代の遺物である。59の口縁部外面には注ぎ口の左右に二箇所ずつ縦方向のヘラ描きが見られる。その他の備前焼は壺(45・46)、長頸壺(47・64)、大型甕(48)、鉢(49)である。50~57は瓦質土器で、鉢鍋類(50・51・54・55・56)・火鉢(52)・播鉢(57)・甕(58)がある。



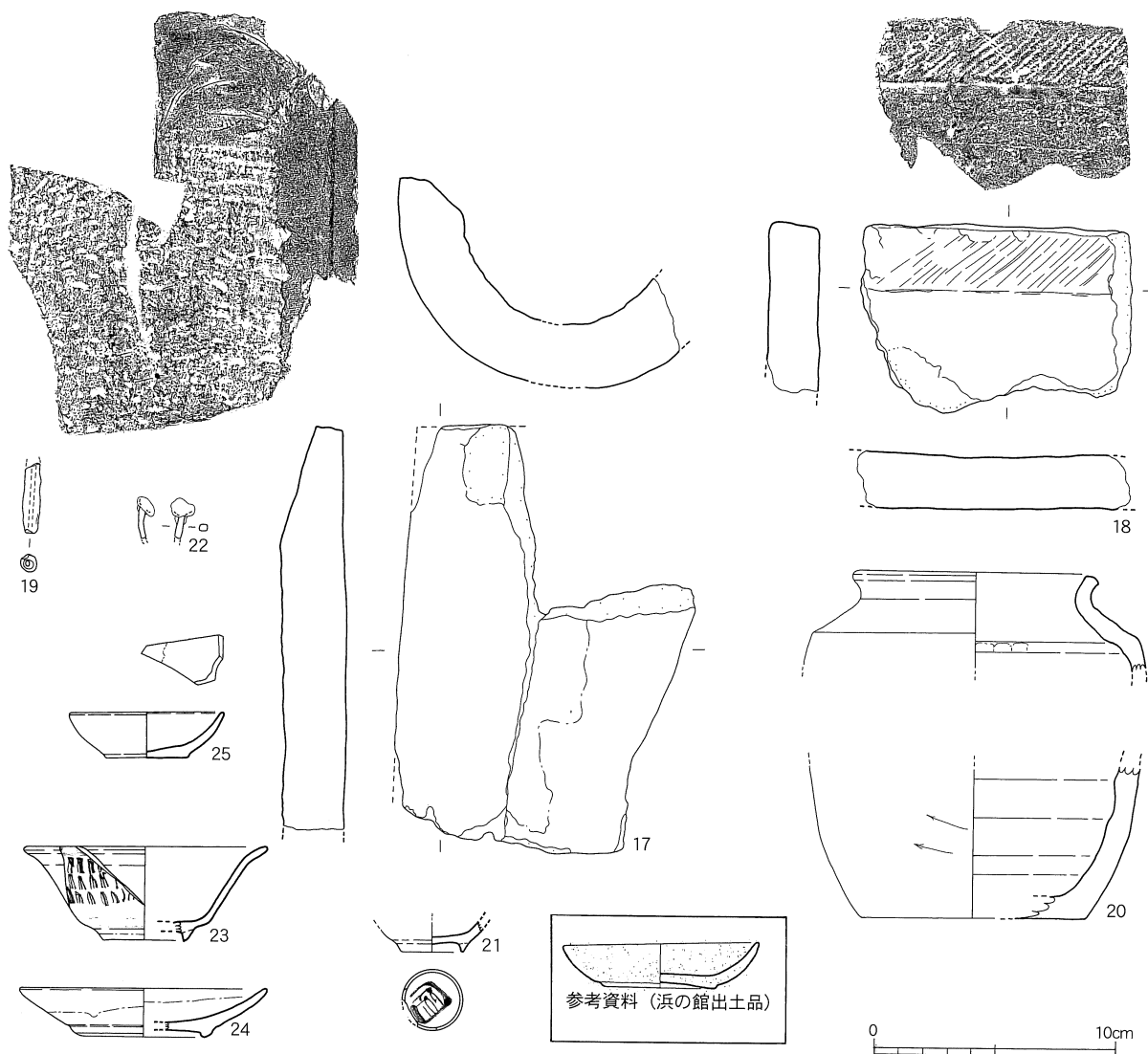
第130図 SD84とSD103の交点付近（SD123とした部分）の検出面実測図



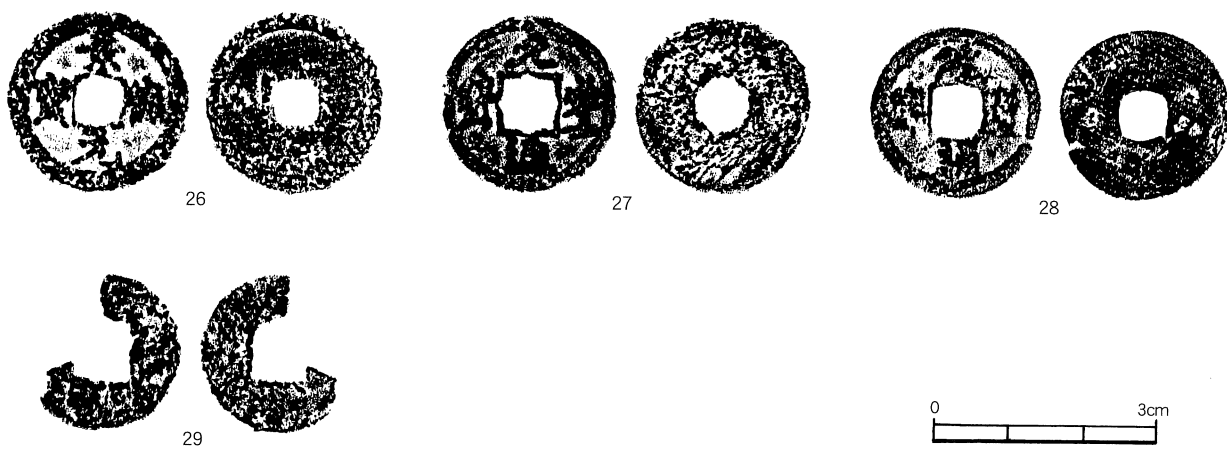
第131図 SD123出土遺物実測図①



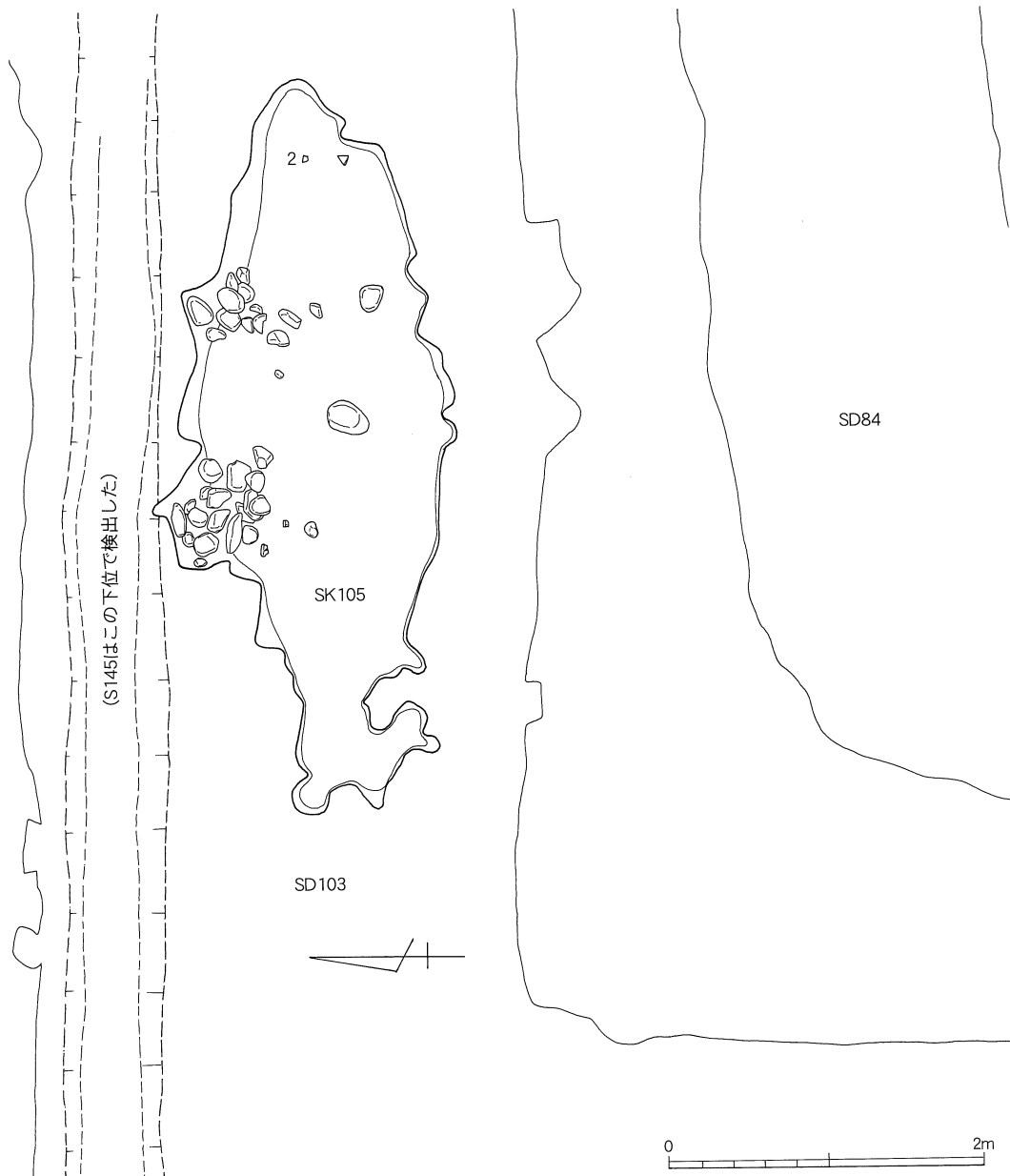
第132図 SD123出土遺物実測図②



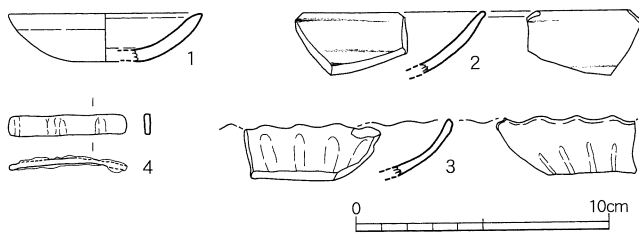
第133図 SD123出土遺物実測図③



第134図 SD123出土銭貨実測図拓影

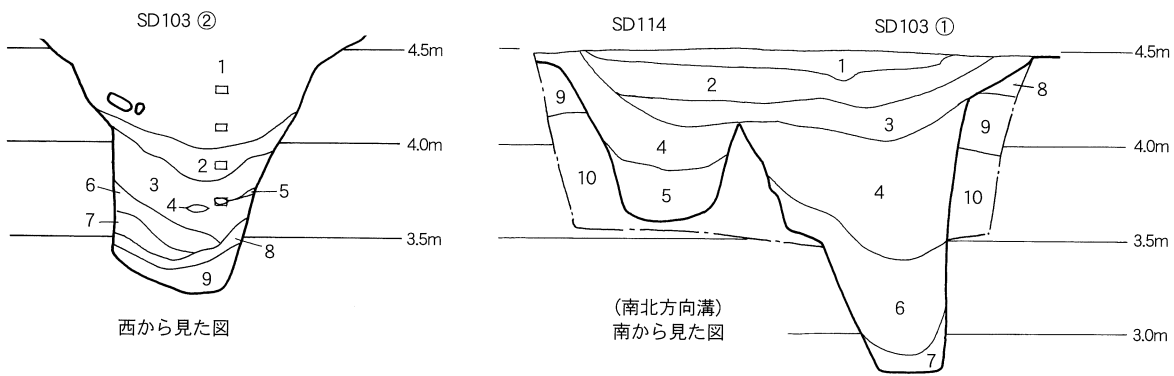
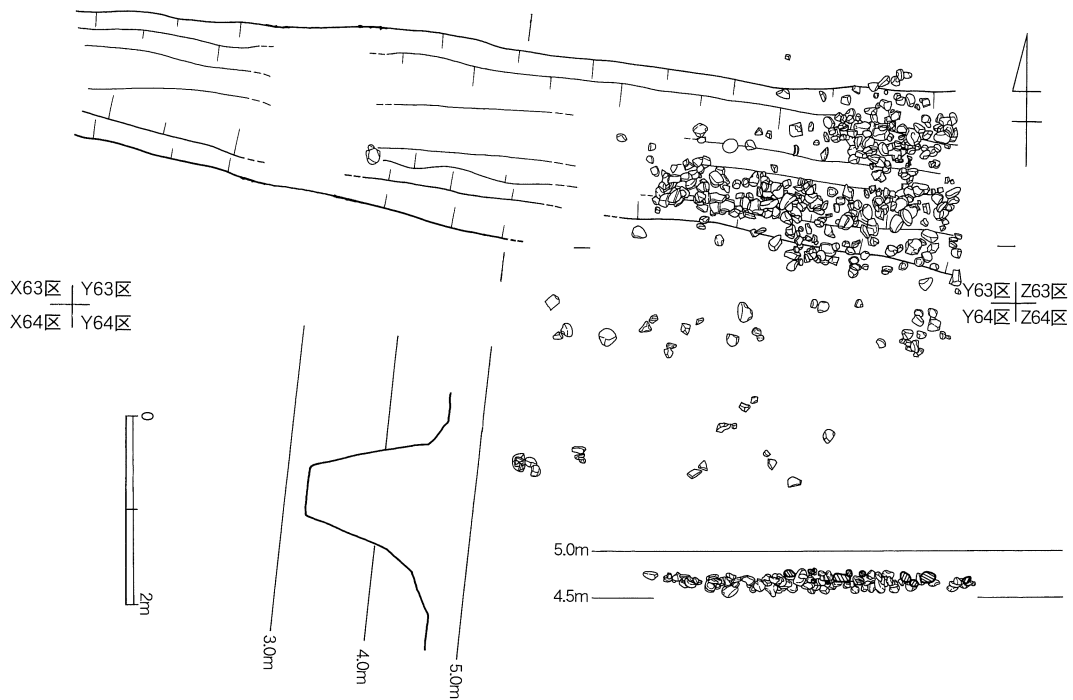


第135図 SK105実測図



第136図 SK105出土遺物実測図

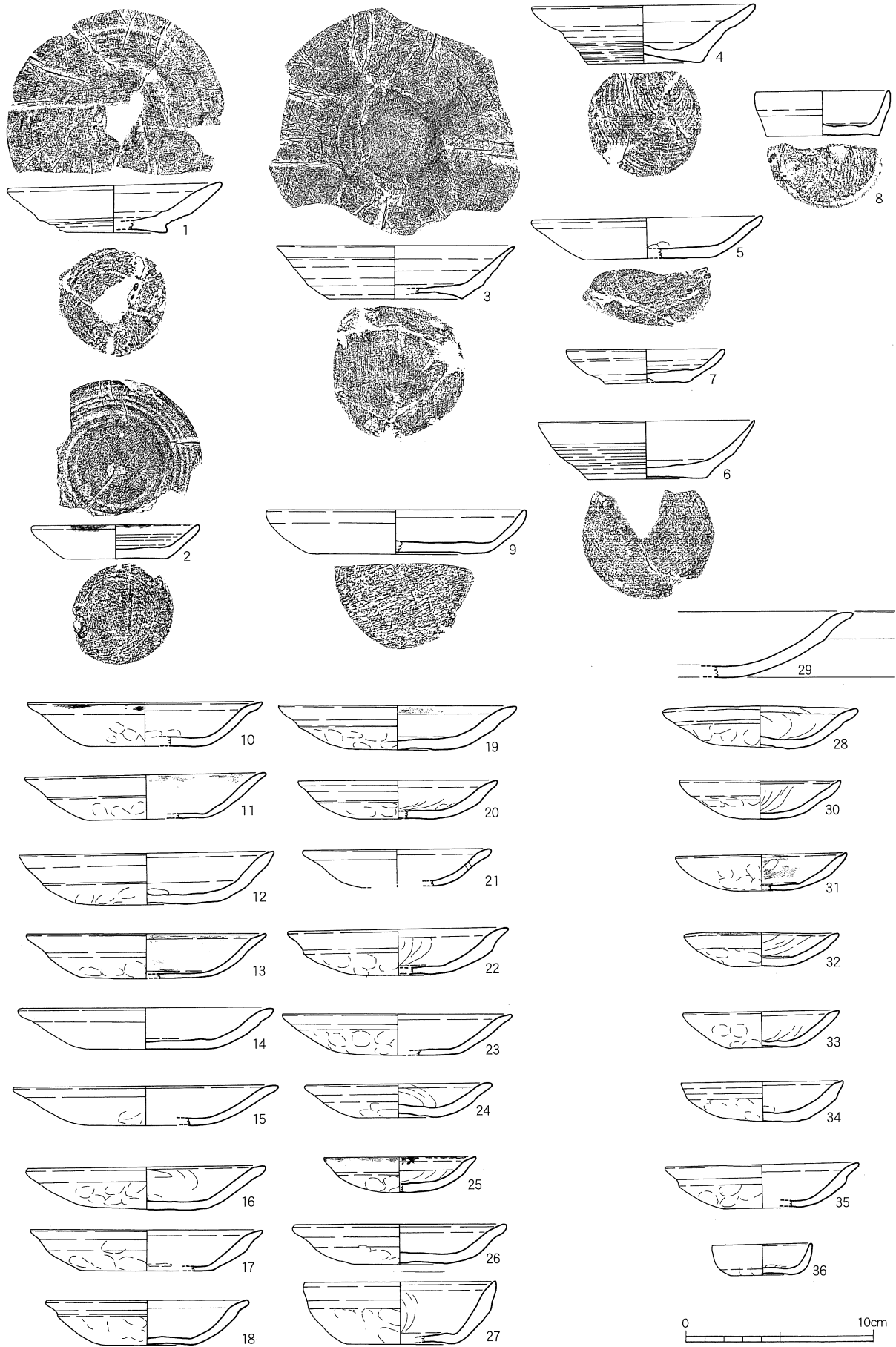
62・63は古墳時代の土師器。65は青銅製品である。断面の一方が細くなるので小柄であろう。66は結晶片岩製の砥石で、全周を使用している。67は鬼瓦。68・69は土師質の土錘、70・71は鉄製品で、71は板上の部材で用途不詳。71は鎌か。72は青銅製の小柄、73は白色のガラス玉。74は鉛製の火縄銃弾である。直径1.25cm、重量9.7g。75は結晶片岩製の砥石で、両端と片面を欠損している。76も結晶片岩製の砥石で、折れ曲がるほど使い込まれている。77は硬砂岩製の上臼。



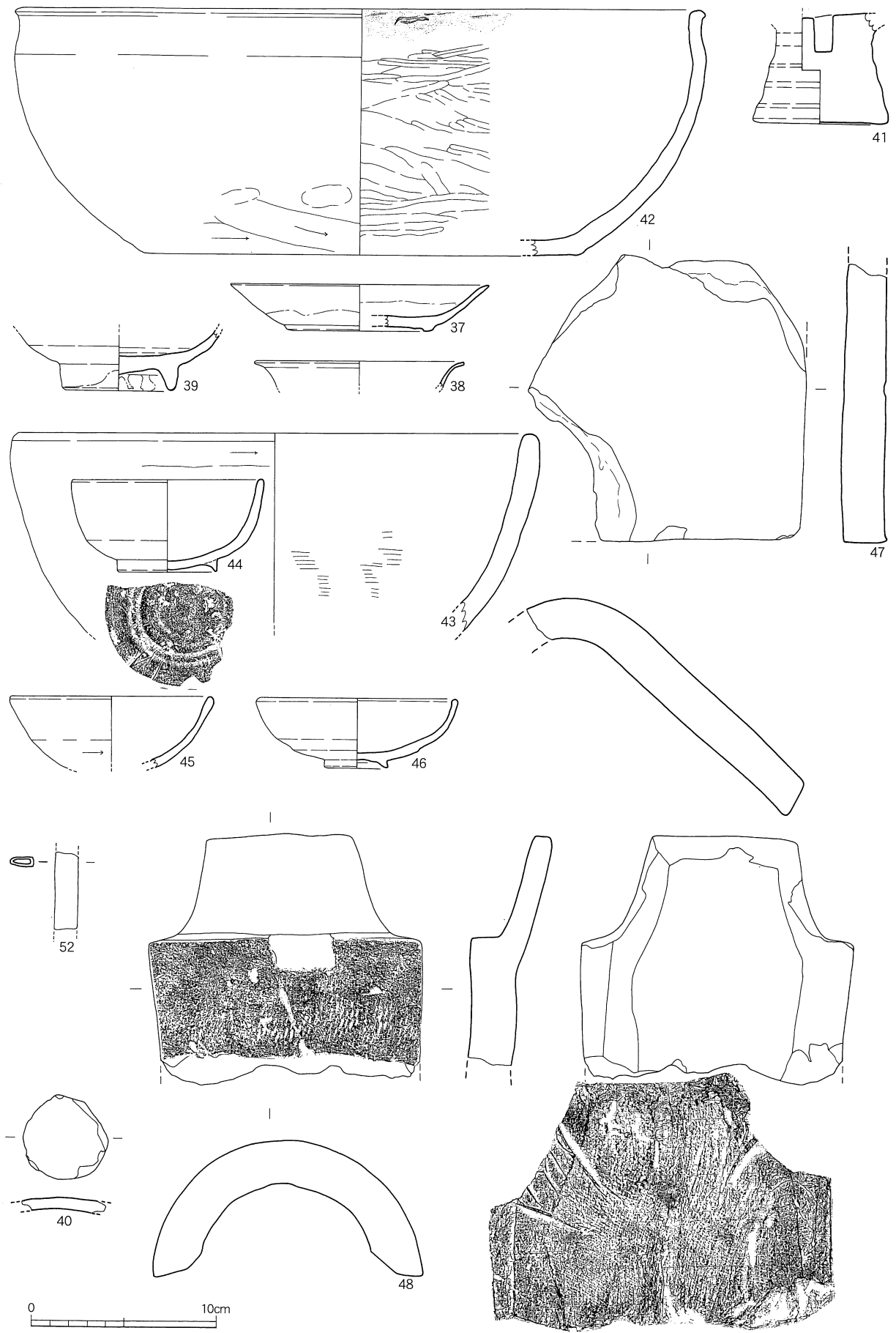
第137図 SD103部分 (Y63区) 及び土層図

82~85は中国景德鎮窯系の青花。82は青花皿B 1群。83・85は青花碗E群で16世紀中葉から後半のいわゆる饅頭芯碗。84は青花皿E群。86は皿。87は祥符通宝（北宋1009年初鑄）。

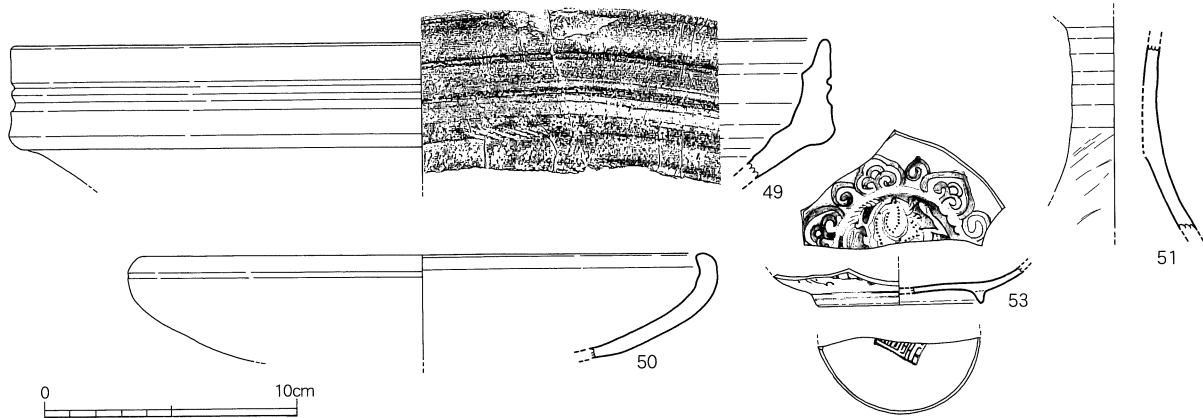
SK123（第123図） SD103とSD112が交差する部分は調査当初には礫や遺物が一面に出土するので一個の遺構として取扱いS123と呼んでいた。掘り下げが進んだ段階で下部から溝状遺構が2条現れたので、これをSD103・SD112とした。ここではSD103とSD112とが埋没する最後の段階の遺物群という意味で、SK123とした当初の名称部分から出土した遺物を報告する。



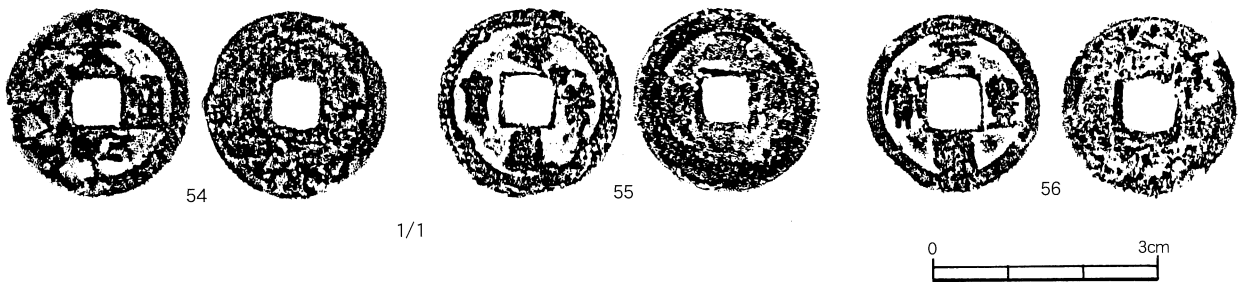
第138图 SD103出土遺物実測図①



第139图 SD103出土遺物実測図②

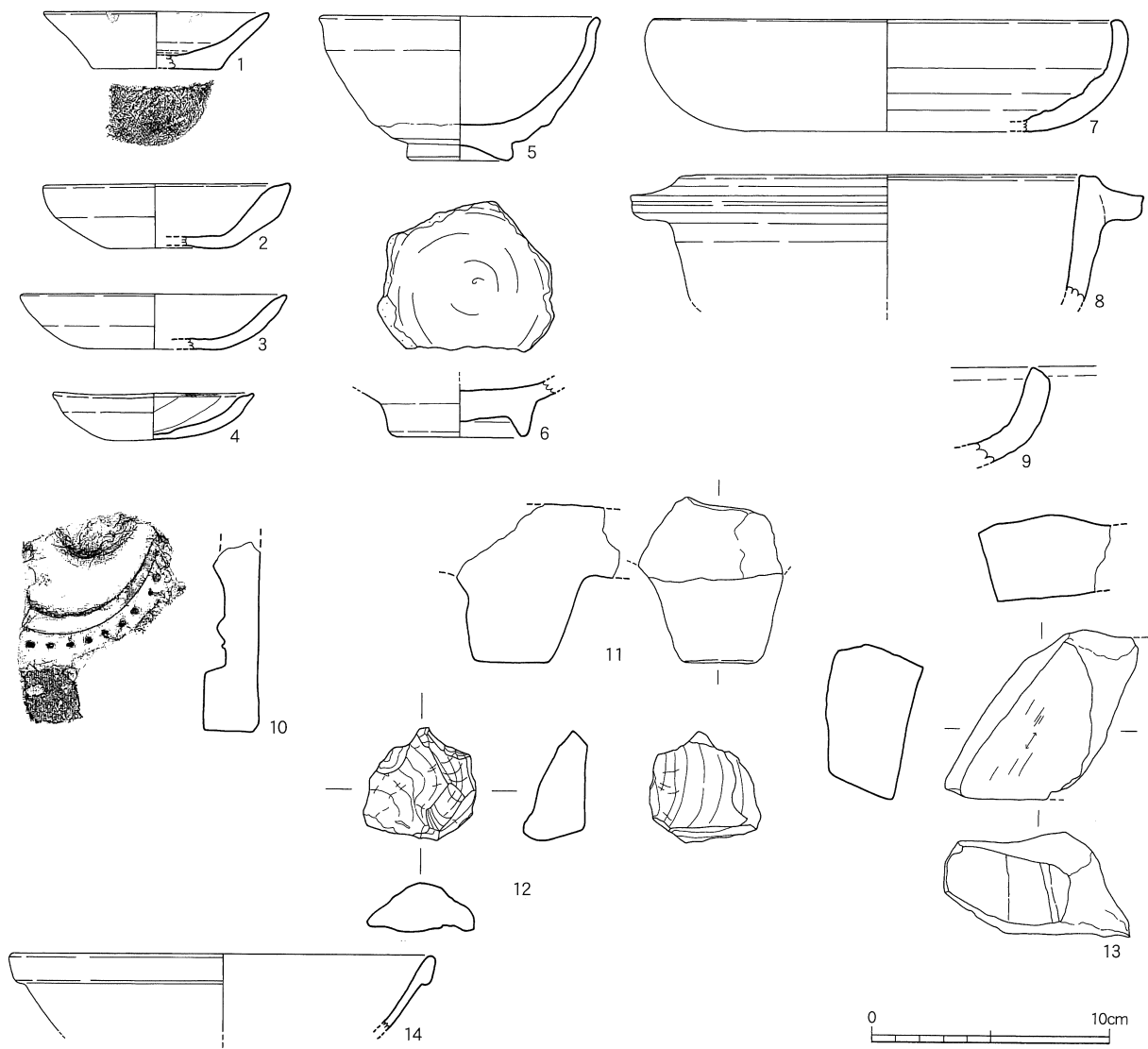


第140図 SD103出土遺物実測図③

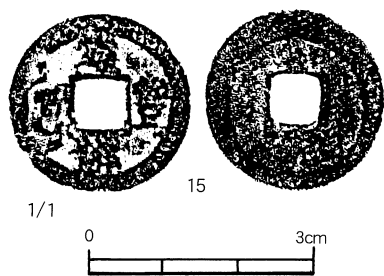


第141図 SD103出土銭貨拓影

SK123出土遺物（第131～134図1～28） 1～6は京都系土師器で、1～3は皿、4・5は小皿である。4は二次的熱を受け黒変している。5は口縁部に煤が付着する。7は土師質の分厚い楕円形皿である。8は土師器の燭台。9・10は瓦質土器火鉢、11は瓦質土器鉢、12は安山岩製の下白、13は凝灰岩製の平面円形加工した品の半割である。14～16は備前焼の播鉢で、14は中世6期、15・16は交叉播り目を施す近世1b期である。17は丸瓦、18は瓦で平面縁辺に幅3cm弱のコビキ痕を残す。19は土師質の土鍾。20は須恵器壺で同一個体破片がY63区包含層、Z64区焼土層からも出土した。21は中国景德鎮窯系の青花小杯、22は鋌状の青銅製品、23は中国景德鎮窯系の青花碗。24は白磁皿。25は透明ガラスの皿で、銀化して雲母のようにきらきら光る。透明だが乳白色を呈する。口径6.3cmに復元したが、小破片であり不確実である。第41次調査区に隣接する大友第43次調査区に1小片、熊本県浜の館に3点本品の類例があるのを参考にするると浜の館ではほぼ口径8.2cmにまとまっており、本品ももう少し大きいのかも知れない。26～29は銭貨。26は景德元宝（北宋1009年初鑄）、27・28は元豊通宝（北宋1078年初鑄）、29は無紋銭であり国産である。



第142図 SD113出土遺物実測図



第143図 SD113出土銭貨拓影

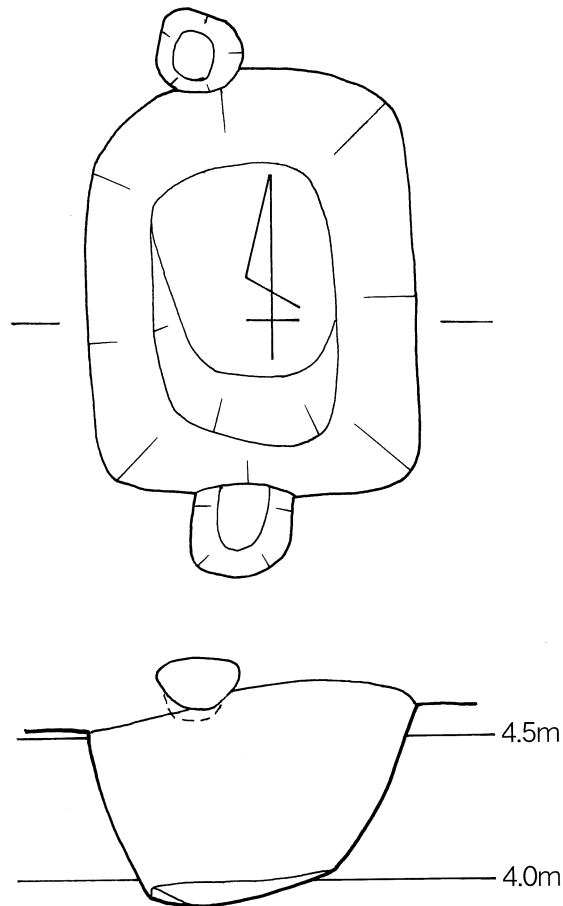
SD103、SD113・SK105・123（第117図） SD84との共存遺構とみられるのでここで記す。SD84の外側に廻る溝状遺構である。初めV63区で遺物が集中した不整形の遺構としてSK105とSK123を調査したが、掘り下げが進むにつれ、これらが溝の上部に廃棄された物であることが分かってきた。したがってSK105とSK123とはSD103に含めるべき遺構である。SD113はU63・64区・V63・64区を南北方向に走る溝状遺構である。当初SD113としていたが、SD103と連続することが分かったので、ここで報告する。

SK105 (第135図) SD103の西部がほとんど埋没した段階で遺物を集中的に廃棄した部分である。調査当初はひとつの遺構として射たが、掘り進めるに連れ、SD103の埋没採集段階の窪地を廃棄場所として利用したものであることが分かった。しかし、SD103埋没採集段階の状況を示すものとしてSK105のまま報告する。

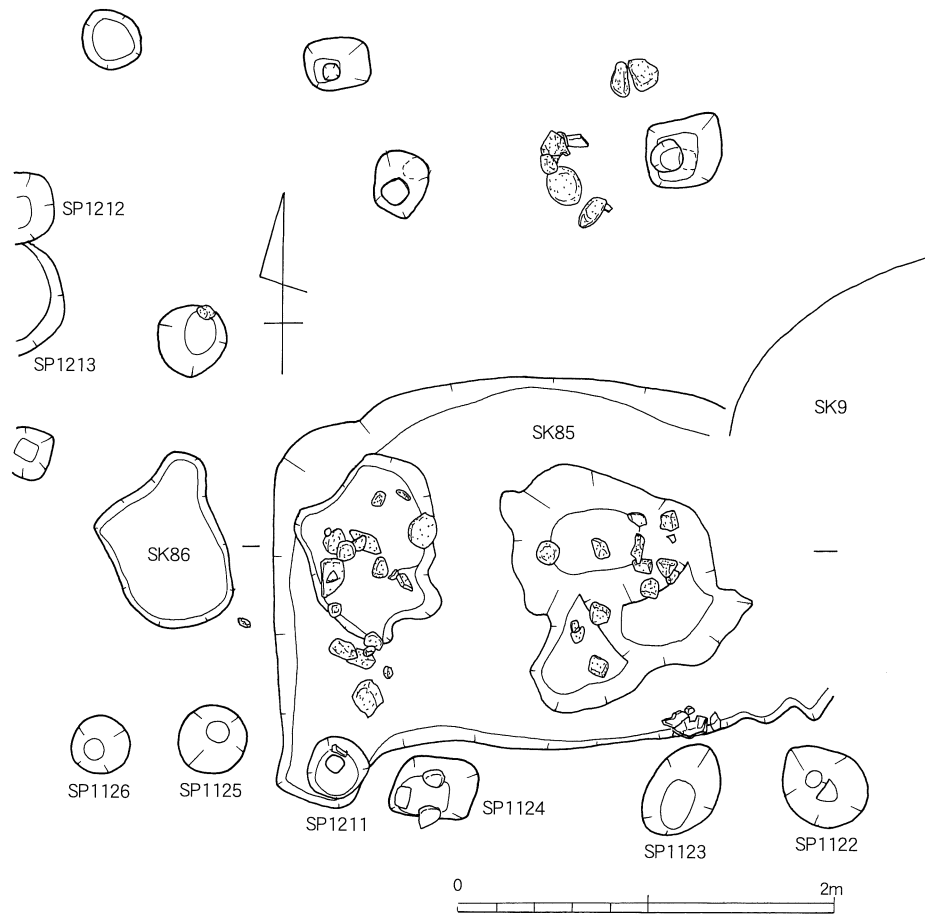
SK105出土遺物 (第136図1~4)

SK103 (第118・137図) 遺構全体の状況は第118図を参照されたい。SD84の外側を囲むように廻る溝状遺構である。西側のSD114とは平行状態である。第137図土層図①はSK103の西部が折れ曲がり、南北方向溝となった場所の東西断面である。SD103は検出面では1条の溝状遺構としていたが、20cm弱掘り下げると溝は2条に分かれた。東側の溝が深く、その東壁は垂直に近い。西側の溝は北上して西側に屈折して行くので、SD114として区別した。

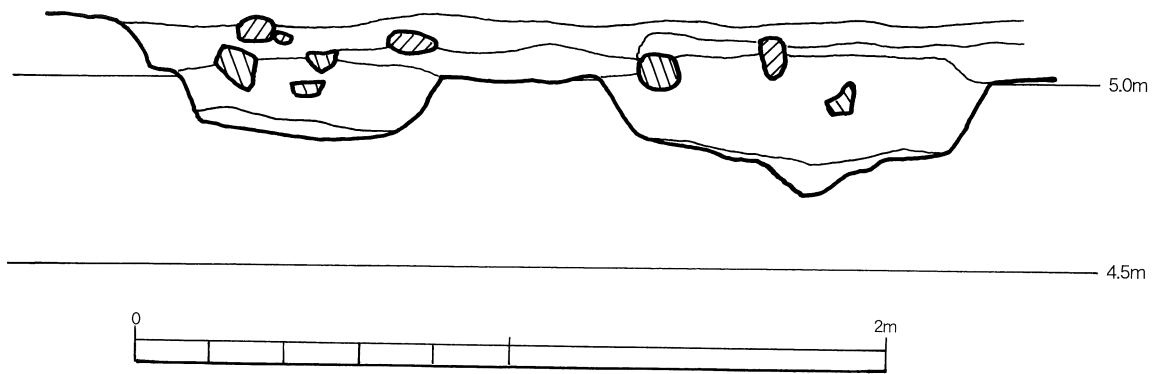
層序の説明を行う。1層は褐色の土斑を含んだ褐色土、2層は黒茶色の土斑を含んだ褐色土、3層は2層よりも黒茶色土斑が少ない。1層に似た褐色土である。5層は4層に似るが土斑が少ない。6層は黒褐色土、7層は茶褐色土。8・9・10層は地山の層序であり、8層が茶褐色土、9層が黒褐色土、10層が褐色土である。4層は二つの溝に見られるのでSD103とSD114両方が同時に機能していたことを窺わせる。



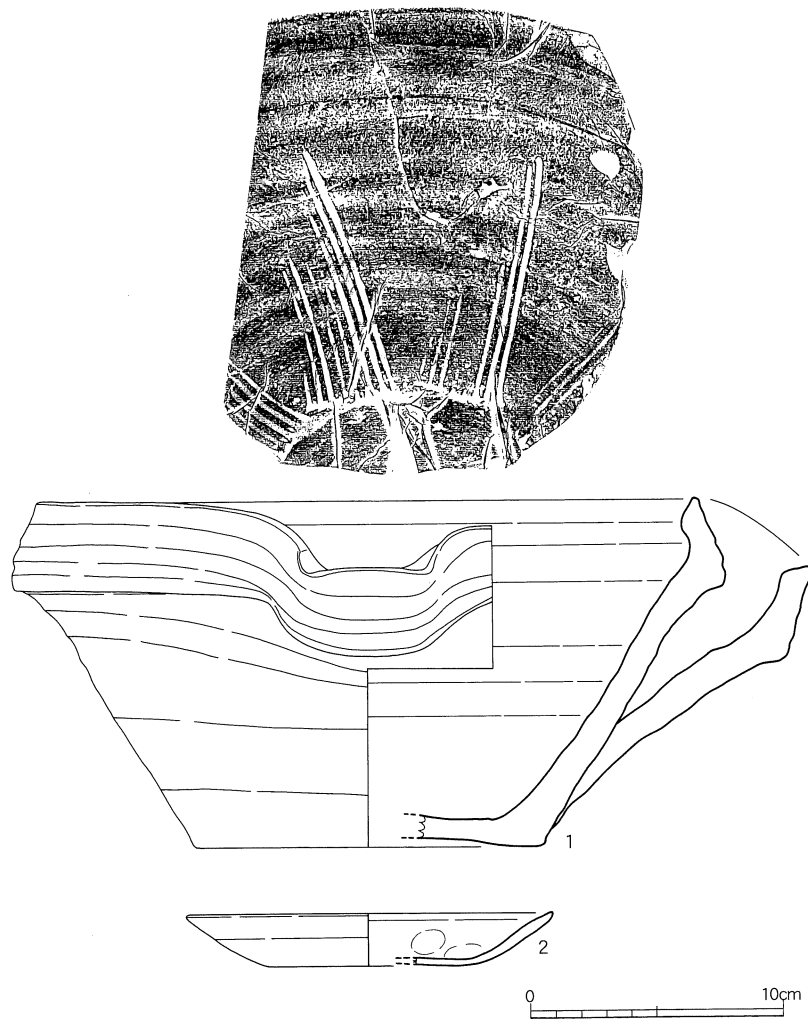
第144図 SK186実測図



第145図 SK85・86と周辺実測図



第146図 SK85断面図

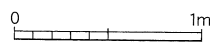
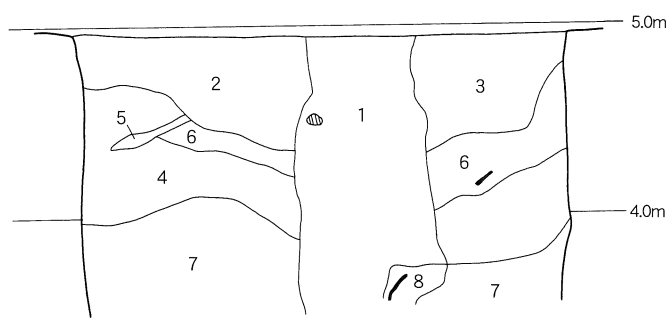
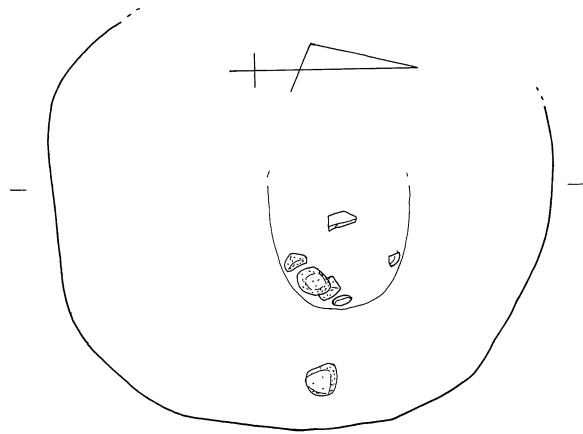


第147図 SK85出土遺物実測図

また、1～3層はある時点での溝断面であり、SD114とSD103下部が埋没した時に掘り返して再利用したようである。

SD103出土遺物（第138～141図1～56） 1～9は在地系土師器皿である。1は明確に、2・3は不明瞭だが段状のロクロ目が残る。在地系土器の中には5・9のように体部が内湾し、底面と体部の角度が緩やかであり、体部の厚みが均等という特徴を示すものがあり他の在地系土師器皿と異なる。

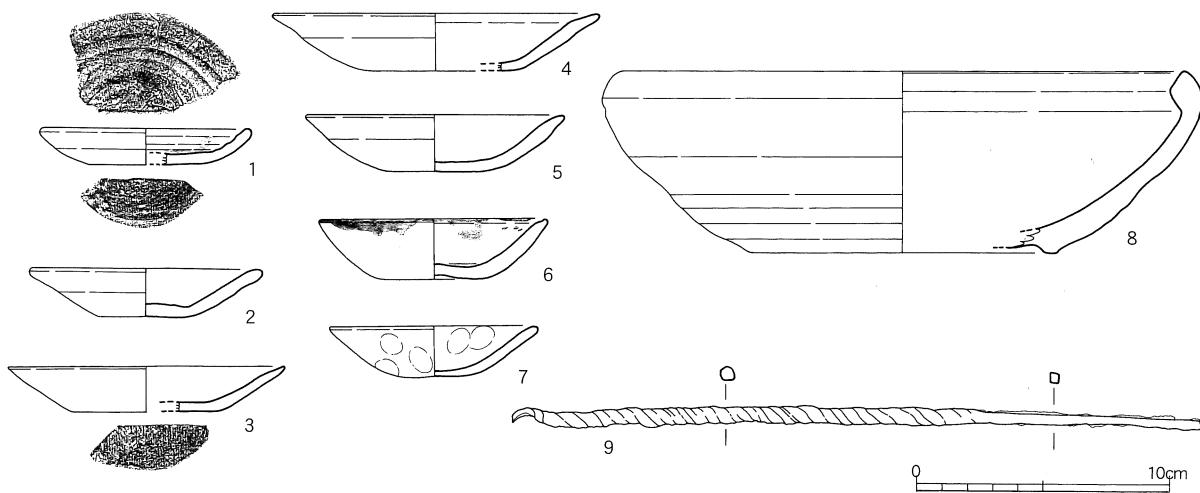
京都系土師器皿を模倣した可能性がある。10～36は京都系土師器である。16～24・26～28・35は大型皿、他は小型皿である。口縁部に煤が付着するのは大型皿では10・11・19・24の4個、小型皿では25・31の2個。37は白磁皿B群。38は白磁皿C群。39は青磁碗。40は瓦質土器破片を円形に加工した物。41は燭台。42・43は瓦質土器鉢、44は土師質土器碗。45・46は瓦器碗。47は屋根の頂上部に使う伏間瓦、48は丸瓦である。49～51は備前焼で、49は近世1期の播鉢、50は浅鉢、51は長頸壺である。52は青銅製小柄、53は中国景德鎮窯系の青花皿。54～56は銭貨で、54は太平通宝（北宋976年初鑄）、55は祥符通宝（北宋1009年初鑄）、56は元豊通宝（北宋1078年初鑄）である。



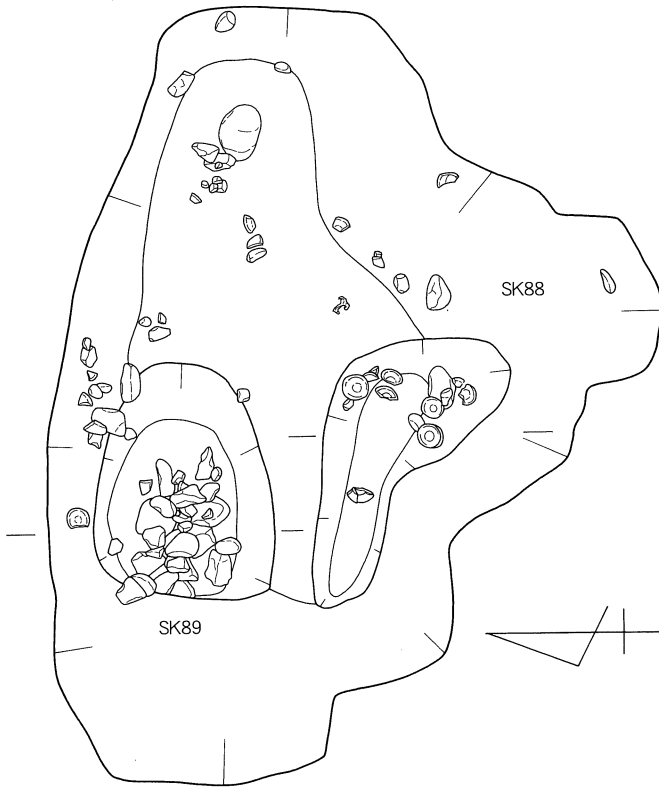
第148図 SE87実測図

SK113 (第117図) 先述のようにSD113はU63・64区・V63・64区を南北方向に走る溝状遺構である。当初SD113としていたが、SD103と連続することが分かったので、ここで報告する。この南北溝は検出時には一条であったが、掘り下げが進むと下部では二条の溝が平行に並ぶ状況となった (第137図右)。しかも、西側の溝は北部で西方に屈折し、より幅広くなることが判明したので、合わせてSD114と呼ぶことにした。

出土遺物 (第142図1~14) 1は在地系土師器坏、口縁部に煤が付着し灯明皿として使われた事が分かる。口径9.4cm、底径5.4cm、器高2.4cmで色調は淡橙色を呈する。2~4は3期の京都系土師器で、4は口縁部に煤が付着する。口径・器高・色調は次のとおりである。2 (10.4cm・2.7cm・淡黄色)、3 (11.2cm・2.3cm・黒褐色)、4 (8.4cm・2.0cm・にぶい黄橙色)。5は瀬戸美濃製の天目碗で全体的に二次被熱。口径11.8cm、底径4.5cm、器高6.1cmである。6は青磁碗、高台は削り出している。底径5.6cm。7は備



第149図 SE87出土遺物実測図



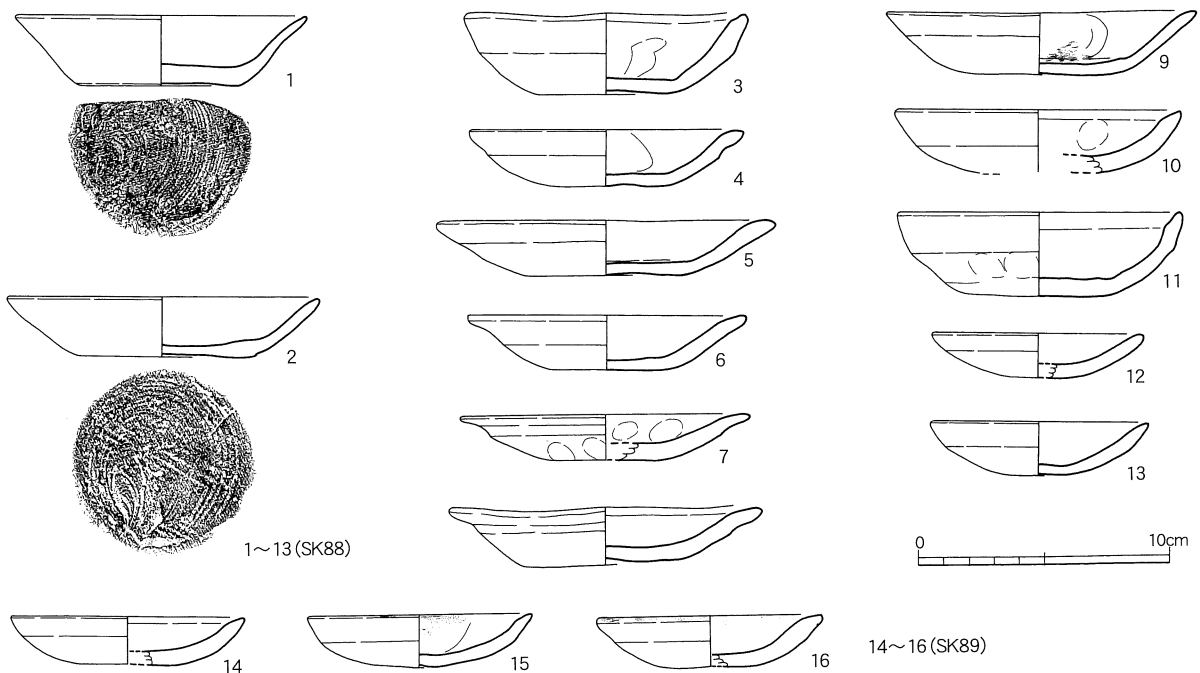
第150図 SK88・89実測図

前焼鉢で、口径19.8cm、器高4.7cmである。8は瓦質土器の鍋。口径15.9cmで、灰褐色を呈する。9は瓦質土器の坩堝、10は軒丸瓦で珠紋・巴紋がある。11は瓦質土器の風炉脚部。12は石製品の剥片あるいは火打ち石。13は結晶片岩製の砥石。14は中国製の玉縁口縁白磁で、口径17.6cmである。第143図15は元豊通宝（北宋1078年初鑄）。

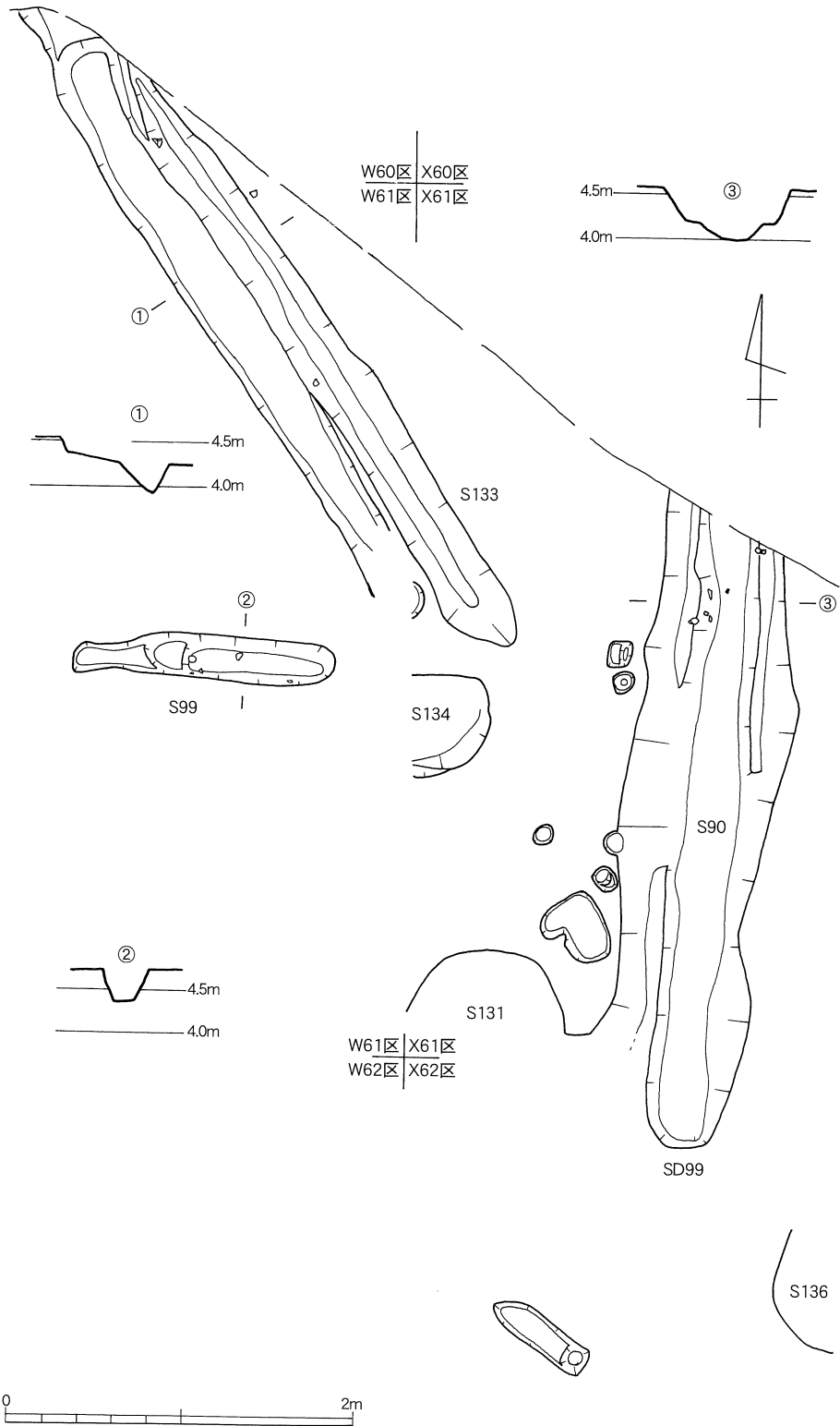
SK85（第145図） C63区中央東部に分布した土坑で埋土に砂利層が入っていた。

出土遺物（第147図1） 1は中世6a期（1500～1530年頃）の備前焼播鉢、で8条単位のの播り目を観察できる。口径26.5cm、底径14.0cm、器高13.6cmである。2は1期の京都系土師器坏である。器壁が薄く、全体に扁平である。口径6cm、器高2.1cm、色調は淡黄色を呈する。

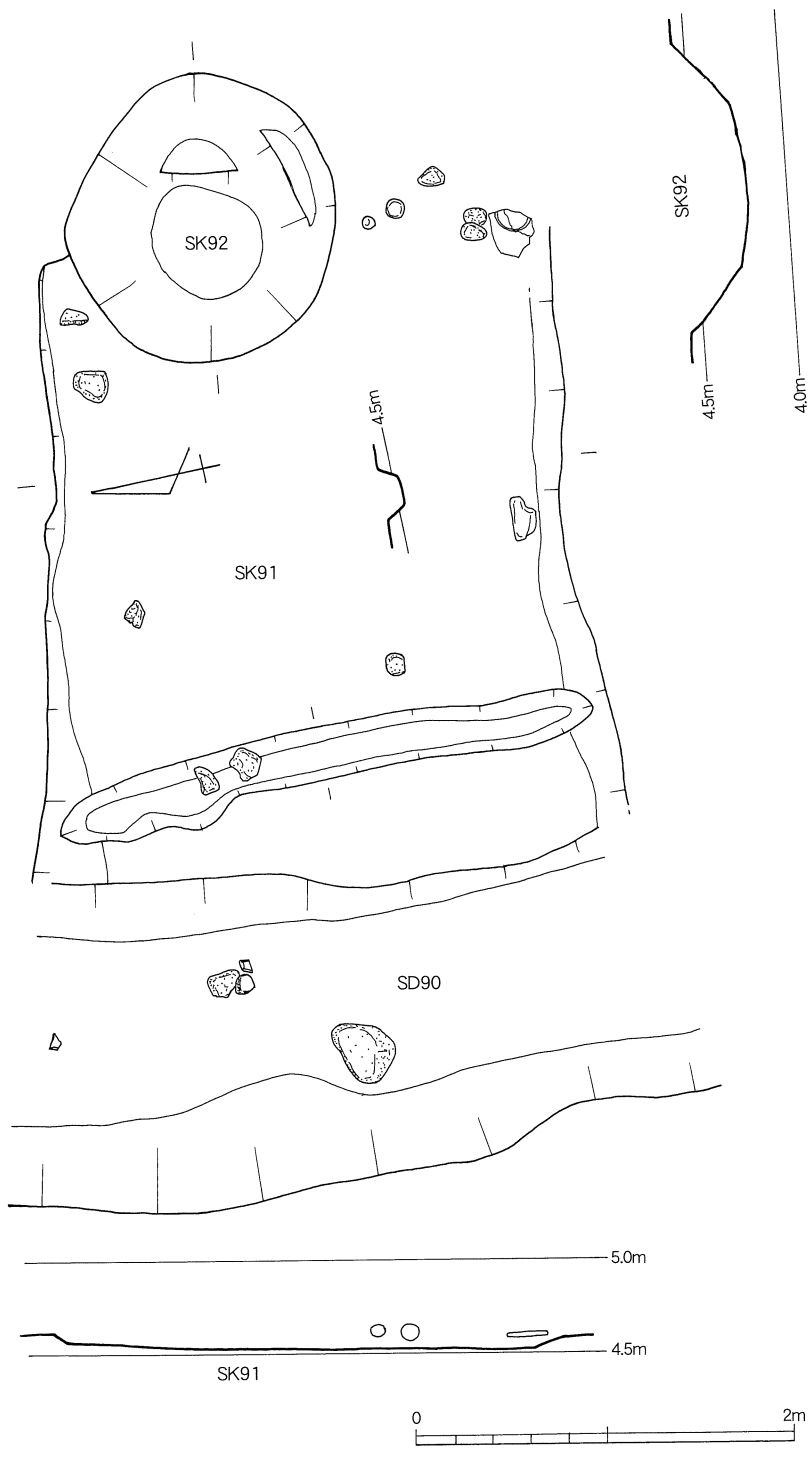
SK86（第145図） C63区にありSK85の西側に位置する円形の土坑である。図化した出土遺物なし。



第151図 SK88・89出土遺物実測図



第152図 SD90・SD99・SD133実測図



第153図 SK90~92実測図

SD90 (第152図)

X61区の調査区北側から南に延び出た溝状遺構で、内部に段差があることから掘り直して利用したとみられる。検出標高は4.55m前後である。

出土遺物 (第155図1~7)

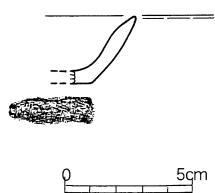
1・2は内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。1は口径9.6cm、底径6.8cm、器高1.8cm、色調淡黄橙色である。2は影12.2cm、底径6.0cm、器高2.4cmである。明橙褐色を呈する。3は備前焼甕、4は瓦質土器の壺、5は瓦質土器の鉢、6は中世5期、15世紀の備前焼播鉢。7は丸瓦の破片である。

SK91 (第153図)

X61区南部にあり、SD90とSD90の東側に平行して位置する細い溝状遺構が重複した長方形土坑である。残存状態は良くなく、南北方向に長い形で東部では床面が消滅している。図化した遺物はない。SK91の性格については、規模、位置等から粘土採掘坑の可能性を考える。

SK92 (第152図)

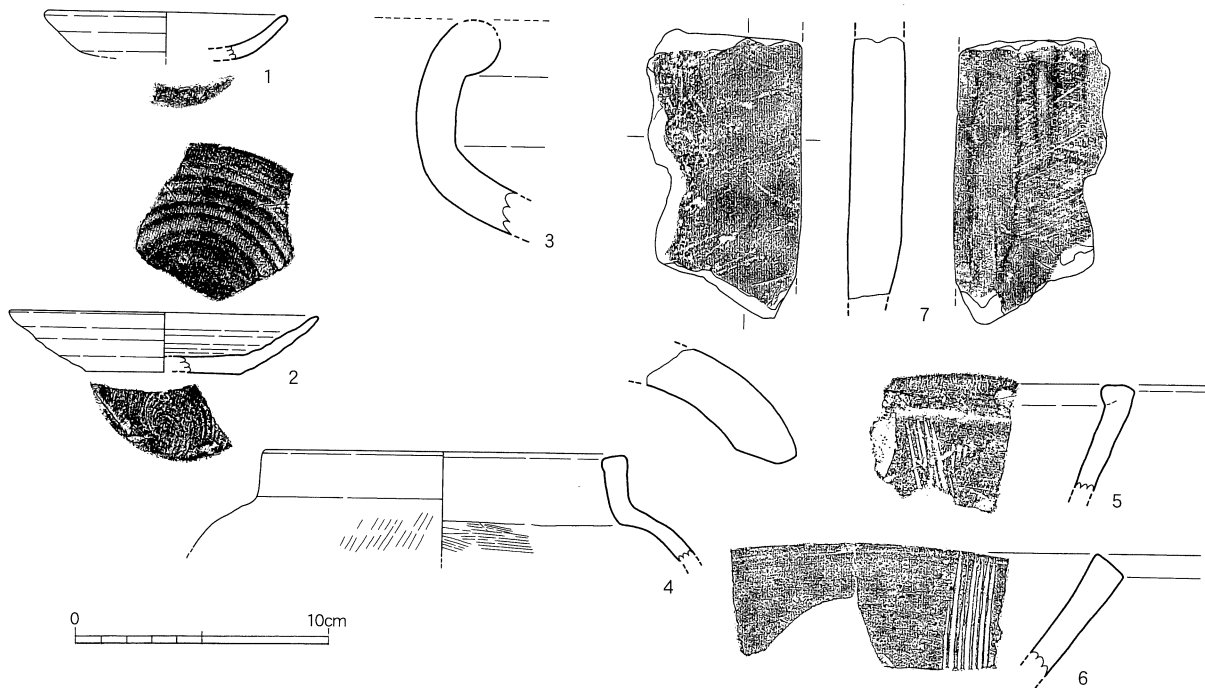
X61区南東部にある平面円形の土坑で、SK91を切る。東部では検出面が標高5.1 mである。



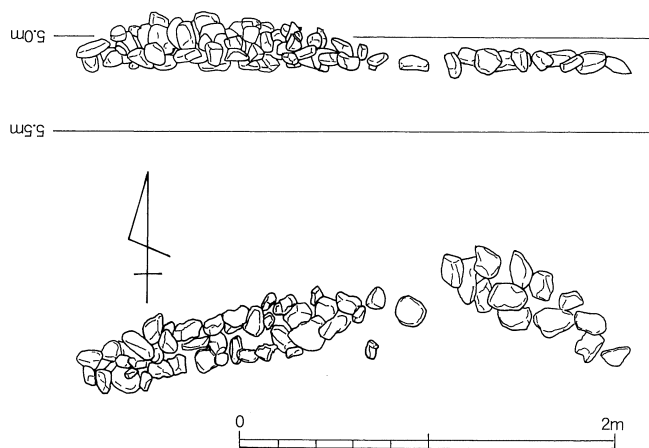
第154図 SX93出土遺物実測図

SE87 (第148図)

D63区南西部にあり、SK241の北側に位置する井戸跡である。検出面から1.5M程度しか調査しなかった。検出段階で井側の痕跡が円形に分かったが、井側の材料は残っていなかった。本来は板材を組み合わせた桶を重ねた井戸であったと考えられる。



第155図 SK90出土遺物実測図

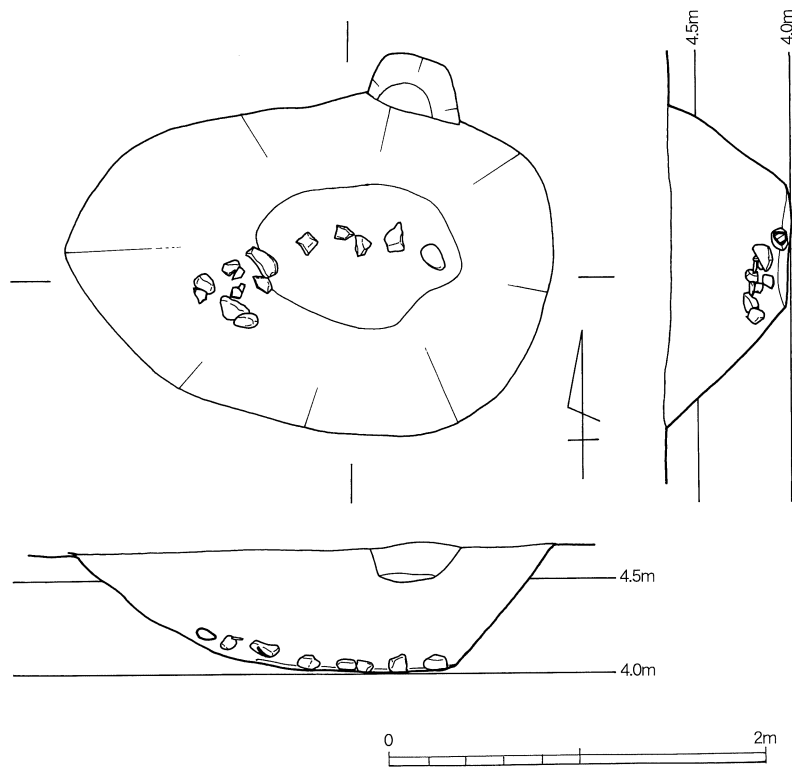


第156図 SX93実測図

出土遺物（第149図1～9） 1～3は在
地系土師器皿である。1は内面にロク
ロ目を残し、底部は糸切り離しであるが、
体部は内湾気味で、底部との繋がりは滑
らかである。京都系土師器の模倣土器で
ある。口径8.4cm、底径4.4cm、器高1.5
cmである。内面に煤が付着しており、灯
明皿として使われている。色調は淡黄橙
色を呈する。2は2期の京都系土師器皿
である。2は体部が直線的に外反し、口
縁部外面にも横なでしている。口径9.2
cm、器高2.0cmである。色調は灰橙色を
呈する。3は体部が補染まりながら開き、
底部は糸切り離しである。内面にロクロ

目を残す段階の土器とみられるがロクロ目は認められない。色調は淡橙色を呈する。4・5は薄手の京都系土師器皿である。2期であろう。4は口径12.9cm、器高2.3cmで色調は淡黄色を呈する。5は径10.2cm、器高2.3cmで、色調は灰黄橙色を呈する。6・7は京都系土師器の小皿である。6は口縁部に煤が付着する。口縁部は内側が窪む。口径9.0cm、器高2.4cmである。7は薄手の製品である。器面には両面とも指押さえの跡が残っている。口径3cm、器高2.0cmで色調は淡黄色を呈する。8は備前焼の鉢で、口径22.4cm、底径12.2cm、器高7.3cmである。

9は鉄製の棒状製品で、図の左端は鎌状に尖り、その右側はネジ巻いており、右端三分の一ほどは断面四角の棒のままである。全長27.4cm。



第157図 SK94実測図

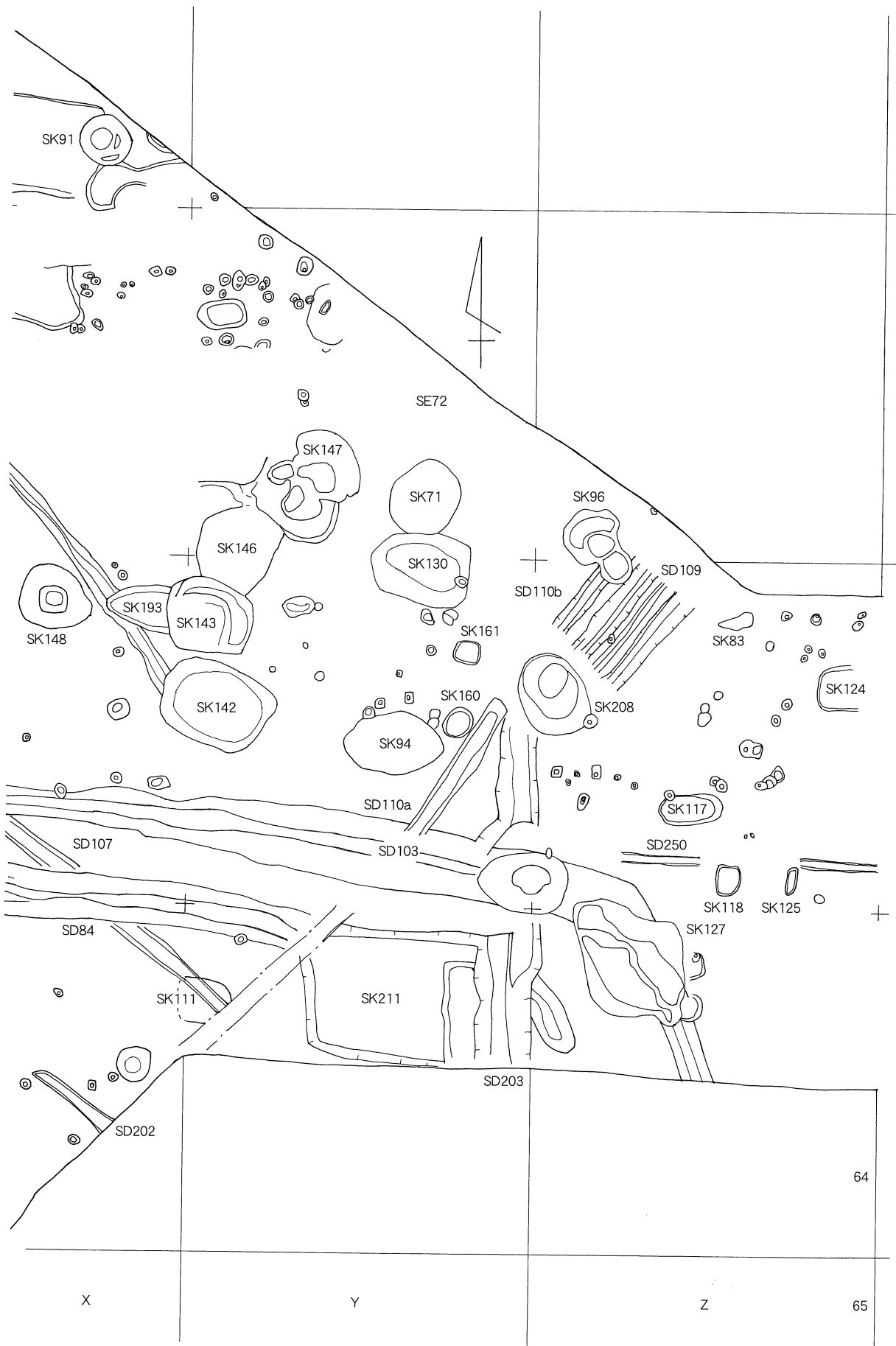
SK88 (第150図) D63区北西部にあり、SK4の下位で検出した。内部から多量の礫、若干の遺物が出土した。床面で南北に並んだ小型土坑二基を検出したので、北側の土坑をSK89とした。

出土遺物 (第151図1~13)

1は在地系土師器坏である。口径11.6cm、底径3.6cm、器高2.8cmで、色調は灰黄色を呈する。2も在地系土師器のように糸切り底だが、体部は内向きに屈曲し、京都系土師器を模倣したと思われる。口径12.3cm、底径6.9cm、器高2.4cm、淡橙褐色を呈する。3~13は京都系土師器で、3~11は大型皿、12・13は小型皿である。7は外面に煤が付着している。これらの口径・器高・色調は次のとおりである。3 (11.2cm・3.2cm・にぶい黄橙色)、4 (10.9cm・2.3cm・灰褐色)、5 (11.0cm・2.2cm・灰黄橙色)、6 (13.4cmい・2.2cm・淡灰色)、7 (11.4cm・1.8cm・うい黄橙色)、8 (12.4cm・2.2cm・にぶい黄橙色)、9 (12.2cm・2.8cm・灰褐色)、10 (11.4cmい・2.5cm・にぶい橙色)、11 (11.3cm・3.4cm・暗灰橙色)、12 (8.4cm・1.8cm・灰黄色)、13 (8.6cm・2.1cm・淡 橙色)。SK88出土の京都系土師器は2期に属すと考えられる。

SK89 (第150図) SK88の床面で検出した土坑である。

出土遺物 (第151図14~16) 14~16は2期あるいは3期の京都系土師器小皿である。15・16は口縁部に煤が付着している。これらの口径・器高・色調は次のとおりである。14 (9.2cm・1.9cm・灰褐色)、15 (8.8cm・2.1cm・暗褐色)、16 (8.9戦地医・2.0cm・灰黄橙色)。



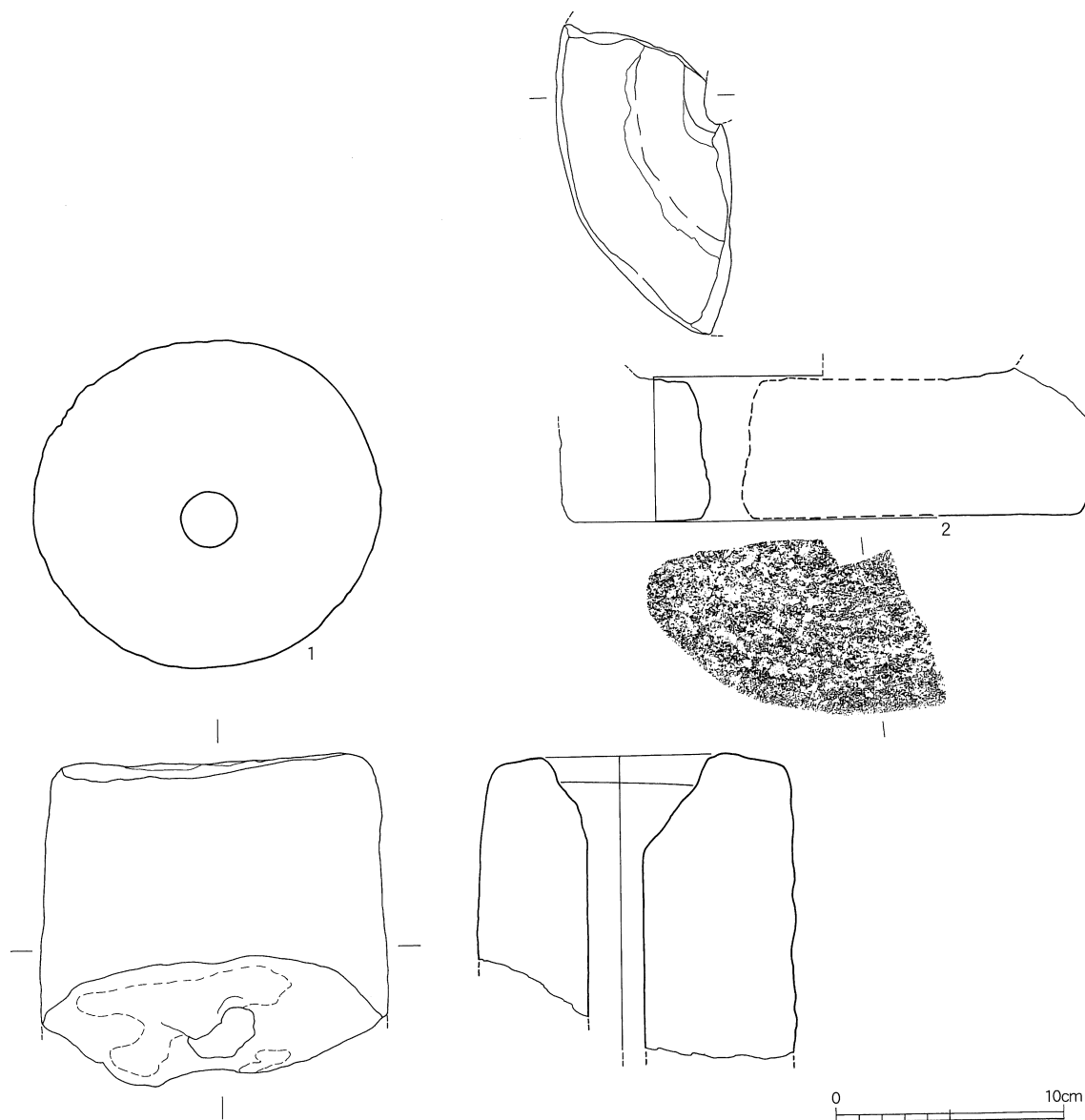
第158図 X~Z区遺構配置図

SD93 (第156図) D63区とD64区の境界線上に東西に長く分布した礫群である。長さ3m、幅70cmの範囲に幅30cmほどの帯状に曲線的な分布を示し、上面は水平である。

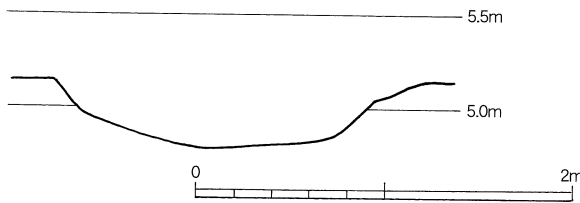
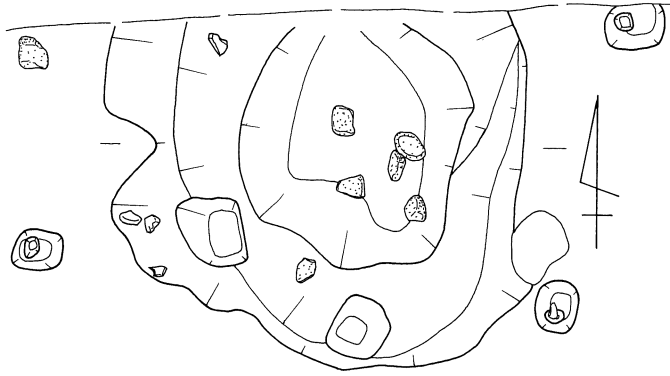
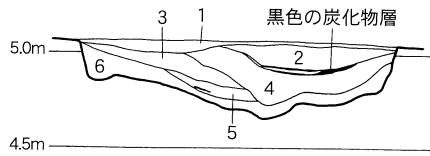
出土遺物 (第154図1) 1は在地系土師器皿である。口縁部は先端に向かって細くなり、中位が厚くなっている特徴から14世紀中葉～後葉の遺物とみられる。

SK94 (第157図) Y63区にあり、SD103を切る平面楕円形の土坑である。規模は平面が2.6m×1.8m、深さは0.65mである。

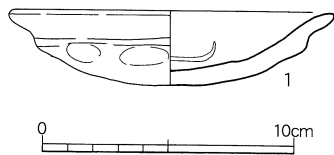
出土遺物 (第159図1・2) 1は凝灰岩製の轆 (フイゴ) の羽口である。中心部に直径2.5cmの穴が貫通している。中央部で折れているがその折れ口は二次的に熱を受け黒変している。直径は15.3cm、全長14.5cmである。2は安山岩製の臼である。本来の1/4程度の破片である。注ぎ口の一部が残る。使用面は摩滅が激しく溝の痕跡が認められないほどである。直径は30.9cm、高さは8.7cmである。



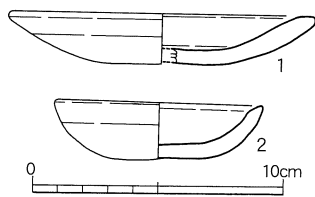
第159図 SK94出土遺物実測図



第160図 SK95実測図



第161図 SK95出土遺物実測図

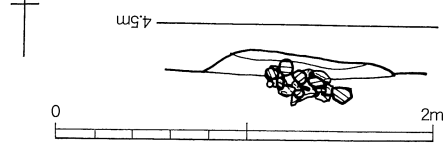
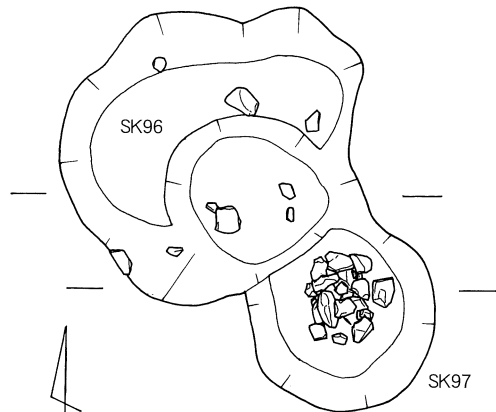
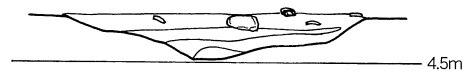


第163図 SK99出土遺物実測図

SK95 (第160図) C63区にあり、遺構は調査区外に延びる。平面形は不整な円形で標高5.2mで検出した。東西方向の土層断面図を作成したところ、東部には焼土や炭化物を含む土坑が重複していることが分かった。

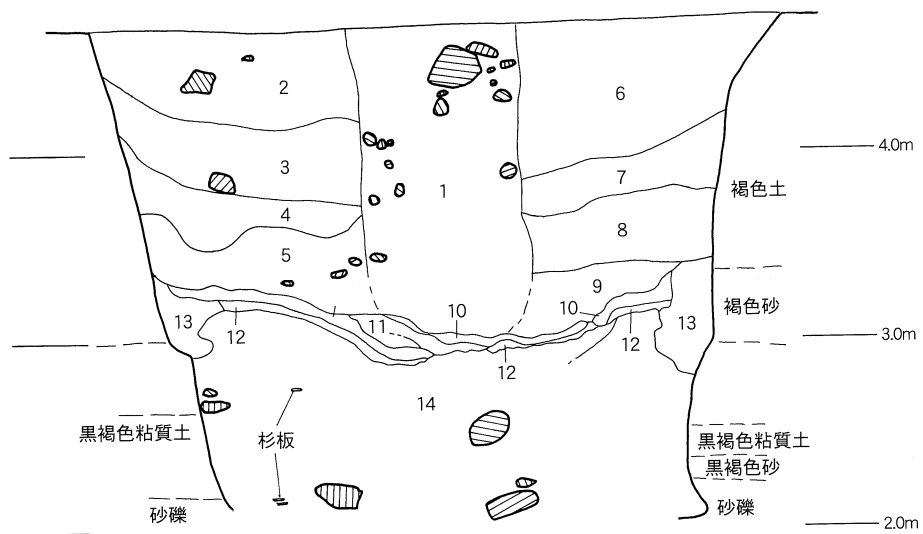
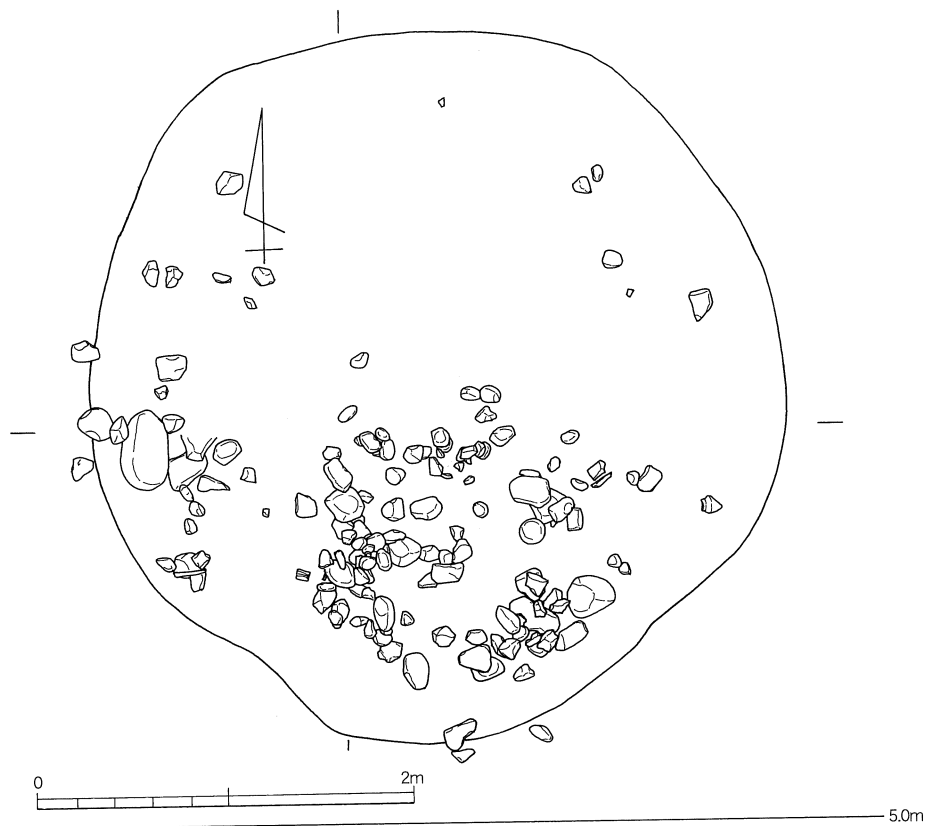
出土遺物 (第161図1) 1は3期の京都系土師器杯である。口縁部外面は板状工具による横方向のなで調整が行われ、明瞭な段差が生じている。口径12.8cm、器高3.0cm、色調は灰橙色を呈する。

SK96 (第162図) Z62区にあり、SK150の南東側にある不整形坑である。SK97と重複するが先後関係は分からない。標高4.8mで検出した。



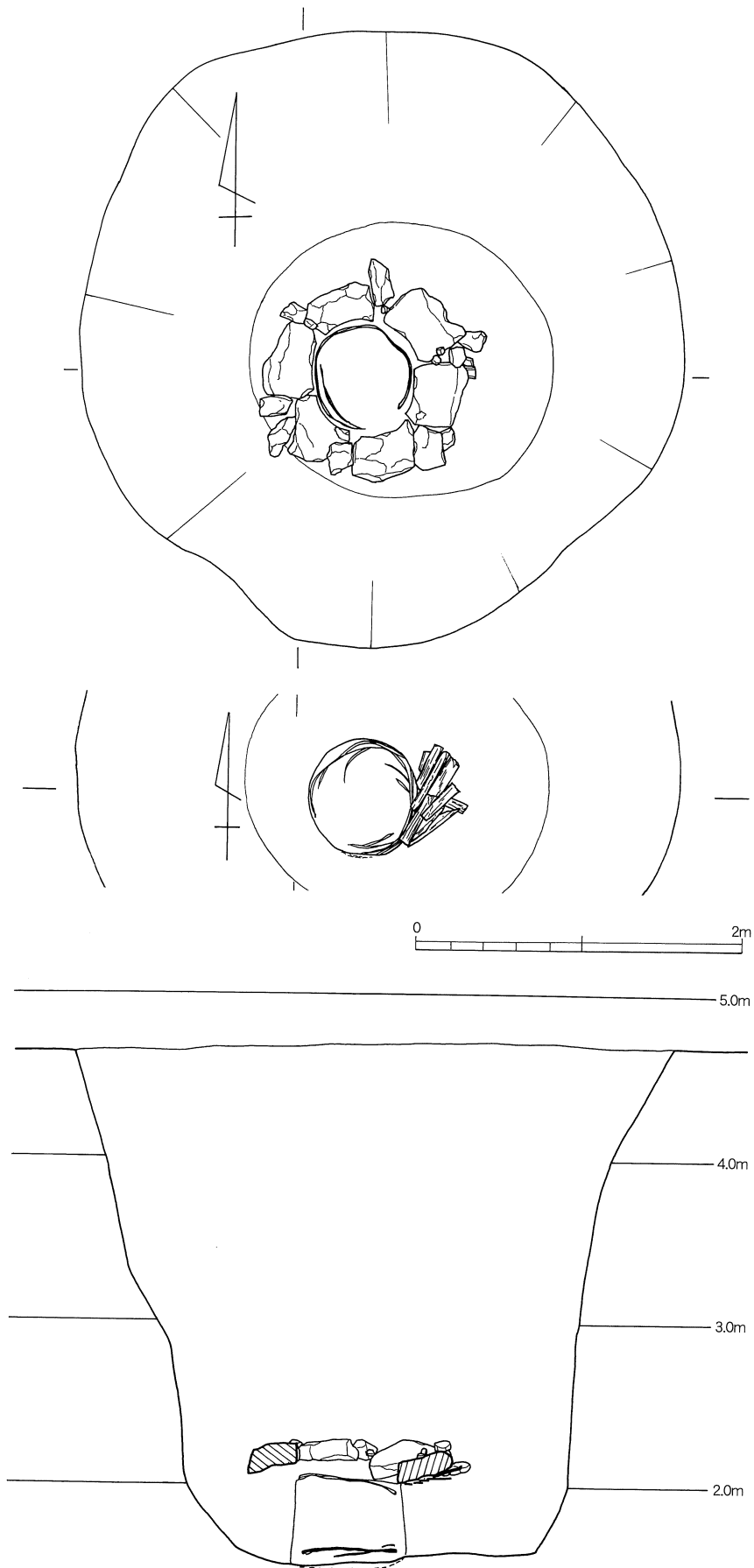
第162図 SK96・97実測図

SK97 (第162図) Z62区にあり、SK96と重複する平面円形の土坑である。床面からやや上の中心部に礫がまとまって出土した。直径1.1m×1.0m、深さは0.2mであるが礫群が検出面よりも高い位置にまで続くので、もっと高い位置から掘り込まれたらしい。出土した遺物は礫ばかりで、年代の分かる遺物は出土しなかった。

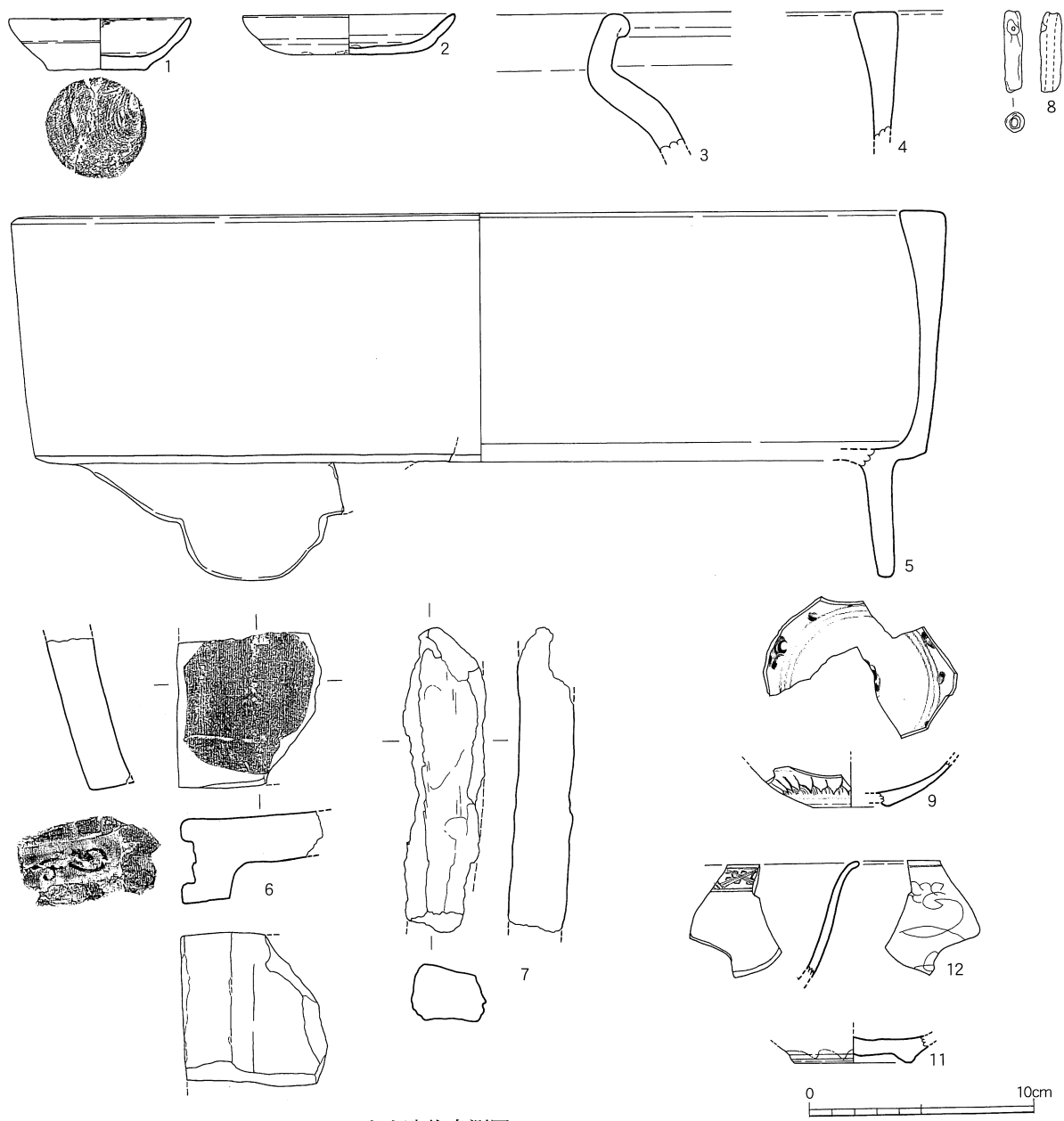


- | | |
|-------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 1: 黒褐色土層
(井筒部) | 粘性なし。締まりやや悪い。白色粒子少量含む。炭化物を少量含む。Φ3~25mmの礫が混じる。 |
| 2: 褐灰色土層 | 粘性なし。締まりやや良い。白色粒子少量含む。炭水化物を微量に含む。酸化鉄を多量に含む。 |
| 3: 褐灰色土層 | 粘性なし。締まりやや良い。白色粒子少量含む。酸化鉄やや多量。3層と4層の層境に酸化鉄沈殿。 |
| 4: 黒褐色土層 | 粘性ややある。締まりやや良い。白色粒子少量。酸化鉄やや多量。4層と5層の層境に酸化鉄沈殿。
黒色の(10YR1.7/1)粘性の強いブロックがやや多量混じる。 |
| 5: 黒褐色土層 | 粘性なし。締まりやや悪い。白色粒子微量。酸化鉄やや多量。 |
| 6: 灰黄褐色土層 | 粘性なし。締まり良い。白色粒子少量。酸化鉄少量。 |
| 7: 暗褐色土層 | 粘性なし。締まり良い。白色粒子少量。炭化物微量。酸化鉄微量。 |
| 8: 黒褐色土層 | 粘性なし。締まり良い。白色粒子微量。酸化鉄微量。 |
| 9: 黒褐色土層 | 粘性ややある。締まり良い。酸化鉄を少量含む。 |
| 10: 酸化茶褐色土層 | |
| 11: 灰色砂層 | |
| 12: 褐色土質砂層 | |
| 13: 褐色まだら土 | |
| 14: 黒褐色土 | |

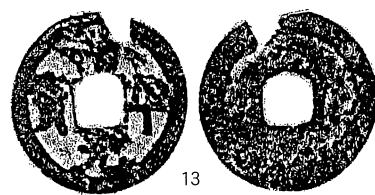
第164図 SE100実測図①



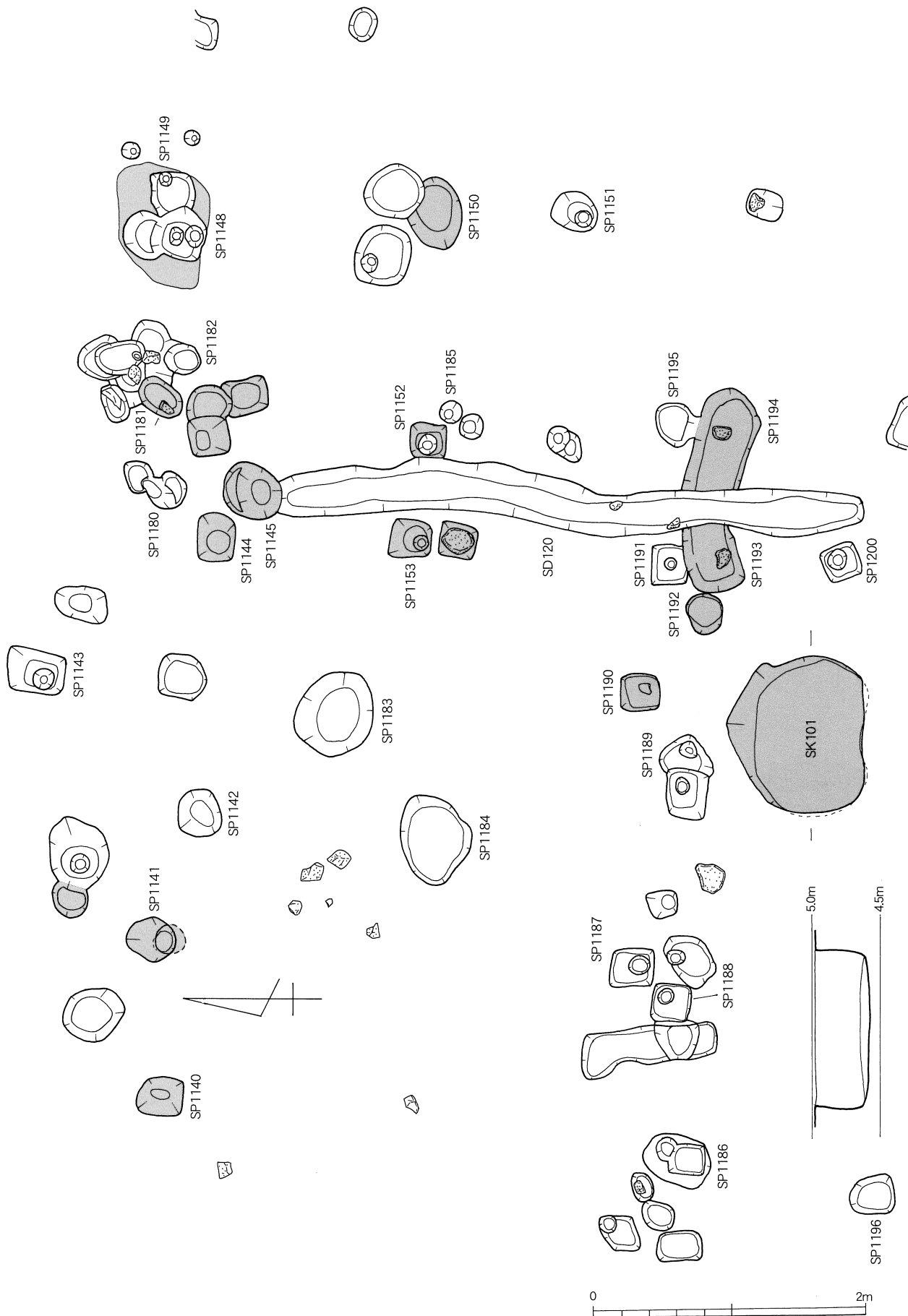
第165図 SE100実測図②



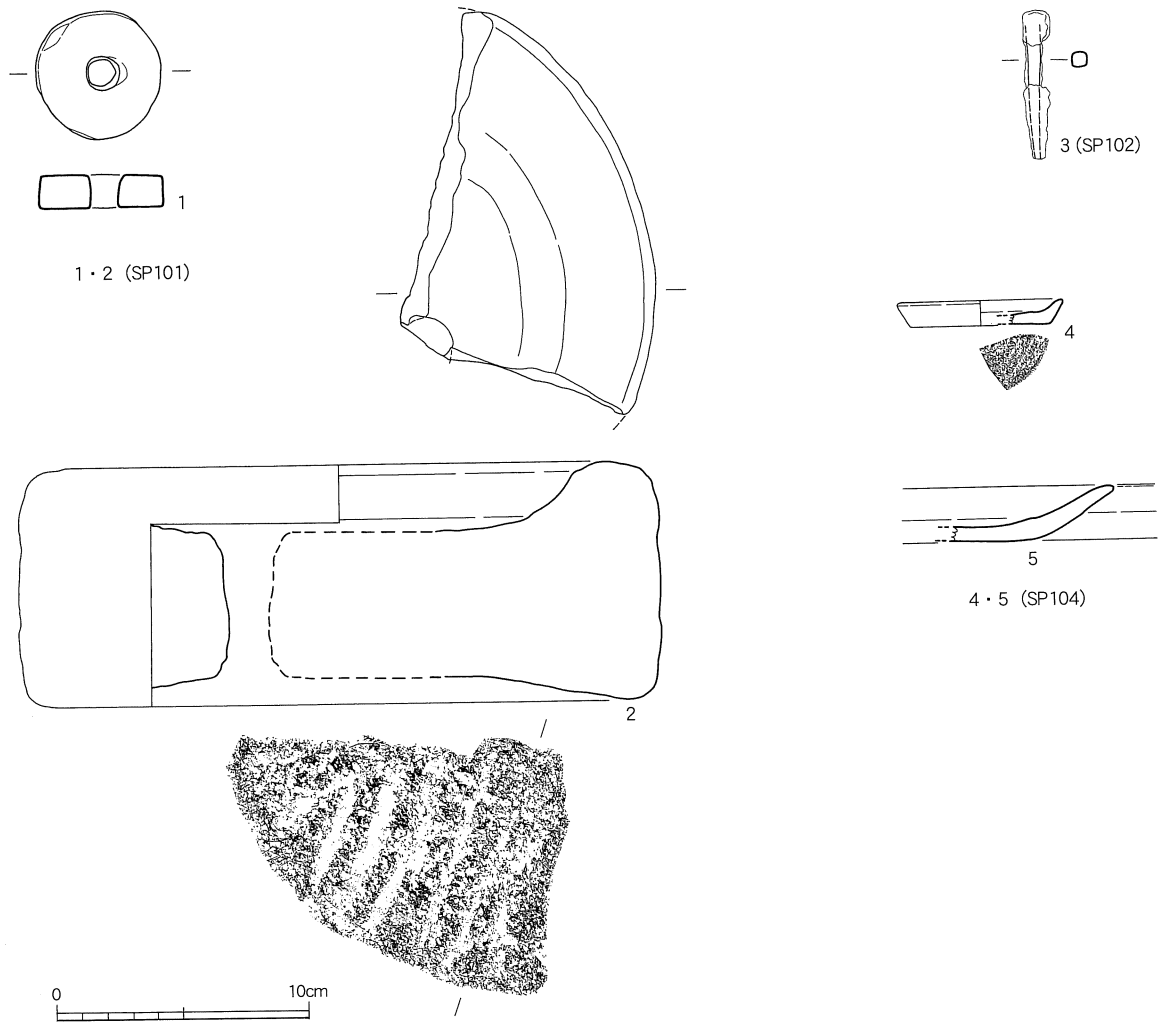
第166図 SD100出土遺物実測図



第167図 SE100出土銭貨実測図



第168図 A63区 標高5m前後の遺構分布図



第169図 SP101～104出土遺物実測図

SK98 B63区にある小穴である。中世の斜行道路の西脇に位置する。年代の分かる出土遺物はない。

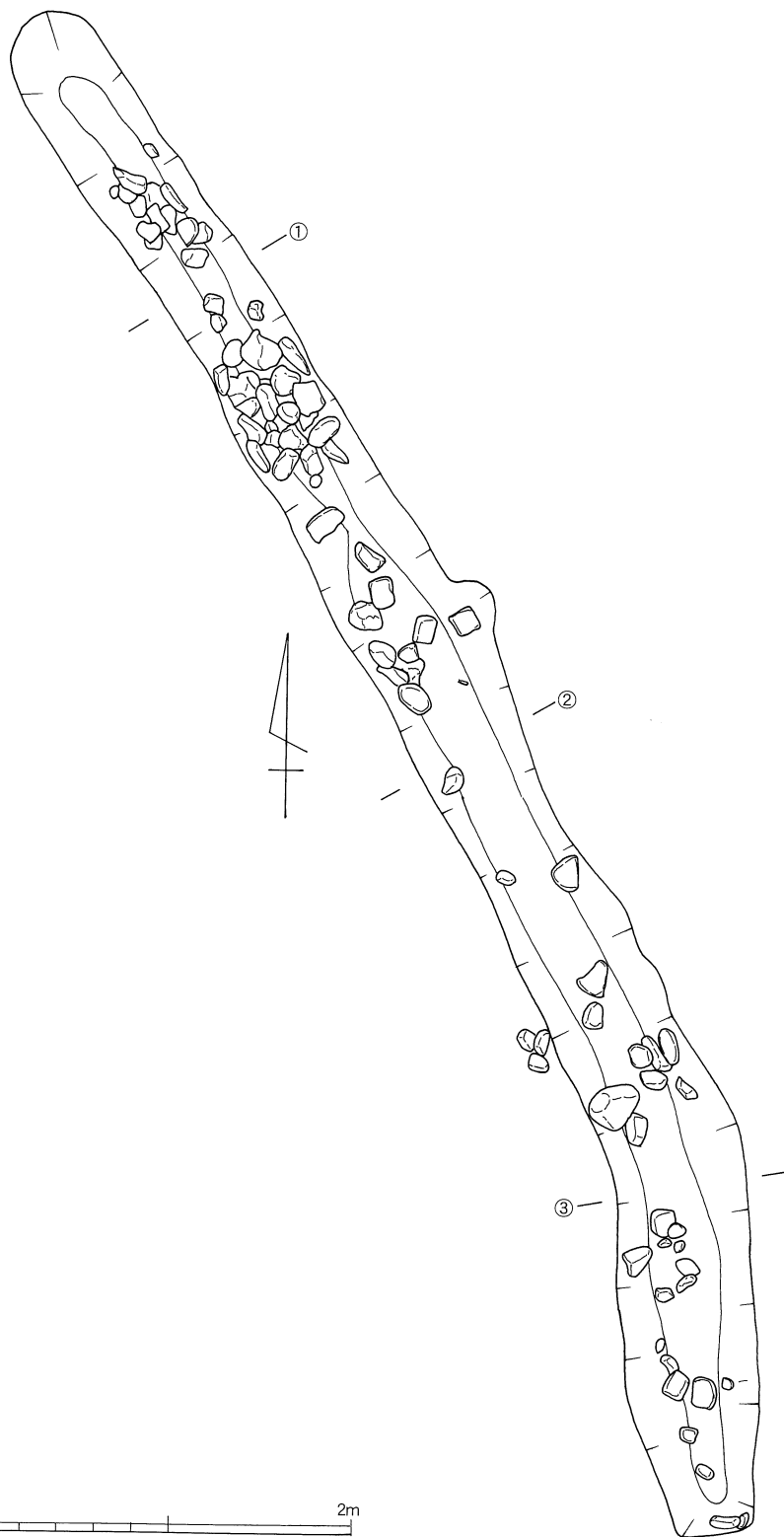
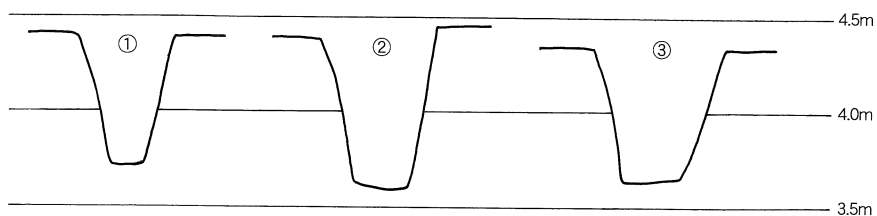
SD99 (第152図) W61区の東部にあり東西方向に走る溝状遺構である。

出土遺物 (第163図1・2)

1・2は京都系土師器である。1は坏で、口径12.2cm、器高2.0cm、色調は淡黄色である。2は小皿であり口縁部に煤が付着する。口径8.2cm、器高2.2cm、色調は浅黄橙色である。京都系土師器の磁器は3期である。

第158図は第41次調査区の中央部の遺構を示している。

SE100 (第164・165図) W61区の中央部に位置する井戸である。検出標高は4.72mである。上面の規模は3.7m×3.77m、最下面は標高1.5mである。



第170図 SD104実測図

下底面のやや端寄りに検出した井筒は杉板を円形に組み合わせた桶だったらしい。竹を割った籬（タガ）が上下二段残っていた。井筒の上位周辺基部に凝灰岩板石を6枚配置し、石の隙間に凝灰岩破片を詰めていた。基部石の下位に杉板6、7枚が横倒し状態で出土した。基部石の基礎としたらしい。調査では基部石まで半割して層序断面図を作成した。

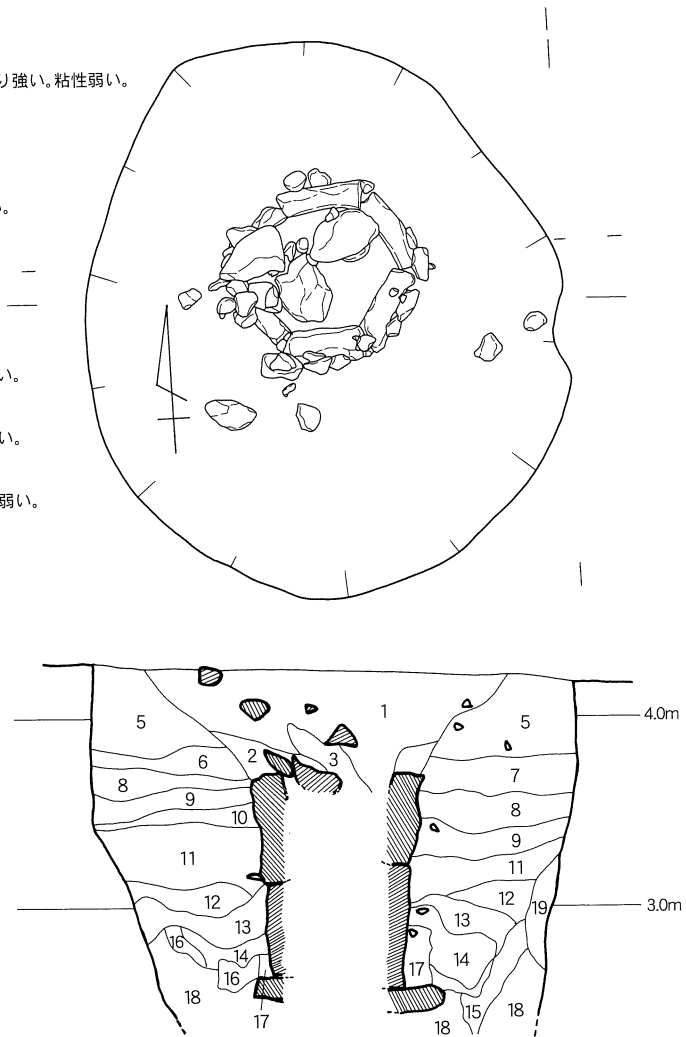
層序を観察すると標高3m付近から上にはおそらく桶であろう井側の痕跡とみられる縦方向の落ち込みがあり、標高3m以下は細分できない状態だった。最下部に井筒がありその上に花卉状に6枚の凝灰岩製板石が配されていることからして当初は石組六角形井戸であったものを、数段積まれた井側の板石を取り除き、その後穴の上半部だけを対象に桶積みみの井戸として再生利用したのであろう。

出土遺物（第166図1～13）

1は在在系土師器杯で口径8.0cm、底径4.4cm、器高2.3cmである。色調は灰黄色を呈する。2は3期の京都系土師器皿で、口径9.3cm、器高1.8cm、色調は淡黄橙色である。

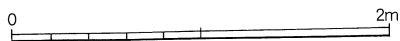
3は備前焼壺、4・5は瓦質土器火鉢である。2は口径41.0cm、底径39.6cm、器高16.3戦地である。同一個体の破片がSD112からも出土している（SD112-No.80）。6は軒先瓦で瓦頭面に唐草紋が入る。7は結晶片岩製の砥石の残欠で、使用面は一面

- 1: 灰黄褐色土層
赤色・白色粒子を微量含む。Φ0.1cm~20.0cmの礫を含む。締まり強い。粘性弱い。
- 2: 褐灰色土層
赤色粒子を微量含む。締まりやや弱い。粘性やや強い。
- 3: 褐灰色土層
2よりやや土色が明るい。締まりやや弱い。粘性やや強い。
- 4: 灰黄褐色土層
1に近い土質であるが粒子類を含まない。締まり強い。粘性弱い。
- 5: 灰褐色土層
赤色・白色粒子、炭化物を微量含む。
Φ0.5cm程度の礫を含む。締まり強い。粘性弱い。
- 6: 灰褐色土層
5とほぼ同質。土色は5と比べてやや暗い。
- 7: 暗褐色土層
赤色・白色粒子を微量含む。
鉄分のブロックが部分的に集中する。締まり強い。粘性やや弱い。
- 8: 褐灰色土層
白色粒子を少量、赤色粒子を微量含む。
鉄分のブロックを部分的に含む。締まりやや強い。粘性やや弱い。
- 9: 黒褐色土層
炭化物を微量に含む。遺物を含む。
鉄分のブロックがまだら状に含む。締まりやや強い。粘性やや弱い。
- 10: 黒褐色土層
9とほぼ同質。9と比べて土色がやや暗い。
- 11: にぶい黄褐色土層
赤色・白色粒子を微量に含む。
鉄分が部分的に集中する。締まりやや強い。粘性やや弱い。
- 12: 黒褐色土層
炭化物を微量含む。締まりやや弱い。粘性やや強い。
- 13: にぶい黄褐色土層
11とほぼ同質。11に比べて鉄分の量がやや少ない。
- 14: 黒褐色土層
鉄分を微量含む。
全体的にボソボソとした土質。締まり弱い。粘性やや弱い。
- 15: 黒褐色土層
12とほぼ同質。12と比べてやや暗い。
- 16: 黒褐色土層
粘性あり。締まり強い。酸化鉄を少量含む。
- 17: 黒褐色土層
粘性強い。締まりやや強い。炭化物の微量、酸化鉄を少量含む。
- 18: 黒色土層
粘性やや強い。締まりやや強い。
灰褐色土(10YR4/1)のブロックが部分的に混じる。
- 19: 灰黄褐色土層
粘性やや弱い。締まり強い。酸化鉄を微量含む。

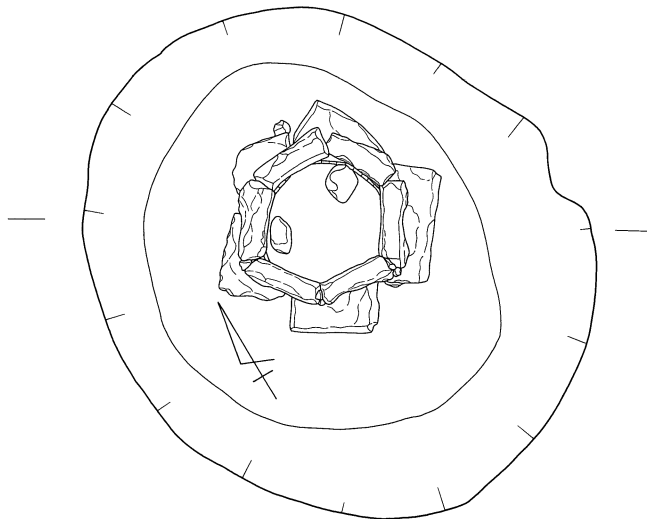


SE108

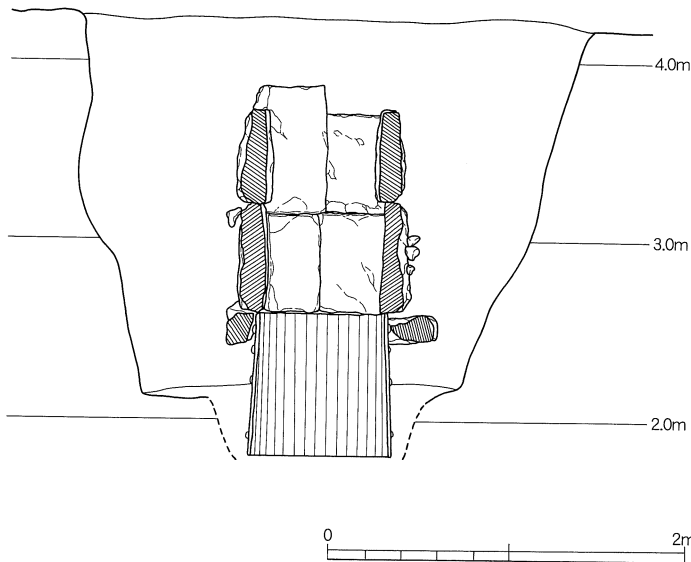
X62区
X63区



第171図 SE108実測図①



SE108



第172図 SE108実測図②

である。8は土師質の土錘、9・10は中国景德鎮窯系の青花磁器。9は基筒底の青花皿C群で、底径3.4cmである。10・12は同一個体で青花碗B群。口径14.8cm、底径6.1cm、器高7.3cmである。なお、10と同一個体の破片がSK21・Z63区の攪乱部・SK103・SK233から出土している。11は白磁皿。13は治平元宝（北宋1064年初鑄）。

SK101（第168図） A63区にある土坑。

出土遺物（第169図1・2） 1は凝灰岩製の紡錘車。直径5.1cm、厚さ1.4cm、重さ22.0gである。2は上白の1/4位の破片である。復元直径は34.0cm、高さ12.6cmである。

SD102（第168図） A63区にある溝状遺構。

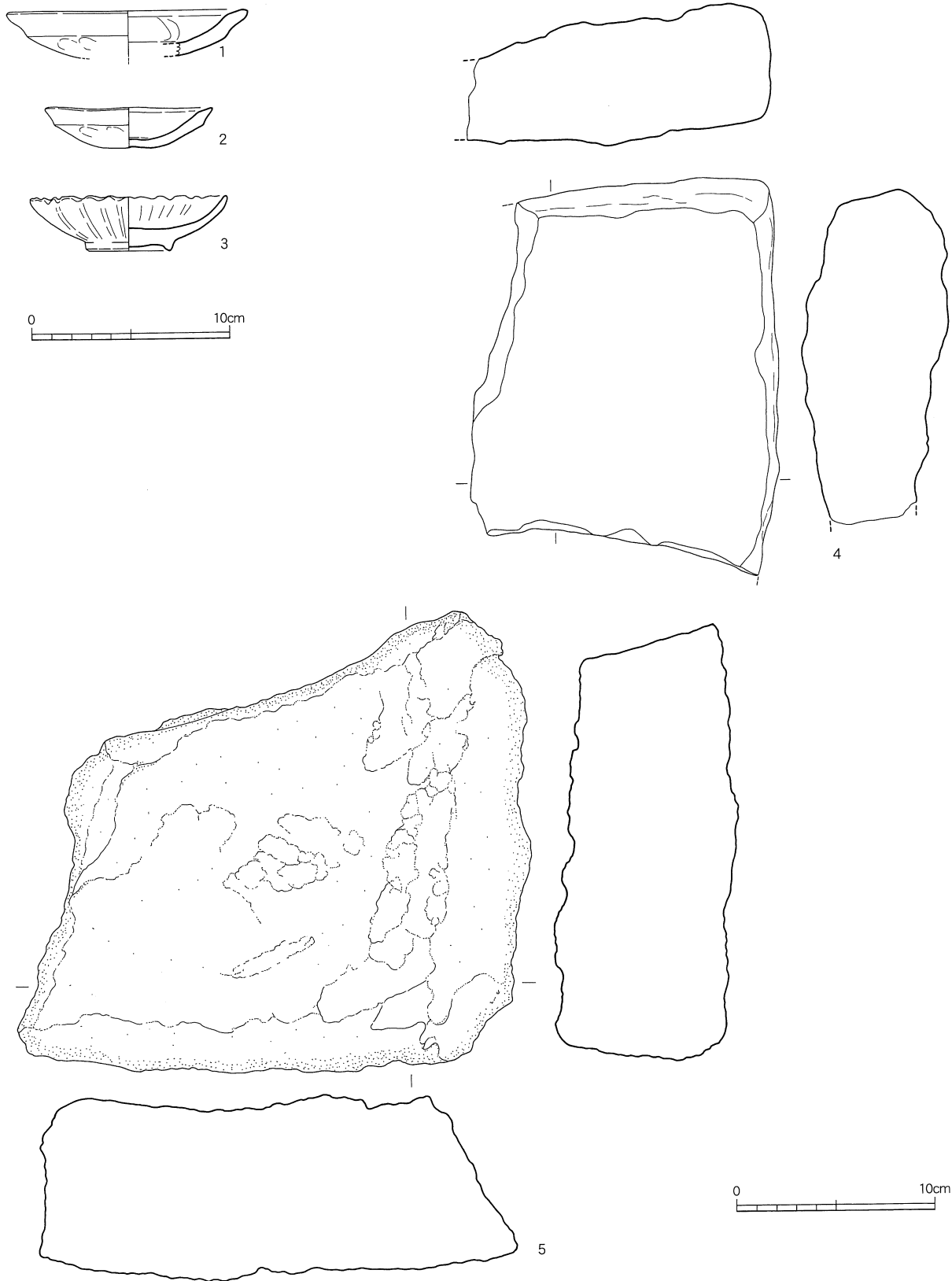
出土遺物（第169図3） 2は鉄製の釘。断面は方形で、長さ6.6cm、重さ7.8gである。

SD104（第170図） W62・63区にあってSD112と平行に東側を走る溝状遺構である。SD103との先後関係は分からない。全長約9m、幅は60cm前後、深さは70cm～90cmで中央部分が相対的に深いので水溜めには利用できたであろう。上部から礫が出土しただけで、図化した遺物はない。

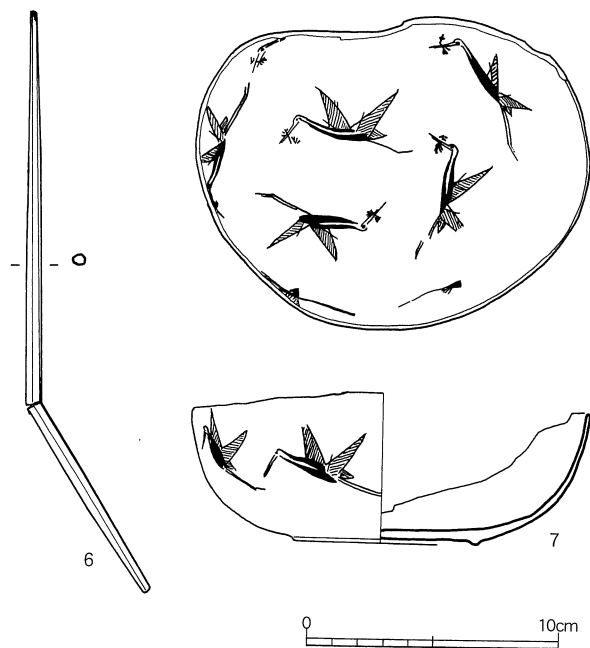
出土遺物（第169図4・5） 4は在地系土師器である。口径6.6cm、底径5.5cm、器高1.0cmで、色調は明橙色である。5は3期の京都系土師器である。暗褐色を呈する。

SK106（第169図4・5） W63区にある。SK105に切られる。当初SD112と別遺構でSD103と重複する遺構と考えていたが、北部でSD112に繋がったのでSD112に含めることにする。

SD107（第117図） W62区からY64区にかけて一直線に走る細い溝状遺構である。出土遺物はないがこの付近では最も古い遺構であり、SD84・SD103・SD104・SK109・SD110に切られた状態で検出した。検出標高はSD109南部で4.37m、幅0.52m、深さは18cm前後。



第173図 SE108出土遺物実測図①



第174図 SE108出土遺物実測図②

SE108 (第171・172図) W62・63区に位置する井戸である。検出標高は4.2mで、床面が標高2.1m、井筒底面は標高約1.8mである。

井筒は杉板の一段造りである。桶にはタガを4箇所巻いている。桶の上端と並ぶような高さに基部の凝灰岩製配石5枚を花卉状に廻らしていた。通常では基部配石は床面に直接乗るのであるが、本例は井筒をある程度埋めた後に埋土に乗せている。その上に凝灰岩製板石を六角形に二段積んでいた。二段目の上端は一段目以上に凸凹状態であり、本来もう一段存在したのではないと思われる。

層序断面の観察によれば、下位の井側を設置した後は井側に寄せて土を積み、次第に外側に向かって堆積させ、一段目上部からは水平方向に積み足して行ったことが分かる。層序断面によれば、二段目井側上端から上は外側に開くような堆積が認められ、もう一段存在した井側を抜き取ったのではないと思われる。

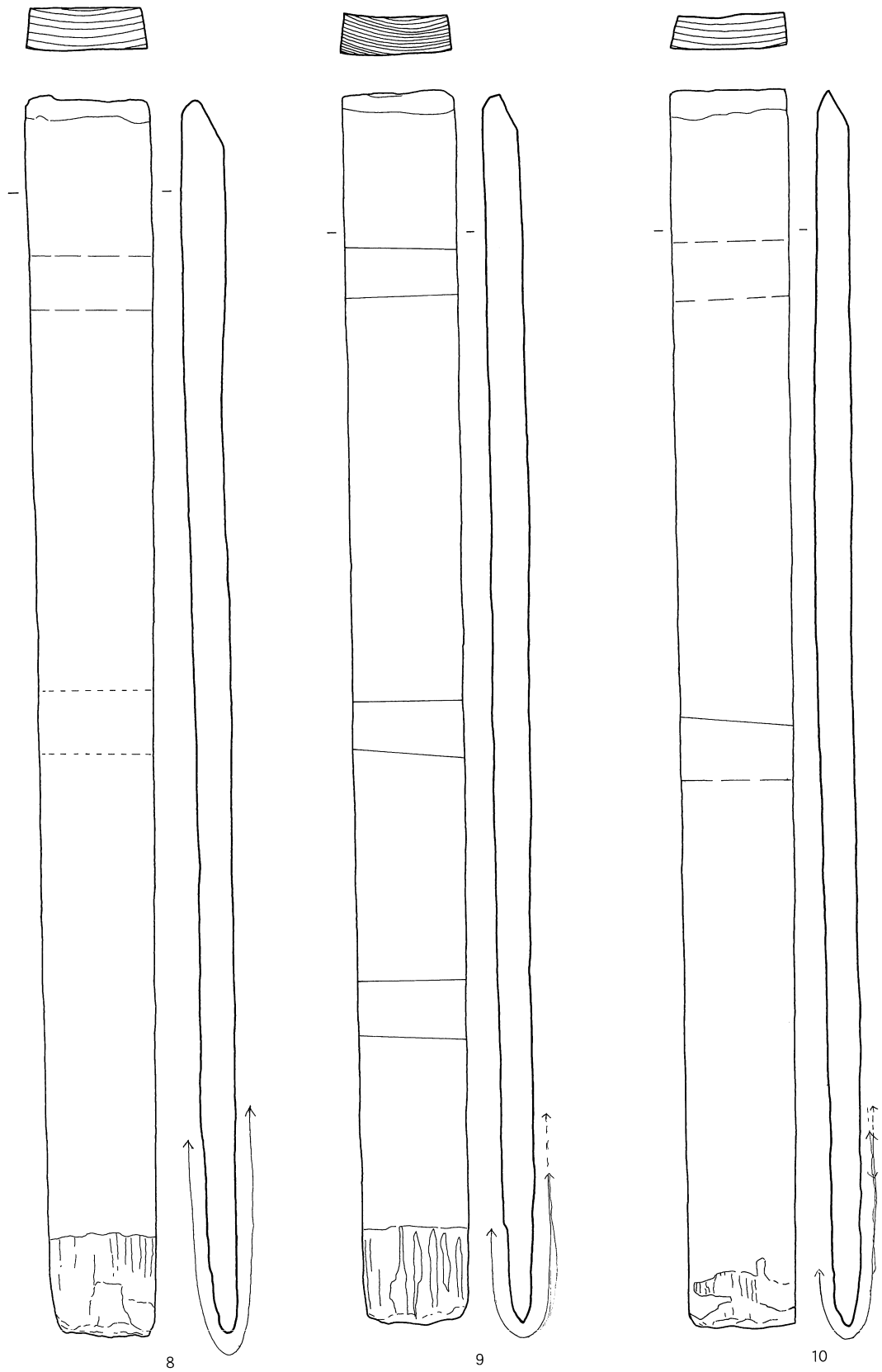
出土遺物 (第173～175図1～10) 1～3は井筒内から出土した。1・2は厚手であり、4期の京都系土師器である。3は中国景德鎮窯系青磁菊花皿。4・5は井側の一つである。6は杉材のはく、7は漆器椀で松葉をくわえた鳥を朱で描く。8～10は井筒の一部である。長さは8が79.5cm、9が79.3cm、10が79.5cmである。

SK109 (第176図) X63区にある平面長方形の土坑である。SD107を切っている。規模は南北長軸が6.2m、東西幅が3.7mである。埋土の状態は人為的に埋め戻したのではなく、自然に埋没したように見える。床面は中央から南部は細かに掘り込まれた穴が分布し、北部は浅く掘り込まれた状態であった。床面の穴は鍬のような道具で掘り込んだ痕跡だと思われる。この土坑が掘り込まれた土層は黄褐色の砂質土であり、この土を目的としたいわゆる粘土採掘坑だと推定する。SK109の北側には同様の遺構SK137があるが、相互の先後関係は分からない。この遺構は番号が重複しSK129としたものと同一である。SK129として採り上げたのは後述5の銭貨1点である。

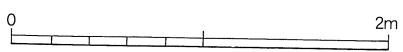
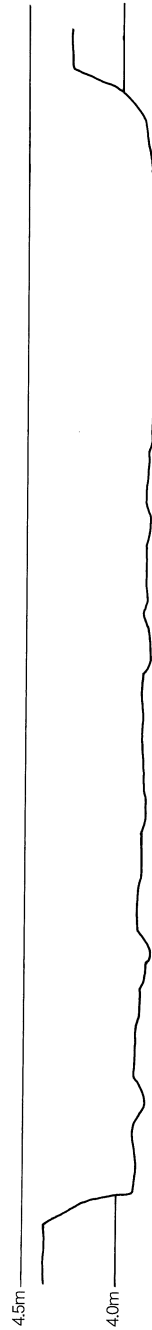
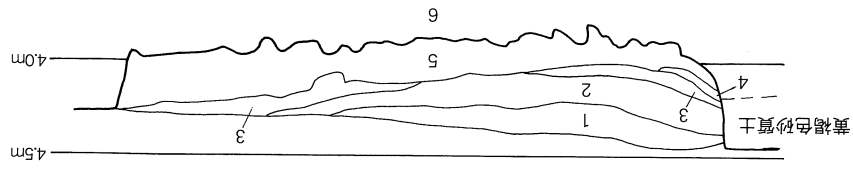
出土遺物 (第177・178図1～4) 1は在地系土師器杯である。全体の1/4が出土した。2は東播系須恵器こね鉢である。3は熙寧元宝(北宋1068年初鑄)、4は口口通宝。

SD110 (第179図) V62・W62区にあり南北方向に走る溝状遺構である。SD107を切る。

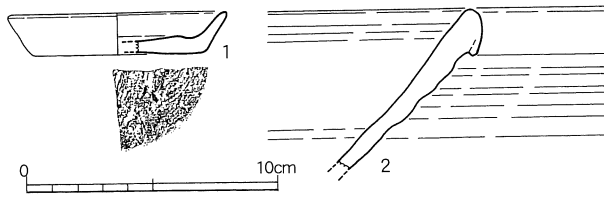
出土遺物 (第117・180図1～6) 1は京都系土師器、2は備前焼壺、3は中国景德鎮窯系白磁皿、4は白磁皿C群。5は瓦質土器の火鉢で双頭蕨手流雲紋の刻印がある。6は埴瓦。



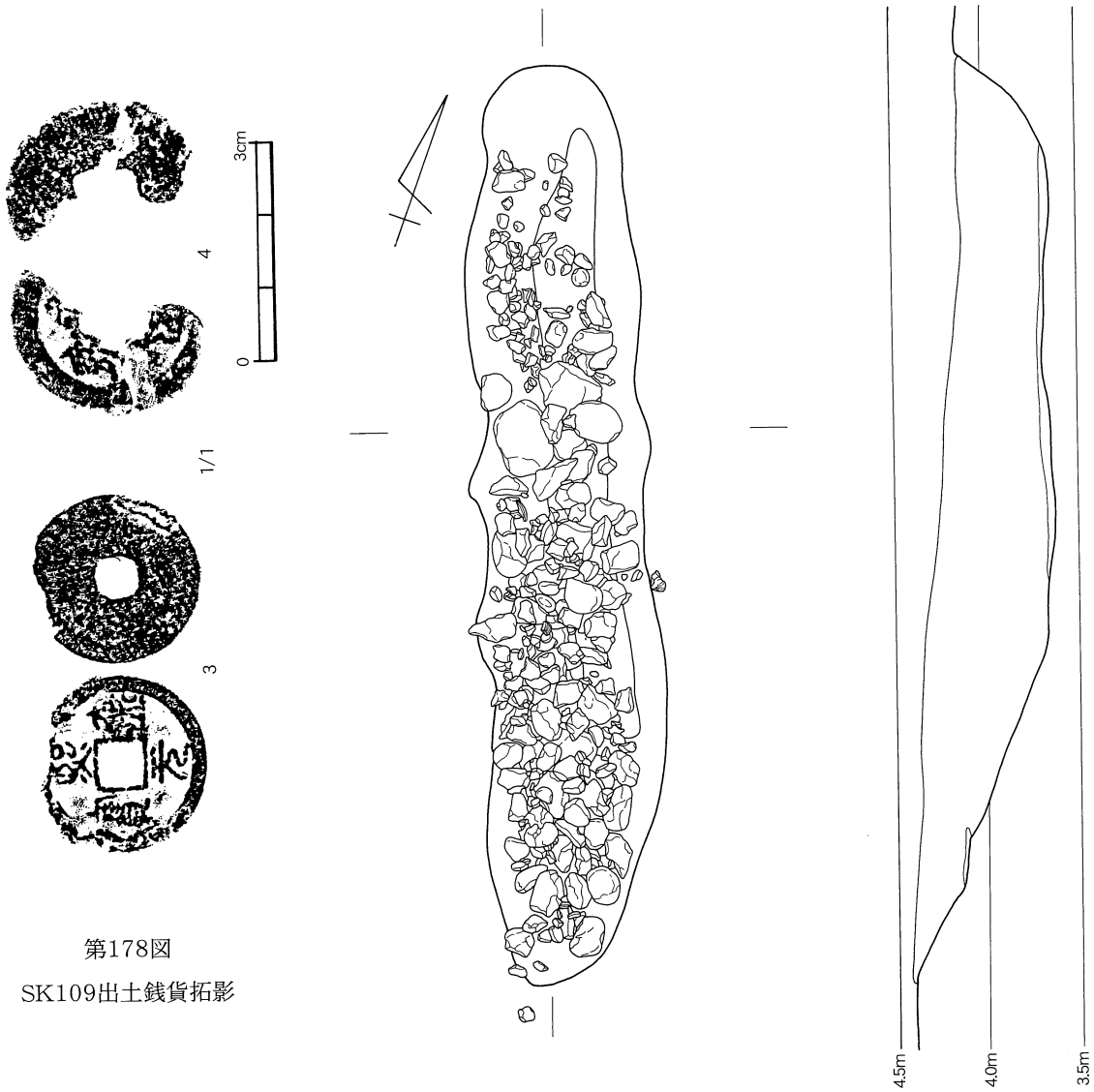
第175図 SE108出土遺物実測図 (S=1/4)



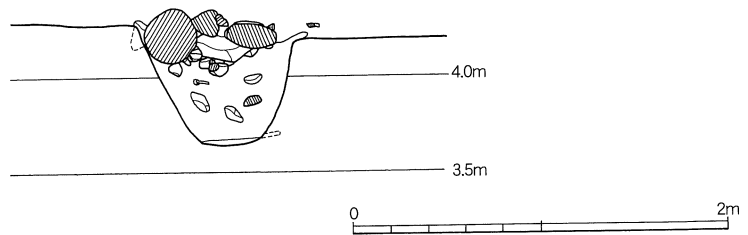
第176图 SK109实测图



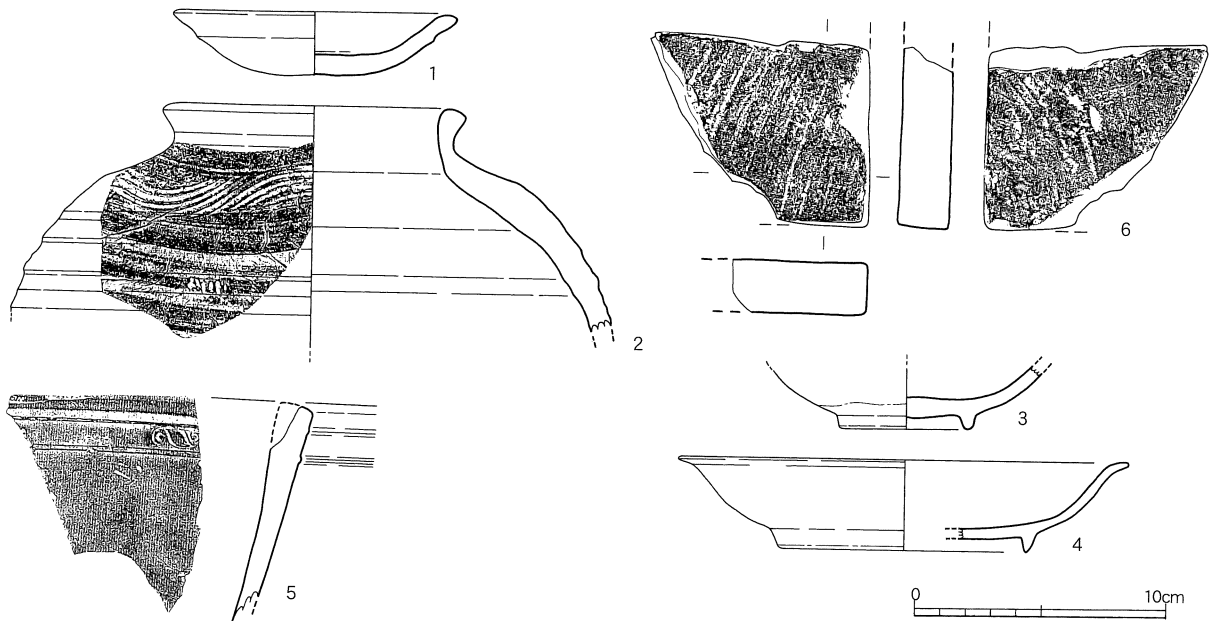
第177図 SK109出土遺物実測図



第178図
SK109出土銭貨拓影



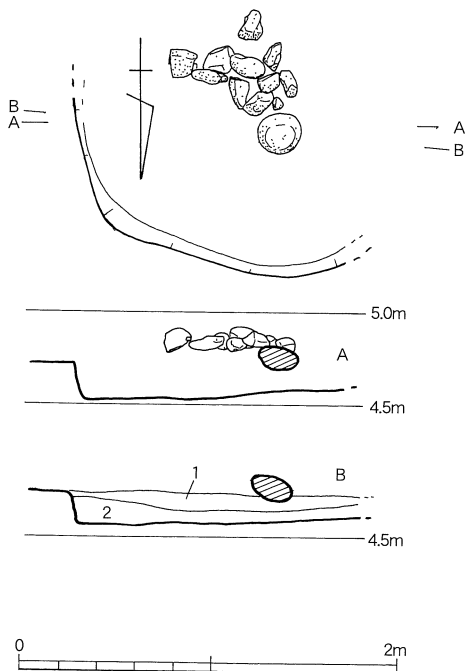
第179図 SD110出土遺物実測図



第180図 SD110出土遺物実測図

SD112 (第182～184図) U60区に始まりX65区で調査区外に消える溝状遺構である。V63区付近でSD103と交叉する場所ではSK123として遺物を採り上げている。SD103との先後関係は現地では明確ではなかった。

SD84との関係では明らかにSD84が新しいと把握できたので、SD84と組み合わせると考えられるSD103もSD112よりも新しいと思われる。しかし、交差部分のSD123がSD103とSD112の流れに沿っているように見えたので、古い方のSD112もSD84が造られた時点でも上部が窪地状態の痕跡として残っていたと考えられる。また、SD112の北西部は東西方向に走るが、当初この部分はSD112とは別遺構と考えSという名称を与えていた。この部分から出土したのが第321図2・3である。

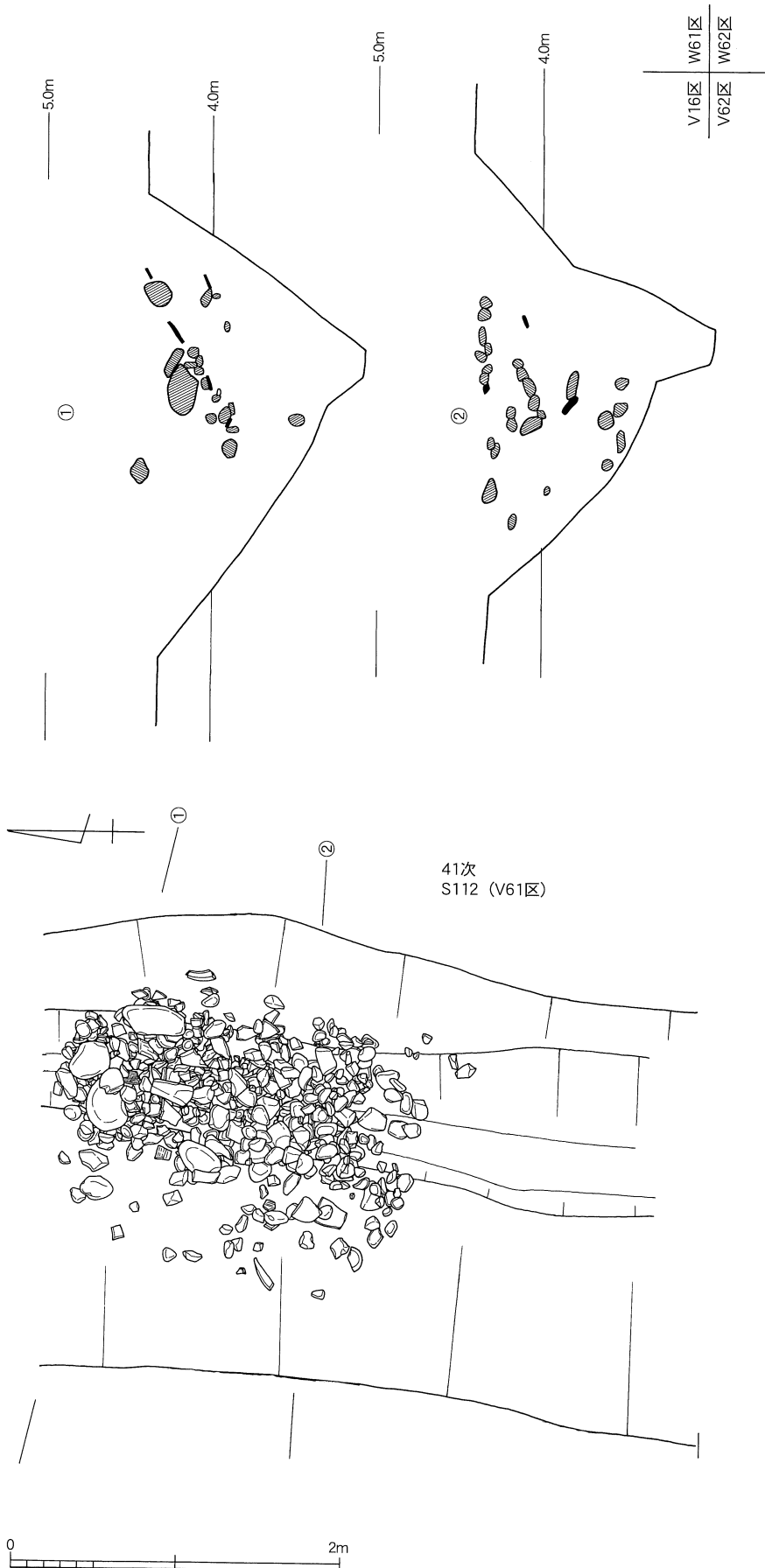


第181図 SK111実測図

出土遺物 (第185～199図1～167・第321図2・3) 初めに第184図の遺物を説明する。1は口縁端部が外側に向かって尖り、体部と底部との境付近に丸みを帯びる在地系土師器皿である。口径11.9cm、底径7.6cm、器高3.6cm、灰褐色。14世紀中葉から後葉に位置づけられる。2～6・9・12は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。2～6は坏、7～12は小皿である。口径・底径・器高・色調は次のとおりである。2 (12.8cm・7.0cm・2.6cm・明橙色尾)、3 (12.0cm・6.1cm・2.9cm・橙褐色)、4 (12.2cm・6.5cm・2.3cm・明橙色)、5 (12.6cm・6.0cm・3.6cm)、6 (12.6cm・6.1cm・2.8cm・明橙色)、7 (9.3～52は京都系土師器である。26・27・31～35・43～45・47は口縁部に煤が付着する。50は平面楕円形で厚手の皿である。



第182图 SD112实测图

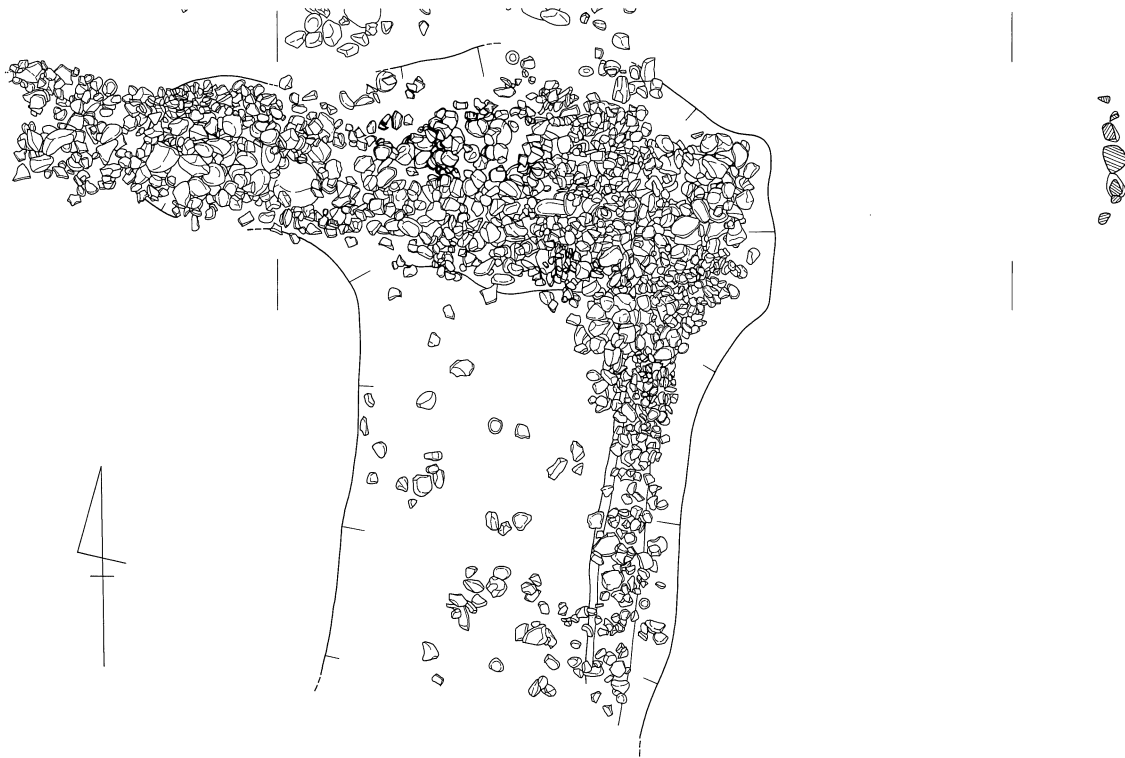


第183図 SD112実測図

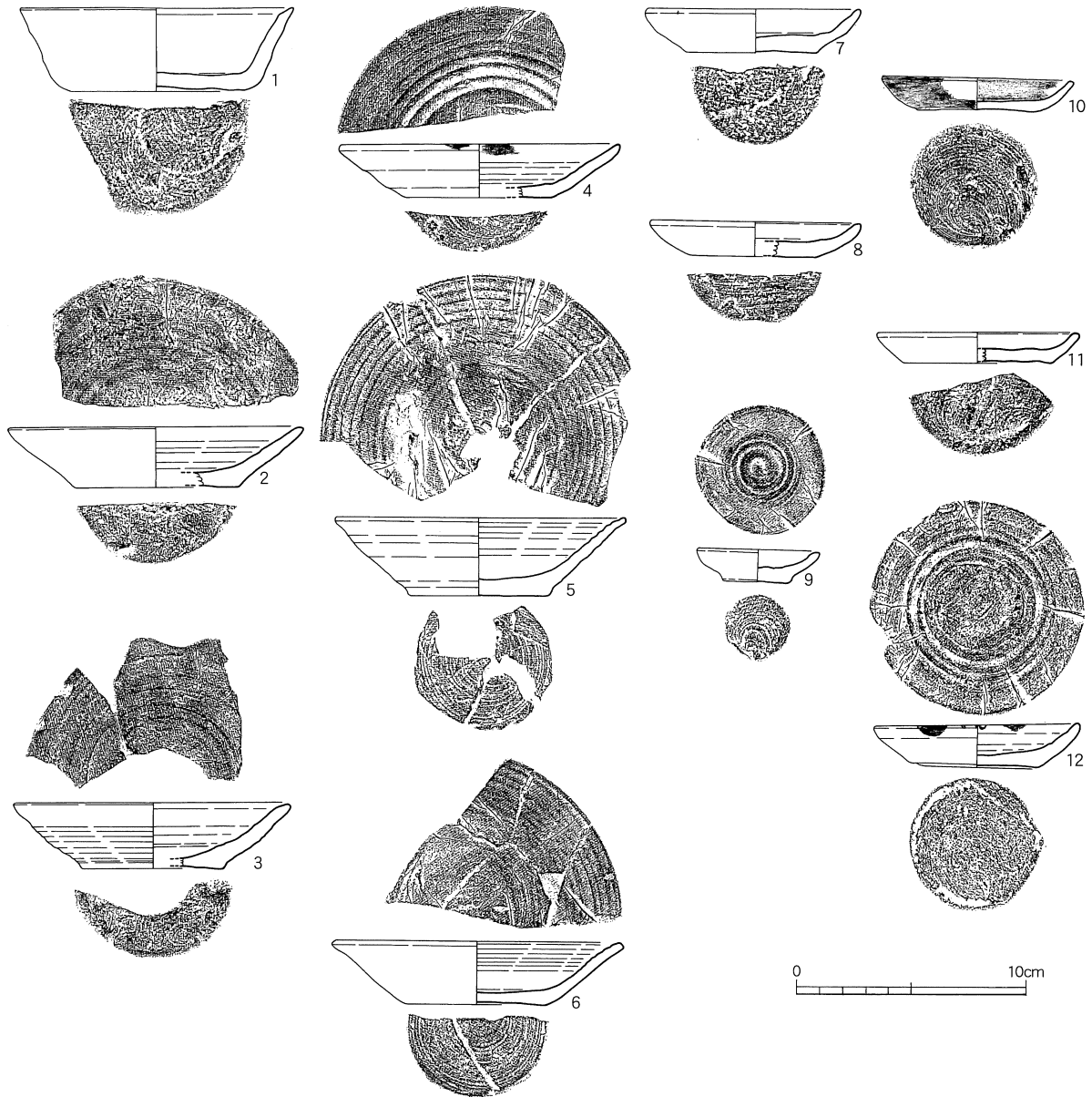
53は中国景德镇窯系白磁皿C群。54は瀬戸美濃製の天目碗、55～57は中国南部製の褐釉四壺、58も中国南部製褐釉cm 5.7cm・1.9cm・淡灰色)、8(9.2cm・)、9(5.4cm・3.1cm・1.4cm・明橙褐色)、10(7.3cm・1.4cm)、11(8.8cm・6.5cm・1.3cm・淡橙灰色)、12(9.0cm・5.5cm・1.8cm・淡赤灰色)。12には口縁部に煤が付着する。

13～52は2期及び3期の京都系土師器である。本場の京都系土師器は器形・規模から各種に分類されているが、ここでは通常の皿、やや小型の皿、小皿、器高の深い皿、箸置きである耳皿に分けて説明する。通常の皿は13～23・25～33・49である。やや小型の皿は口縁部が特に外湾したり、鯛部との境に明瞭な屈曲部がない24・35～49である。灯明皿として使われることが多いような印象がある。京都系土師器のうち、煤が口縁部を中心に付着し灯明皿と考えられる土器は26・27・31～35・43～45・47である。小皿は51・52の2点である。器高の深い皿は34と50を挙げたい。京都系土師器の口径・器高・色調については、巻末の遺物観察表を参照願いたい。

53は中国製白磁皿、54は瀬戸美濃製の天目碗、55～57は中国製褐釉四耳壺である。58は中国南部製焼締め陶器鉢である。



第184图 SD112実測図

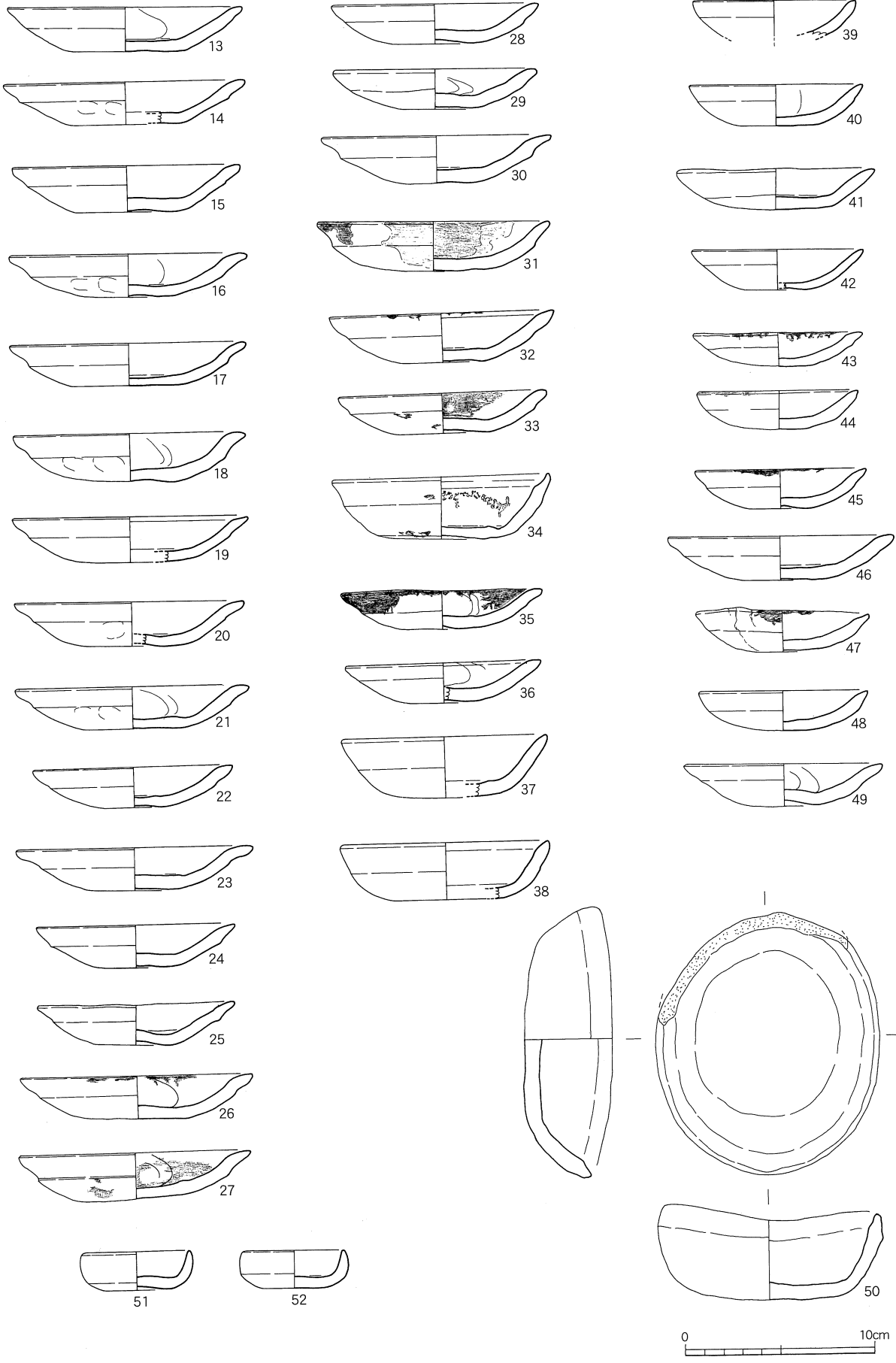


第185図 SD112出土遺物実測図①

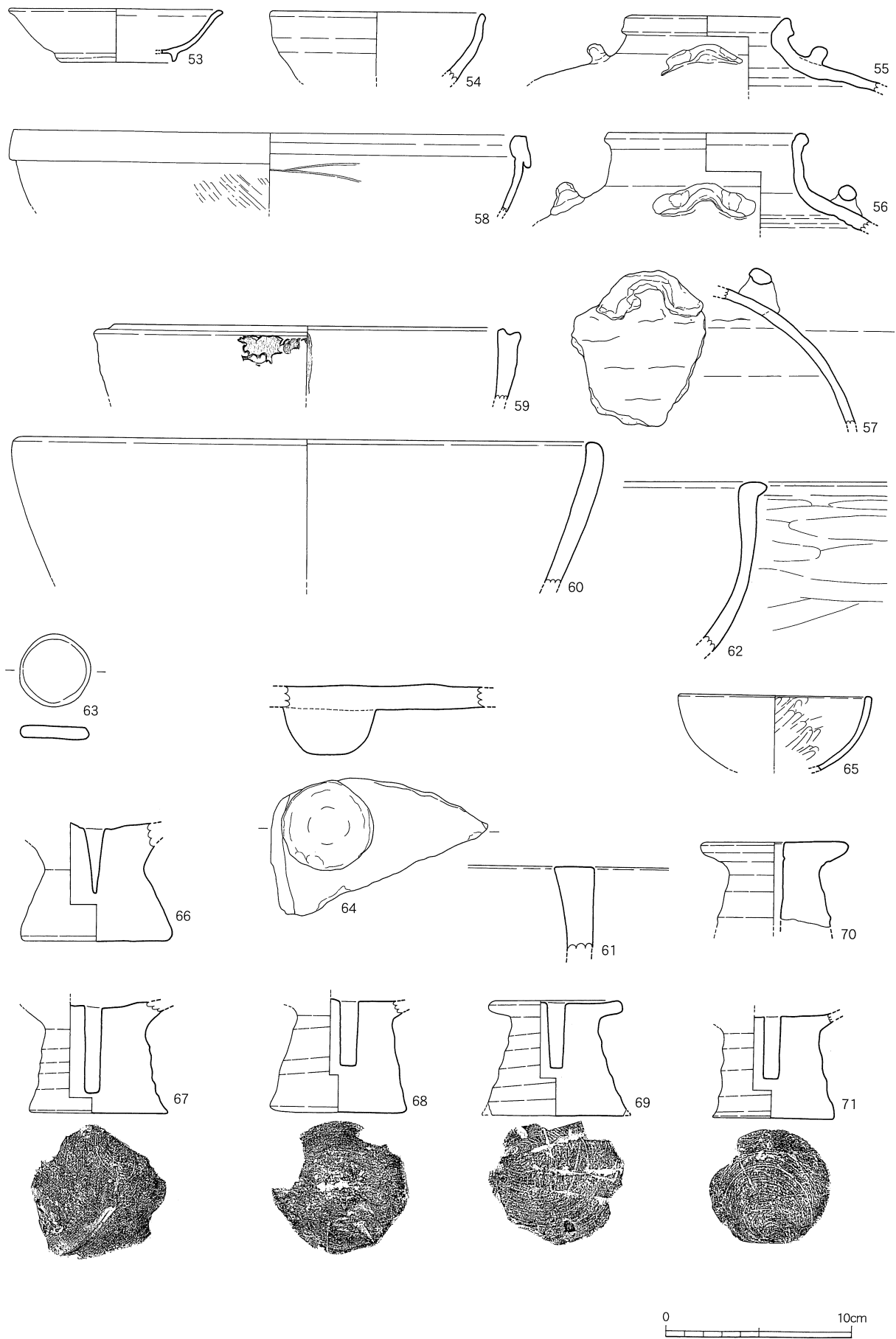
59～62・64は瓦質土器で、59は鍋、60・62は鉢、61は火鉢、64は風炉脚部である。

63は土師器皿破片を円形に加工したもの、65は瓦器椀、66～71は土師質の燭台である。

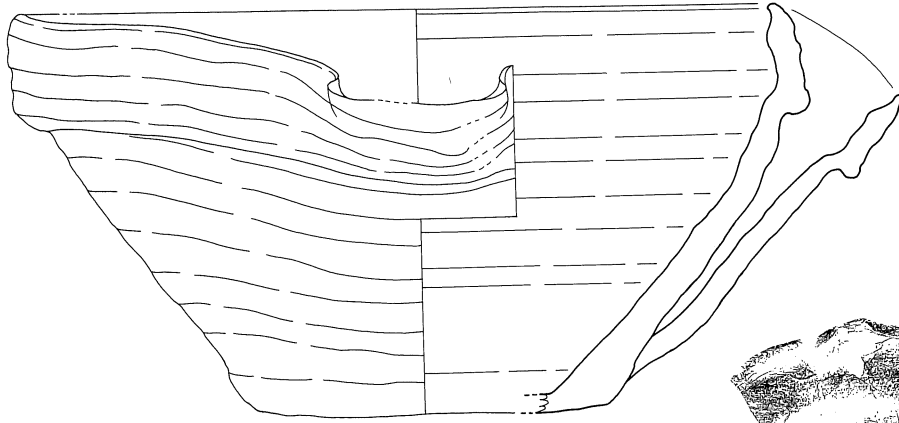
73～89・100・101・112～114は備前焼である。73・74・79・81は播り目が交叉するもので近世1期の播鉢、78は中世6期の播鉢、80・82は中世6期かの播鉢、85は中世2～3期の播鉢である。83は鉢、77・84は壺、86～89・100・101・112～114は甕である。このうち、85・88・89・101・114は近世1期、77・87・100は中世6期。112・114の破片がSK233からも各1点出土した。113は口縁部が外側に厚く、肩部にヘラ記号があり中世5期。同一個体の破片はSD84に1点、SK116に24点、SK233に1点あり、SD112からは1点しか出土していないので、本来はSK116で報告すべきかもしれない。75・76は長頸壺。90～92は中国南部の漳州窯製青花皿、93は景德鎮窯製青花皿E群である94は中国景德鎮窯製の五彩碗である。95は景德鎮窯製の五彩皿である。96は青磁碗、97は中国龍泉窯系青磁碗で口縁部外面に櫛



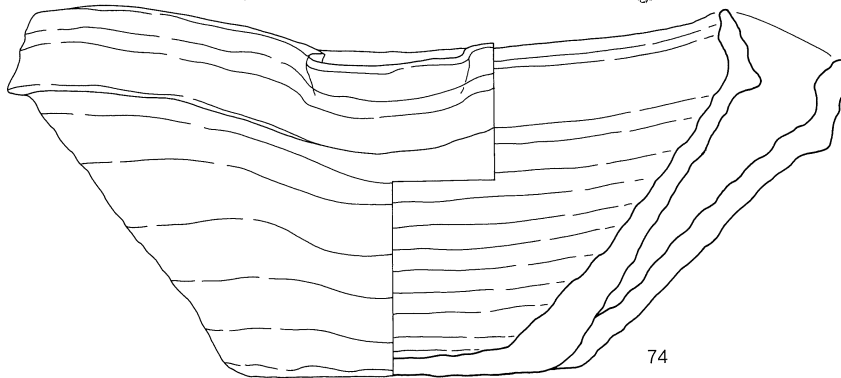
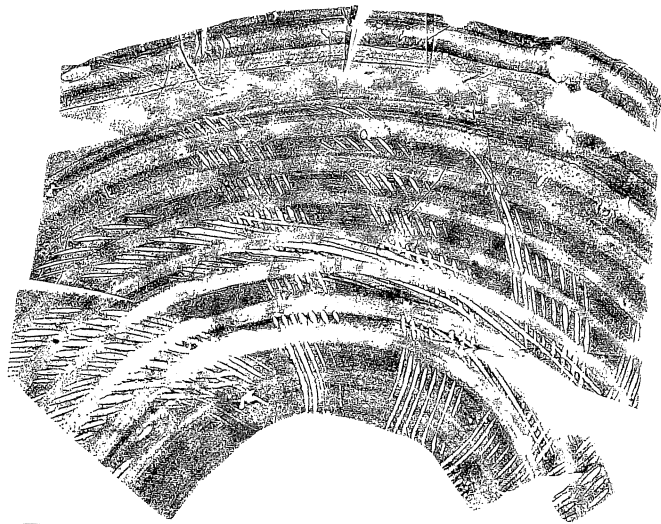
第186図 SD112出土遺物実測図②



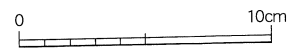
第187图 SD112出土遺物実測図③



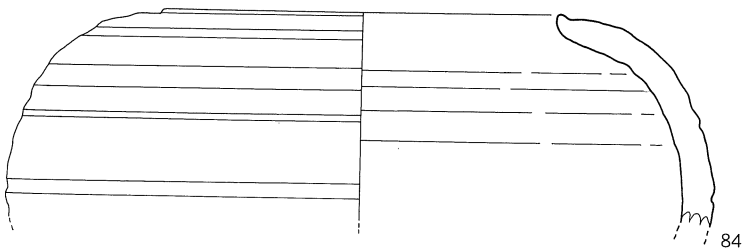
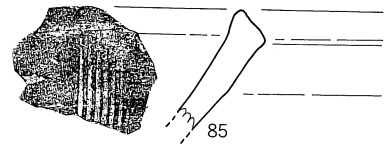
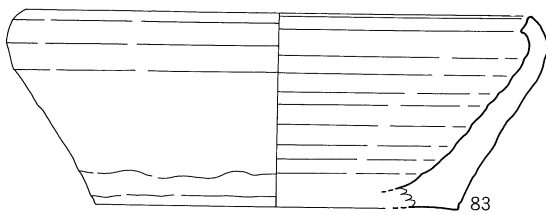
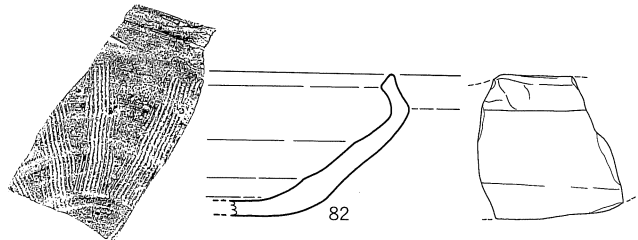
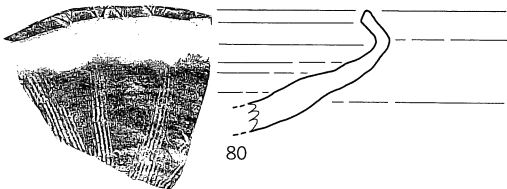
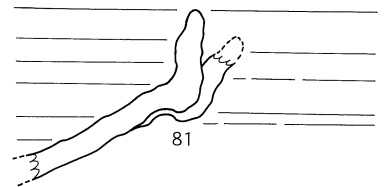
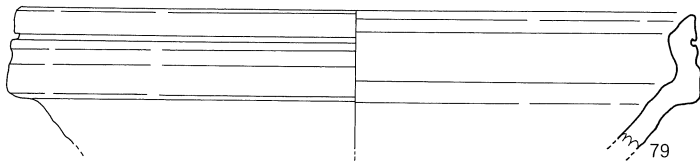
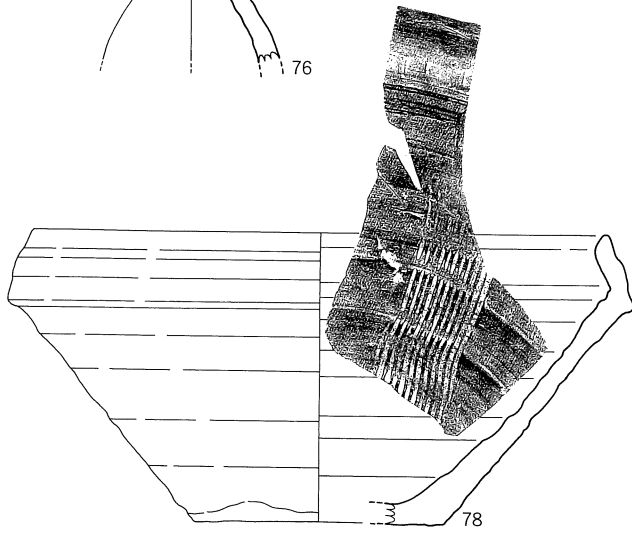
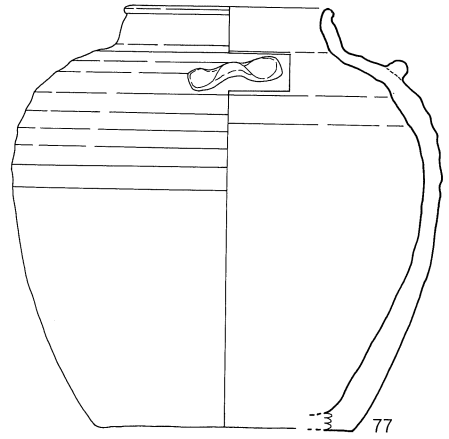
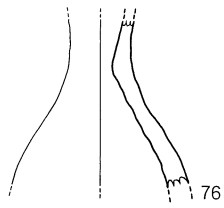
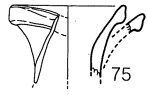
73



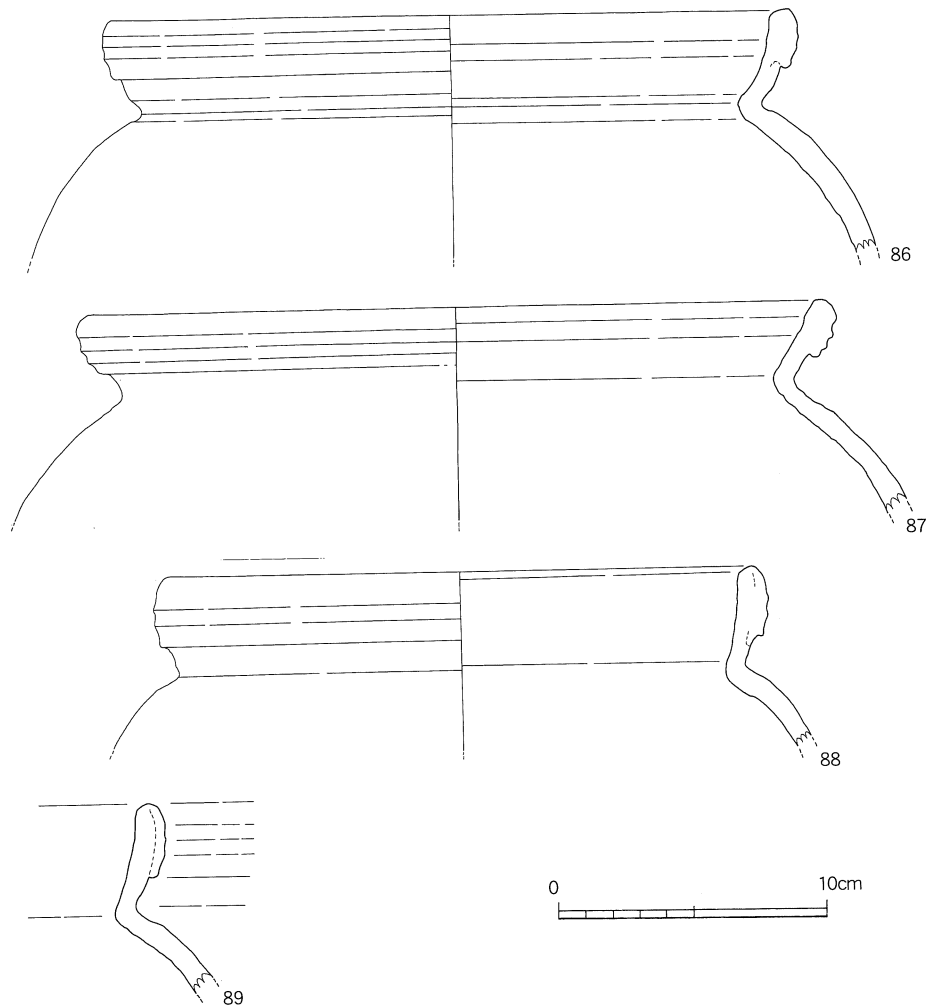
74



第188図 SD112出土遺物実測図④



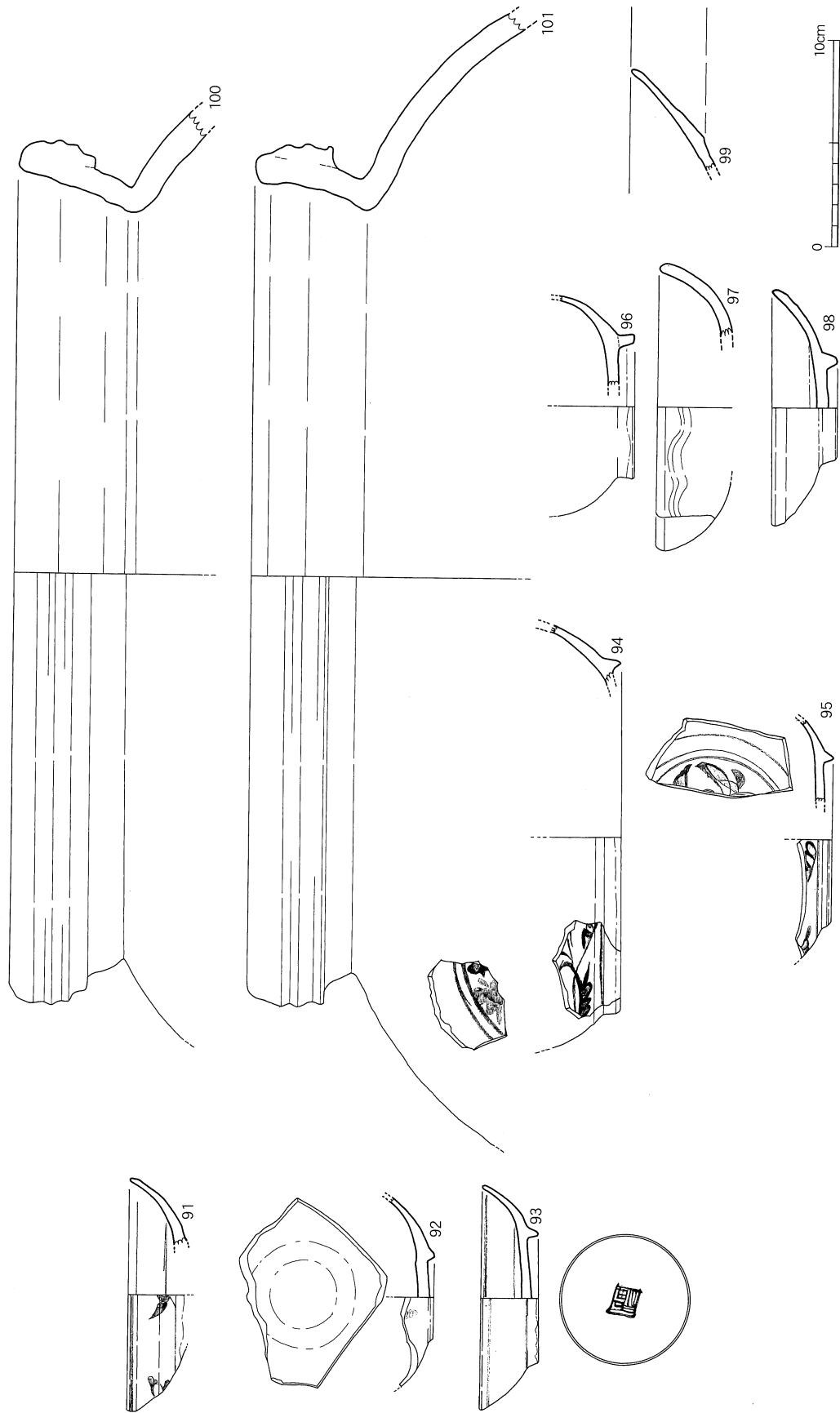
第189図 SD112出土遺物実測図⑤



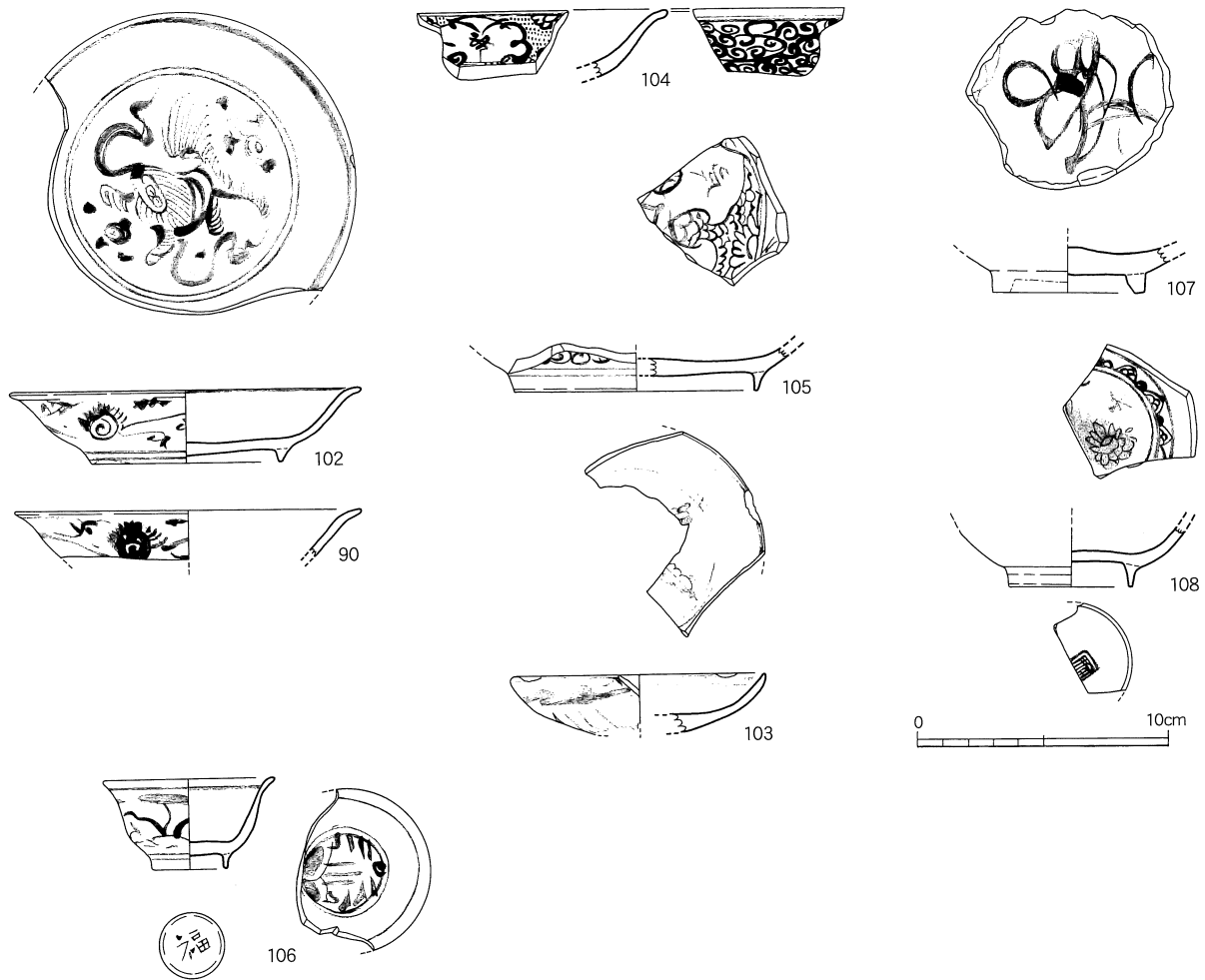
第190図 SD112出土遺物実測図⑥

描き波状紋をもつ。98は中国景德鎮窯系白磁皿B群。99は肥前系陶器皿。唐津焼きのような色調である。全面に施釉している。102は漳州窯系青花皿B2群、103は青花皿C群、105は漳州窯系青花皿F群、106は漳州窯系青花小杯、107は漳州窯系青花碗、108は景德鎮窯系碗E群。109は13世紀の龍泉窯系青磁碗。110は型造りの瑠璃釉小皿。111は華南三彩片で内面は無釉。115～125は瓦質土器のるつぼである。116・118・121・123～125は内面に金属の溶着物が付着し、このうち121・123～125は緑色の金属であり銅とみられる。126-2は軒丸瓦で珠紋が廻る。126は軒平瓦で唐草紋がある。瓦頭面の下半分が剥落しているため、紋様は不詳である。

127～129は凸面に格子目叩き、凹面に布目痕が付く。130は垂木先瓦である。131～133・142は専瓦。このうち2点は全長が分かるので記すと、132は縦横の長さが22.5cm、133は縦が22.5cmである。134は弥生土器の甕、135は古墳前期の土師器高杯である。136～140は鉄製品で、136は釘、137は筒状のもの、138は鎌か。139は紡錘車の軸様、140は不明。141は青銅製品で小柄。143・146は壁土で表裏に蕁様の痕跡がある。143は図の左側は表面であり、胎土に金色の雲母を混入している。146は図の右側が表面であり、石英を混入している。144は山口県赤間石製の硯、145～148は砥石で、145は泥岩製、147・148は結晶片岩製。149は姫島産黒曜石製の縄文時代の石匙である。150～162は土師質の土錘。163～167は銭貨。163は皇宋通宝（北宋1038年初鑄）、164は元豊通宝（北宋1078年初鑄）、165は元符通宝（北宋1098年初鑄）、166は大観通宝（北宋1107年初鑄）、167は銘文不明。



第191図 SD112出土遺物実測図⑦



第192図 SD112出土遺物実測図⑧

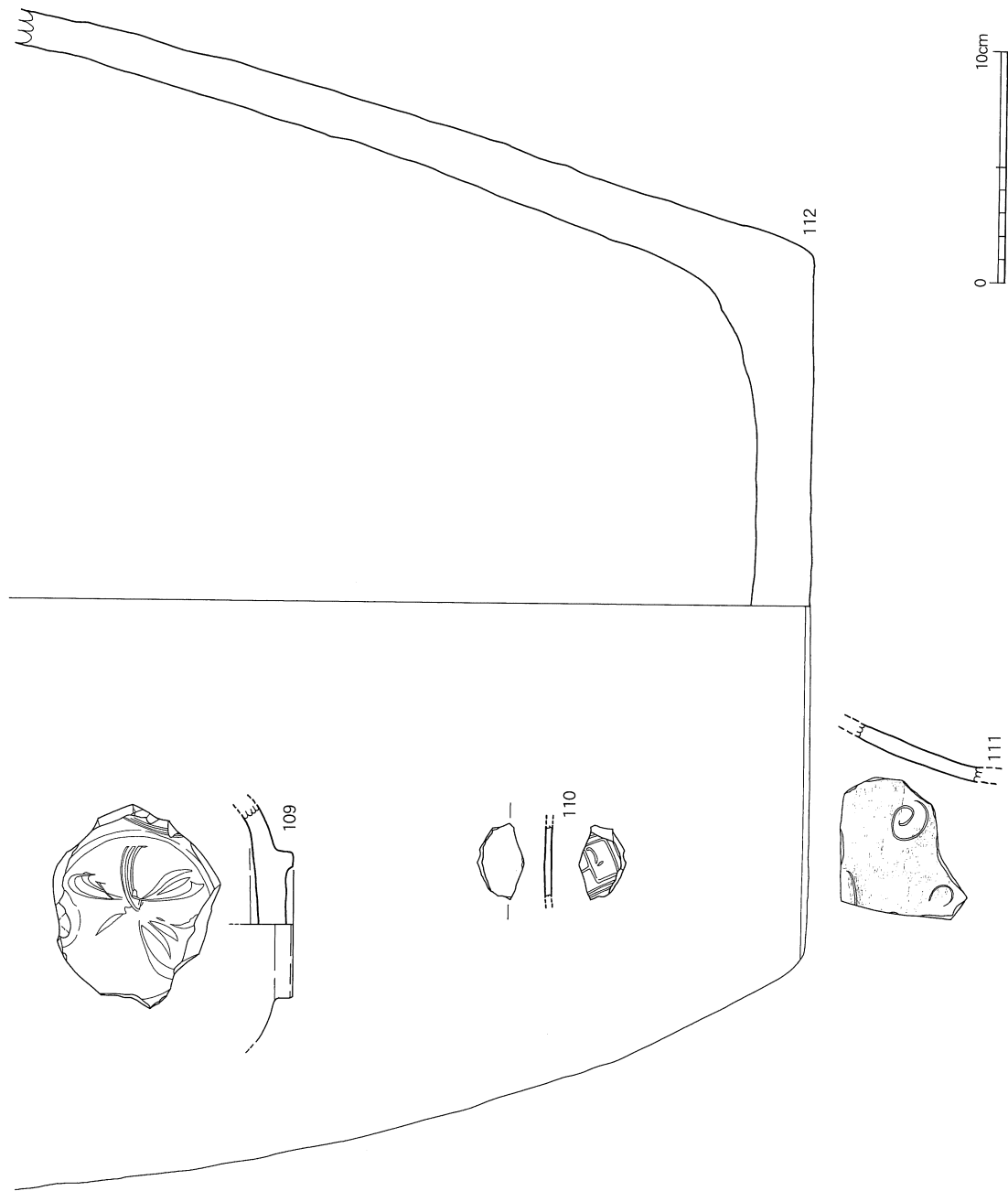
第321図2・3はSD112北西部の東西方向溝部分で出土した。2は一見、備前焼を思わせる焼成・色調（茶色）の陶器であるが、タイ製のいわゆるクロツである。厚い底部が広がった安定を保つ器形で、上部に短い体部がある。口縁部は厚く、垂直に立つ。口径11.6cm、底径8.0cm、器高11.0cmである。3は朝鮮製陶器碗で、見込みに四か所の砂目積み痕がある。復元底径は4.9cmである。

SD114（第200図） T63区・U64区にある直角に曲がった溝状遺構である。南北方向部分は当初SD113としていたが、下部で東西二条に分離したので西側のをSD113A、東側のをSD113Bとして遺物採り上げを行った。SD114の規模は東西溝が長さ7.3m、幅1.8m、深さ1.0mである。南北溝はやや幅狭く、下部の検出面で幅が1.0m、上部の検出面から床までの深さは0.9mである（第137図右下）。

出土遺物（第201図1～8） 1は15世紀後葉の在地系土師器皿、2～5は京都系土師器3期の皿で、3・4には口縁部に煤が付着する。6は中世3期（14世紀中葉～15世紀前葉）の備前焼播鉢。7は青色透明のガラス片で気泡を含む。8は結晶片岩製の砥石。使用面は広い面1枚と両側面である。

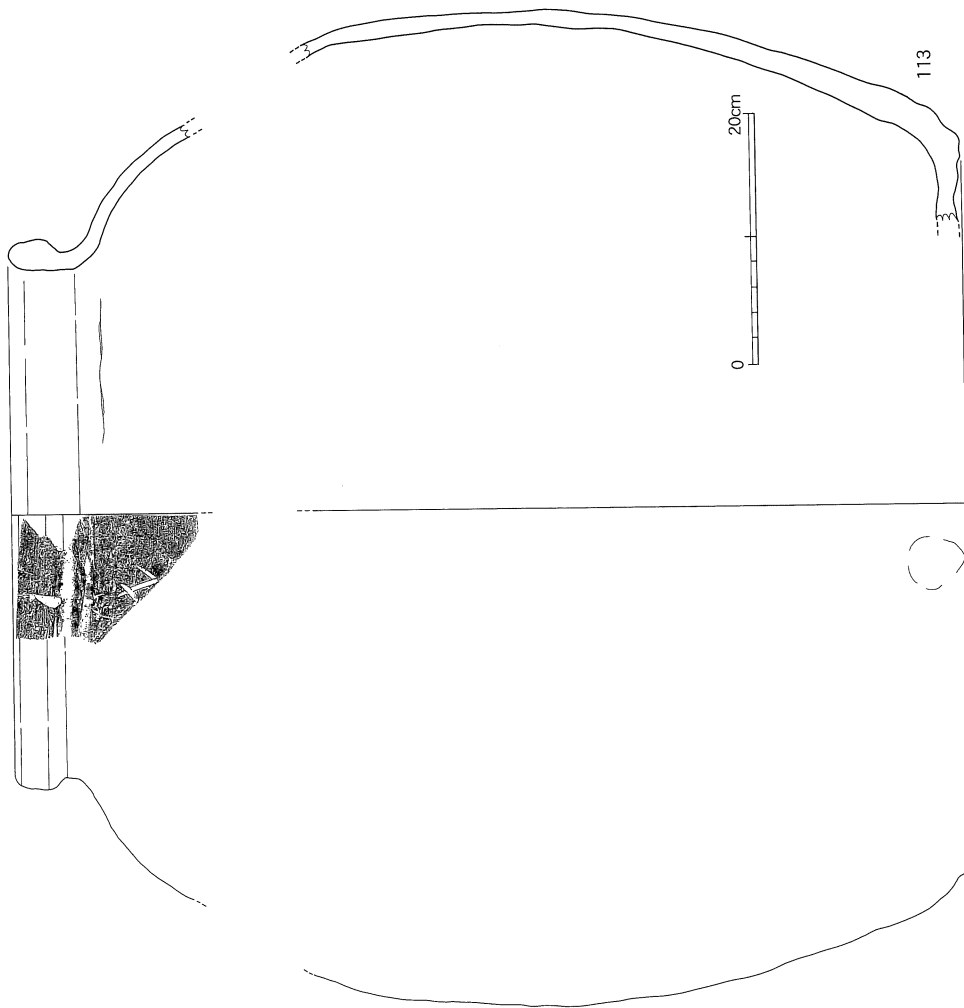
SD115 Y63・64区に位置する溝状遺構である。

出土遺物（第204図1） 1は京都系土師器3期の皿である。

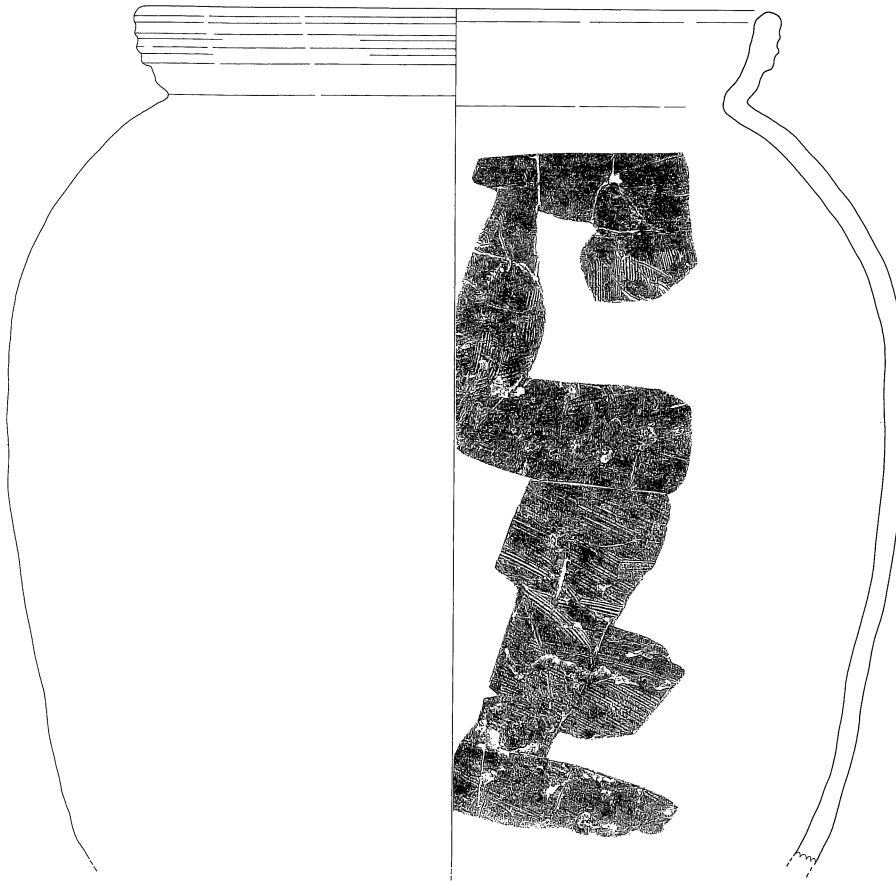


第193図 SD112出土遺物実測図⑨

SK116 (第203図) V61・62区に位置し、南北方向に長軸をもつ土坑である。西部の小型土坑Aと東部の大型土坑Bに区別する。この遺構の検出当初は礫の集積として把握した当初は礫の集積として把握したが、掘り下げると下部で二基の土坑が出土した。規模は土坑Aが長さ1.7m、幅0.67m、深さ0.37m、土坑Bが長さ3.0m、幅1.15m、深さ0.37mである。両者の深さは数値上同じだが、土坑Bの方が高い位置から残っているだけであり、本来は土坑Aの方が深い。内部をぎっしり埋めたのはほとんど礫であった。



第193-2図 SD112出土遺物実測図⑩



第194図 SD112出土遺物実測図㊸

出土遺物（第204図2～5） 2は中世6期の備前焼播鉢である。3・4は黒褐色の大甕で同一個体ある。器面調整は横方向のナデである。底面は内側に突きだしている。備前焼かどうか不詳。5は瓦質土器の鉢である。明茶褐色を呈する。口縁部以下の外面は横方向のヘラナデ調整で、口縁部と内面はナデ調整である。

SK117（第206図）
Z63区に位置する。出土遺物なし。

SK118（第206図）
Z63区に位置する。焼土少量を含む。

出土遺物（第208図1）
1は3期の京都系土師器皿である。

SK119（第207図） Y63区にある楕円形の小型土坑で、SK120の南部に接する。第207図でSK120とともに示す。

出土遺物（第205図2） 2は3期の京都系土師器皿である。

SK120（第207図） Y62・63区の境界上に位置する楕円形気味の浅い土坑である。規模は東西に長く長さ2.93m、幅2.1m、深さ0.1mである。標高4.69mで検出した。

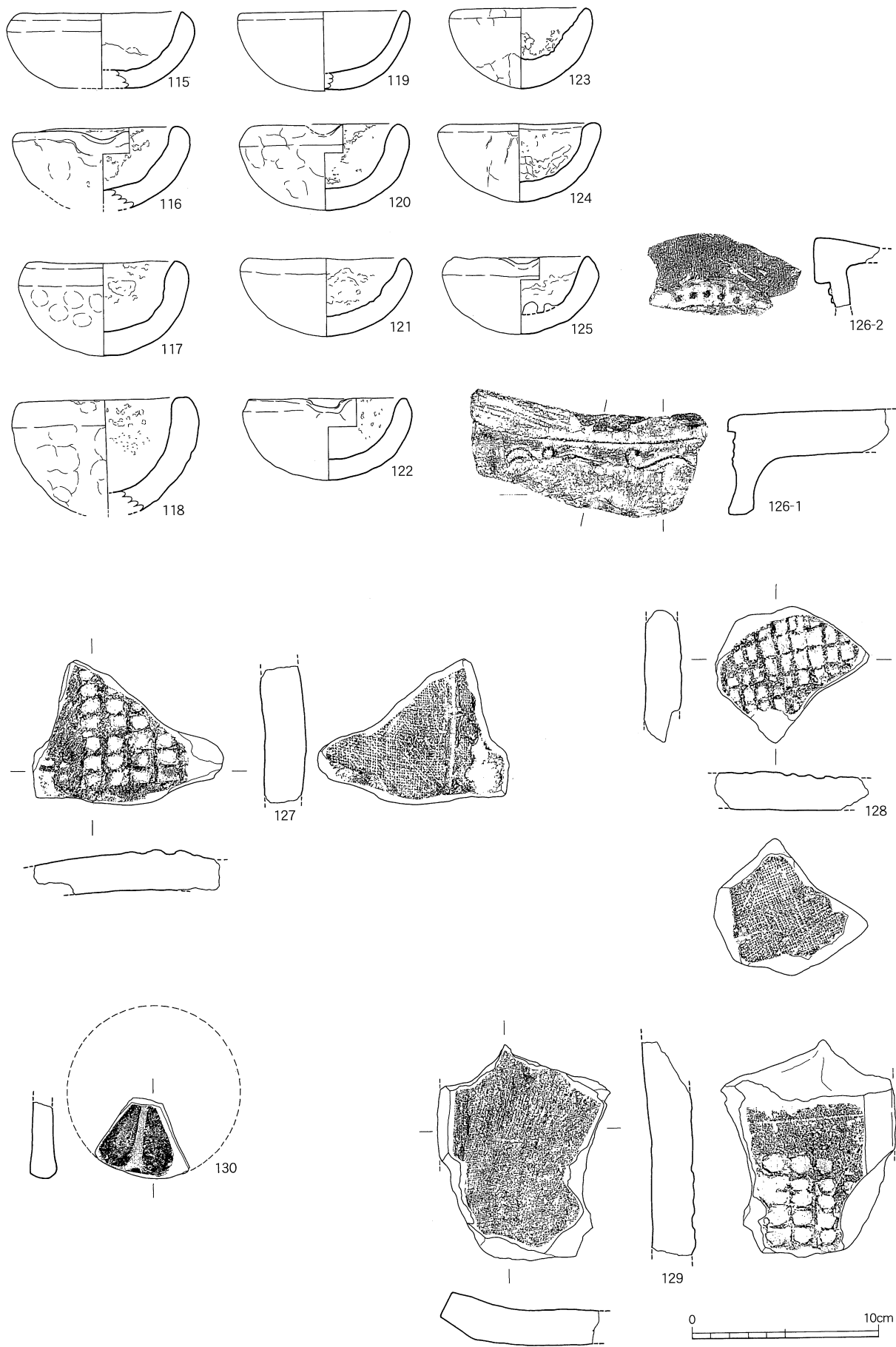
出土遺物（第208図1～5） 1～3は在地系土師器で、1は皿、2・3は杯である。14世紀前葉のものと思われる。4は瓦質土器の播鉢で、注ぎ口が少しだけ外側に折り曲げられ、6条の播り目を使っている。5は土師質の土錘。

SK125（第209図） Z63区南東部にあり、SD250の南西部に位置する小型土坑である。

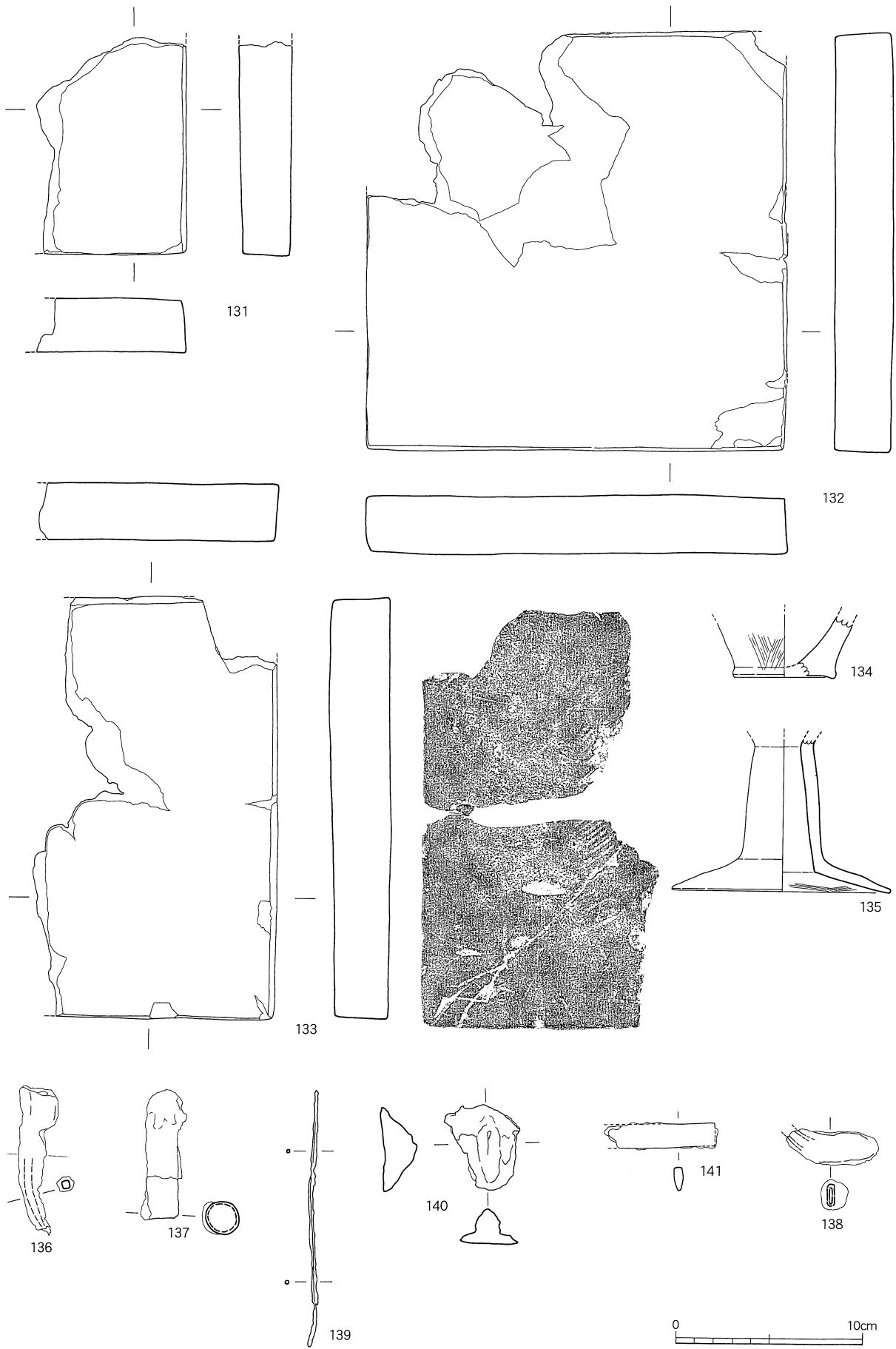
出土遺物（第211図1） 1は中国南部の漳州窯系青花碗である。

SK126（第210図） C63区にあり、中世の斜行道路の下層部で検出した楕円形の土坑である。

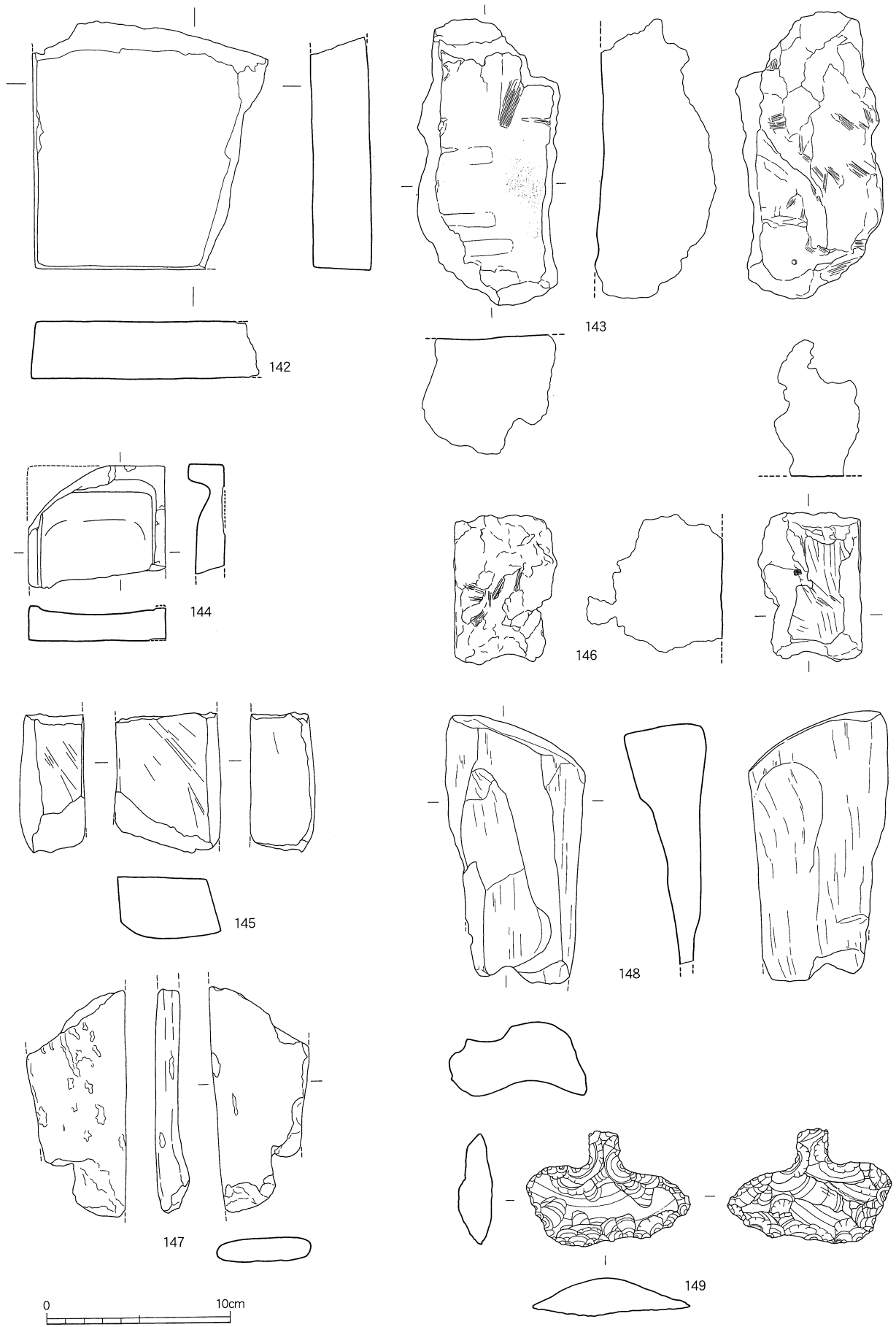
出土遺物（第211図1～6） 2は2期の京都系土師器皿で、1は土師質土器、4は中世5～6期の備前焼播鉢である。5は青銅製の円盤状のもの。表面の損傷が激しい。6は龍泉窯系青磁碗。



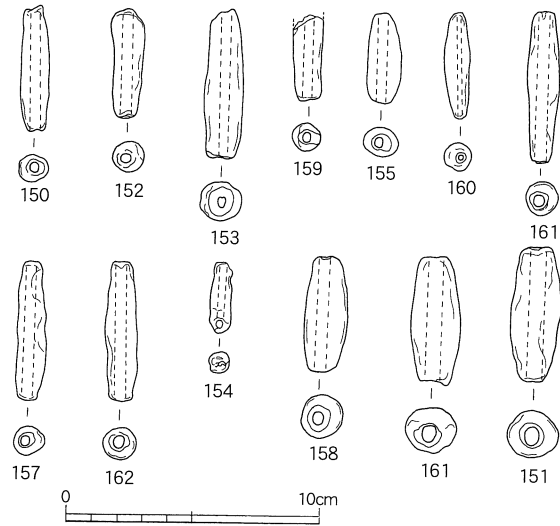
第195图 SD112出土遺物実測図⑩



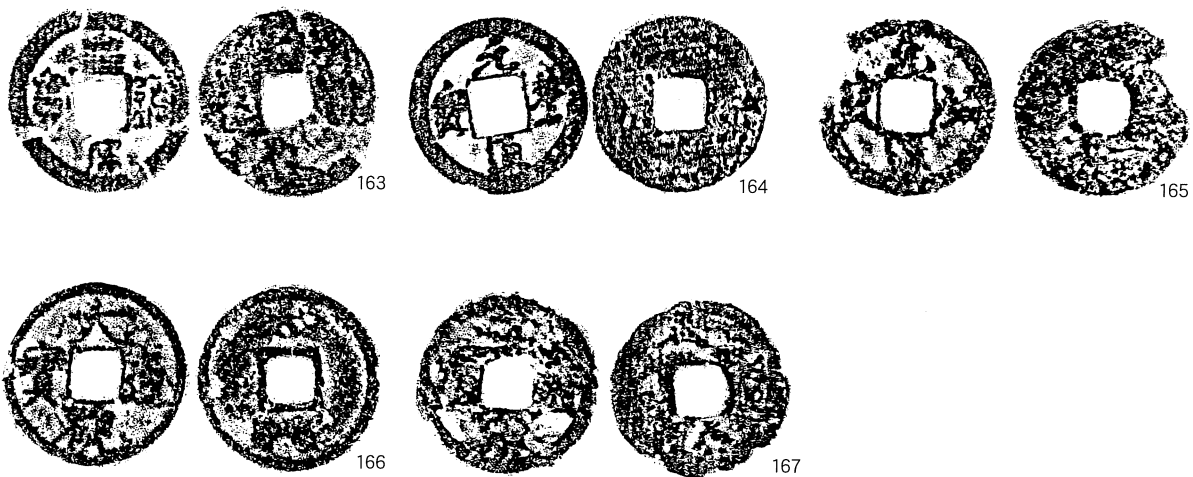
第196図 SD112出土遺物実測図③



第197图 SD112出土遺物実測図④



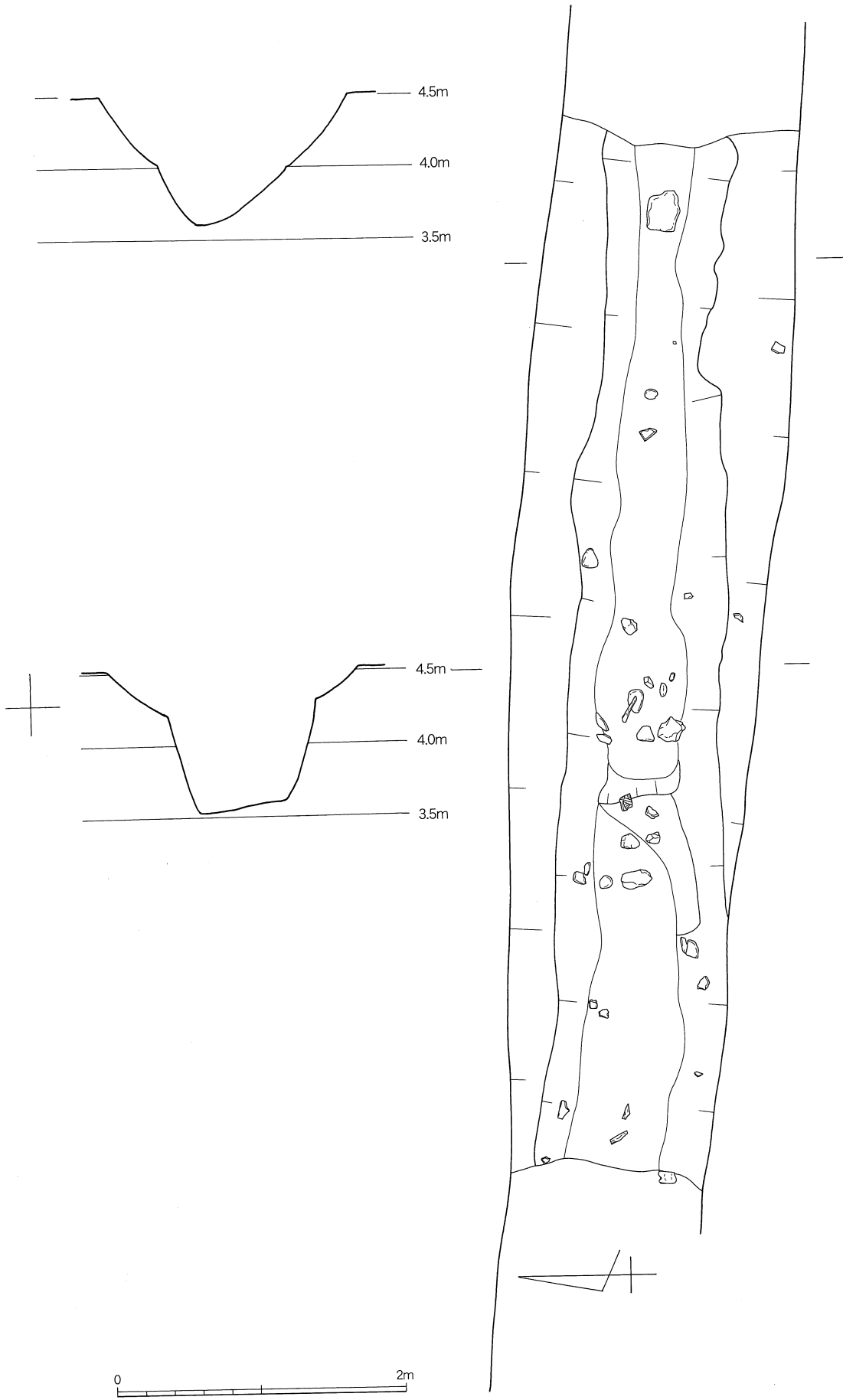
第198図 SD112出土遺物実測図⑤



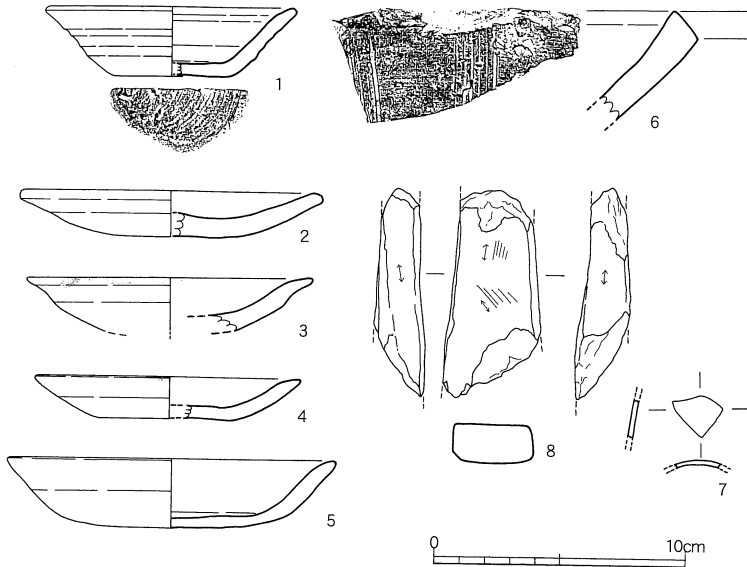
第199図 SD112出土銭貨拓影

SK127 (第212・213図) ほとんどZ64区にあり、一部Z63区にはみ出る不整形土坑である。断面層序図で分かるようにSD103の埋没後に掘り込まれており、埋土は自然堆積に近く、上部に礫・人工遺物が多数廃棄されていた。

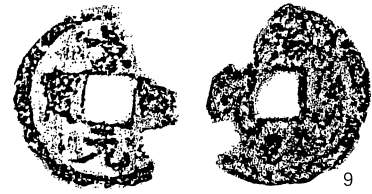
出土遺物 (第214図1～39) 1～18は2～3期の京都系土師器である。1～10・16・17が大型皿、11～15が小型皿である。煤が付着するのは2・3・9の3点で、15は二次的熱のために黒変している。19・21・22・24～26は備前焼である。19は肩部に縦方向の把手が付くが、破片であり4箇所かどうかは不明。21は甕、22は長頸壺、24～26は近世1期の播鉢である。20は須恵器壺、23は青花碗。27・28は土師器の燭台。29は軒先瓦で唐草紋をもつ。30・32は丸瓦、32は雁振瓦、33は塙瓦である。34～



第200图 SD114实测图



第201図 SD114出土遺物実測図

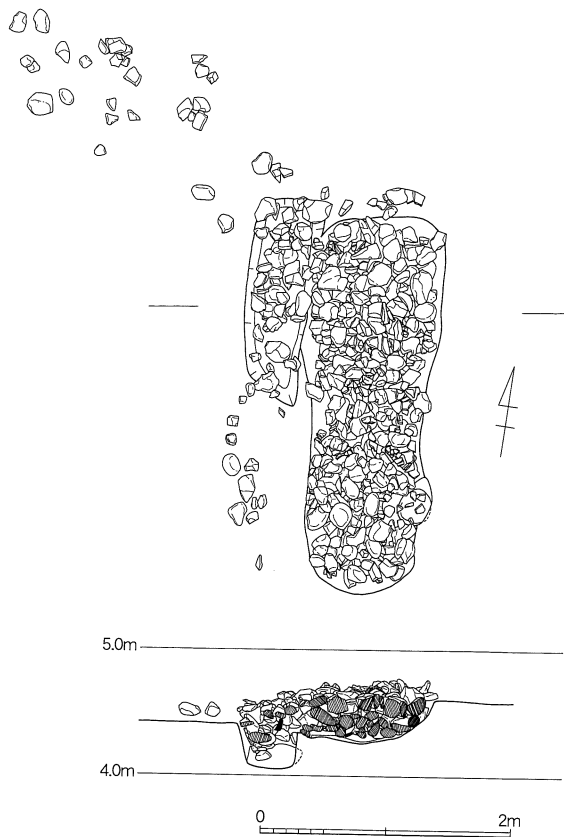


第202図 SD114出土銭貨拓影

36は中国景德镇窯系の青花で、34・35は碗E群、36は皿である。37は華南三彩で、外面の一部に釉のない円形部分がある。38は華南三彩の鳥形水注で、水入れが付く部分の下側にあたる破片である。

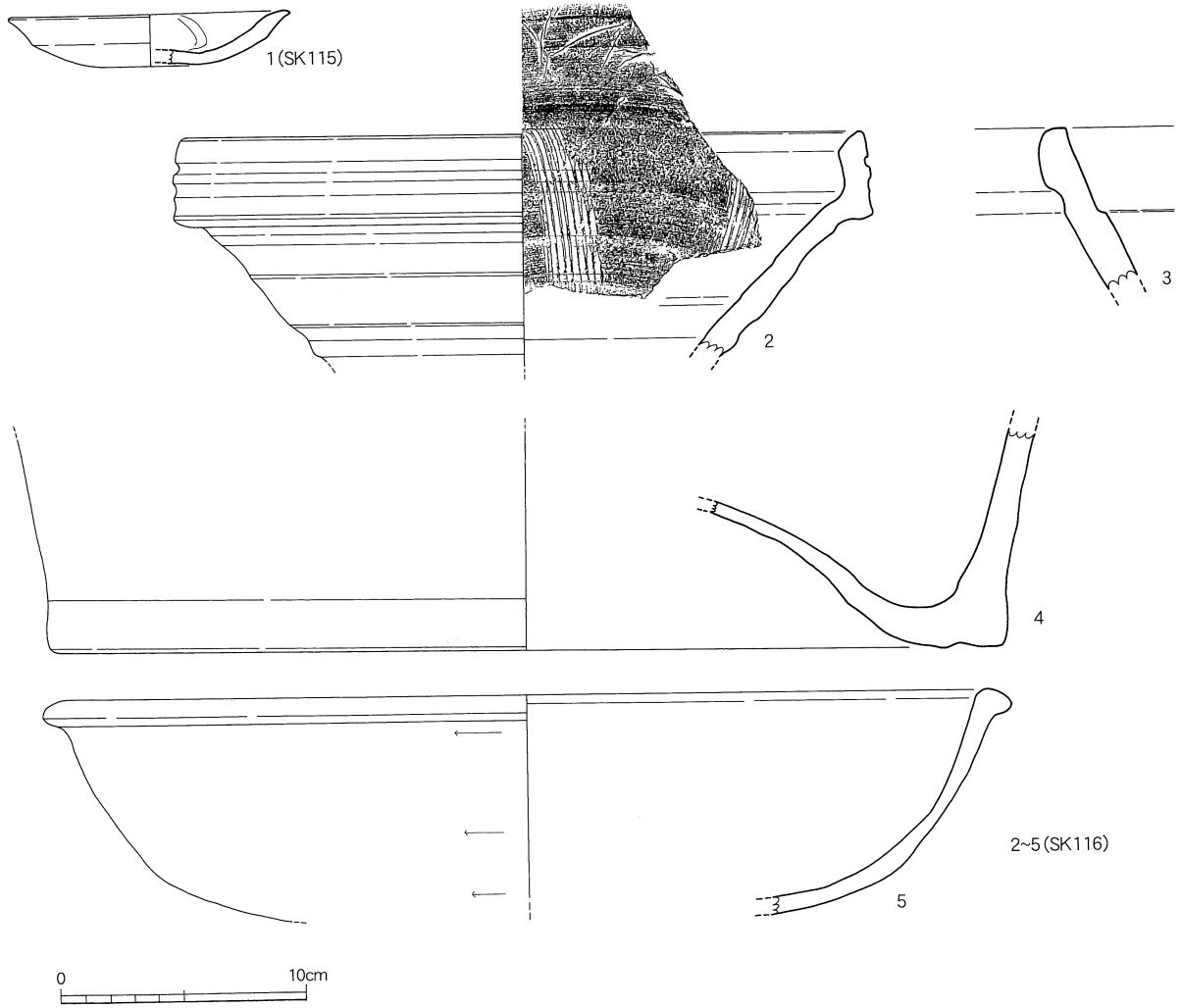
SK128 (第218図) X64区西部にあり、SK140の南に位置し、SD130を切る楕円形土坑である。標高4.59mで検出した。平面規模は1.23m×1.08m。埋土は砂質の黒褐色で、焼土・炭化物を多量に含む。

出土遺物 (第218図1) 1は銘文はあるが字が判読できない。



第203図 SK116実測図

SD130 (第220図) X64区の西部に位置し、ほぼ東西方向に走る細い溝状遺構である。溝の規模は検出した全長が2.9m、幅が0.4~0.5m、深さは0.14mと浅く、もともと東西方向に延長して存在した筈だが、浅いので消滅したようである。一箇所、埋土に礫がまとまって出土しており、これらの出土面をみると深さ0.2mはあったらしい。磁器の判明する出土遺物がないので遺物面から遺構の時期を考えることはできないが検出標高は4.63mであること、SD128に切られること、付近にある同様規模の溝状遺構の状況からみて14世紀前後の遺構と思われる。



第204図 SK115・116出土遺物実測図

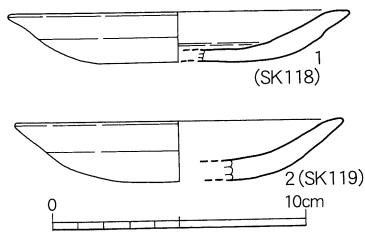
SK131 (第221図) X61区とX62区に跨り、西部に位置する楕円形の土坑である。埋土上部から礫が多数出土した。礫分布は中央部分で空白である。土坑は南北に長く全長2.1m、幅約1.3m、床は東部で浅く中央部は深い。時期の判明する遺物は出土していない。

SK132 W61区・X61区にある土坑である。

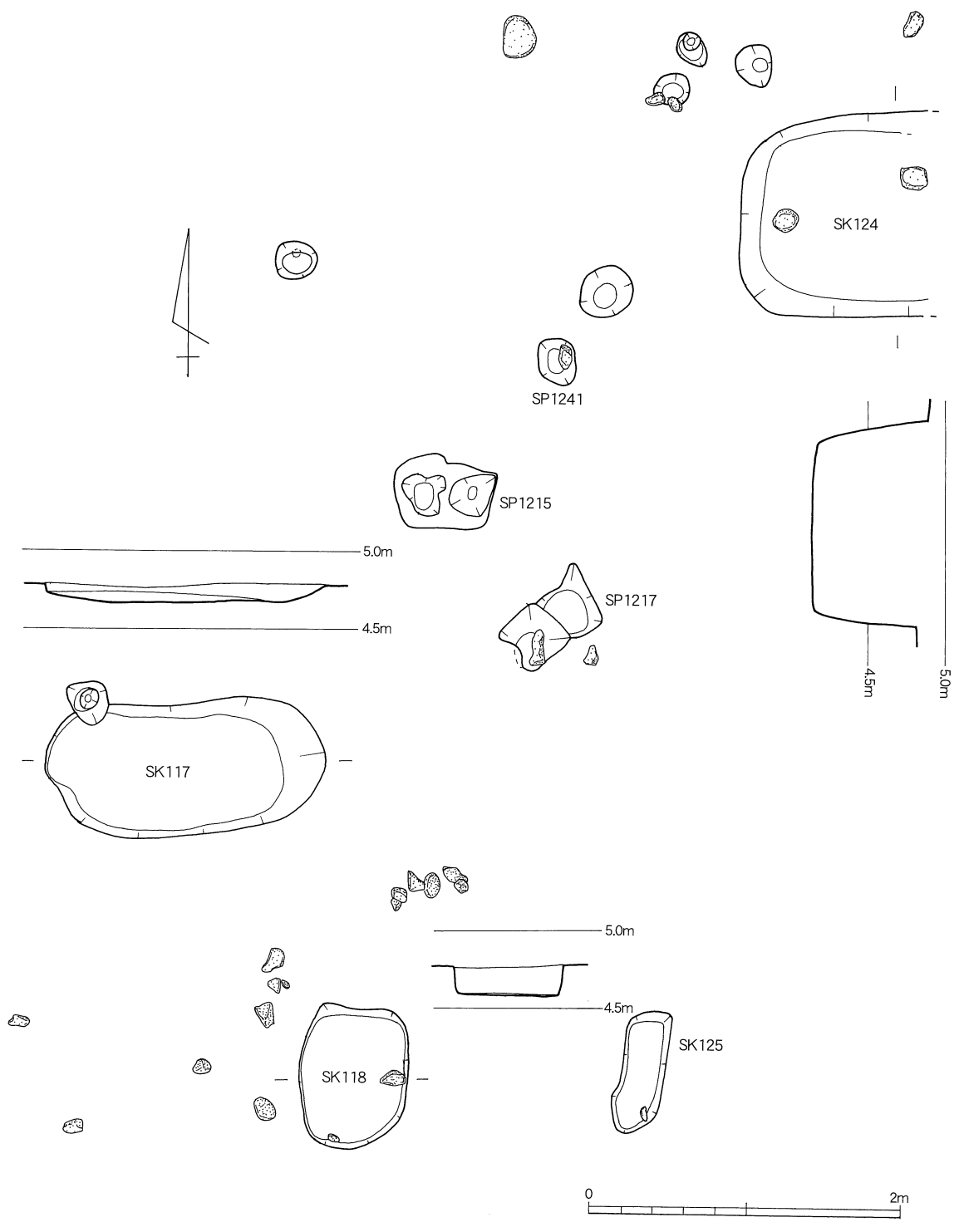
出土遺物 (第223図1) 1は微妙に内面にロクロ目が残る15世紀末葉～16世紀初頭の在地系土師器皿である。

SD133 X61区に位置する深い溝状遺構である。

出土遺物 (第223図1～3) 1は糸切り底の土師器皿である。外底面はナデ仕上げし、体部は外側に緩やかに傾斜し、京都系土師器皿を模したとみられる。2・3は1期の京都系土師器皿である。



第205図 SK118・119出土遺物実測図



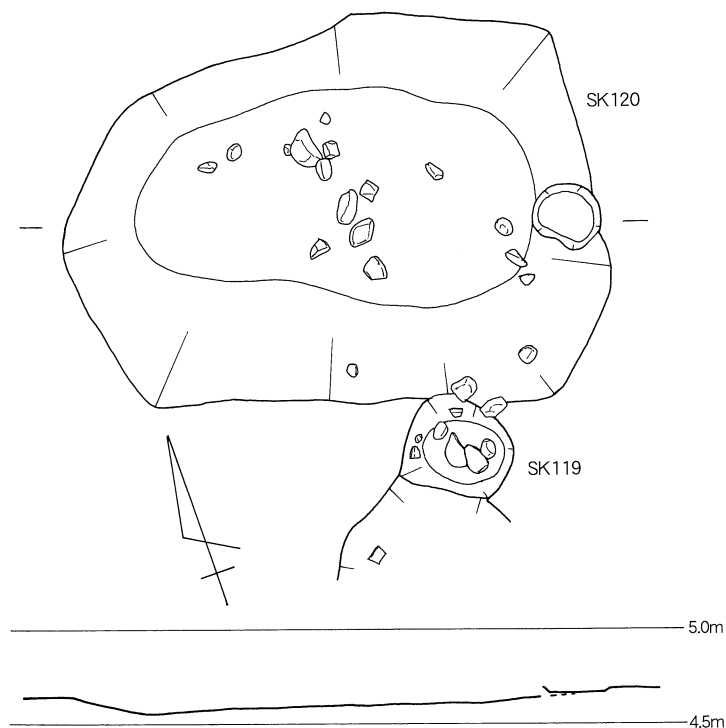
第206図 SK117・118・124・125と周辺実測図

SK135 (第223図) X62区にあり、SD90の床面で検出した土坑である。出土遺物はない。

SK136 (第224図) X62区北部にある円形土坑である。

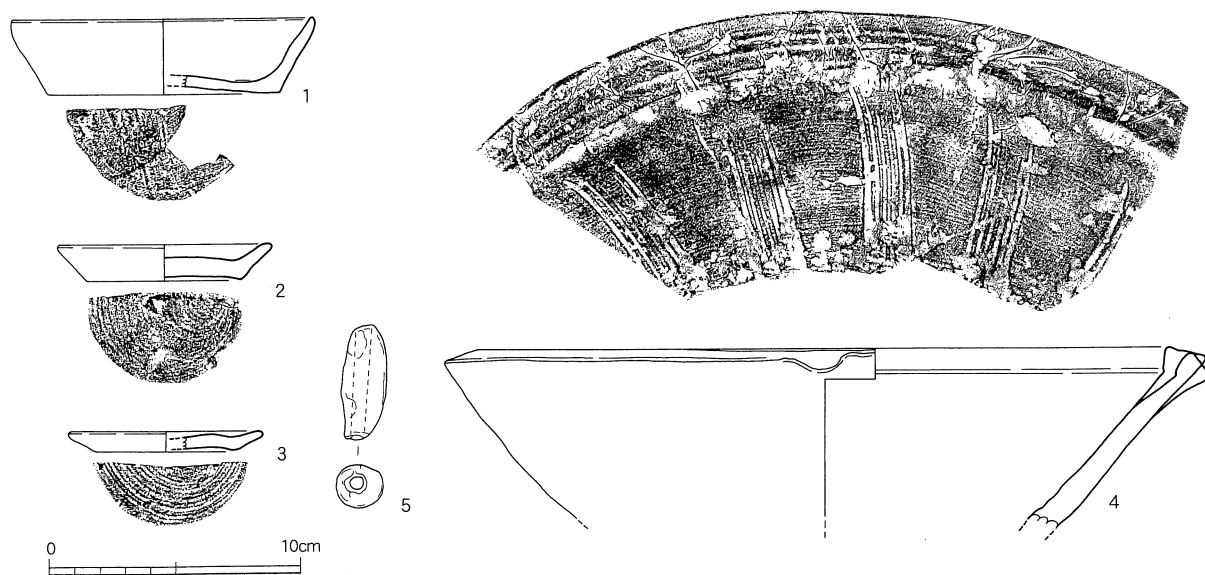
遺構の北部は今回の本調査に先立つ試掘調査時に重機で破壊している。現状で長さ2.3m、幅1.7m+α、深さ0.3mである。

出土遺物 (第225図1~3) 1は中世6期(16世紀初頭~16世紀第3四半期)の備前焼甕である。2は中国景德镇窯系青花碗C群。3は茶褐色のフリント様の六太郎産石材を用いた火打ち石である。三面に原石面を残し、三面に剥離面をもつ。縁辺部の角に小さな打撃痕が目立つ。



第207図 SK119・120実測図

SK137 (第227図) X62区にある平面長方形の土坑である。南北方向に長く、規模は長さ5.9m、

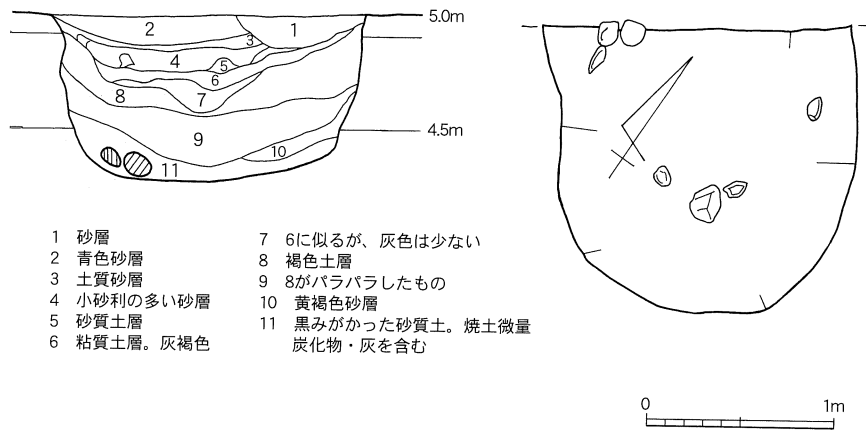


第208図 SK120出土遺物実測図

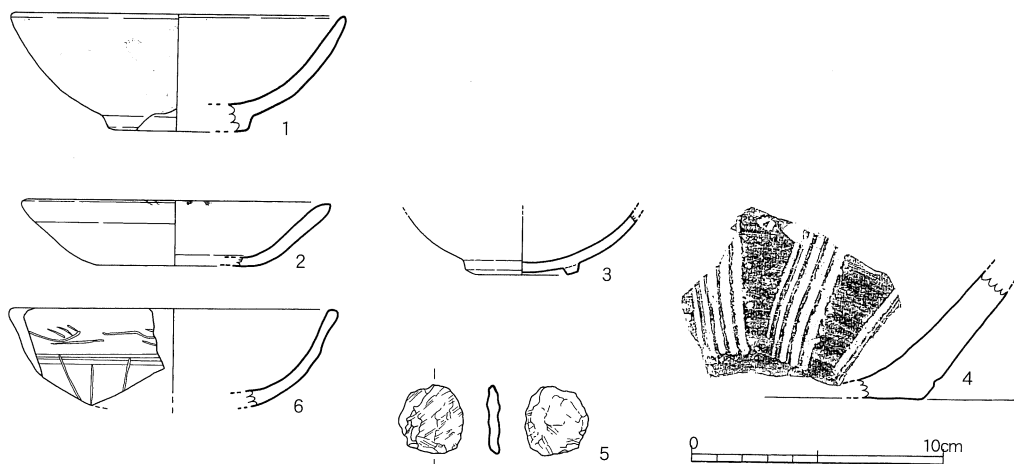
幅4.0m、深さ0.8mでここが出入り口かも知れない。北壁・西壁は垂直に近い状態だが、東と南は緩やかになっている。床面には鍬で掘ったような穴が散在する。南側に接するSK109も同様の遺構であるが、二つの先後関係は不明である。粘土採掘坑であろう。掘り込み面は褐色砂質土であり、下位の褐色シルト層まで掘り下げている。褐色砂質土と褐色シルト層は土師器や瓦質土器の材料にするには粘性が足りず、不向きであろう。であるとすれば、壁土にでも使ったのであろう。土坑の埋土は自然堆積状態である。埋土中から出土したものは土師器皿破片1点のみである。

ある。南西部に階段のような段差があり、出入り口の可能性がある。

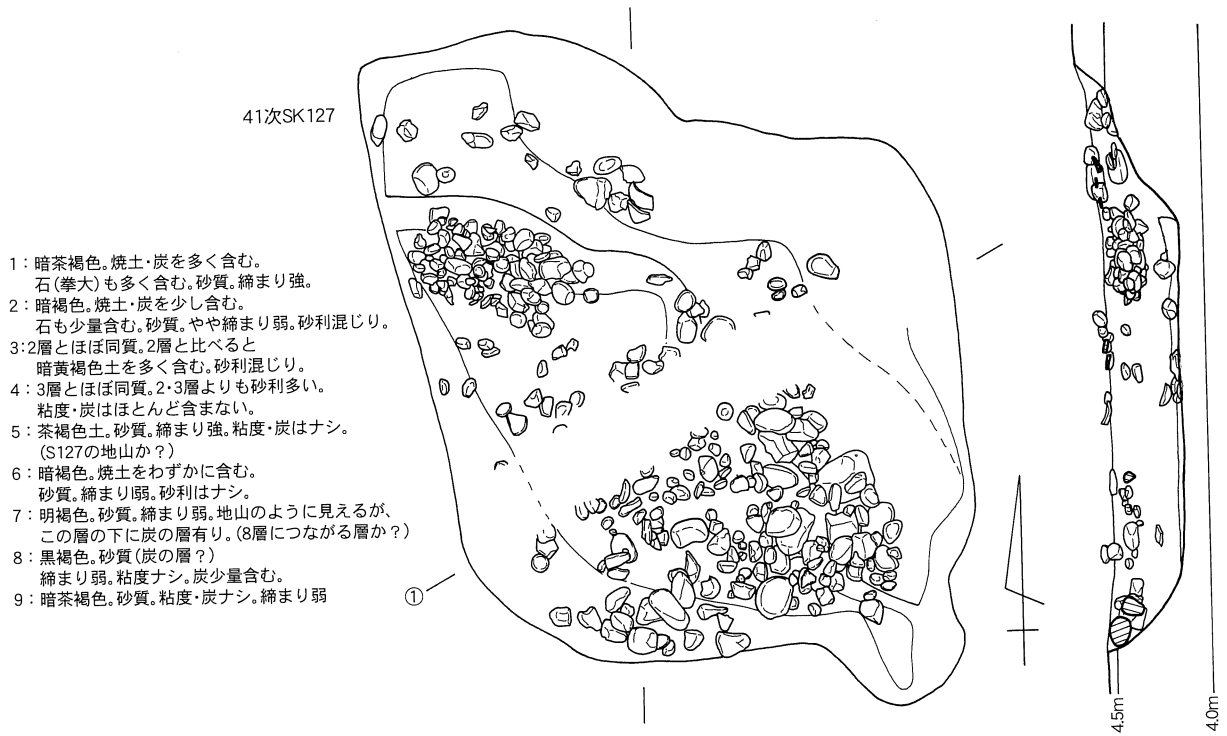
出土遺物 (第226図1) 1は在地系土師器皿で、体部外面は外湾気味に立つ。底部は糸切り離して、口径9.5cm、底径7.0cm、器高1.4cmである。色調は黄褐色を呈する。これだけで判断するのは不確かだが、14世紀初頭であろう。



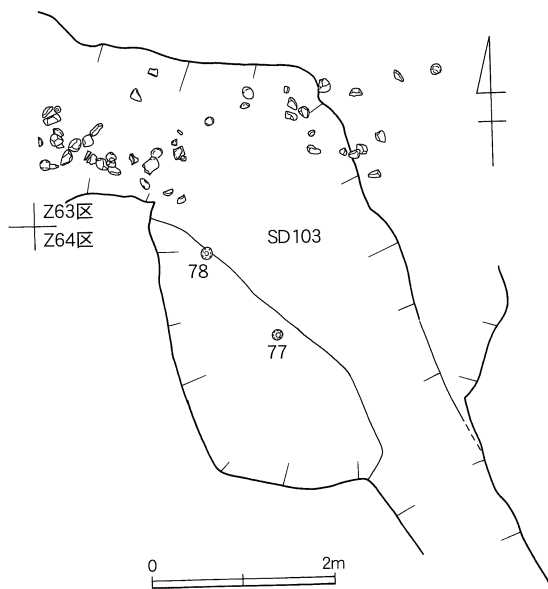
第210図 SK126実測図



第211図 SK125・126出土遺物実測図



第212図 SK127実測図



第213図 SK127実測図

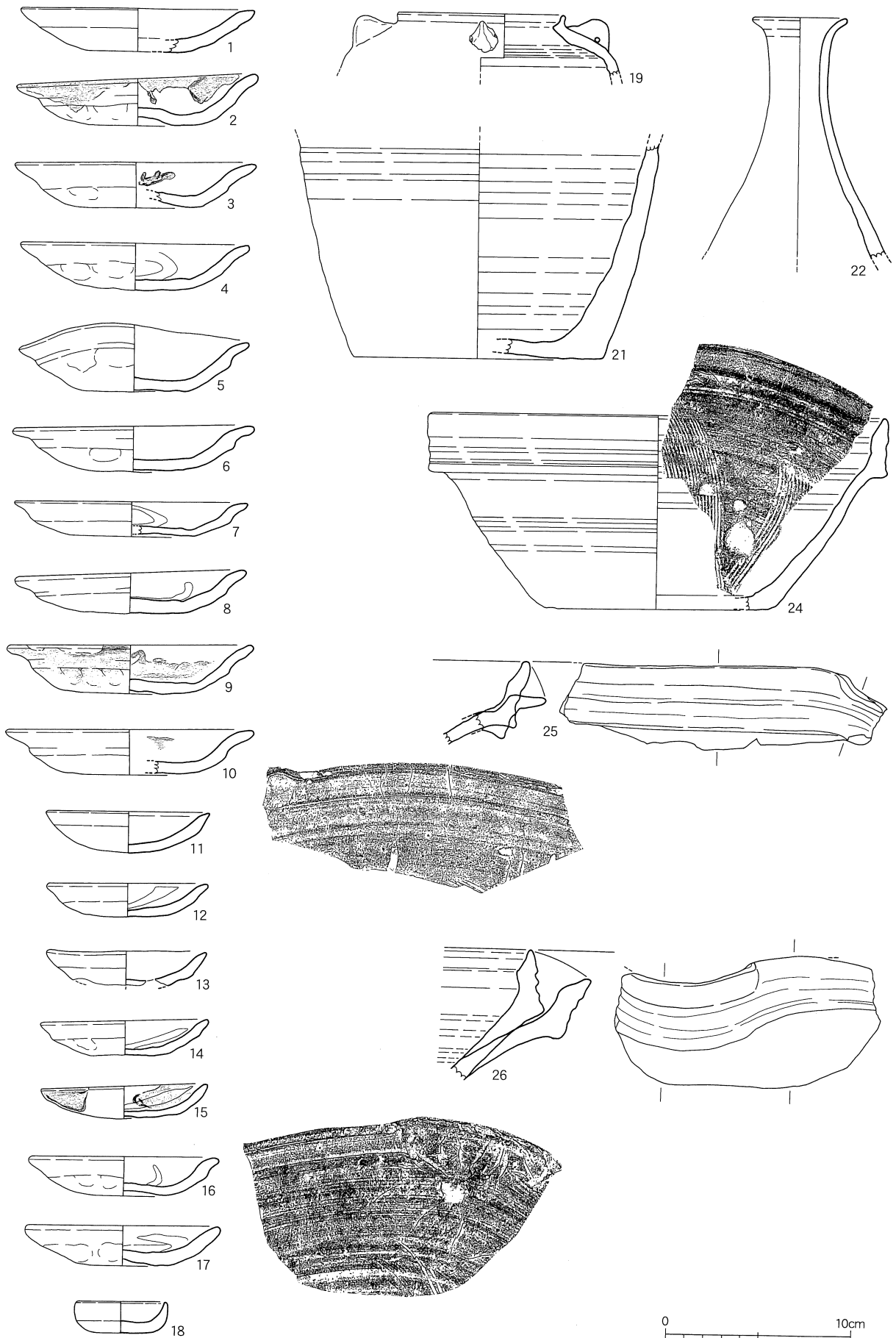
SK138 C63区で検出した土坑である。

出土遺物 (第228図2) 2は安山岩製の土白である。

SK139 W64区の土坑である。

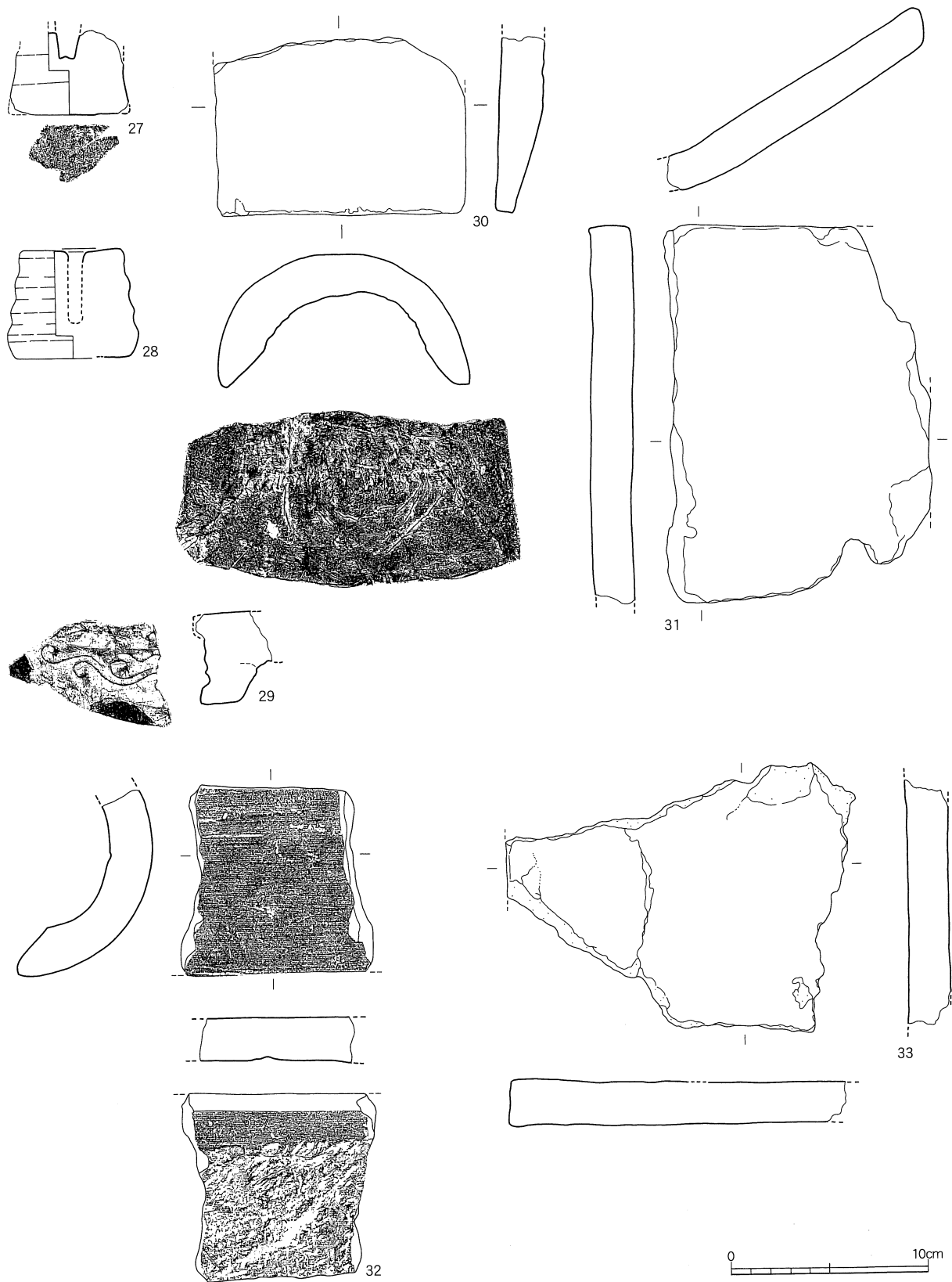
出土遺物 (第228図1) 1は1期の京都系土師器皿である。口径11.6cm、器高2.5cmである。色調は淡灰色を呈する。

SK140 (第229図) W/X区に跨り、63区・64区に跨る平面長方形の深い土坑である。標高4.48mで検出した。図の中央にあるのは掘り残し土手である。SD84・SD103に切られる遺構であり、それらの調査後、0.6m位下位で検出した。検出標高は4.15mである。北西隅に二段、階段状の部分がある。床面は平坦である。規模は長さ6.7m、

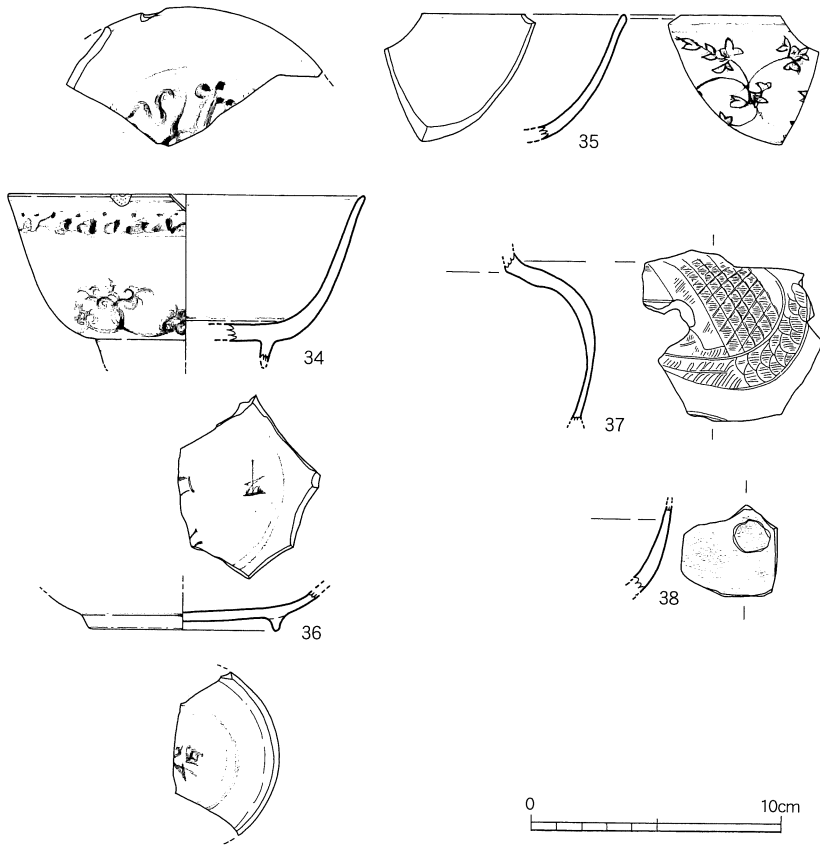


第214图 SK125·126出土遺物実測図①

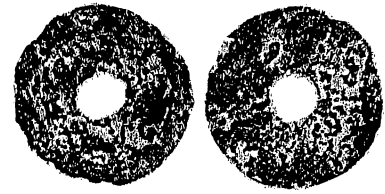
0 10cm



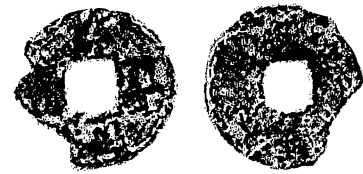
第215図 SK127出土遺物実測図②



第216図 SK127出土遺物実測図③



第217図 SK127出土銭貨拓影



第218図 SK128出土銭貨拓影

幅は広い北部で3.27m、南部で2.25mである。埋土中の南部で礫が少量出土し、図化したのは土錘1点である。北側に類似遺構であるSK137・109があり、このSK140も粘土採掘坑だと思われる。

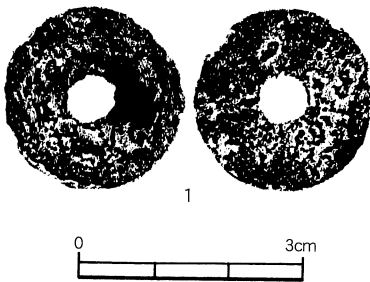
出土遺物 (第230図1) 土錘1点が出土した。1は土師質の土錘で、一端を欠損している。現状の長さは2.7cm、幅は1.2cm、重さは2.6gである。

SK141 土抗である。

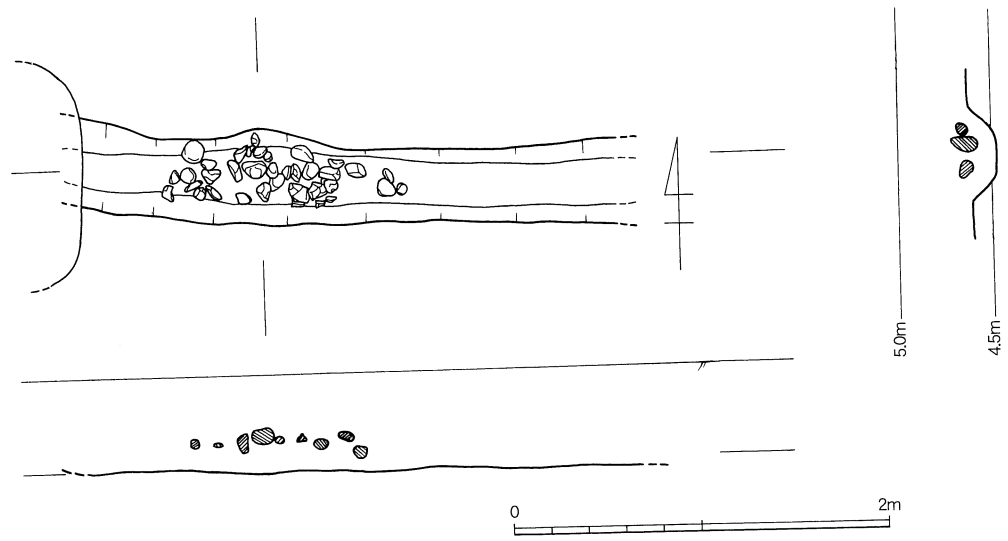
出土遺物 (第231・232図1~6) 1は3期の深い京都系土師器杯、2は埴瓦、3・4・6は銘文判読不能の銭貨、5は紹聖元宝(北宋1094年初鑄)。

SK142 (第233図) X63区・Y63区にかけて位置する平面楕円形の土坑であり、SD165を切る。長さ3.3m、幅2.4m、深さ0.3mである。埋土中に礫・土師器を含むが、自然堆積した状態である。

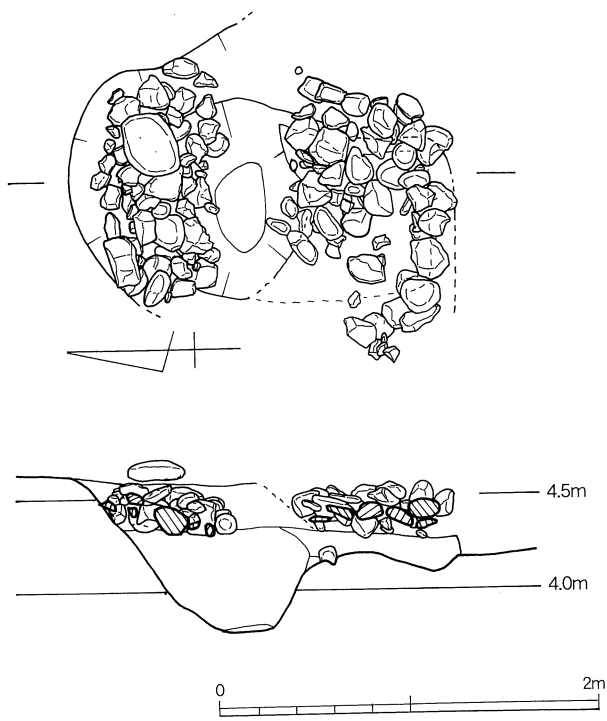
出土遺物 (第234図1・2) 1・2は2期の京都系土師器皿である。1は口縁部に煤が付着する。2は図示したように1/4強の破片であるが、焼成後の穿孔が二つある。穴は内側から突いて外側に開いたようになっている。



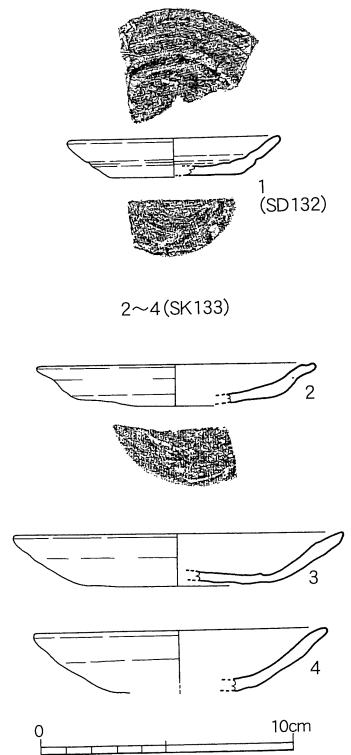
第219図 SK127出土銭貨拓影



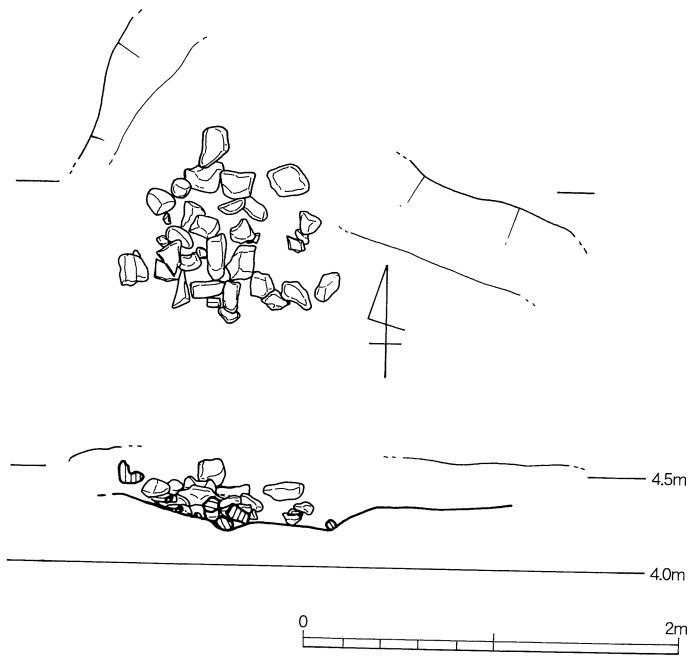
第220図 SD130実測図



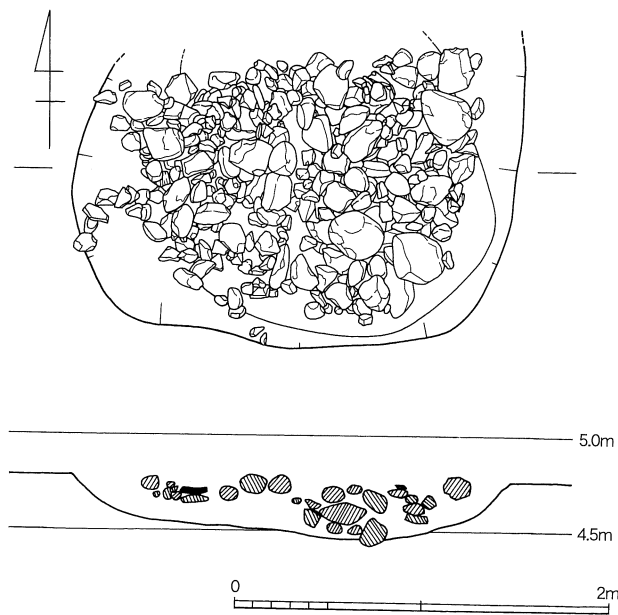
第221図 SK131実測図



第222図 SD132・SK133
出土遺物実測図



第223図 SD135実測図



第224図 SK136実測図

SK143 (第235図) X63区・Y63区にあり、SK142に並んで平衡状態で存在する平面楕円形の土坑である。床面は二段に分かれる。検出標高は4.0mで、規模は長さ2.55m、幅2.05m、深さ0.8mである。埋土中、北部に礫・土器が若干出土した。

出土遺物 (第236図1~8) 1~4は在地系土師器である。1は14世紀末~15世紀前葉の皿で、2~4はその頃の杯である。5~8は1期から2期の京都系土師器である。遺物が二時期に分かれるので、同一場所での遺構の重複があるのか、単なる混在出土なのか分からない。

SK144 (第237図) B63区にあり、標高4.9mで検出した土坑である。深さ0.75m。

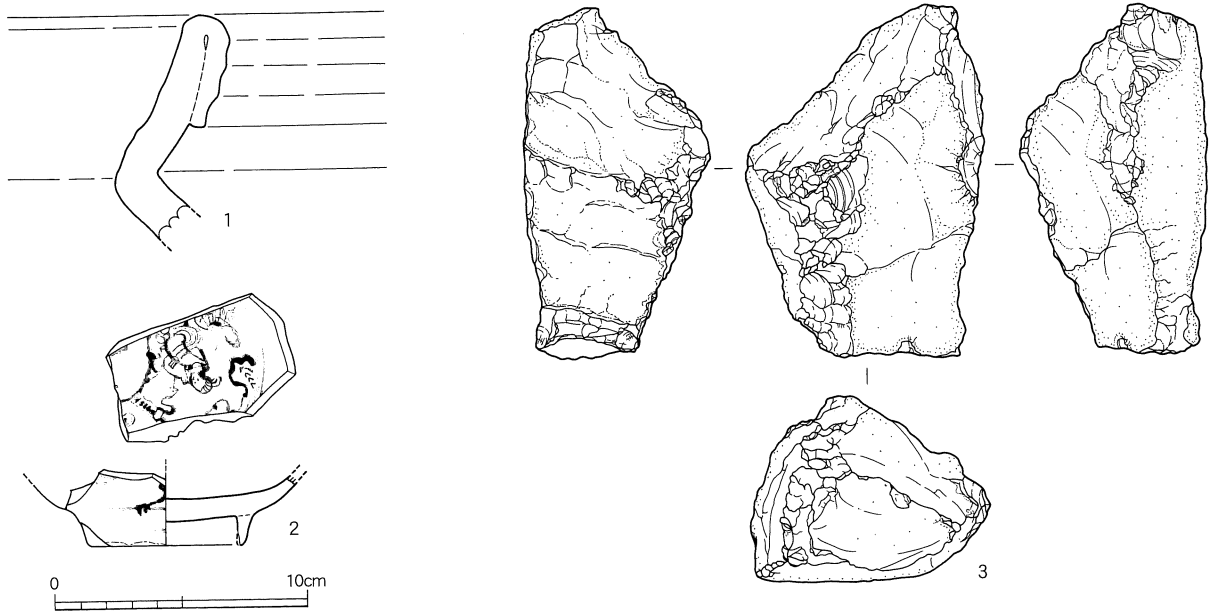
出土遺物 (第238図1~3) 1は2期の京都系土師器大型皿、2は小型皿である。3は青磁碗で、高台両面にも釉がかかる。

SK145 V63区にある溝状遺構である。SD103の北側に平行状態で存在し、SK105・SK123の下層で検出した。SD145の西端はSD114が屈折する位置にあり、東端はSD112とぶつかって消滅する。

出土遺物 (第239図1~14) 1~13は土師質の土錘、14は青磁輪花皿で、見込みは蛇の目状に釉を剥いている。外面下部には浅く縦方向の溝が並ぶ。高台両面から内側は無釉である。

SK146 (第240図)

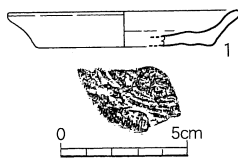
Y62・63区西部にある楕円形土坑である。北東部ではSK147を切り、南西部ではSK143に切られる状態で検出した。規模は長さ約3m、幅2.3m、深さ0.6mである。内部には多量の礫が詰まっていた。3期の京都系土師器の存在から16世紀後葉~末葉の遺構であろう。



第225図 SK136出土遺物実測図

出土遺物 (第241図1~8) 1は在地系土師器杯、2~7は京都系土師器である。2は深めの器形、3~6は大型の皿、7は小型の皿で、口縁部に煤が付着する。3・6は2期、他は3期である。8は安山岩製の容器。

SK147 (第240図) Y62区南西部にあり、SK146と重複する二基の土坑が重複した土坑である。南部の土坑は方形で北部は消滅し中央部に重複らしい別の土坑があり、全体の規模は2.6m×(2+α)mである。北部の土坑は不整形でこれも南部に別の小型土坑が重複している。全体の規模は2m×2m程度である。この付近にはSK142・SK143・SK146・SK147・SK193等のゴミ穴とみられる土坑群が集中しており、土地利用の固定化された様子を反映している。内面にロクロ目を残す在地系土師器と1期の京都系土師器の存在から、15世紀末~16世紀初頭の遺構と判断した。

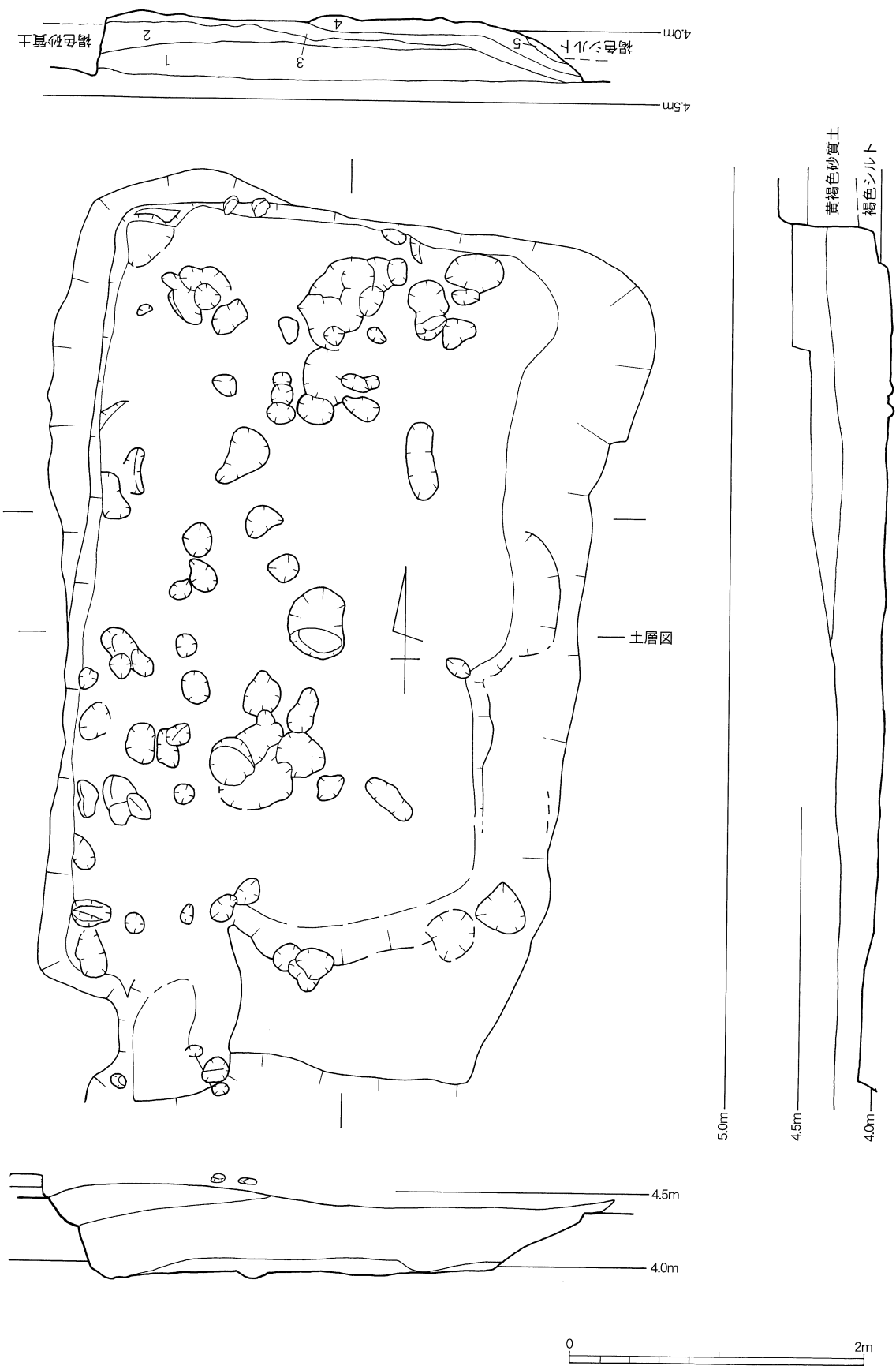


第226図 SD137
出土遺物実測図

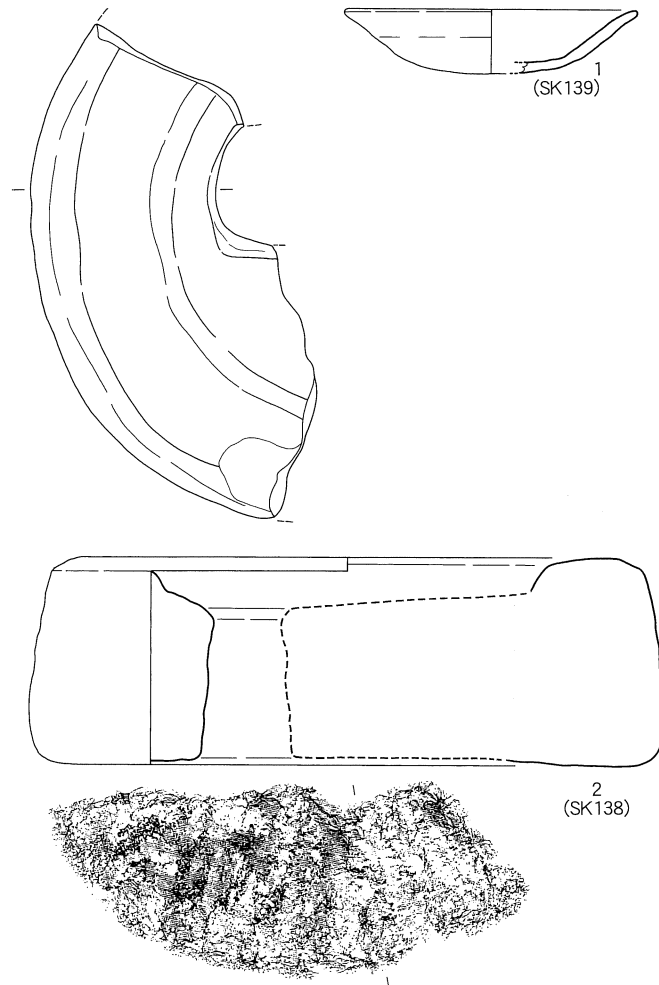
出土遺物 (第241図9~12) 9・10は内面にロクロ目を残し、底部を糸切り放した在地系土師器皿であら、器形は異なる。9は体部がゆるやかに直線的に外反するとともに体部の厚さが均等で、10は体部が外湾し、かつ下部に厚みがある。11は1期の京都系土師器皿である。12は軒平瓦で胎土に石英を含む。紋様は太めの唐草紋である。

SK148 (第243図) X63区にある平面円形の土坑である。標高3.85mで検出した。土坑の規模は2.15m×1.8m、深さ1.0mである。断面はラッパ状に開き、中位に礫が集中する状態であった。出土遺物から14世紀前葉の遺構である。

SK149 (第242図) V64区にありSD84に囲まれた内部に位置する不整形の土坑である。規模は2.82m×1.58m、深さは48cm。内部から骨が1点出土した。



第227図 SD137実測図



第228図 SK138・139出土遺物実測図

SK150 (第270-2図) Z62区西部にある平面が小型円形の井戸である。調査区外縁部にあり、完掘すると外側の高い耕作地に影響を及ぼすことが予想されたので半割調査を途中までで止めた。断面層序の観察では井側は残っていなかったが中央部を縦方向に貫く土層の存在から桶の井側であったと考えられる。図化する遺物がないので正確な時期は不明である。

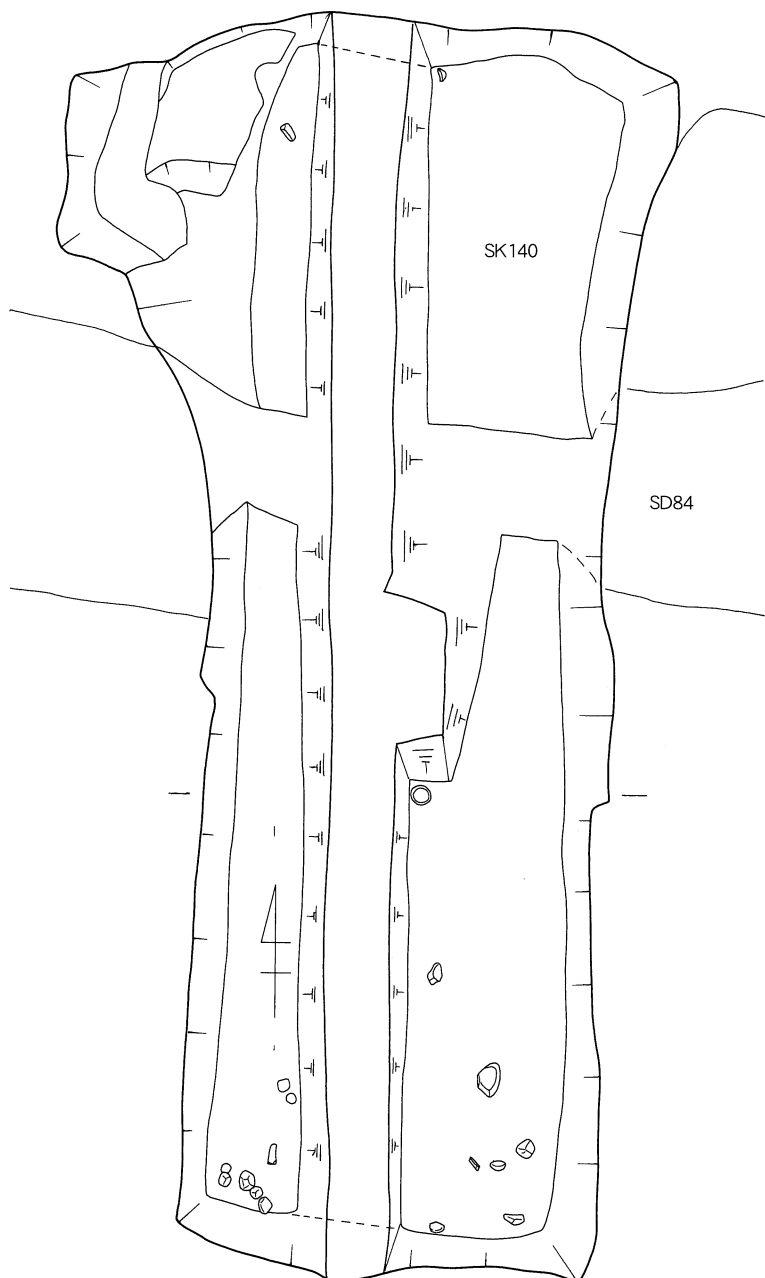
SK151 B63区にある溝状遺構で、SD169と同一である。

出土遺物 (第245図1~5) 1~4は在地系土師器で、1~3が皿、4が坏である。1~3は口縁部が厚く底部近くで薄くなる共通点がある。4は体部が内湾して立ち上がる。5は瓦質土器の鉢である。内面は刷毛で横方向の調整を行い、口縁部周辺はナデ調整している。

SK152 A64区にある焼土の入った浅い土坑である。半分は第36次調査区にある。

出土遺物なし。SK152~155は同一図面としてまとめて図化せよ。

SK153 Z64区東北部に主体があり、一部A64区に延びた楕円形の浅い土坑。出土遺物なし。



SK154 SK153の南側に位置する不整形の土坑である。出土遺物なし。

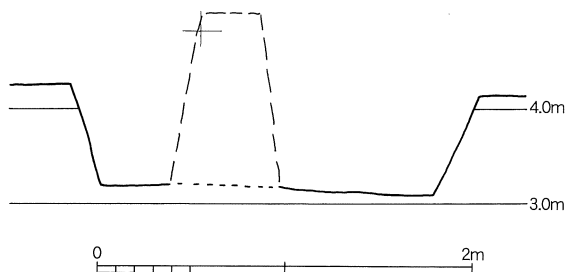
SK155 A64区南部にあり、K154の南側に位置する。14世紀初頭の遺物が出土した。

出土遺物 (第242・245図1~3)
1は在地系の土師器皿で、体部が内湾気味に立つ。2は鬼瓦で、板状部表面側に円形刻印3個を付けている。胎土は石英を少し混入する。3は元豊通宝(北宋1078年初鑄)である。

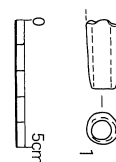
SK157 (第246図) C64区にあり、中世の斜行道路面よりも低い位置で検出した。SD205の西側に位置する。出土遺物なし。

SK158 (第248図) Z63区にありS124の南に位置する土坑である。検出標高は4.59m。出土遺物から16世紀中葉から後葉の遺構であると推定する。

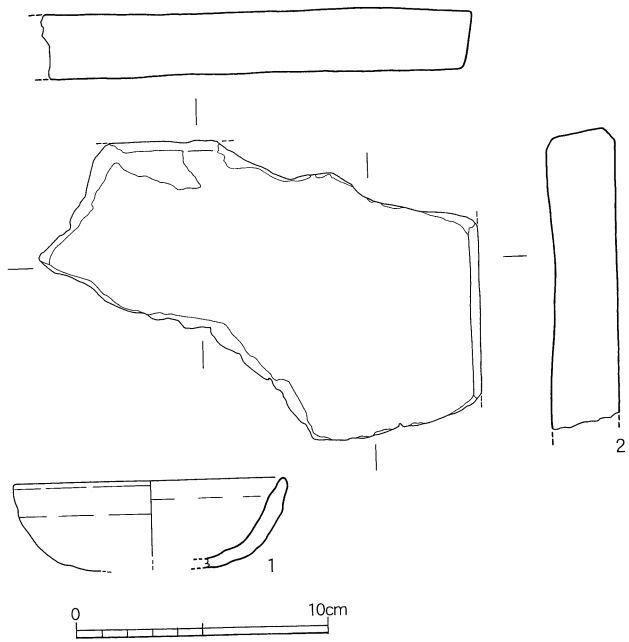
出土遺物 (第247図1) 1は2期の京都系土師器皿である。



第229図 SK140実測図



第230図SK140
出土遺物実測図



第231図 SK141出土遺物実測図

SK159 B63区にある溝状遺構である。長さ3.5m、幅0.5m、深さ0.3mである。中世の斜行道路を構成する遺構である。検出標高は5.03m。

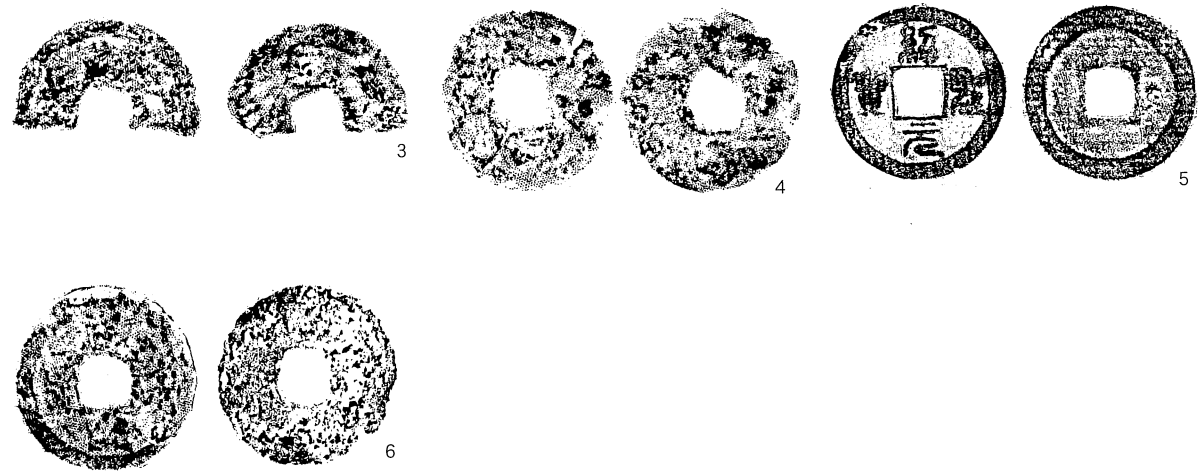
出土遺物 (第247図1) 1は1期の京都系土師器皿である。

SK160 (第305図) Y63区にある土坑である。

出土遺物 (第247図1) 1は古代の平瓦である。凹面には布目痕があり、凸面には平行叩き痕がある。石英を少し混入する。

SK161 (第305図) Y63区にある井戸である。出土遺物から16世紀前葉の遺構と判断した。

出土遺物 (第249図1~3)
1・2はロクロ目を残す在地系土師器皿で、二点とも体部が外反する。3は京都系土師器である。



第232図 SK141出土銭貨拓影

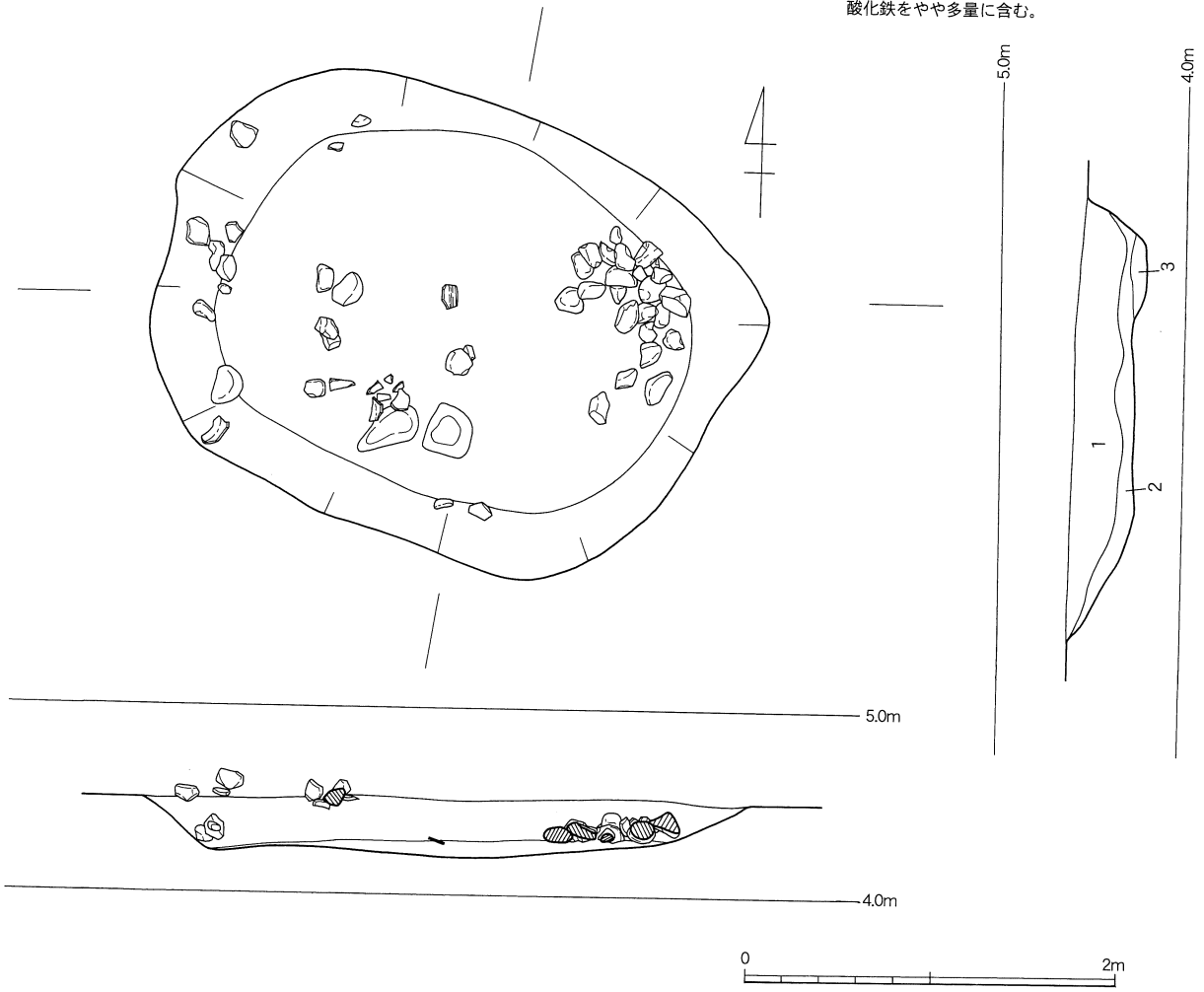
SK162 Z64区に北東部ある小型の浅い土坑である。79cm×68cmで深さ3cm。出土遺物なし。

SK163 (第248図) Z63区南東部にあり、標高4.74mで検出した土坑である。

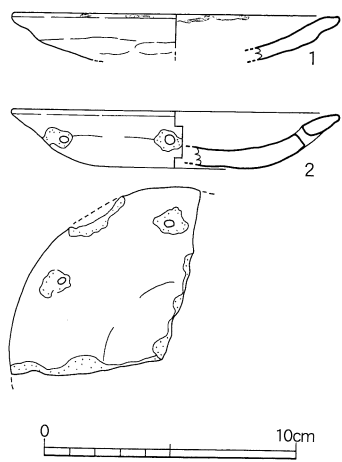
出土遺物 (第249・250図1~7)

1~4は3期の京都系土師器皿である。5は瀬戸美濃製の天目碗。

- 1: 黒褐色土層 粘性なし、締まりあり。
白色粒子を多く含む。酸化鉄をやや少量に含む。
- 2: 黒褐色土層 粘性あり、締まりあり。
白色粒子を少量含む。酸化鉄を少量含む。
第1層より暗く灰色が強い。
- 3: 黄灰色土層 粘性なし、締まりやや弱い。
酸化鉄をやや多量に含む。

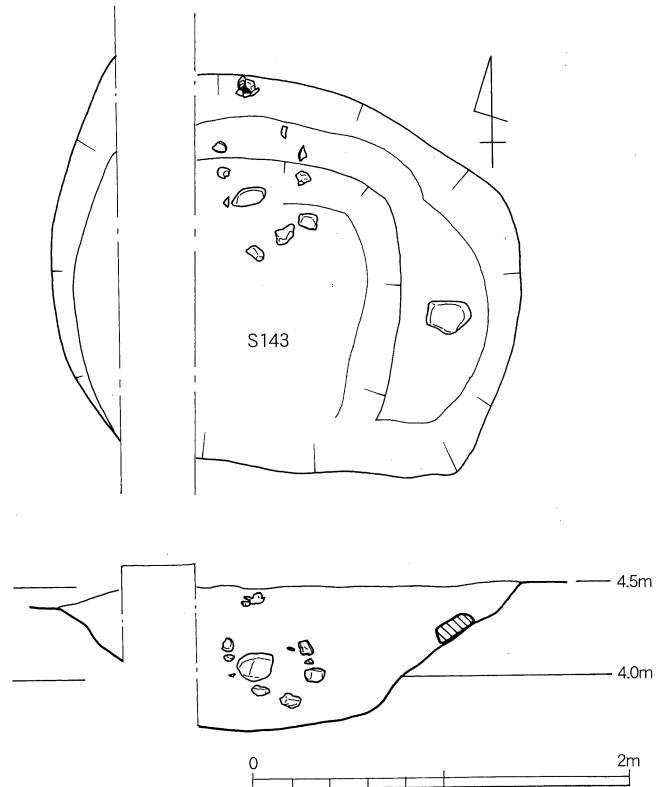


第233図 SK142実測図

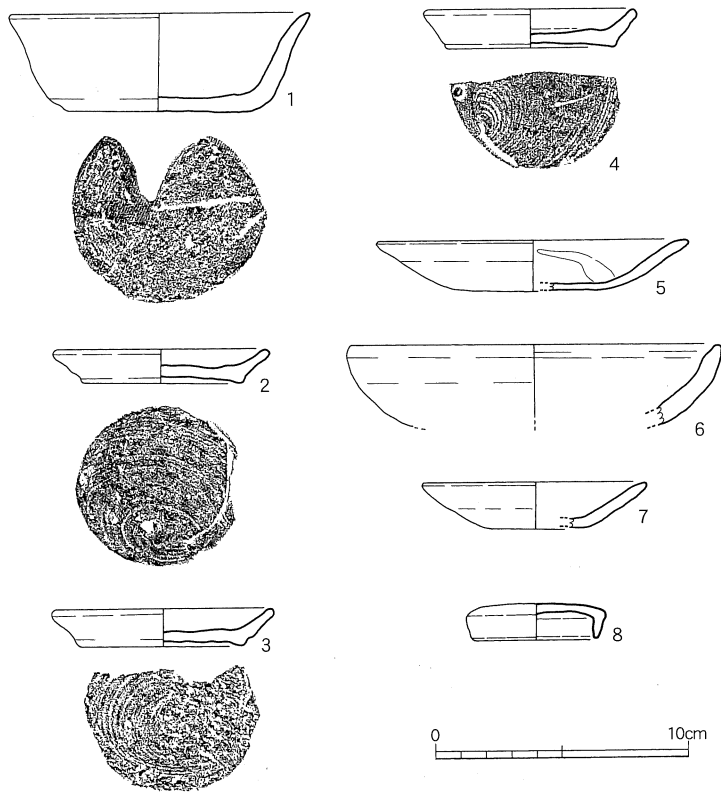


第234図 SK142出土遺物実測図

6は皇宋通宝（北宋1038年初鑄）。7は元豊通宝（北宋1078年初鑄）。
SK164 A64区からA63区の東部に位置する井戸である。井側は南端部にあり、礫が投げ込まれていた。検出面の標高は4.76mで、平面形は楕円で規模は2.43m×1.93m。
出土遺物（第251図1～7） 1～4は2期の京都系土師器皿、5は京都系土師器の耳皿である。6は軒平瓦。7は青磁皿。釉色は緑色である。底面には一箇所石が付着している。



第235図 SK143実測図



第236図 SK143出土遺物実測図

SK165 X62区西北部からX63区北東部に至る細い溝状遺構である。検出標高は南端部で4.43m、幅は約55cm、深さは20cm前後である。

出土遺物（第251図8） 8は瓦質土器の鉢。

SK166 X62区の土抗である。

出土遺物（第251図9） 9は土師質の土錘。

SD170（第252図） V60区からT59区までほぼ東西方向に走る溝状遺構である。西端部は調査区外に及ぶ。東部でSD235に切られている。

出土遺物（第254図1～5） 1・3は京都系土師器で、1と3は煤が付着する。

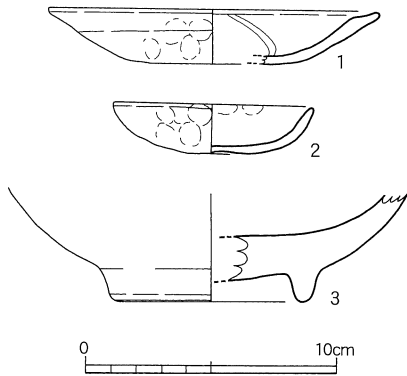
1は糸切りの底部である他は器面をナデ調整しており、京都系土師器を模した形態である。4は瓦質土器火鉢である。5は景德鎮青花碗。6は鉄製品で、把手か。

SE171 (第256図) T62区にある井戸である。平面形は検出面は2.85m×2.6mの円形で、床面は1.73m×1.6m、床面の標高は2.23m、最下部は1.86m。床面から円形の掘り下げた穴に曲げ物の井筒を三段置き、床面に板で四方を囲み、さらに縦方向に一段板を廻らしている。上端部も四角に板を配置している。井筒の内部には礫が投げ込まれていた。

出土遺物 (第257図1) 1は在地系土師器杯である。短い体部が立ち上がっており、14世紀初頭頃と推定する。

SK172 (第258図) Z64区にある礫を集積した土坑である。

出土遺物 (第260図1~5) 1は在地系土師器皿で、2は3期の京都系土師器である。口縁部に煤が付着する。3は中世6期の備前焼播鉢である。4は凝灰岩製で、外形は角張り、片面を窪ませている。5は結晶片岩製の砥石で、表裏両面を使っている。



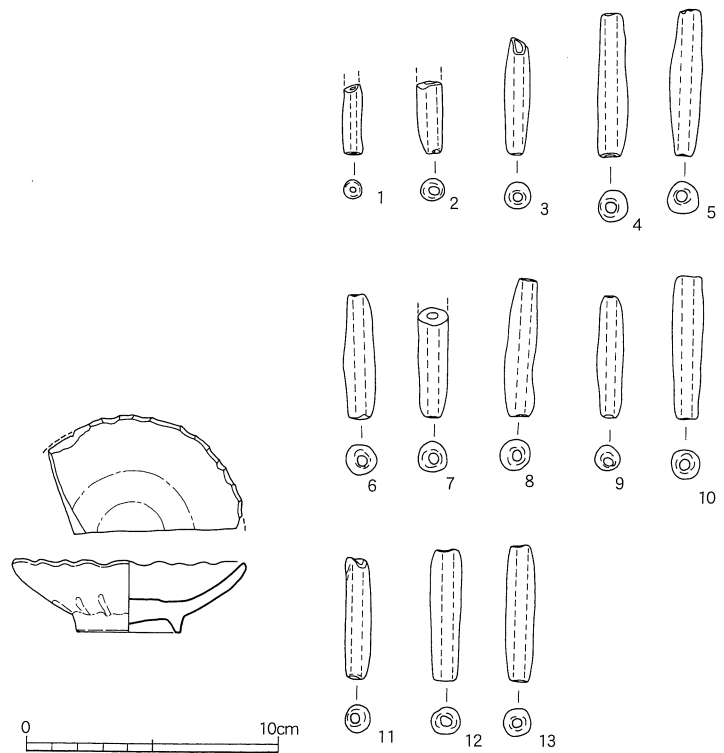
第238図 SK144出土遺物実測図

SK173 (第259図) Z64区にある集石遺構である。出土遺物で年代の分かるものはなかった。

SK174 (第261図) D62/63区の調査区北部にある大型の円形土坑である。

出土遺物 (第263図1~16) 1~13は3期の京都系土師器である。4・7は口縁部に煤が付着する。14・15は中国景德鎮窯系の青花で、1は皿、2は饅頭芯碗である。16は漳州窯系の青花皿である。

SK175 (第264図) D64区にある略円形土坑である。埋土中位から遺物・礫が投げ込まれた状態で出土した。



第239図 SK145出土遺物実測図

出土遺物 (第265図1~13) 1~11は在地系土師器である。1~3・4は皿で、他は坏である。1・2は外底面に板状圧痕が残る。これらは14世紀初頭の遺物である。12は東播系須恵器のこね鉢である。13は瓦質土器の鍋である。短い口縁部が内面に稜をもって屈折する。

SK176 (第266図) T59区の調査区端部で検出した土坑である。底から検出面まで礫が密集した廃棄土坑である。年代の分かる出土遺物はないが、16世紀後葉であろう。

SK177 (第267図) D63区にあり、SK38に切られた土坑である。

出土遺物 (第268図1) 在地系土師器である。

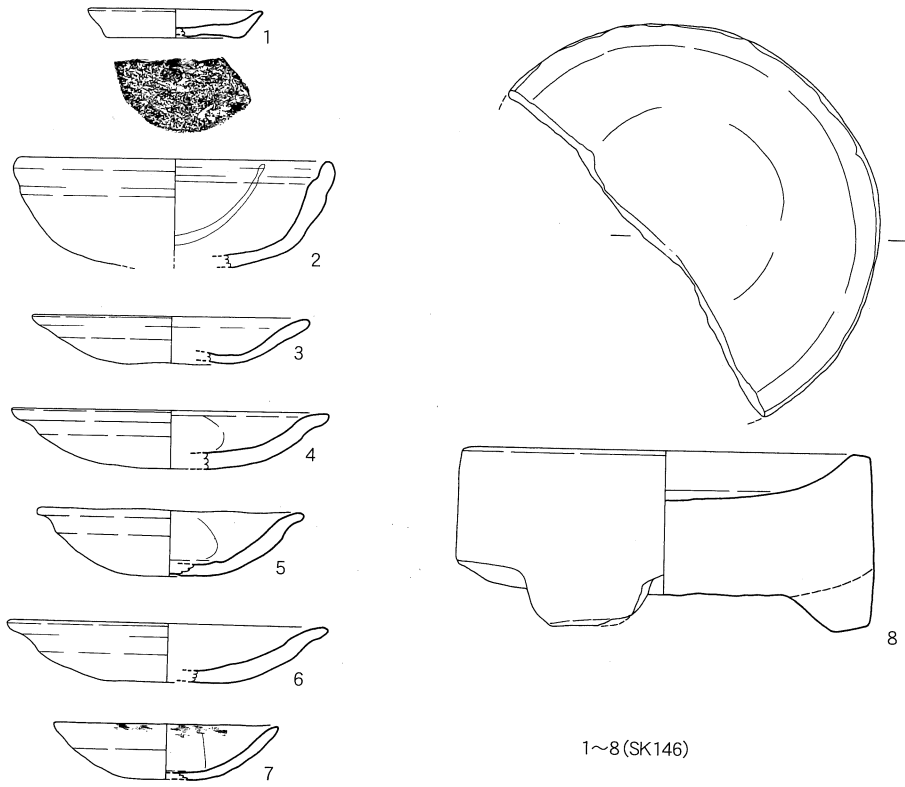
SK178 (第図なし) D64区にあり、SK81に切られた土坑である。

出土遺物 (第268図3) 3は在地系土師器皿である。

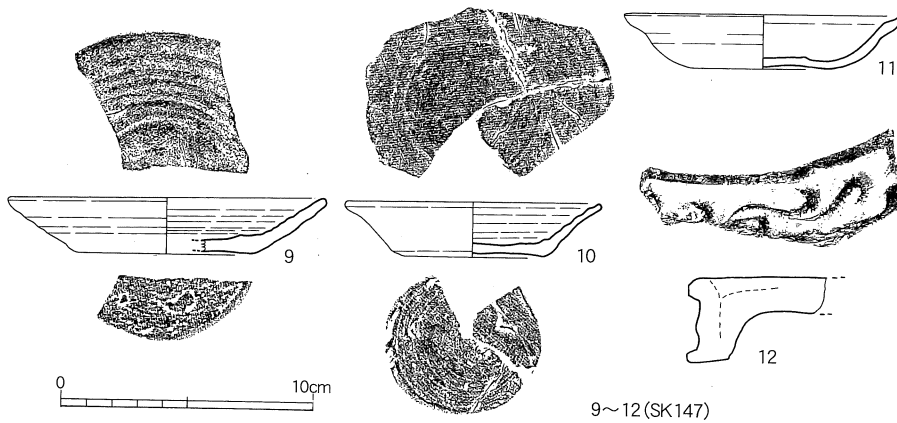
SK179 (第261図) D64区にある楕円形土坑である。西部をSK4・SK180に切られる。



第240図 SK146・147実測図

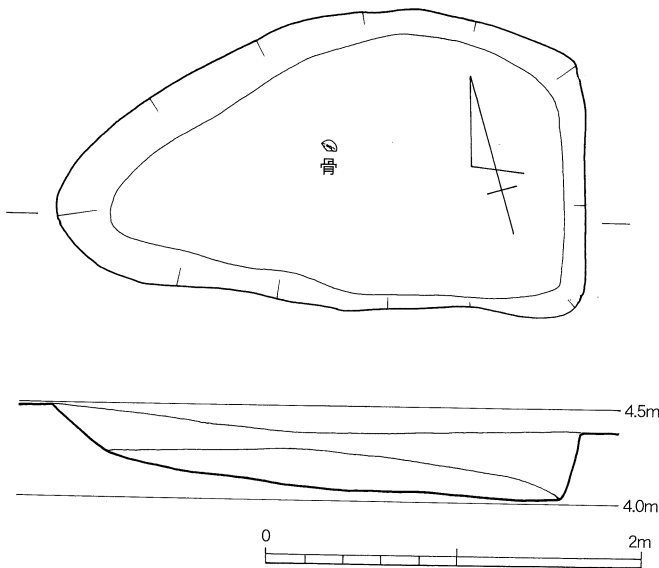


1~8(SK146)



9~12(SK147)

第241図 SK146・147出土遺物実測図



第242図 SK149実測図

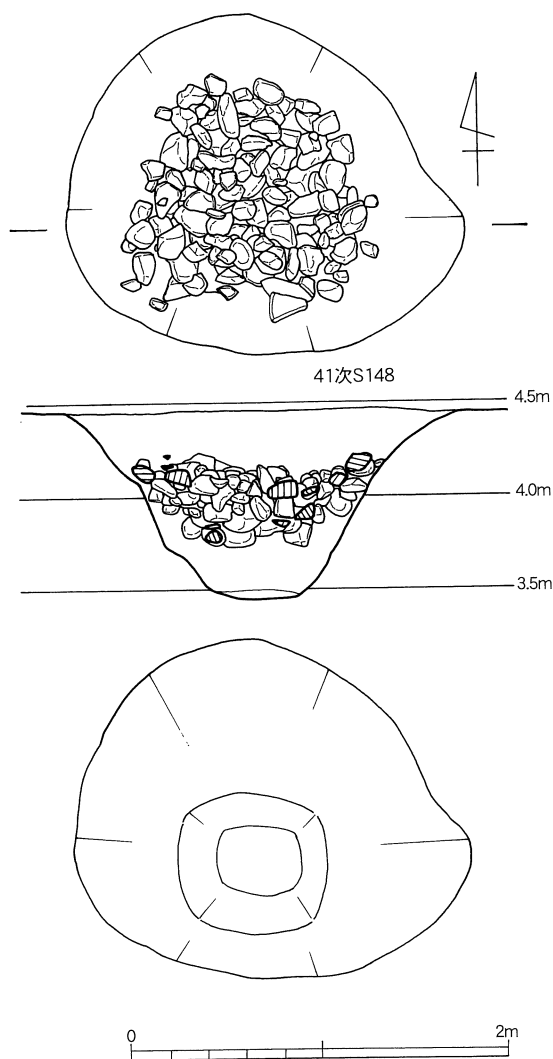
出土遺物 (第268図4) 4は京都系土師器の小皿で、口縁部に煤が付着する。

SK180 (第268図) D63区にあり、SK179の西部に重複する。

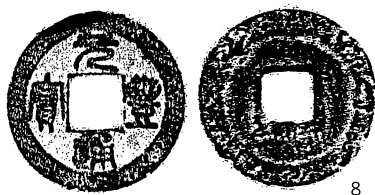
出土遺物 (第268図2) 2は3期の京都系土師器皿である。

SK181

出土遺物 (第268図1) 1は備前焼の鉢である。



第243図 SK148実測図



第244図 SK155出土銭貨拓影

SK182・183 (第269・270図)

C63/D63区に位置する土坑である。初め礫の集中部として掘り下げたところ、南部から方形土坑が出土したので、南部をSK182、北部をSK183としたが、波線で示したようにSK182の後からSK183が掘り込まれた可能性がある。遺物面での時期差はなく、京都系土師器が登場する直前の15世紀末葉～16世紀初頭である。SK182の検出標高は5.0mである。

出土遺物 (第270図1～5) 1～5は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。1はSK182の床面出土、3～5はSK182上部出土である。

SK201 (第271図) C63区にある長方形の土坑である。SK184の床面の東部が深くなっており、これをSK201とした。SK184の外郭線と一致している。出土遺物から見てSK201が新しく掘り込まれた遺構である。

出土遺物 (第276図1～4) 1～3は2期の京都系土師器。4は瓦質土器の鉢である。口径は28.4cm。器面調整は内面を横刷毛、外面をナデ。

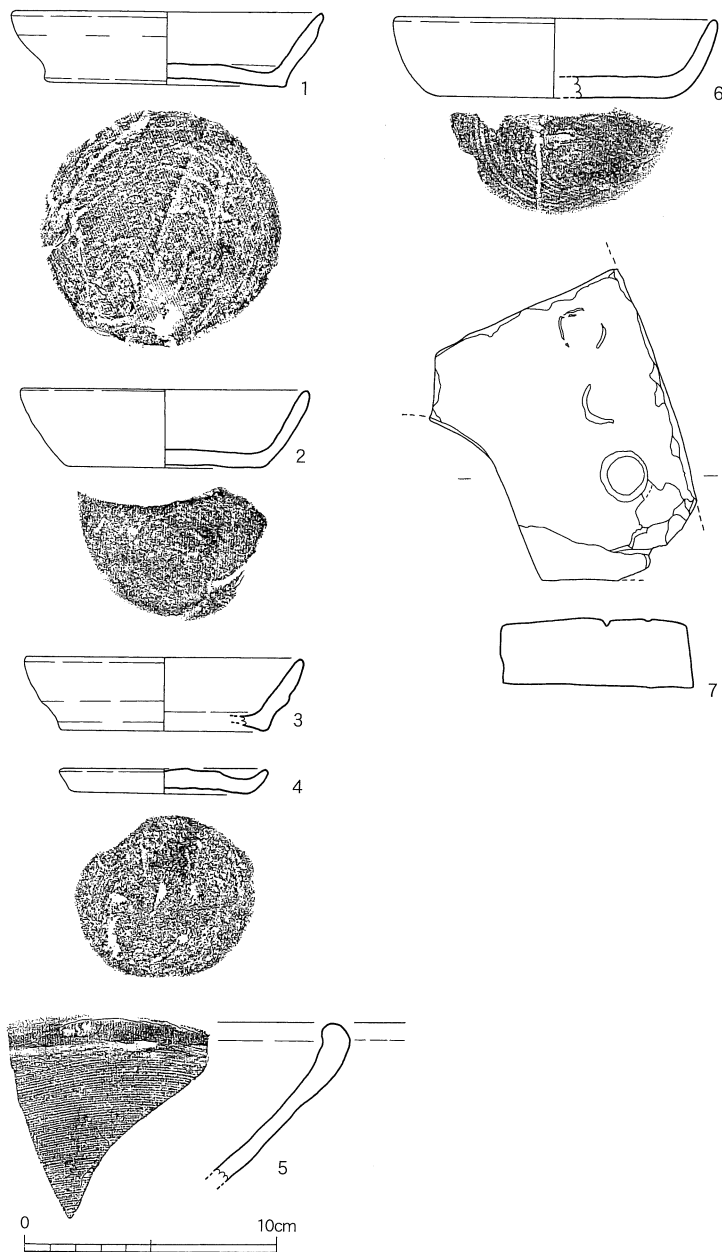
SK184 (第271図) C63区にある土坑である。これを含め、以下に示すSK182～186・201・202・204・207は斜行道路の東側に密集して位置しており、町屋敷地内のゴミ穴として掘られた穴だとみられる

出土遺物 (第275図1～4) 1は内面にロクロ目を残す、他はそれがないが形態的によく似た在地系土師器である。2・3は

口縁部に煤が付着する。15世紀末葉～16世紀初頭の遺物である。4は皇宋通宝（北宋1038年初鑄）。

SK185 (第271図) C63区にある土坑である。SK202の南部が深くなった部分をSK185としたが、別の遺構であるのか、同一遺構であるかは遺物面からも判断できない。

出土遺物から16世紀前葉の遺構である。



第245図 SK151・155出土遺物実測図

出土遺物 (第277図1~22) 1は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。口縁部・内面に煤が付着する。2~11は1期の京都系土師器で、2~6は大型の、8~11は小型の皿である。小型皿8・9・11は口縁部に煤が付着する。12・13は備前焼で、12は中世期の播鉢、13は瓶。14は瓦質土器の鉢、同じく15は茶釜である。16は平瓦、17は瓦質の棒状土製品である。18は_州窯系青花碗、19も同じく漳州窯系青花皿である。20は白磁皿、21は華南三彩の皿。22は天聖元豊(北宋1023年初鑄)。

SK202 (第271図) SK185の北側にあり、床面はそれよりも高い土坑である。北部が尖っており、北側にあるSK184と同じ特徴をもっている。

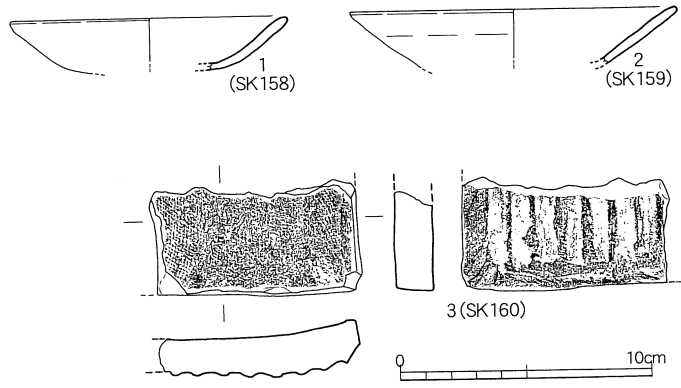
出土遺物 (第279図1~4) 1・2は在地系土師器である。2は外面下部と見込み部に煤が付着している。これらは15世紀後葉であろう。3は3期の京都系土師器、4は中世6期の備前焼の播鉢である。

SK186 (第271図) C64区にある円形土坑で、SK182・183と重複する。出土遺物の年代から見てSK186が新しい。

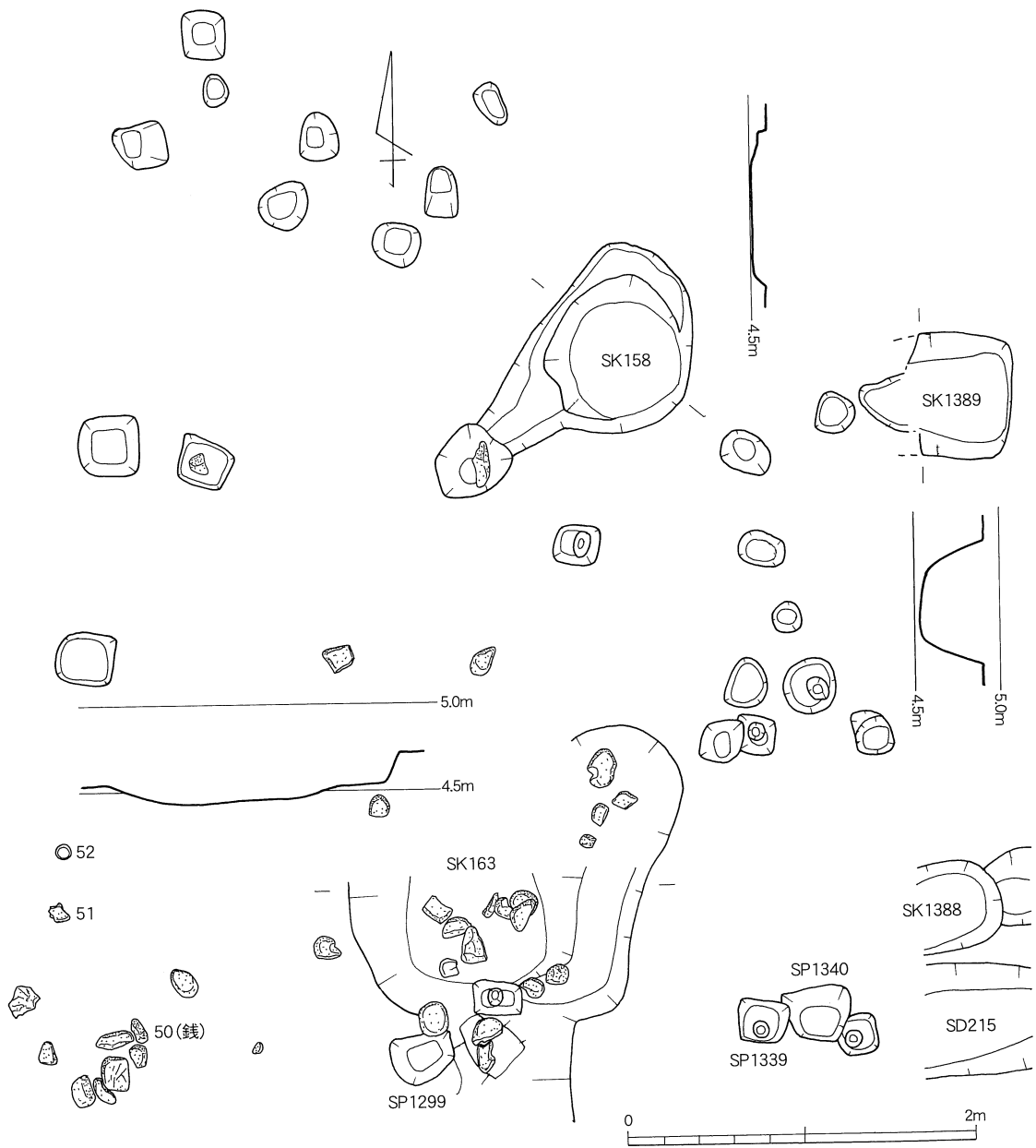
出土遺物 (第280図1・2) 1は3期の京都系土師器系土師器である。2は瓦質土器の播鉢で、口径24cm。

SK187 (第281図) C63区にある楕円形土坑で、内部に礫が集積していた。

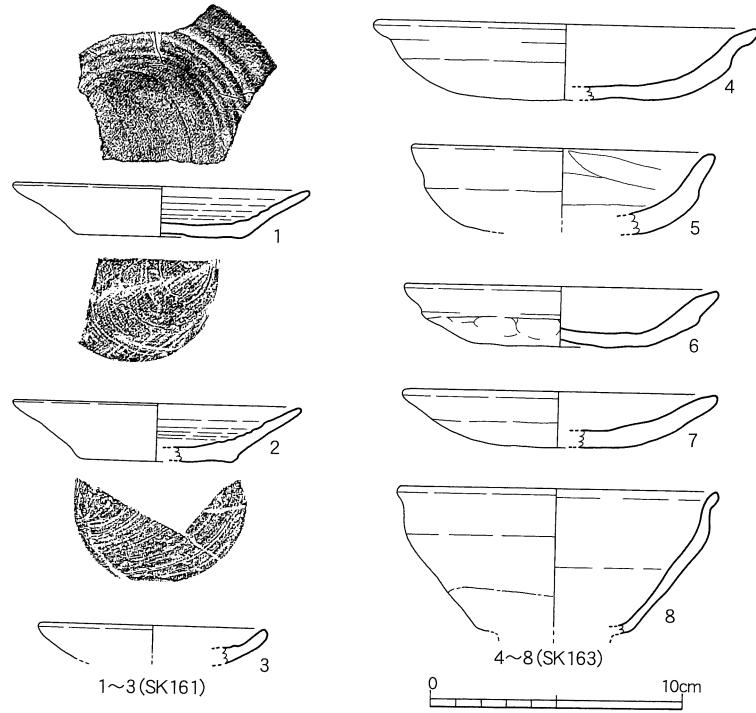
出土遺物 (第280図3~6) 3・4は3期の京都系土師器皿である。5は備前焼の甕、6は瓦質土器の坩堝である。



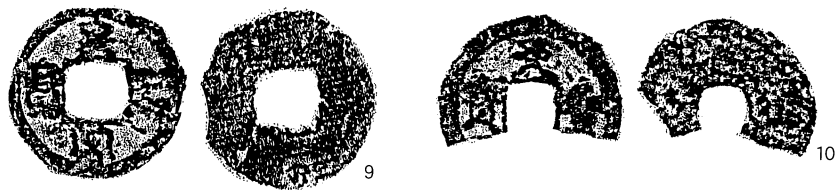
第247図 SK158~160出土遺物実測図



第248図 SK158・163と周辺実測図



第249図 SK161・163出土遺物実測図



第250図 SK163出土銭貨拓影

SK188 (第282図) X61区にある曲がった溝状の遺構である。

出土遺物 (第284図1~4) 4点とも1期の京都系土師器である。

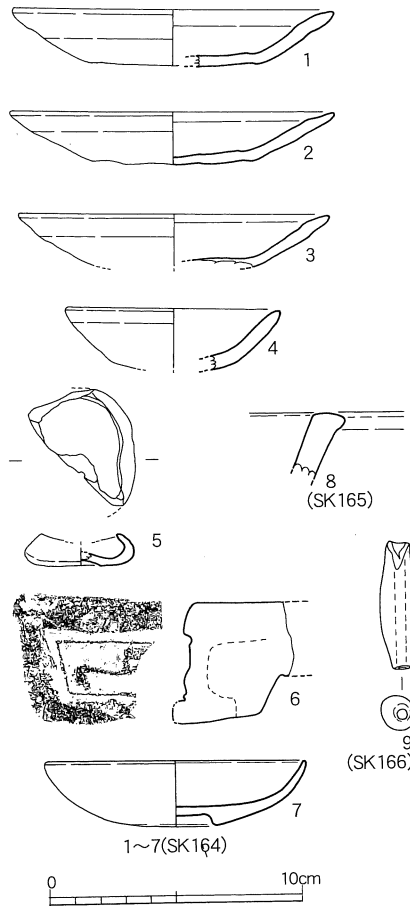
SK189 (第282図)

SK190 (第288図) B63区南西部にある柱穴様の土坑で、内部北側に礫を詰め込んでいる。16世紀中葉~後葉であろう。

出土遺物 (第284図1) 1は2期~3期の京都系土師器である。

SK191 (第285図) B63区にある楕円形土坑である。SK192の北西に位置する。

出土遺物 (第286図1・2) 2点とも3期の京都系土師器皿である。2は口縁部に煤が付着する。



第251図 SK164~166出土遺物実測図

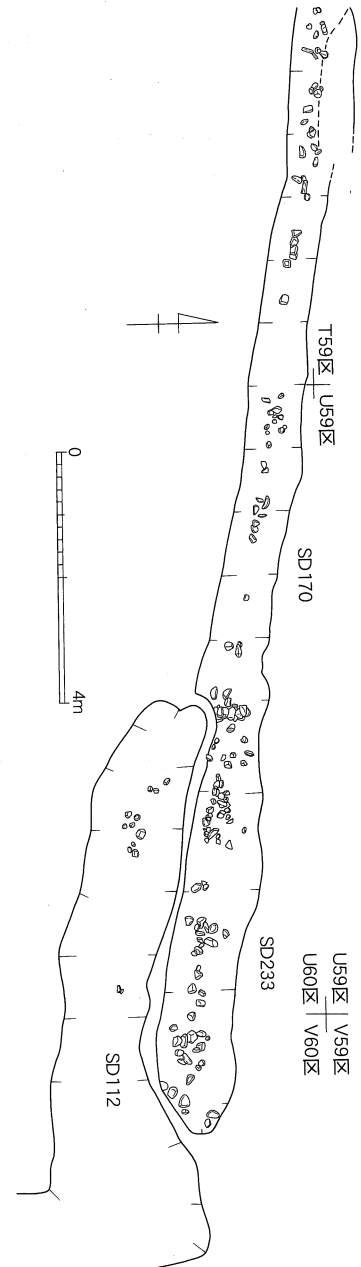
SK192 (第285図) SK191の南東側に位置する長方形平面の土坑である。標高4.46mで検出した。規模は長さm、幅m、深さmである。出土遺物は青花1点である。

出土遺物 (第286図3) 3は中国漳州窯系青花皿である。

SK194 (第288図) D62/63区にある楕円形気味の土坑で、SK179・180が後から掘り込んでい。時期の分かる遺物は出土していない。

SK195 (第288図) D63区北東部にある平面円形の土坑である。検出標高は5.40m。

出土遺物 (第287図1・2) 1は瓦質土器の鍋で、器面調整は外面は削り、内面はナデ、口縁部周辺は横方向にナデている。内面にヘラ描きの×記号がある。2は2期の京都系土師器である。



第252図 SD170・233遺物出土状態実測図

SK197 (第289図) B63区の楕円形土坑ある。床面北西部に円形土坑があり、掘られたのは別時点の可能性はある。

出土遺物 (第290図1) 鉄製の紡錘車である。平面的な出土位置は円形土坑部だが、出土水準は外側の浅い土坑の礫群と同じであり、それに伴う。

SK199 **出土遺物** (第290図1) 1は2期位の京都系土師器である。

SK201 (第271図) C63区にあり、SK184の下で検出した土坑である。

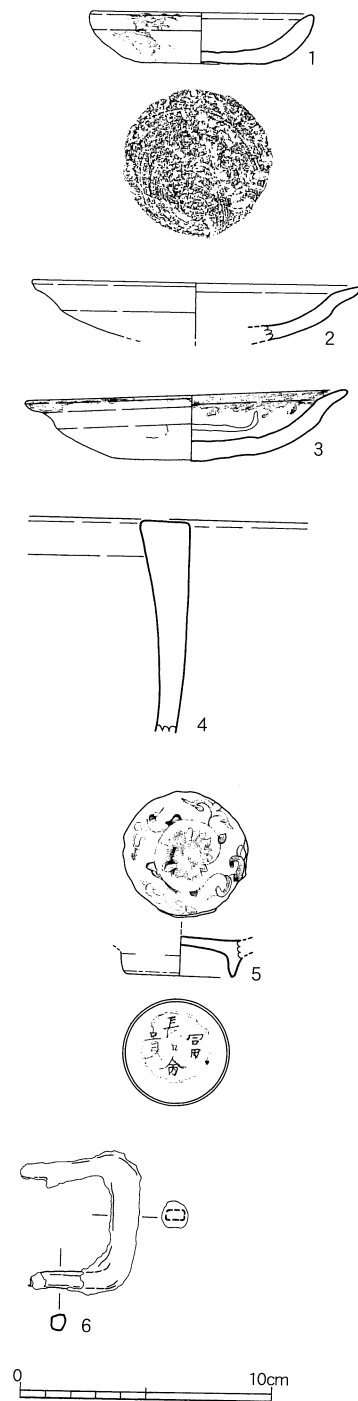
出土遺物 (第276図1~4) 1~3は2期の京都系土器、3は瓦質土器の鉢である。

SK202 (第271図) C63区にあり、SK201の南に位置する。

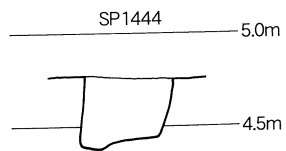
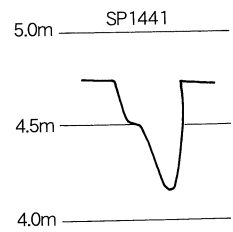
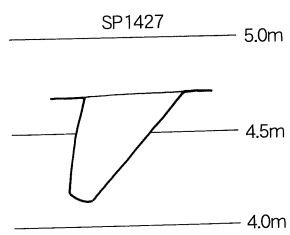
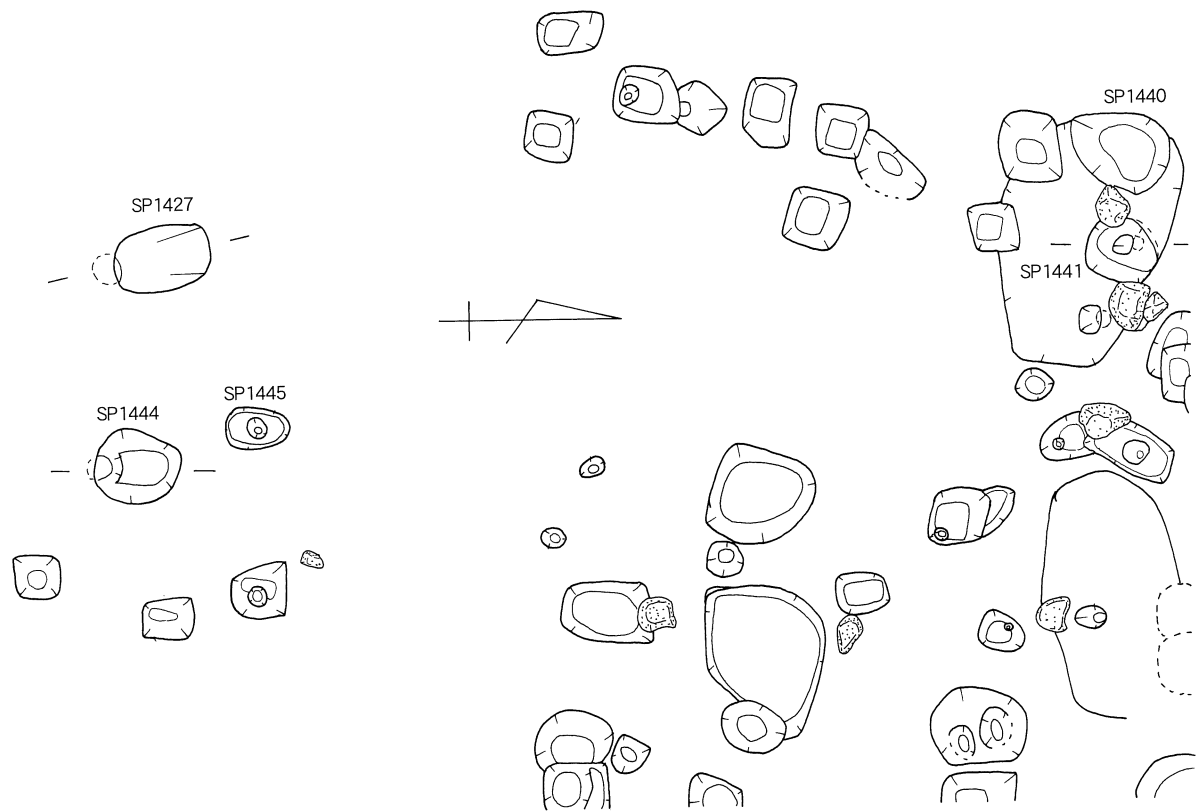
出土遺物 (第279図1~4) 各時期の遺物があるが、3の3期の京都系土師器の遺構である。

SD203 (第292図) C63/64区の東部を南北方向に走る溝状遺構である。標高4.80mで検出した。この溝は南側の第36次調査区から続き、北側の第69次調査区に連続している。調査中、床面近くは常時水が湧く状態であった。層序図は調査区南壁の状態である。SD203の西壁上部は垂直に立ってSD240を切るように見えるので、遺物面からは微妙だが、SD240が古いと考える。SD203の時期は14世紀前葉である。

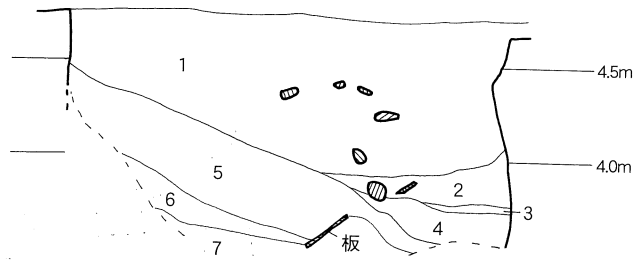
出土遺物 (第294~298図1~49) 1~18は在地系土師器で、1~9・11は皿、他は坏である。2~4・14・15の外底面には板状圧痕が付く。19は1期の京都系土師器で両面に広く煤が付着する。これだけ16世紀前葉で、他の在地系の14世紀前葉の多数の土師器とは異なる。20~25は鉄製品。20は小柄、他は釘である。26~33は瓦質土器である。26は口縁部外面の上端から下がった位置に鏝状部分が付き、そこから下位に煤が付着する。器面調整は内面が刷毛目、外面はナデで指圧痕が付く。27・28は同一個体の鍋か。鏝部は口縁部上端が折れ曲がるように作られ、器面調整は内面が横方向の刷毛目、外面上半は縦方向の刷毛目の後、ナデ消し、底部の屈曲部以下は格子状の叩き目が残る。29は口縁部が外反する鍋で、



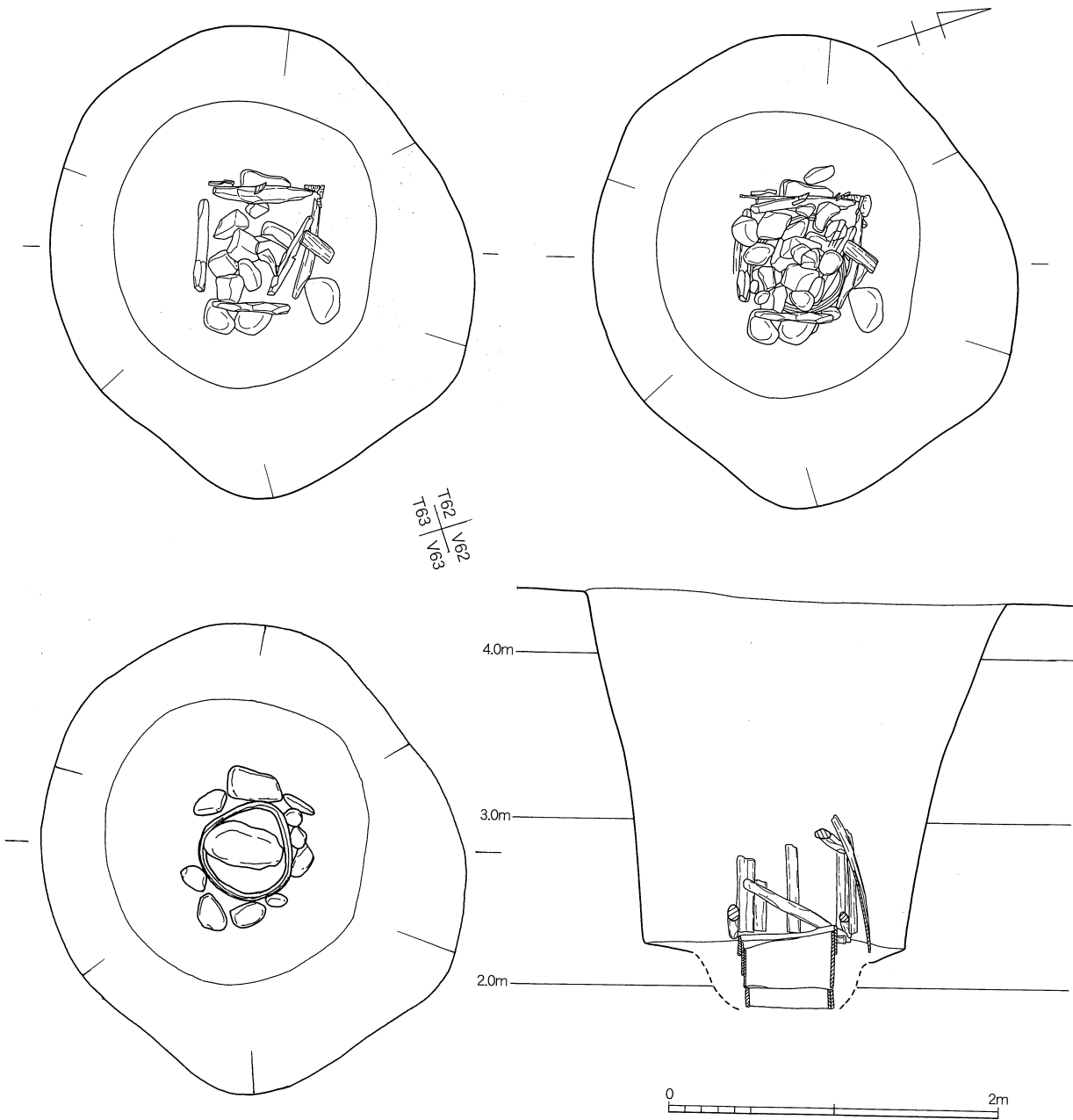
第254図 SD170出土遺物実測図



第253図 向かい合う斜軸柱穴実測図



第255图 SE171層序图



第256图 SE171実測图

内面は横、外面上部は縦刷毛、屈折部以下は横刷毛目調整している。30は一箇所注ぎ口を外側に折り曲げた鉢である。図の如く刷毛目調整している。31・32は直線的に口縁部が開く形の鉢である。内面は横刷毛、外面はナデ調整している。33は防長系の瓦質土器鉢である。内面に縦方向のヘラ描きがある。両面とも刷毛目調整。34・35・39は東播系須恵器鉢。横方向のナデ調整している。36～38は瓦質土器の甕、40は瓦質土器の火鉢脚部である。41は安山岩製の石臼。42は中国製白磁碗、43は軒平瓦で、瓦頭はに柁に囲まれ珠紋が並ぶ。44は土師器の加工品、45は縄紋晩期の刻み目突帯紋土器である。46は位取り色のガラス玉。47は弥生土器の壺である。48・49は銭貨で、48は皇宋通宝（北宋1038年初鑄）、49は元豊通宝（北宋1078年初鑄）である。



第257図 SE171
出土遺物実測図

SK204 (第271図) C63/64 区にある南北に長い不整形土坑である。

底は南北二ヵ所にある。標高4.75m で検出した。出土遺物から時期は14世紀中葉～後葉である。

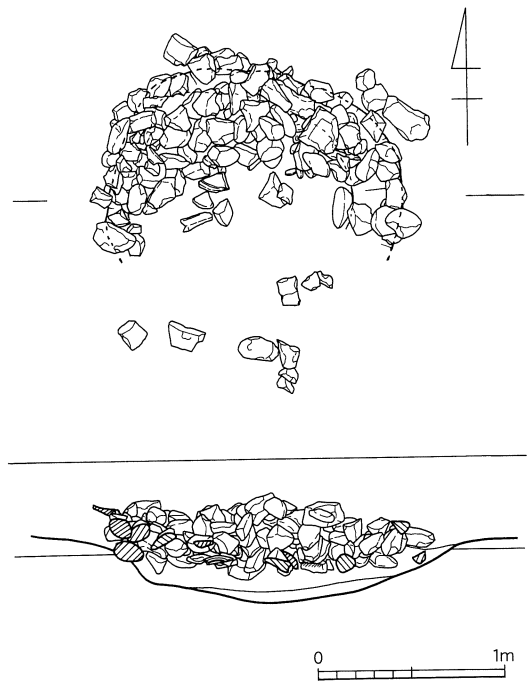
出土遺物 (第299・300図1～15) 1～3は在地系土師器で、1は皿、2・3は坏である。4・5は土師器を円形に加工したもの、6・7は土師質の土錘、8～10は鉄製の棒状のものであり、釘か。11は鉄製の紡錘車である。12はSK203出土37の瓦質土器甕と同一個体である。13～15は銭貨で、13は景祐元宝（北宋1034年初鑄）、14は皇宋通宝（北宋1038年初鑄）、15は熙寧元宝（北宋1068年初鑄）である。

SK205 (第図) C64区の土坑である。

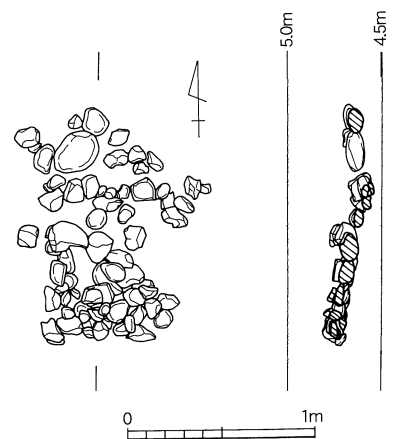
出土遺物 (第299図13・14) 13・14は1期の京都系土師器である。

SK206 (第301図) A63区にある土坑である。二つの遺構が重複している。

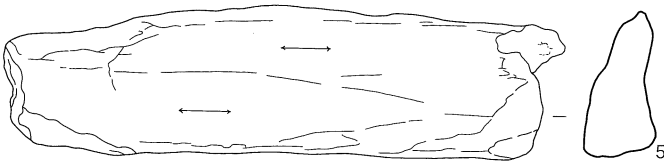
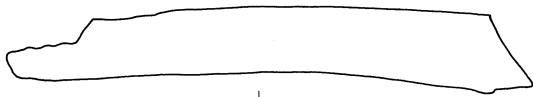
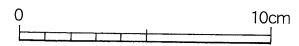
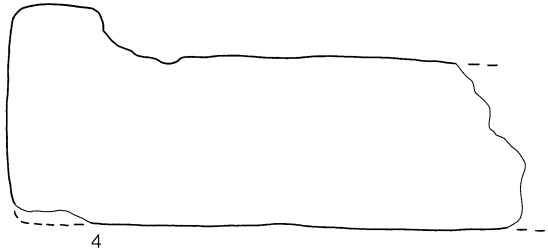
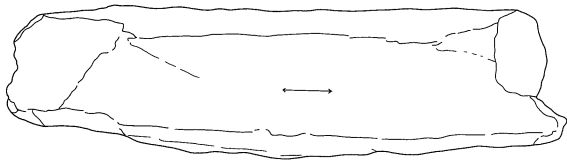
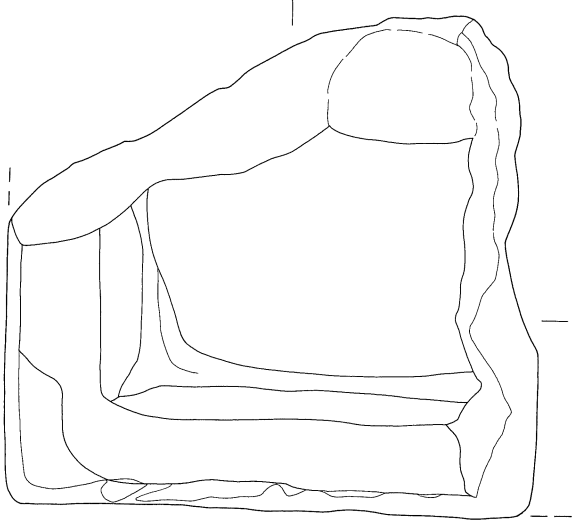
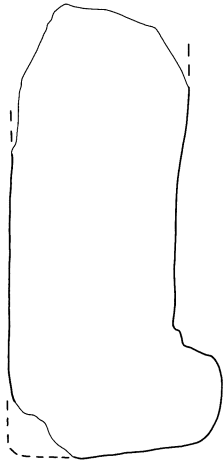
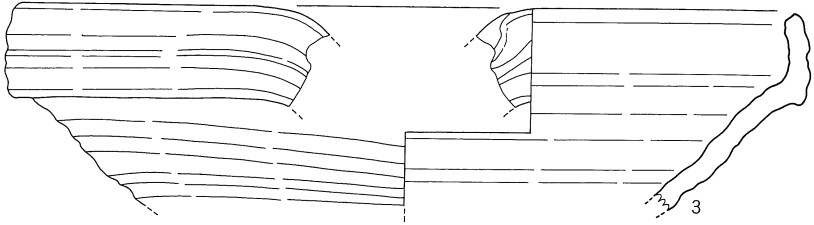
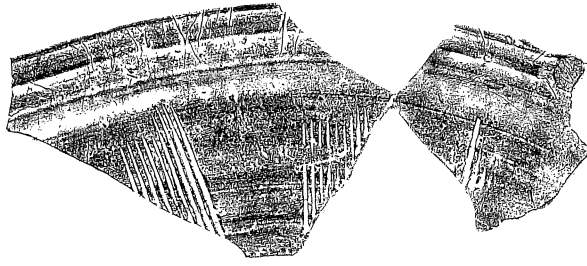
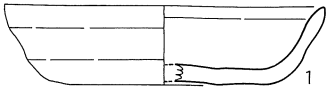
出土遺物 (第302図1・2) 2点とも西部の土坑から出土した。1は15世紀後葉の在地系土師器皿に見えるが、16世紀前葉段階に在地系技術で京都系土師器系土師器皿を模倣したものと思われる。2は瓦質土器の甕である。



第258図 SK172実測図



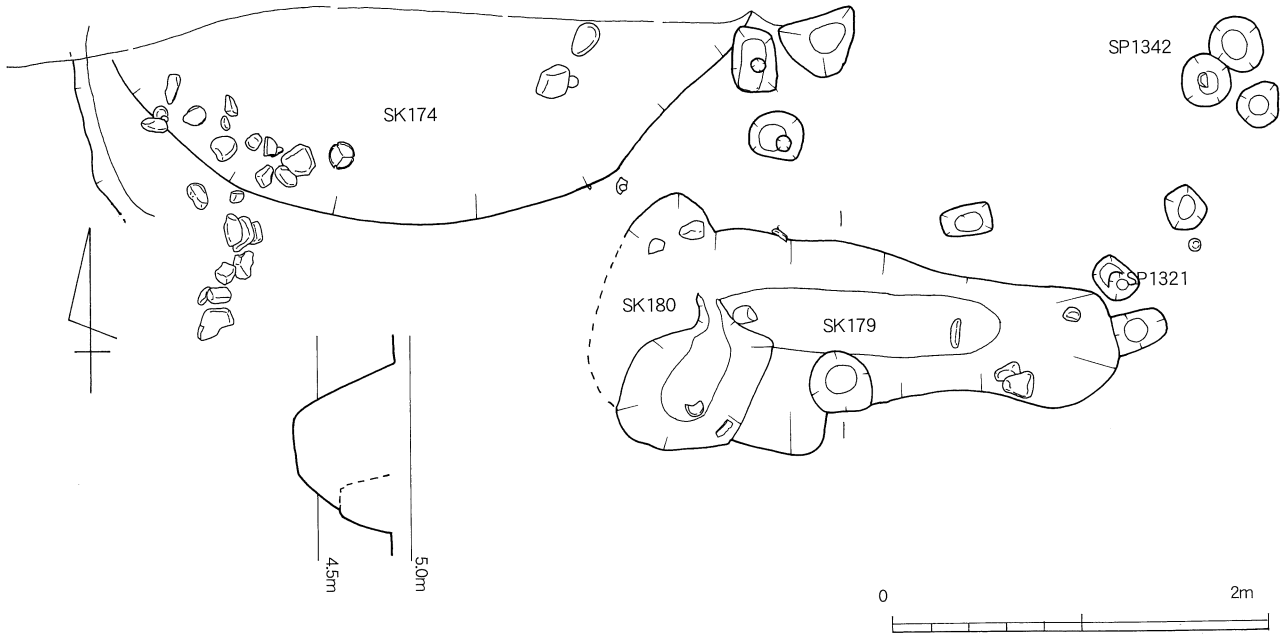
第259図 SX173実測図



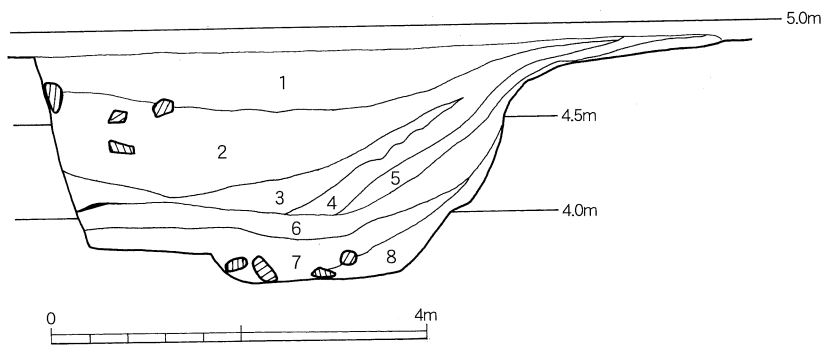
第260图 SK172出土遺物実測図

SF208 (第303図) Z63区にある井戸である。標高4.58mで検出し、最下部の標高は約2.6mである。平面形は楕円で、二段に掘り込まれている。二段目が床面中央部に楕円形の井筒を設置したと見られる掘り込みである。井戸本体を構成した木質部材や石材は出土していない。埋土内から15世紀末葉～16世紀初頭の遺物が出土した。

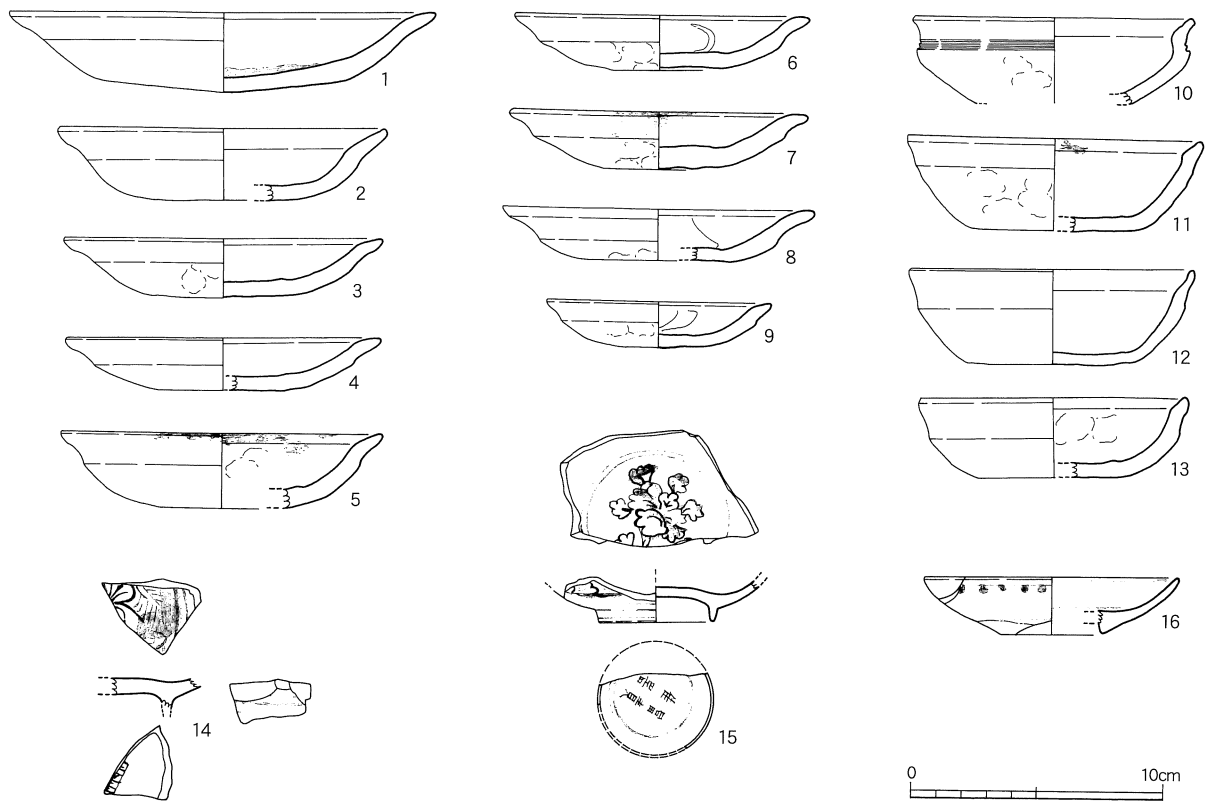
出土遺物 (第304図4～6・7) 4・5は在地系土師器皿で、4は内面にロクロ目を残す。6は中国製白磁輪花皿である。7は木製の下駄である。長さ21cm、幅11.0cm、高さ7.0cmで一木造りである。



第261図 SK174・179・180実測図



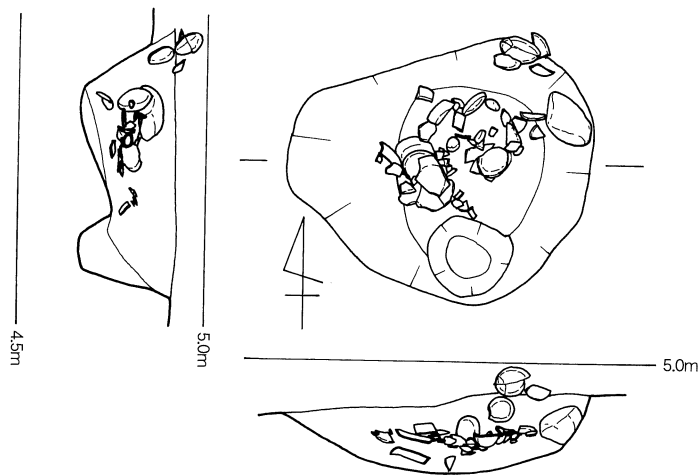
第262図 SK174層序図



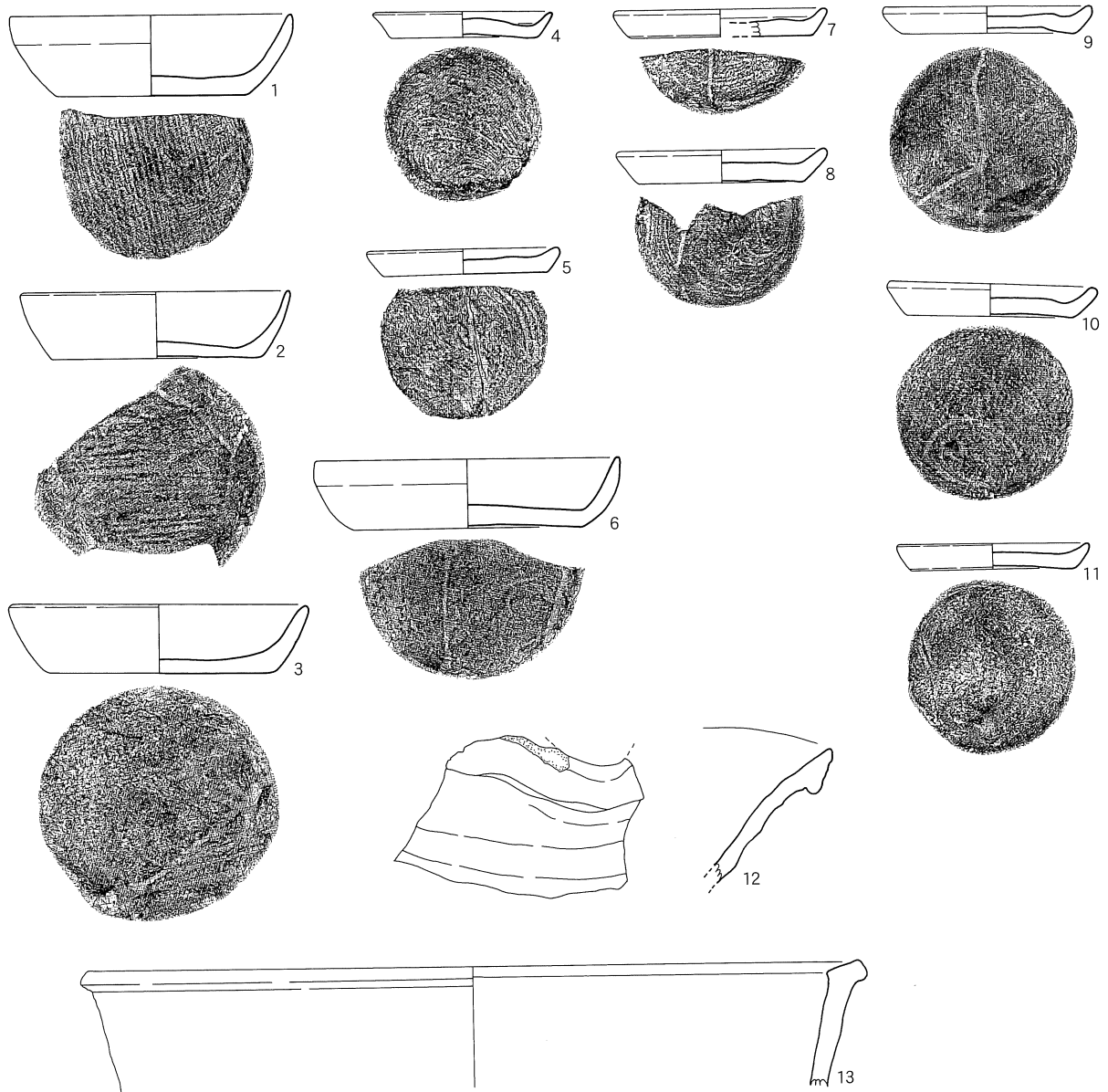
第263図 SK174出土遺物実測図

SK209 (第307図) Z62/63区にあり、西側のSD210と平行に南西から北東方向に走る二条の溝状遺構である。全体の幅は1.9m、中央の土手は溝の両端よりも低い高さで現れ、初めは一条の溝として掘り下げたところ、下の方で二条に分かれた。南部をSE208に切られる。そこから南西側へどのように続くのか不明である。

出土遺物 (第304図1~3) 3点とも在り系土師器である。1は15世紀後葉、2は底部外面に板圧痕がある。3は内面ロクロ目を残す15世紀末葉~16世紀初頭のものの。

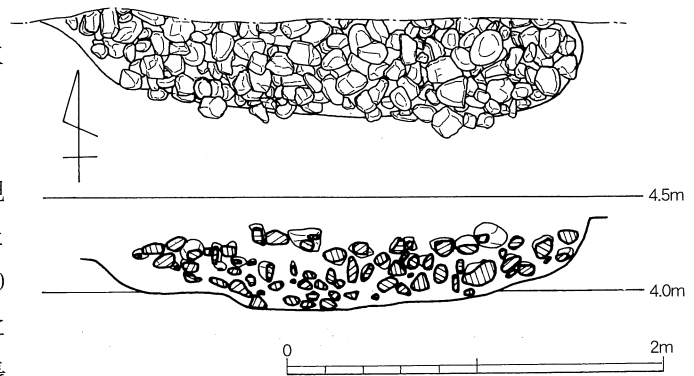


第264図 SK175実測図

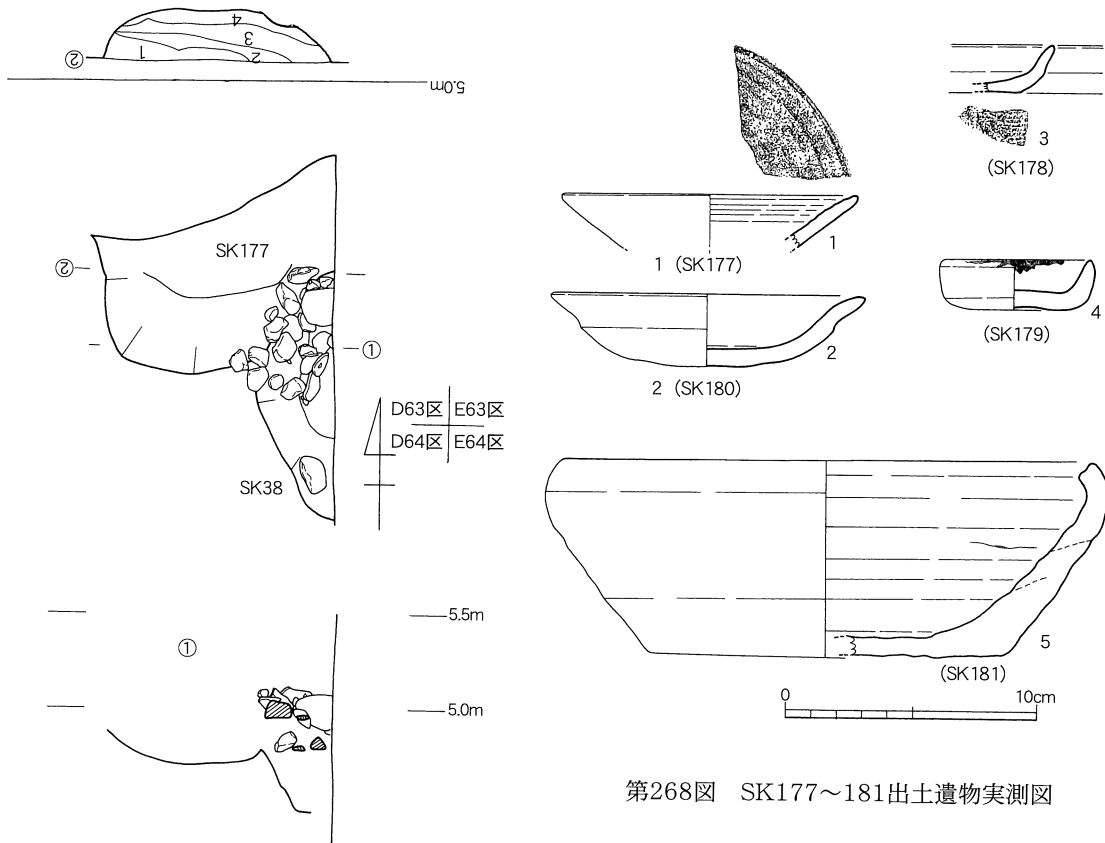


第265図 SK175出土遺物実測図

SD210 (第305・307図) Y63区
 にあり、南西から北東に走る溝である。
 SE208の南西部で止まる (SD210a)
 が、SE208の北側で同じ走向、同じ規
 模の溝があるので、これをSD210bと
 した。南端は土地境界であったSD210
 にほぼ平行するコンクリート壁基礎に
 より壊されていた。溝aの規模は全長
 4.65m、幅0.7m、深さ0.3m。標高
 4.53mで検出した。溝bは全長3.2m、



第266図 SK176実測図



第268図 SK177～181出土遺物実測図

第267図 SK177・38実測図

幅0.7m、深さ0.35mである。14世紀末～15世紀前葉の遺構である。

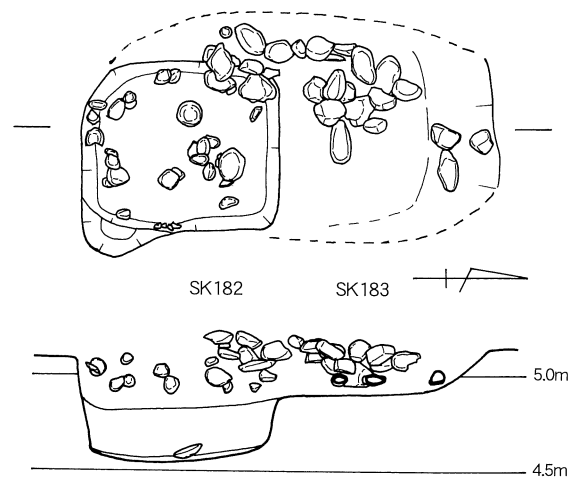
出土遺物（第308図1～3） 1は体部が直線的に外反し、2は体部の下部が厚い特徴をもつ在地系土師器皿である。3は古墳時代の土師器壺。

SK211（第307図） Y64区北部中央にある長方形土坑である。

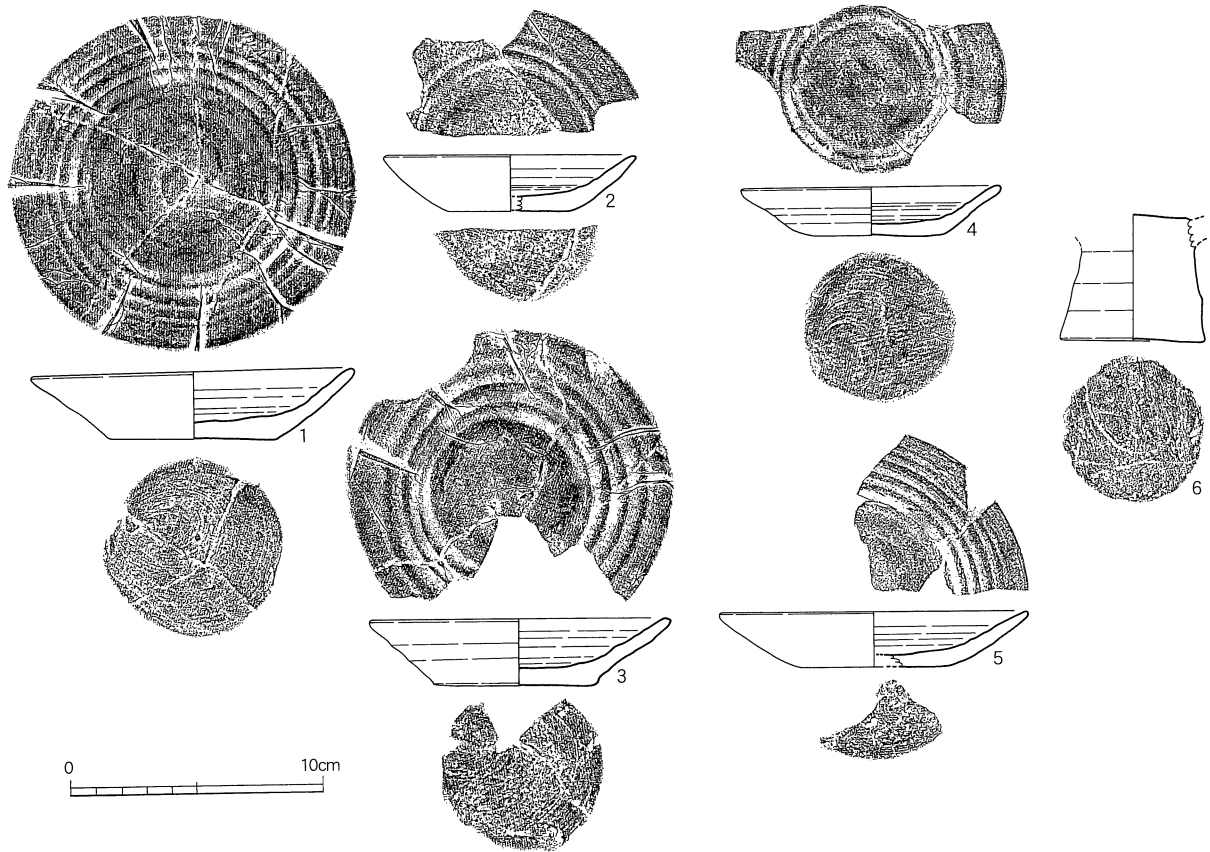
東部は方形土坑と重複し、さらに東側をSD230が切る。したがって西部をSK211aとし、東部をSK211bとする。

SK211aの東壁の位置は不明であった。

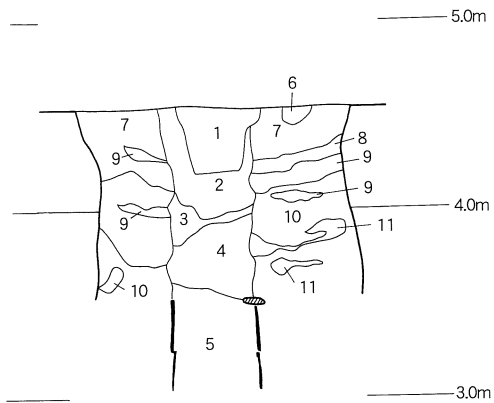
SK211aの規模は南北3.8m、深さ0.7m、東西5m以上である。遺構埋土からは殆ど出土遺物がないが、1点土師器が出土した。SK211bは南北約3m、床面は東が低い。出土遺物はない。SK211の性格は粘土採掘坑であろう。



第269図 SK182・183実測図

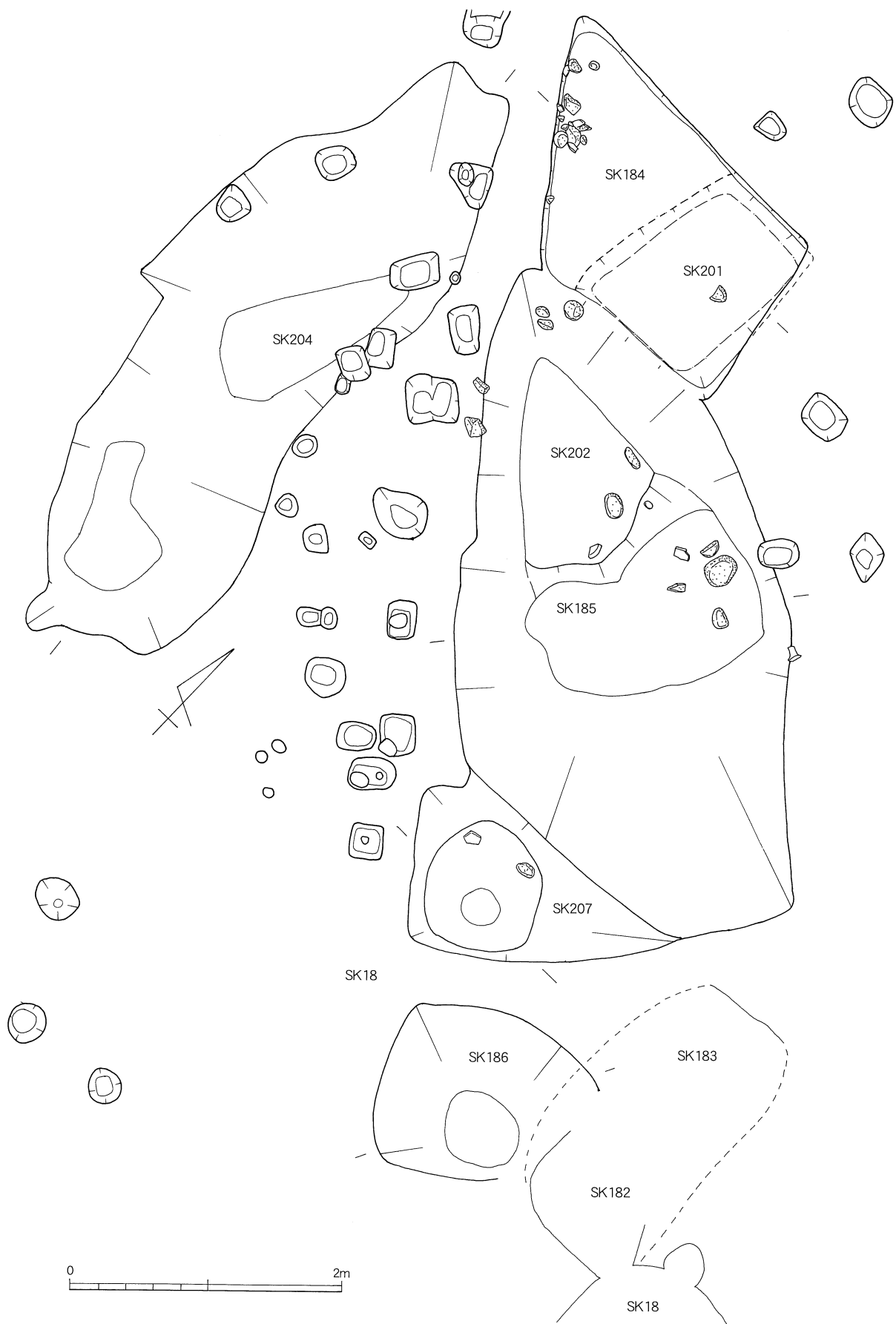


第270図 SK182出土遺物実測図

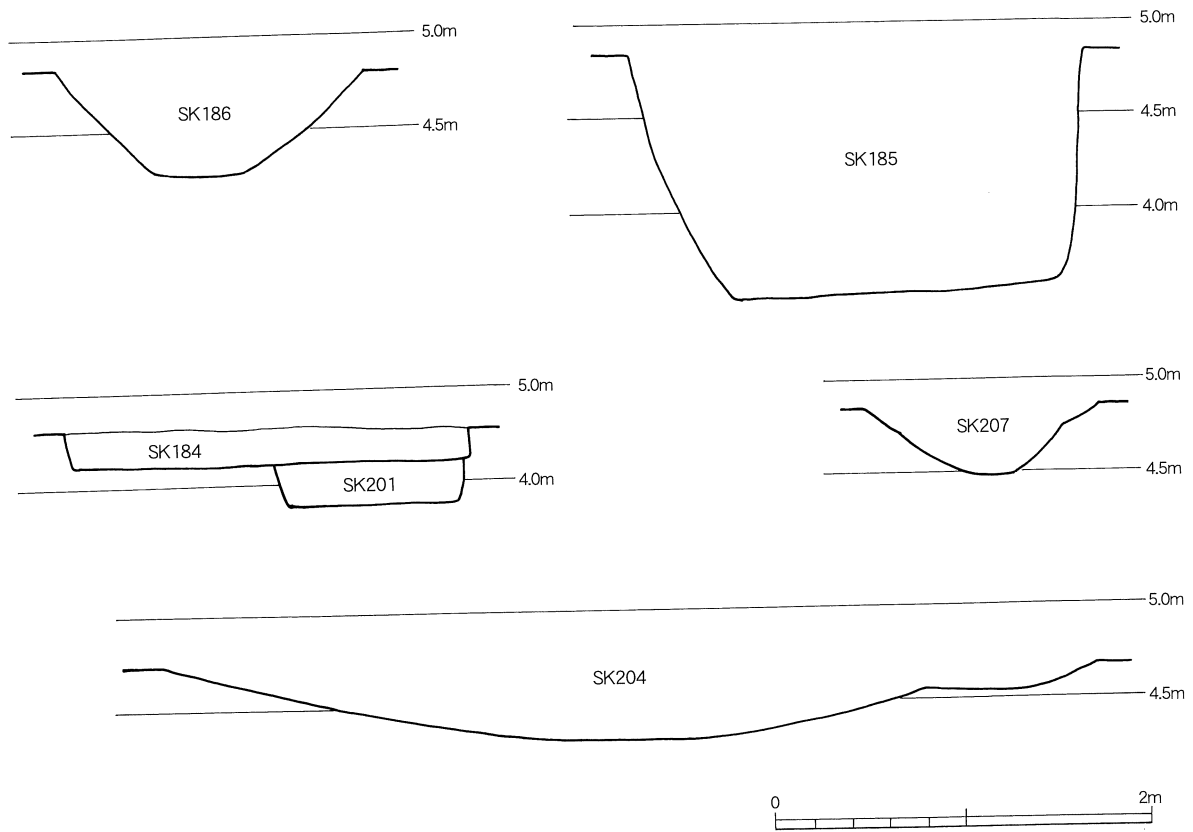


- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 黒褐色土層
粘性弱い。締まりやや良い。</p> <p>2. 暗褐色土層
粘性やや強い。締まりやや良い。</p> <p>3. 褐灰色土層
粘性やや強い。締まりやや良い。</p> <p>4. 灰黄褐色土層
粘性強い。締まりやや良好。</p> <p>5. 黒褐色土層
粘性強い。締まり不良。</p> <p>6. 暗灰黄色土層
粘性やや弱い。締まりやや良。</p> | <p>7. オリーブ黒色土層
粘性やや強い。締まり良好。</p> <p>8. 黒褐色土層
粘性やや強い。締まりやや良。</p> <p>9. 黒褐色土層
粘性強い。締まり良好。</p> <p>10. 黒褐色土層
粘性やや強い。締まり良好。</p> <p>11. オリーブ黒色土層
粘性強い。締まり良好。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

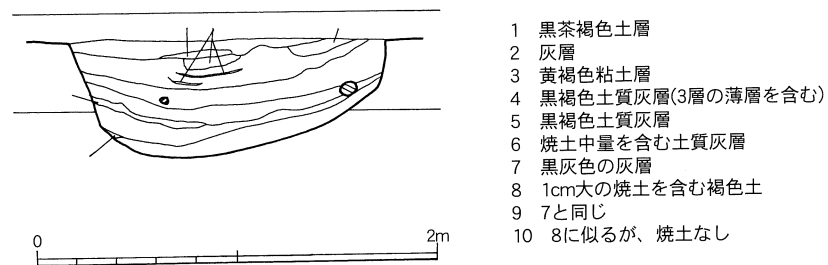
第270-2図 SE150実測図



第271図 SK184~186・201・202・204・207等実測図



第272図 SK184・204等断面図



- 1 黒茶褐色土層
- 2 灰層
- 3 黄褐色粘土層
- 4 黒褐色土質灰層(3層の薄層を含む)
- 5 黒褐色土質灰層
- 6 焼土中量を含む土質灰層
- 7 黒灰色の灰層
- 8 1cm大の焼土を含む褐色土
- 9 7と同じ
- 10 8に似るが、焼土なし

第273図 SK186層序図

出土遺物 (第308図1) 1はSK211aから出土した2期の京都系土師器である。

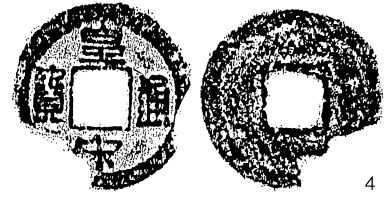
SD230 (第307図) YZ63/64区の境界を南北に走る溝状遺構で4.37mで検出した。溝の幅は1.6m、深さ0.8mである。SD230はSKD211の東部を切り、埋没後にSD84とSD103が掘り込まれている。遺構の北部はSE208にぶつかるが、それよりも北では検出できなかった。

SD230の時期は15世紀末である。

出土遺物 (第306図1・2) 1・2は内面にロクロ目を残す在地系土師器皿で、1は口径12.4cm、底径6.6cm、器高2.7cm、2は口径7.7cm、底径5.2cm、器高1.7cmである。

SK232 B64区にある集石遺構である。

出土遺物 (第306図3) 3期の京都系土師器系土師器である。
口径8.3cm、器高1.7cm。

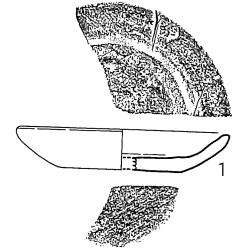


第274図SK184出土銭貨拓影

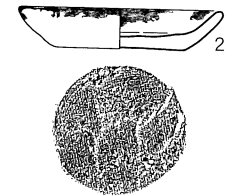
SD212 (第117図) V59/60区にあり、調査区北端に位置する溝状遺構である。溝内部は中程で床面が高まっている。内部には礫や遺物が廃棄されていた。

出土遺物 (第308図5~21)

5~16は2期又は3期の京都系土師器である。5・7・11の口縁部には煤が付着する。17は縄紋時代晩期の深鉢底部、18は瓦質土器の角火鉢、19は全体が錆で覆われた不明鉄製品である。20は土師質の土錘、22~23は鉄製の釘、24は中国製白磁皿である。

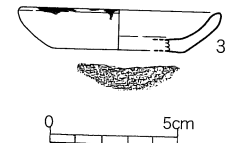


SK216 (第310図) B64区にある略四角形の土坑である。検出標高は4.79m、規模は南北2.6m、東西2.3m、深さ0.8m。



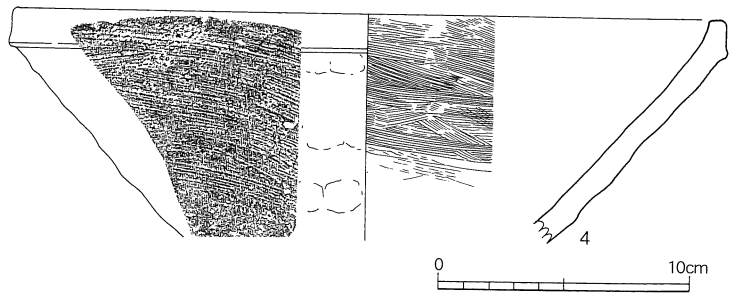
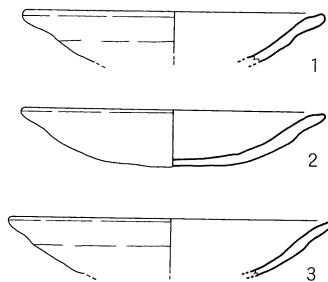
SK217 (第310図) B64区にある略円形土坑である。検出標高は4.78m土坑の規模は南北2.2m、東西1.7m前後、深さ0.6mである。

出土遺物 (第311図1・2) 1は弥生時代の高坏、2は皇宋通宝(北宋1038年初鑄)である。



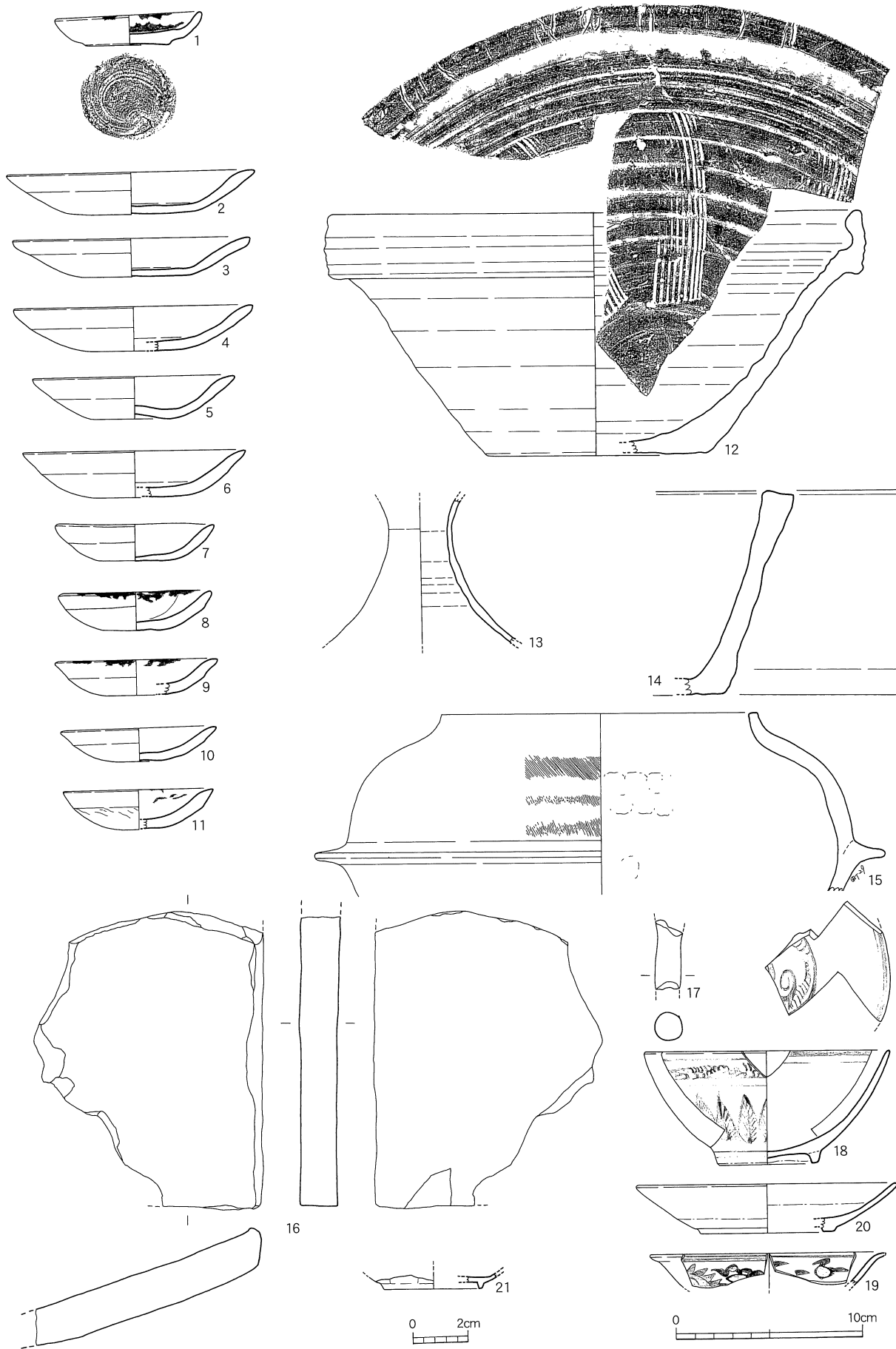
0 5cm

第275図 SK184
出土遺物実測図



0 10cm

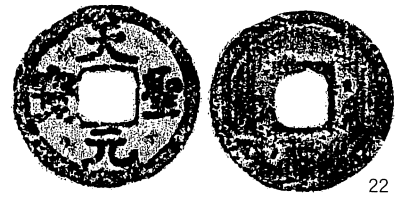
第276図 SK201出土遺物実測図



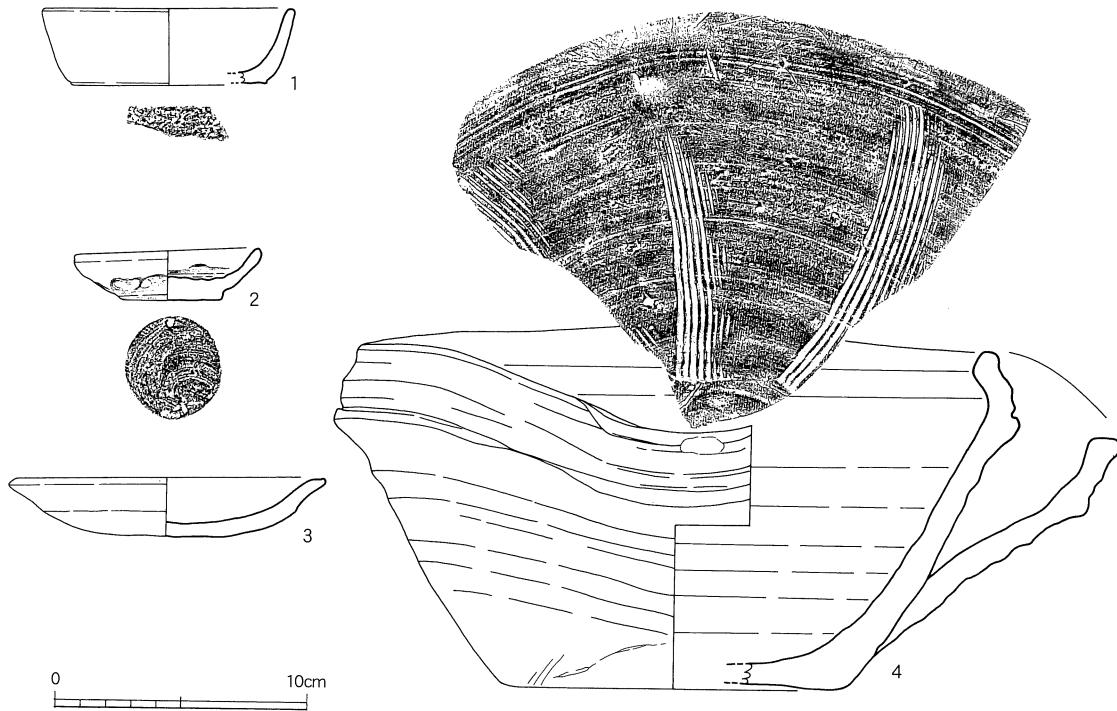
第277图 SK185出土遺物実測図

SK219 (第313図) F63区北東部にあり、東隣にSK220、その東にSK221がある。SK219は西部の長方形土坑に東部で円形土坑が重複した形になっている。検出標高は4.96mである。

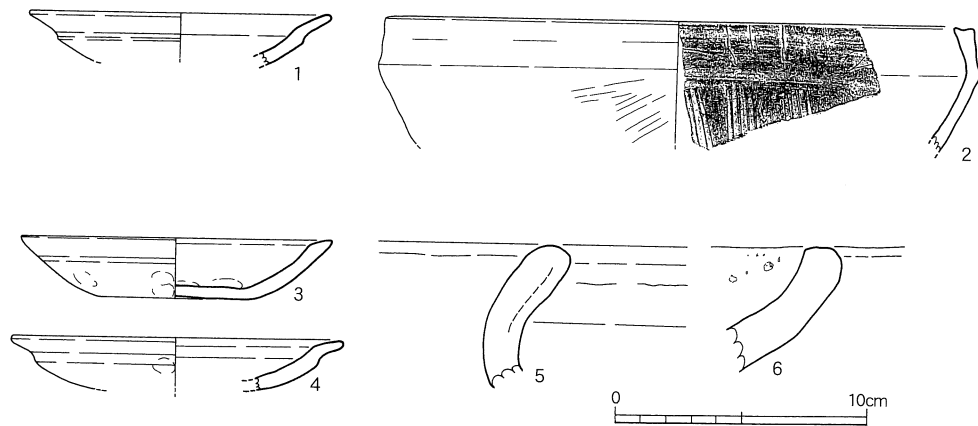
時期の分かる遺物は出土しなかった。



第278図 SK185出土銭貨拓影



第279図 SK202出土遺物実測図



第280図 SK186・187出土遺物実測図

SK220 (第314図) F63区にありSK219の東側に接する。標高4.97mで検出した浅い土坑である。時期の分かる遺物は出土しなかった。

SK221 (第314図) F63区北部中央にある長方形土坑である。検出標高は4.94m。時期の分かる遺物は出土しなかった。

SK222 F63区北東部で一部を検出した円形と思われる土坑である。標高4.92mで検出した。

出土遺物 (第315図1~3) 3点とも在地系土師器の坏である。口径は8.0~8.4cm、底径は6.4~6.9cm、器高は1.3~1.8cmである。

SK223 (第314図) F63区南西部にあり、東西方向に長い土坑である。標高5.09mで検出した。規模は東西に長く1.47m、幅54cm、深さ28cm。

出土遺物 (第315図4~6) 4は瓦質土器鉢、5は弥生土器の甕脚部、6は中国景德鎮窯系の青花皿である。

SK225 B64区東部にある円形土坑である。検出標高は4.71m。

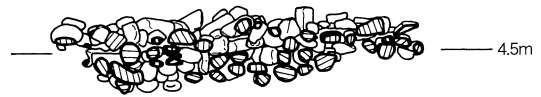
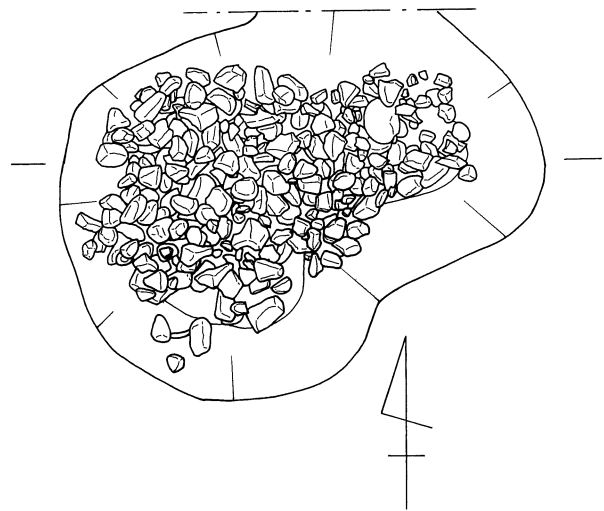
出土遺物 (第315図7) 7は中世6期の備前焼播鉢である。

SK226 B63区北東部にある溝状遺構で、SD213に切られている。標高4.96mで検出した。

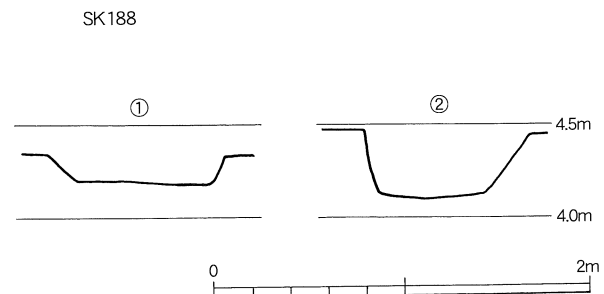
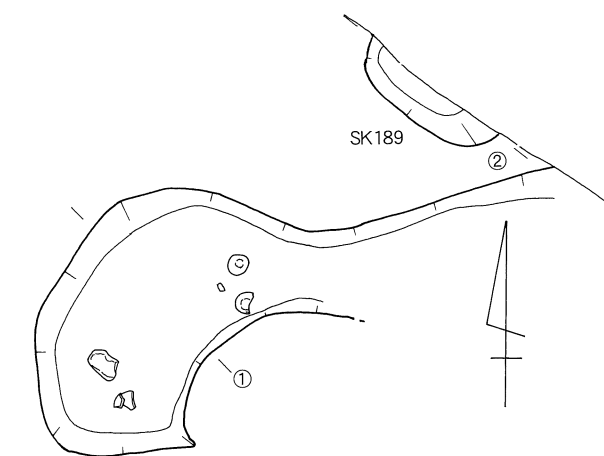
出土遺物 (第315図8) 8は在地系土師器で口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.3cm。

SK227 B63区の標高4.96mで検出した溝状遺構である。

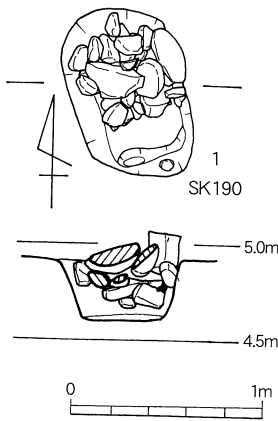
出土遺物 (第315図1) 1は在地系土師器坏である。



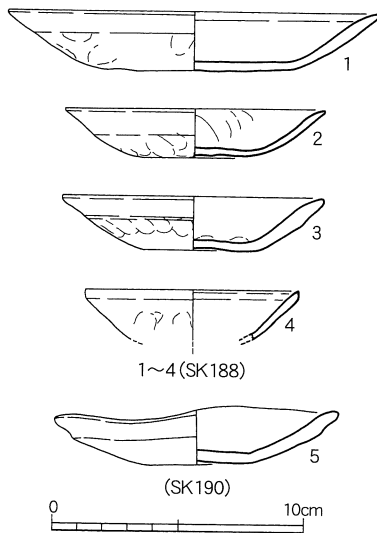
第281図 SK187実測図



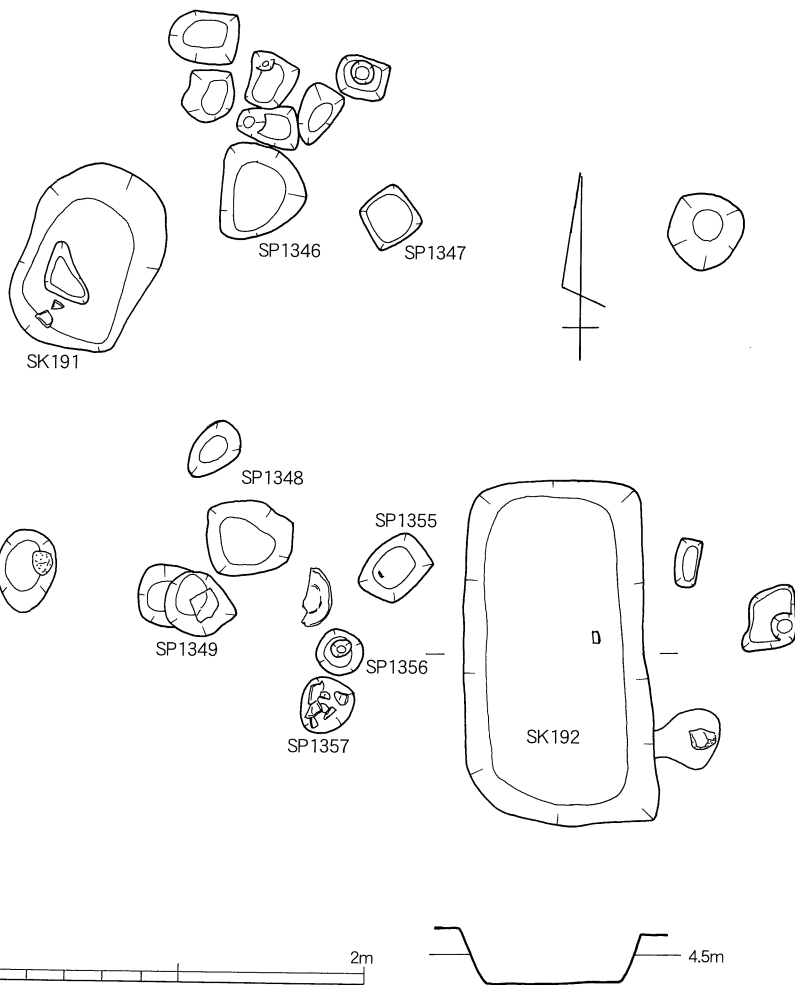
第282図 SK188・189実測図



第283図 SK190実測図



第284図 SK188・190
出土遺物実測図



第285図 SK191・192他実測図

SK228 E63区にある土坑である。標高4.97mで検出した。

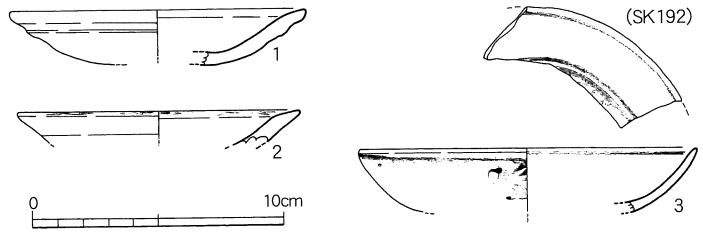
出土遺物（第330図7） 7は近世1期の備前焼播鉢。播り目が交叉し、口縁端部が尖って突出する。

SK233（第117図） V60区にあり、SD112の埋没後、北端部に掘り込まれた短い溝状遺構である。長さ4.43m、幅86cm、深さ52cmで床面はほぼ水平である。埋土に多量の焼石が廃棄されていた。

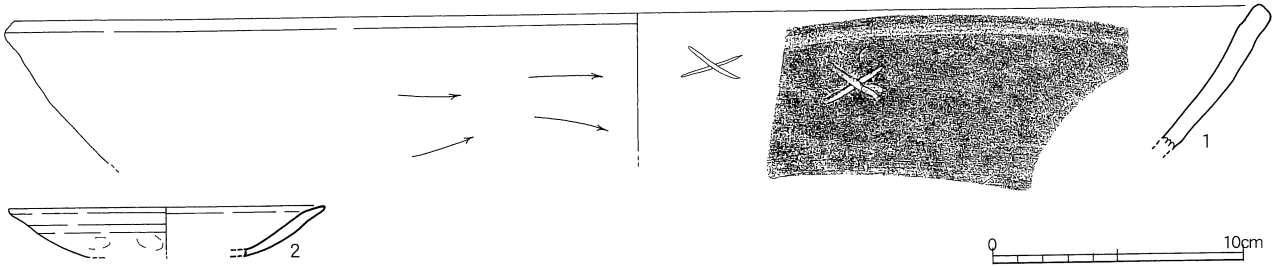
出土遺物（第318・319図1～18） 1は底部糸切り離し後になで消した在地系技術による土師器皿である。後継3.1cm、器高1.8cmの大型品である。口縁部に金箔の痕跡がわずかに残る。2は在地系土師器皿で、口径9.2cm、底径6.6cm、器高2.0cm。9～11は2期の京都系土師器である。12は土師質の蜀台。13は備前焼陶器の壺で、口径12.0cm。14～16は瓦質の瓦である。厚さは2.1cm、2.9cm、2.8cmである。17は泥岩製の砥石である。両端を欠損している。18は中国景德鎮窯系の青花碗B群である。外面は沈線による唐草を描き、内面口縁部には四方襷紋を見込みには花紋を染付で描いている。この資料はほかの遺物よりも100年ほど古いので、大事にされて伝世したのであろう。

SK234 B区にある土坑である。

出土遺物（第321図1） 1は土師質の蜀台で、口縁端部を欠く。



第286図 SK191・192出土遺物実測図



第287図 SK195出土遺物実測図

SD235 (第321図2・2)

U60区の北西部にあるSD112の東西溝部分を当初別遺構と考えてS235としていた。この部分で出土したのが第321図2・3である。SD112の部分で記述している。

SK236 (第322図) E63区中央にある土坑で、標高4.86mで検出した楕円形の土坑である。

出土遺物 (第323図1~3)

1・2は2期の京都系土師器で、1は口径12.7cm器高2.5cm、2は口径11.2cmである。3は備前焼陶器鉢で、口径20.0cmである

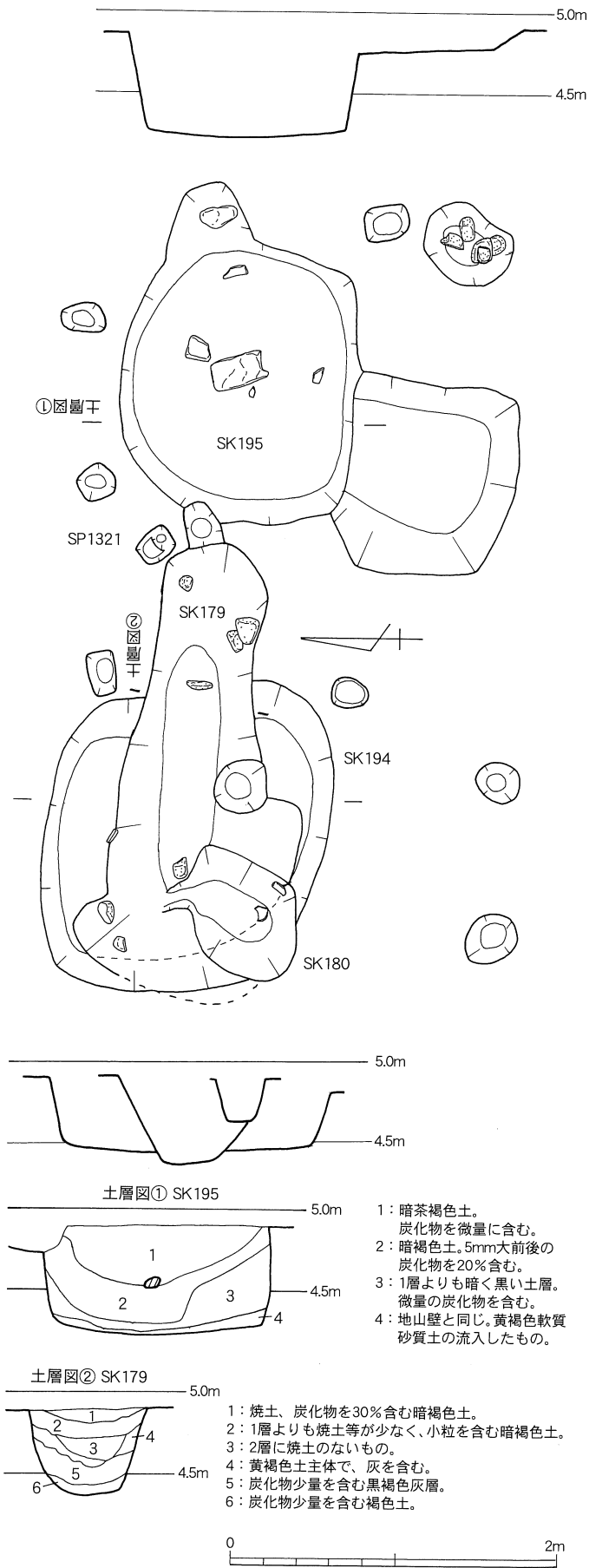
SK237 E63区の北西部にあり、SK243埋没後に掘り込まれた不整形土坑である。検出標高は4.92m。時期不祥の備前焼片が出土しただけであり時期は14世紀のSK243よりは新しいとしか分らない。

出土遺物 (第325図1) 1は備前焼陶器の甕である。

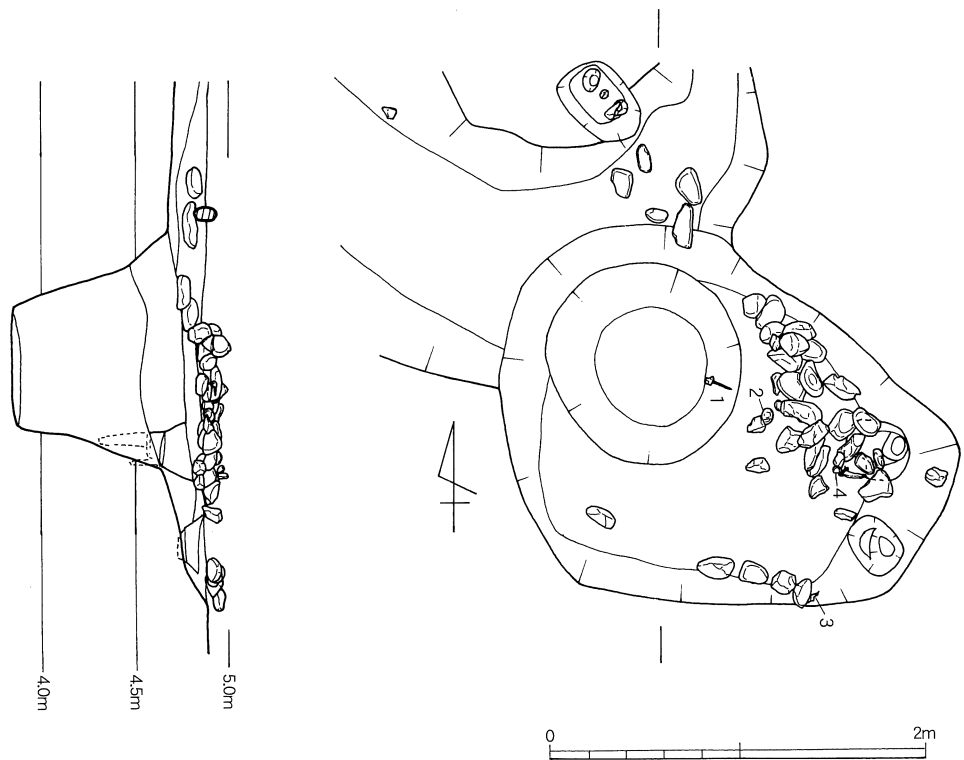
SK238 (第324図) E63区にありSK237とSK239の間に位置する不正形の土坑である。標高4.92mで検出した。時期の分かる出土遺物はない。

SK239 (第324図) E63区にありSK238の北西に位置する楕円形の小型土坑である。標高4.93mで検出した。

出土遺物 (第325図2) 2は口径12.2cm、底径7.0cm、器高3.8cmの在り系土師器である。胎土中に金色雲母がやや多い。体部が円く湾曲する特徴から14世紀初頭とみられる。



第288図 SK179実測図

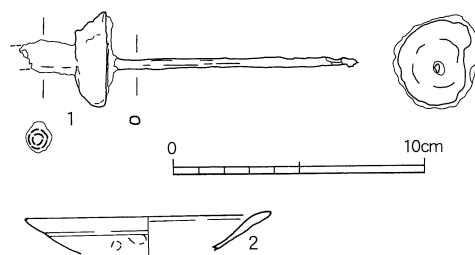


第289図 SK197実測図

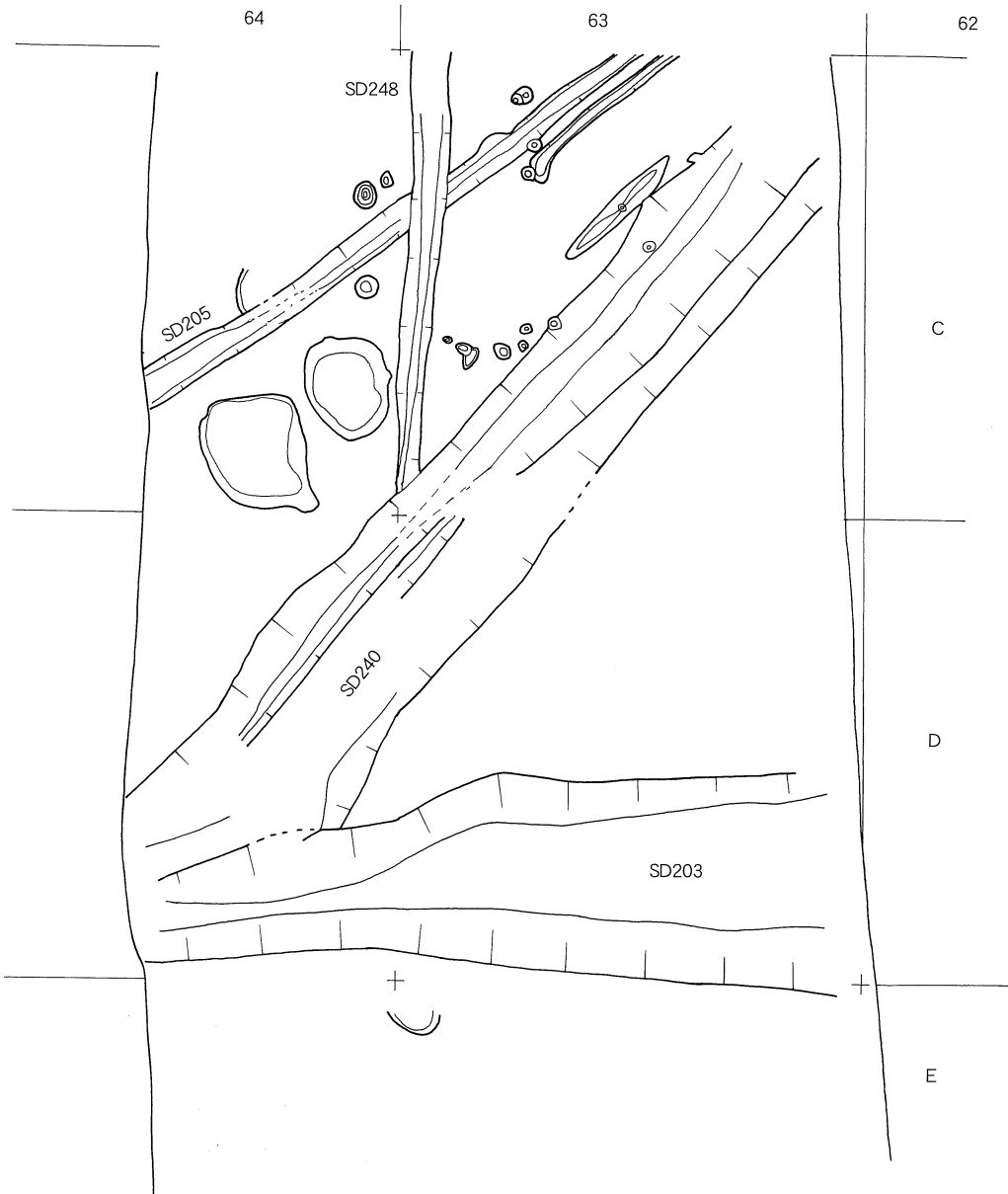
SK241 (第326図) E63区南西隅にあり、SK87に切られた土坑である。検出標高は4.94mで、以降の深さは4cm前後しかない。16世紀前葉の遺物が出土した

出土遺物 (第327図1~8) 1~5は内面にロクロ目を残す在地系土師器である

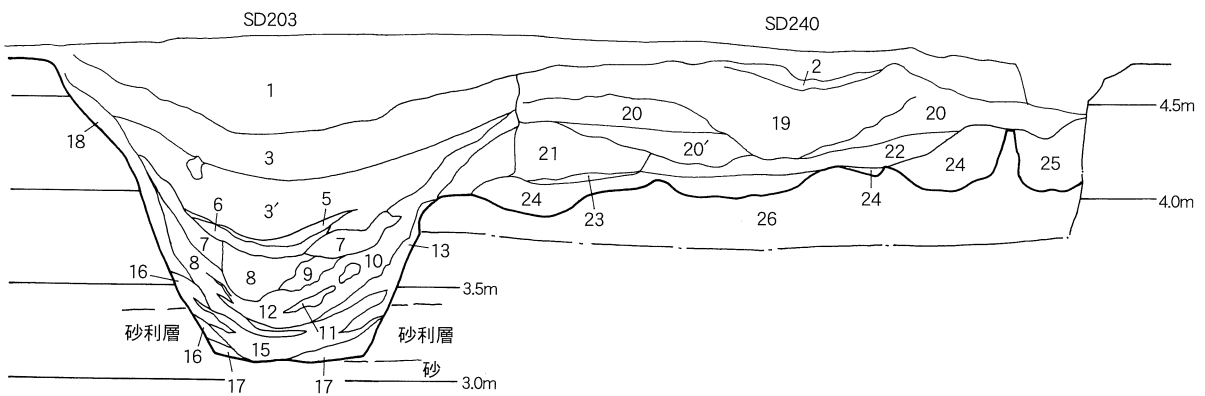
SK250 SD250からは遺物が出土していない。Z区の東側の南北層序断面図(厳密にはZ区に60cm入った線)を示して説明したい。1層は64区では水田床土な硬化面を残し、63区では焼土が少量入った黒褐色土である。2層は黒褐色土、3層は茶褐色土、4層は黄褐色砂質土、5層は褐色土、6層は灰褐色土、7層は暗褐色土、8層は黒褐色土、9層は灰褐色土、10層は黄褐色シルト質土、11層は炭化物を少量混入した黒灰褐色土、12層は灰褐色土。黒色部分は黒色灰層である。SD250はSK215を切って掘り込まれている。幅30cm前後の浅い溝で、Z63区からA63区に東西に走る。東の延長上にはB63区までやや幅広のSD248があるが、同一時期の遺構であろう。



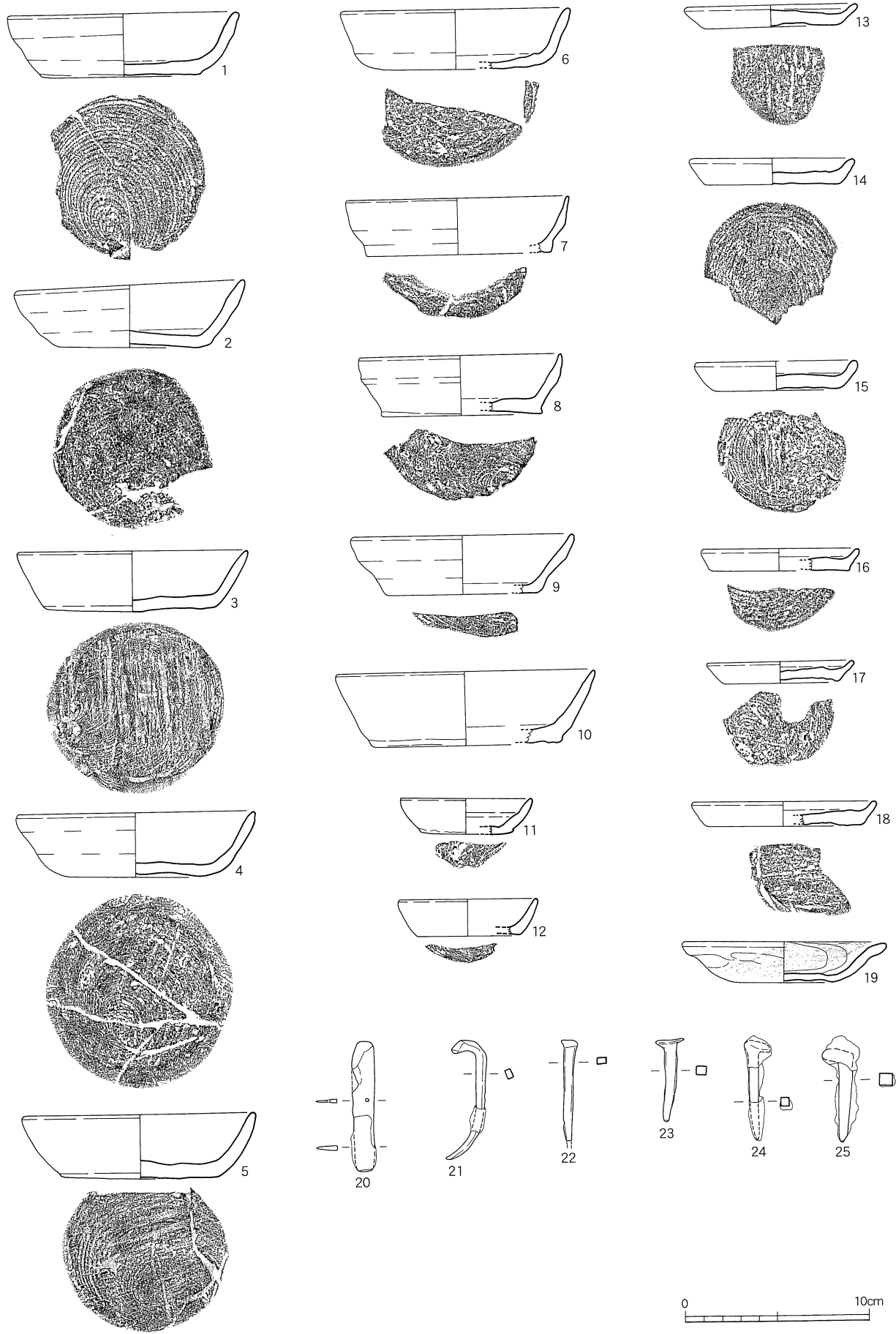
第290図 SK197・199出土遺物実測図



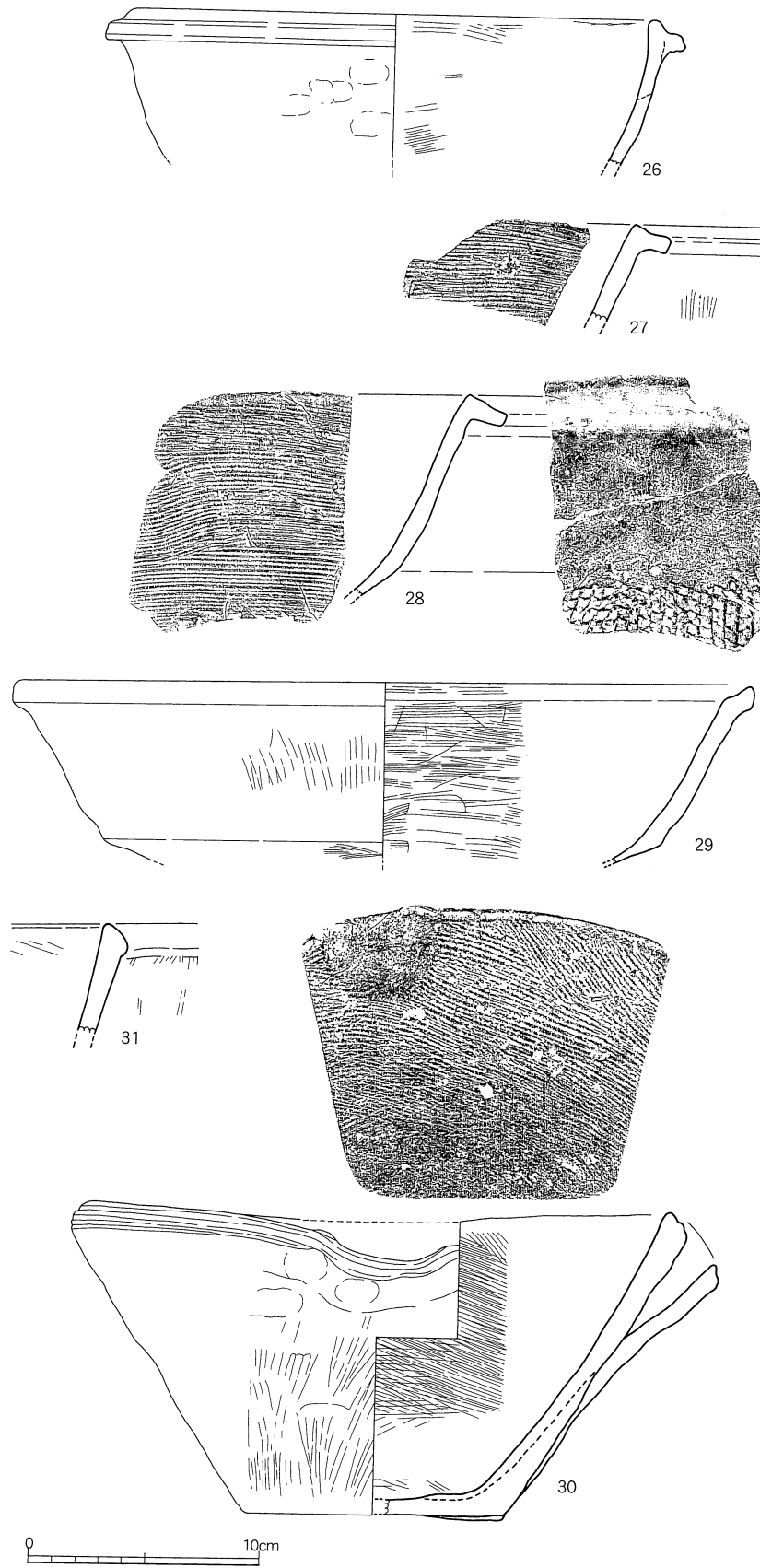
第292図 SD203実測図



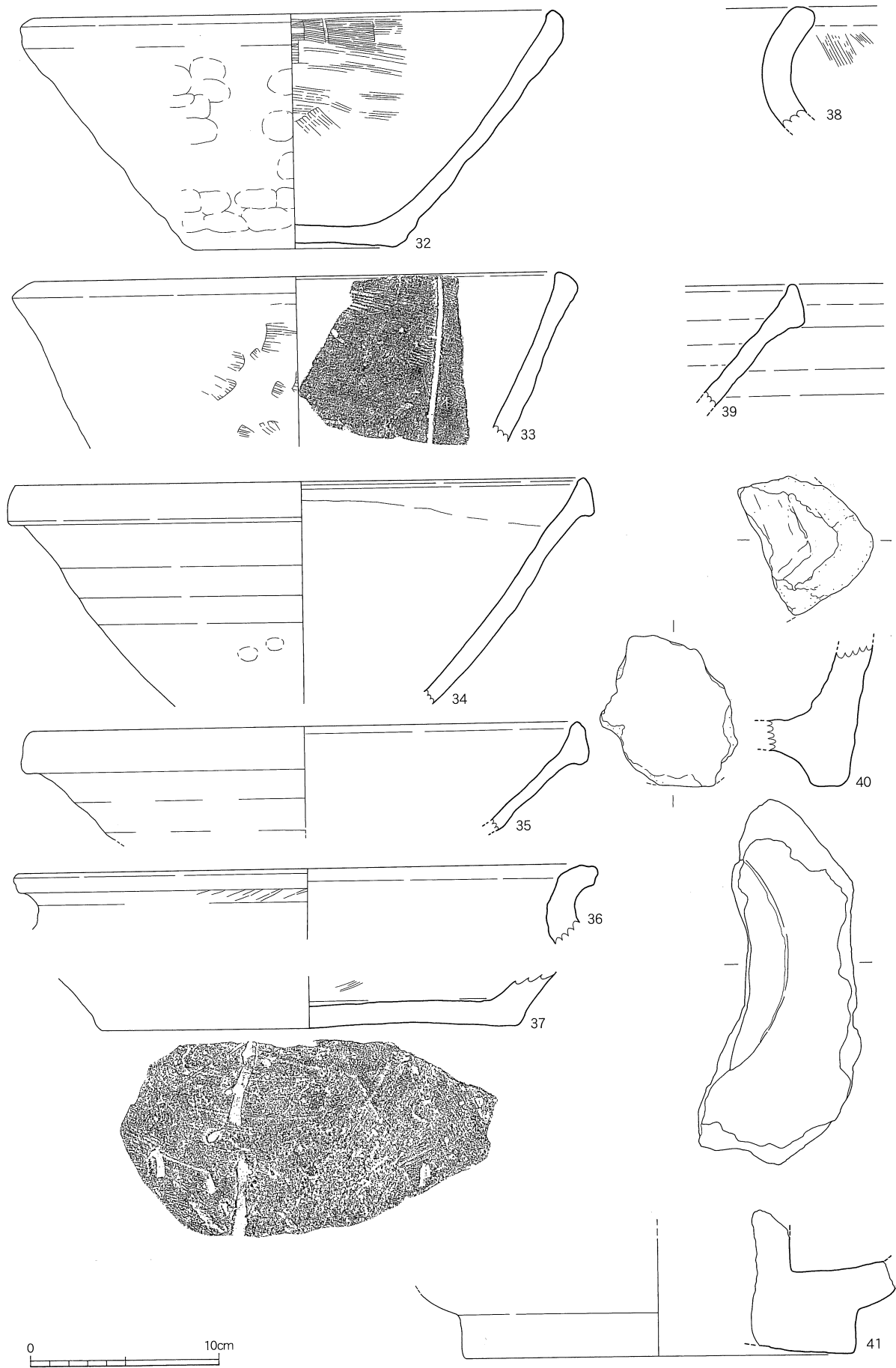
第293図 調査区南端の南向き面層序図



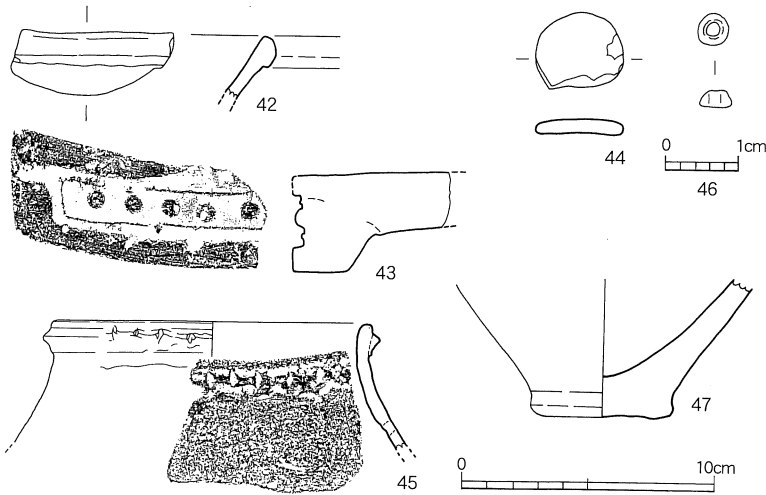
第294图 SD203出土遺物実測図①



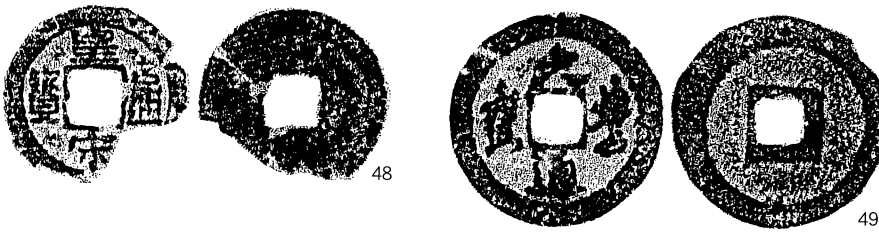
第295図 SD203出土遺物実測図②



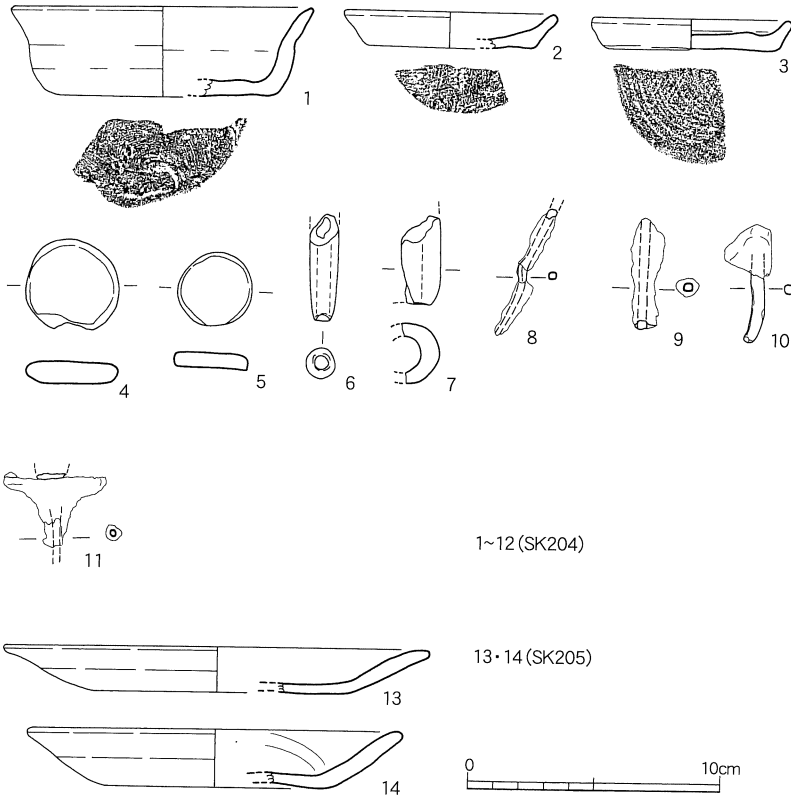
第296図 SD203出土遺物実測図③



第297図 SD203出土遺物実測図④



第298図 SD203出土銭貨拓影



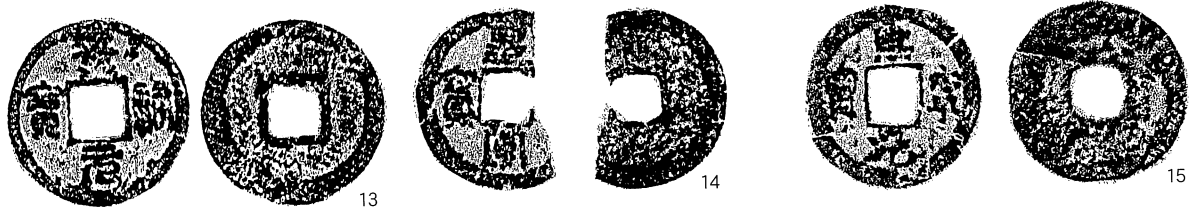
第299図 SK204・205出土遺物実測図

SK242 (第328図) E63区
 の標高4.96mで検出した壁の
 内側三方に石積みを廻らした
 長方形平面の竪穴遺構である。
 平面は東西に長い。規模は
 2.90m×最大2.42m(最小
 2.24m)であり、石壁の内側
 で計ると約5.0m×1.55mとな
 る。深さは最大値で63cm。北
 壁は下部に5個の砂岩を並べ、
 東側から二個目と三個目の上
 に比較的薄い砂岩二個を積ん
 でいる。上に一、二段に円礫
 を積む。南壁は基部に3個の
 砂岩を並べるだけで、東端の
 砂岩は彫り窪めており、その
 下部の長さは10cmであり、も
 し柱を置くのであれば柱直径
 の上限値を示す。

南壁に接して床面南西部に
 柱穴が1個ある。柱穴に関し
 ては南壁に並べられた大型石の
 うち、尤も東に位置する石が
 中央部を上方からえぐり込ま
 れており、ここに柱か何かを
 設置したらしい。

北壁の前には40個以上の円
 礫が壁側から投げ込まれたよ
 うに堆積していた。北壁には
 大石を横に並べた上に小さい
 礫を積み重ねた状態が残っ
 ているが、その上部は不規則に
 しか残っていないので、ここ
 にあった小礫が室内に散乱し
 たのであろう。

出土遺物 (第329図1・2)
 在地系土師器の完形品坏1点と
 京都系土師器小皿の1/4破片が
 出土した。1は口8.5cm、底径
 5.7cm、器高1.2cmである。



第300図 SK204出土銭貨拓影

14世紀初等～15世紀の遺物であるが、後世の京都系土師器が出土しているので遺構の時期は16世紀後葉であろう。2は3期の京都系土師器である。口径8.3cm、器高3.3cm、色調は灰黄色。

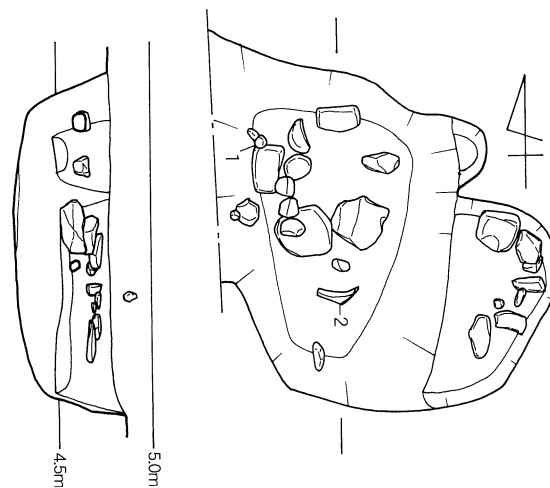
SK243 (第8図) E63・D63区にあり標高4.87mで検出した土坑である。出土遺物から14世紀前葉の遺構とみられる。

出土遺物 (第330図1～6)

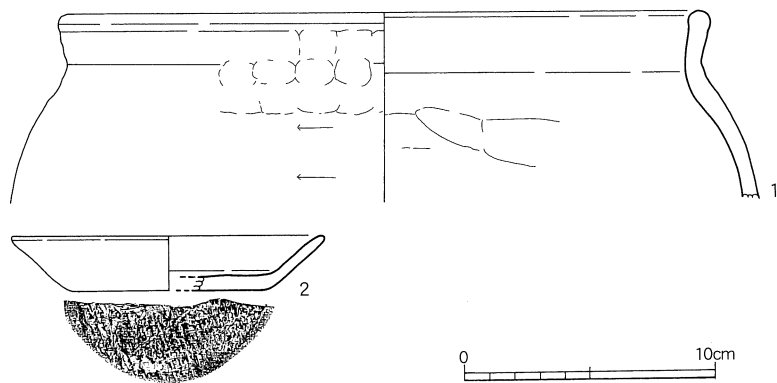
1は在地系土師器で、口径12.6cm、底径10.4cm、器高3.2cmで色調はにぶい黄橙色である。

2は在地系土師器で口径12.2cm、底径8.4cm、器高2.9cmで色調はにぶい黄橙色である。3は

在地系土師器で口径12.5cm、底径9.7cm、器高2.8cmで色調はにぶい橙色である。4は東播系須恵器のこね鉢で、口径30.6cm。5は備前焼甕で、口縁部は丸く折り返している。口径39.6cmである。6は瓦質土器の鉢で、口径21.5cmである。



第301図 SK206実測図



第302図 SK206出土遺物実測図

SD261～SD262 (第117図) 調査区北西部の最下層で検出した溝状遺構群である。出土遺物はなかったが検出標高から14世紀の遺構と考える。方向は東西および北東から南西方向に向いており、16世紀の遺構のように東西南北を指向していない。SD260は東部の末端まで検出できなかっただけであり、もう少し東側に延びて存在したはずである。

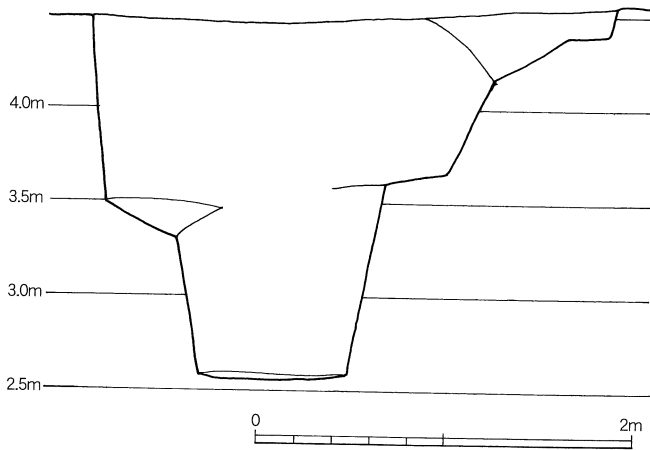
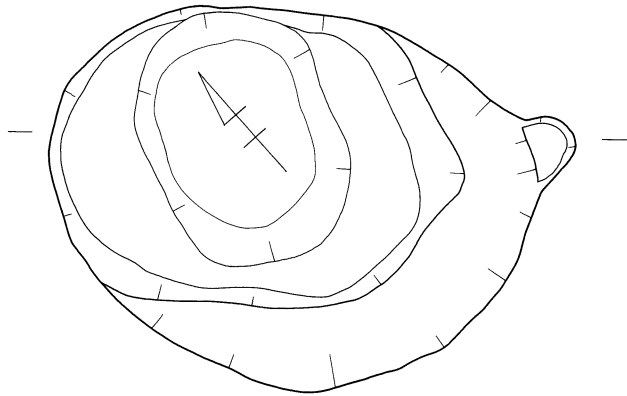
SD263 (第117・334図)

U64区・V64区にあり、SD114・103・84に切られており、標高4.46mで検出した。幅はほぼ30cm、深さは4cm程度である。床面は東部で4.40m、

出土遺物 (第335図1) 1は備前焼の鉢である。口縁部を外側に厚くし、最大径は上部にある。

口径20.0cm。

柱穴類 柱穴類穴類出土遺物を第345図に一括した。遺物の詳細については遺物観察表を参照していただきたい。



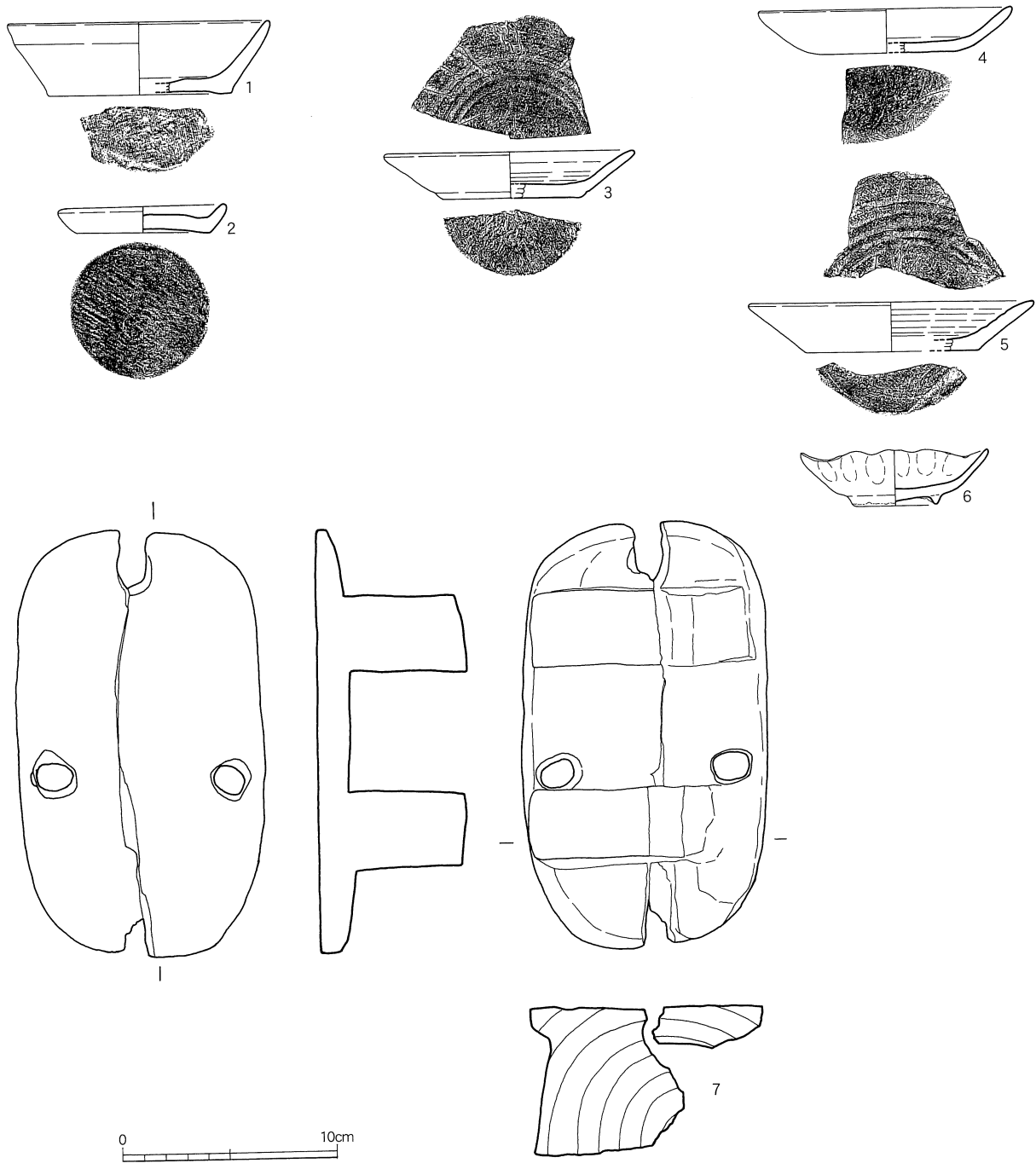
第303図 SE208実測図

道路遺構 (第8・336~338図) 調査区中央部に北西-南東方向に走る道路跡がある。表土下の耕作土を除去した段階で、道路跡を硬化面として把握できた。古い時期の道路は側溝をもち西側に位置したが、時代が経過した段階では砂利を敷いた路面を数枚、やや東寄りに検出した。B区とC区の境界線で断面図を作成したので説明する。

図は西向きの面で、左部5mは64区、右部9.5mは63区である。

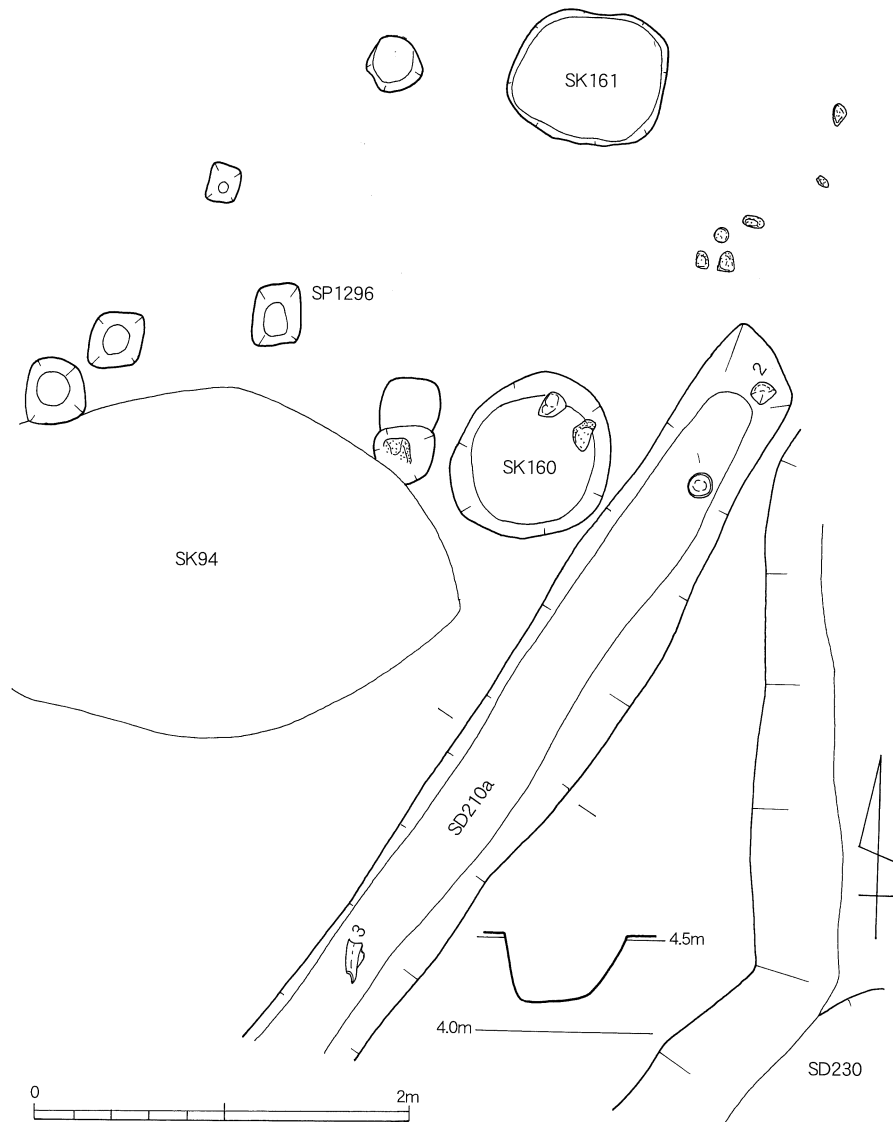
1層は耕作土で水田土、2層は焼土を含んだ黒褐色土、3層は砂・小石混じりの茶褐色土、4層は灰色砂層、5層は3層と同じ、6層は2層と同じ、7層は灰色砂層

で土は少ない。8層は砂層、9層は砂層で上面は硬化、10層は黒褐色砂質土で負う面が硬化、11層は灰色砂層、12層は硬化した黒褐色土層で、13層は灰色砂層で硬化層、14層は地山のシルト質土層でa (褐色土)・b (暗褐色土)・c (灰黒色土)、15層もシルト質褐色土。16層は灰褐色土、17層は砂層でモグラの穴等に落ち込んだ状態である。18層は上面が硬化した砂層、19層は黒褐色土質砂層、20層は茶褐色土、21層は上面が黄褐色土で厚さは1~2cmで砂利を含む。22層は灰色土、23層は地山的な名褐色土、24層は黒褐色土、25層は暗褐色土、26層は混砂土層、27層は灰色土層、28層は地山の名褐色土層、29層は暗褐色土、30層は焼土を含む黒褐色土層、31層は黒褐色土層、32層は褐色土、33層は灰褐色土、34層は黒色灰多量と焼土少量を含む黒褐色土、35層は褐色砂質土、36層は黒褐色土、37層は灰褐色土、38層は砂質の暗褐色土、39層は暗黒褐色土、40層は茶褐色土、41層は灰黒褐色土、42層は灰黒色土、43層は灰黒色土で上面に厚さ5mmの黄色土がある。44層は褐色のシミがある灰褐色土、45層は茶褐色土、46層は灰黒色土、47層は黄褐色砂質土。42層から47層はSD240であり、右側のSD213を切り込んで掘られたことが分かる。48層は黒褐色土、49層は褐色土でこの2層はSD213である。



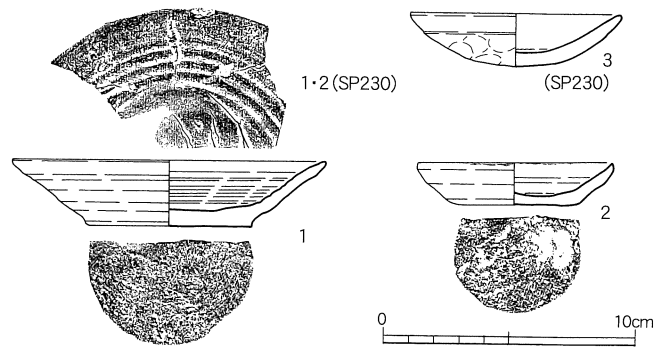
第304図SE208・SK209出土遺物実測図

SD213 C64区南西にあり標高4.66mで検出した溝に似た細長い溝状遺構である。南側では14世紀の遺物が出土したSK204に切られる。SD213はSD240と平行に走り、検出面では一条の溝と考えていたが、掘り下げると二つに分かれた。SD213の遺物としたものにはSD240のものが混じっている。

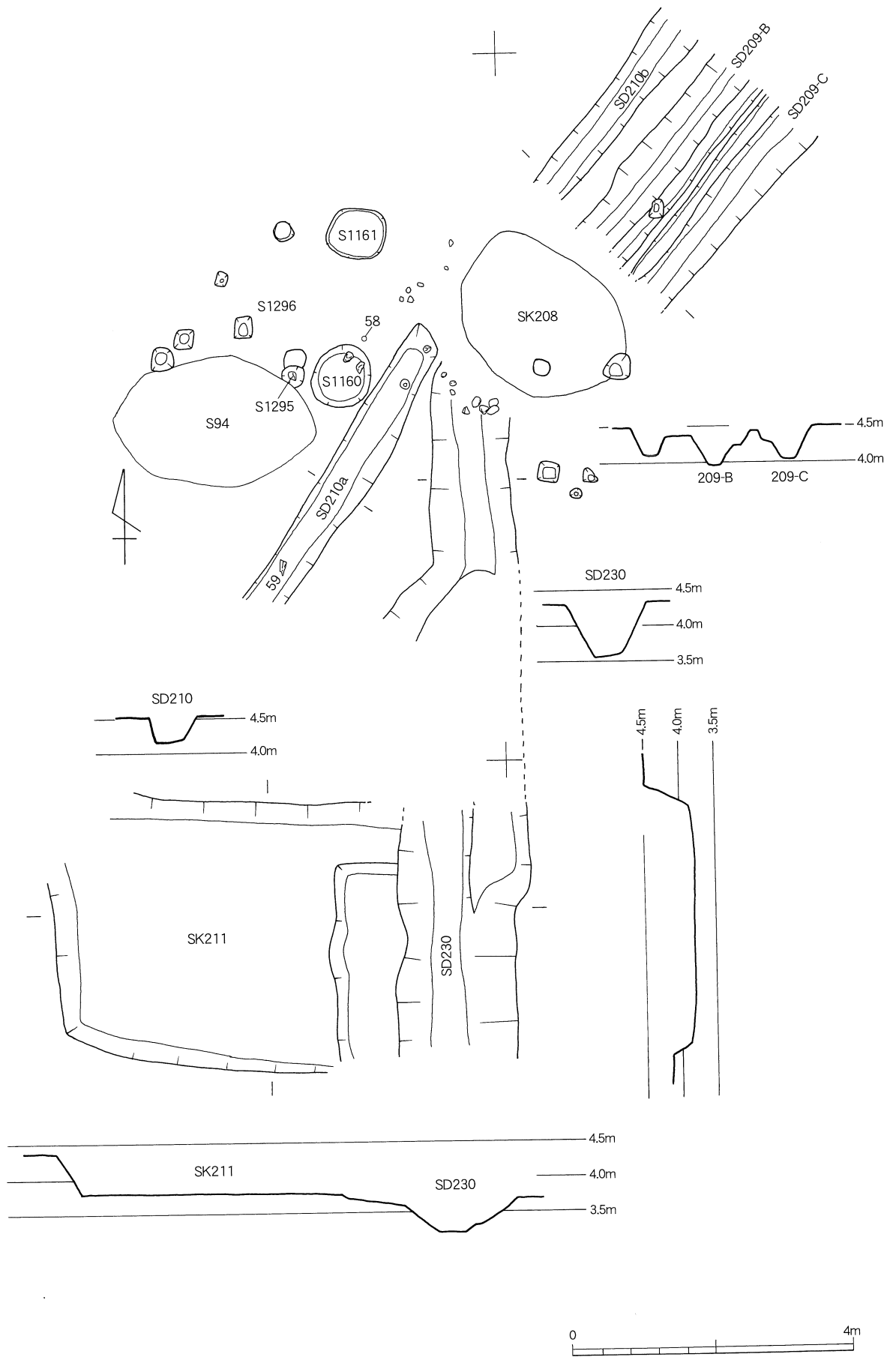


第305図 SD210と周辺実測図

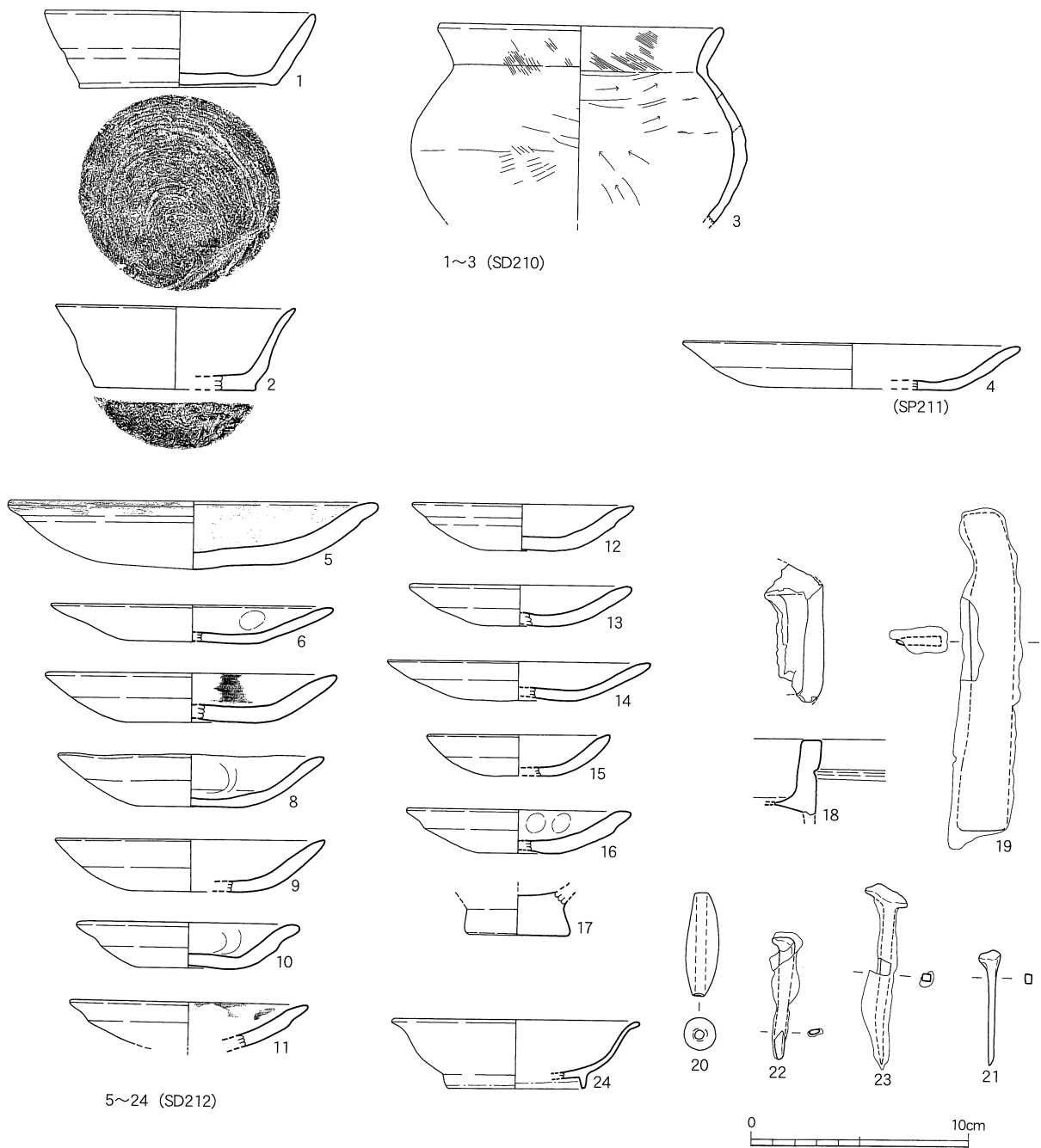
出土遺物（第339図1～10） 1～5は在地系土師器の皿である。1は底部糸切り離し後に板状圧痕がつく。口径12.5cm、底径8.5cm、器高3.0cmで、色調はにぶい黄橙色を呈する。体部下部がまるく立ち上がる特徴をもつ。2～5は標高4.62m前後の小範囲に集中して出土した一括遺物である。2・3・5は器体として完成した後に内面中央部を指で強く一方向に一回ナデた痕跡が残る。2～5は胎土に金色の雲母を少量含む。2は口径8.0cm、底径7.0cm、器高1.2cmである。



第306図 SD230・232出土遺物実測図

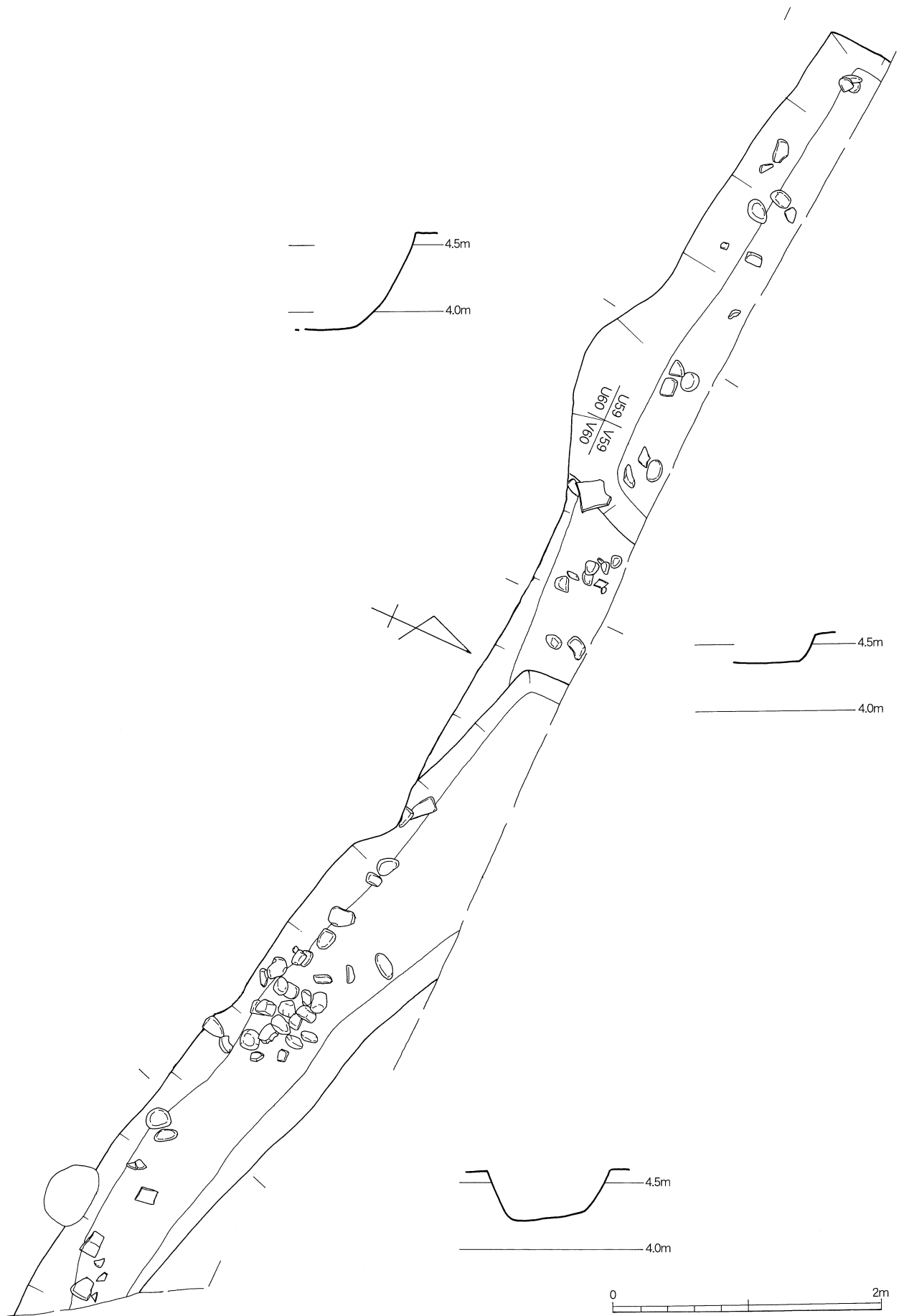


第307図 SK211・SD230等実測図

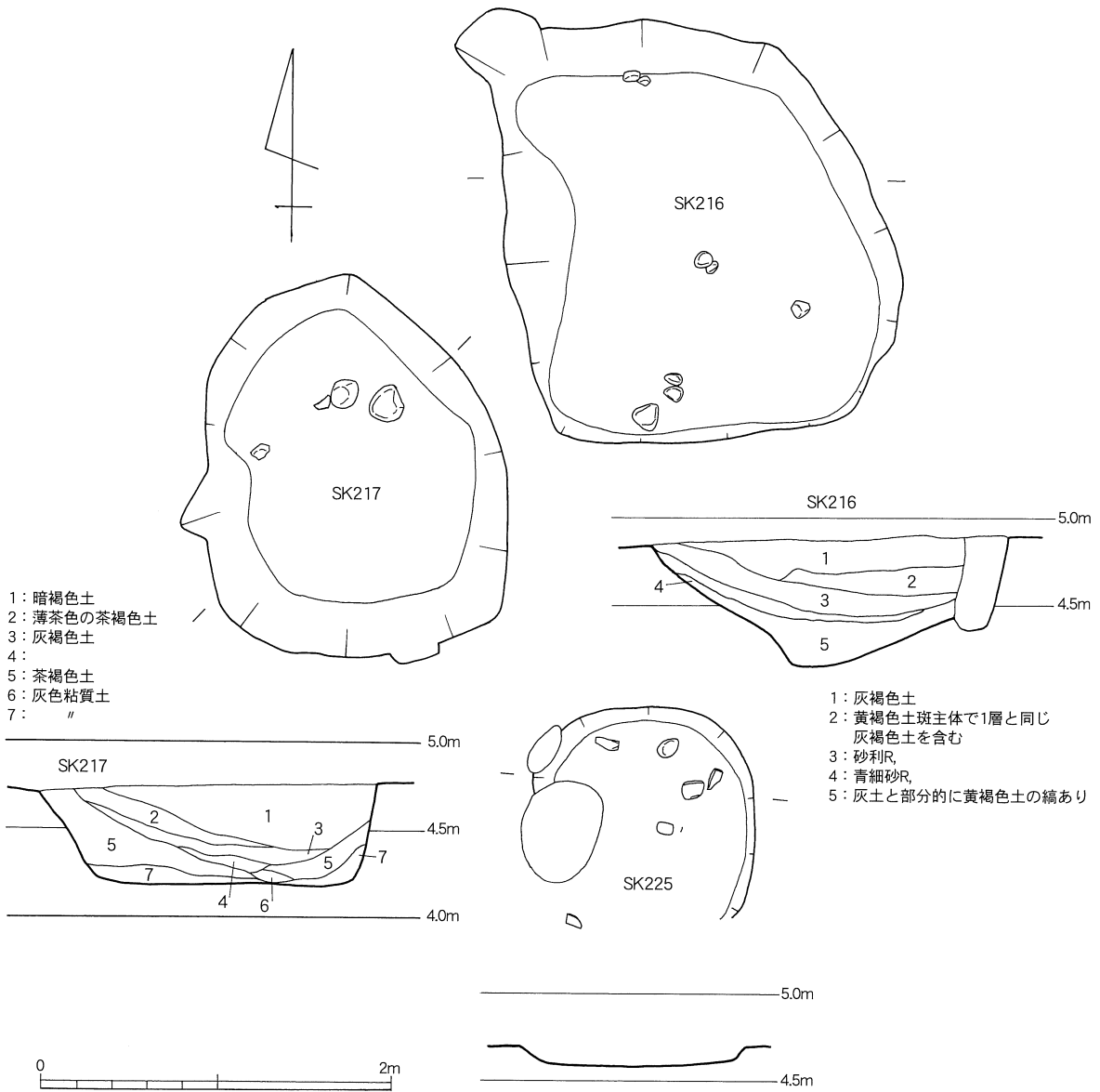


第308図 SD210～212出土遺物実測図

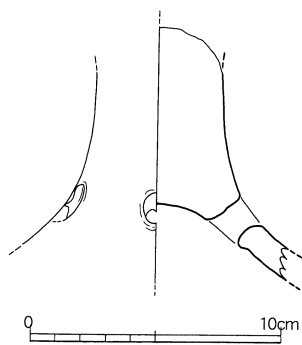
3は口径7.7cm、底径6.5cm、器高1.4cm、4は口径7.7cm、底径5.6cm、器高1.5cmである。3・4が口縁部を少し欠くが2・5は完全に残っている。5は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.5cmである。2～5は口径が7.7cm～8.0cmと近似値を示す。底径は5.6cm～7.0cmとややばらつきがある。器高は1.2cm～1.5cmである。2～5の土師器坏に関しては同じ地域で製作されたとみられる。



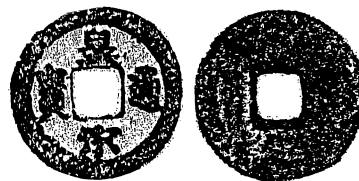
第309図 SD212実測図



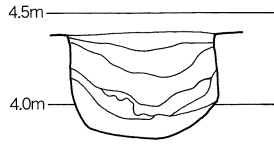
第310図 SK216・217・225実測図



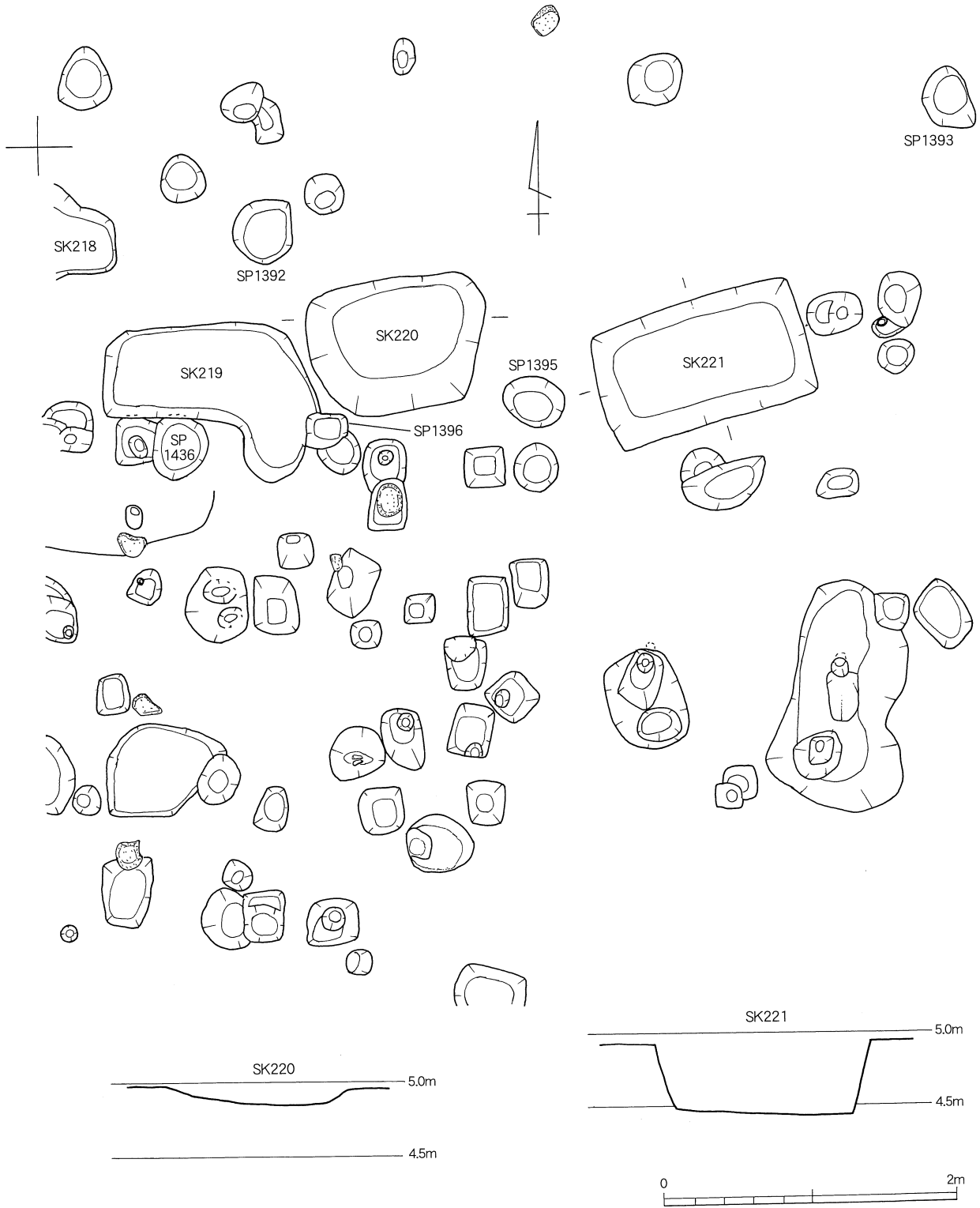
第311図 SK217出土遺物実測図



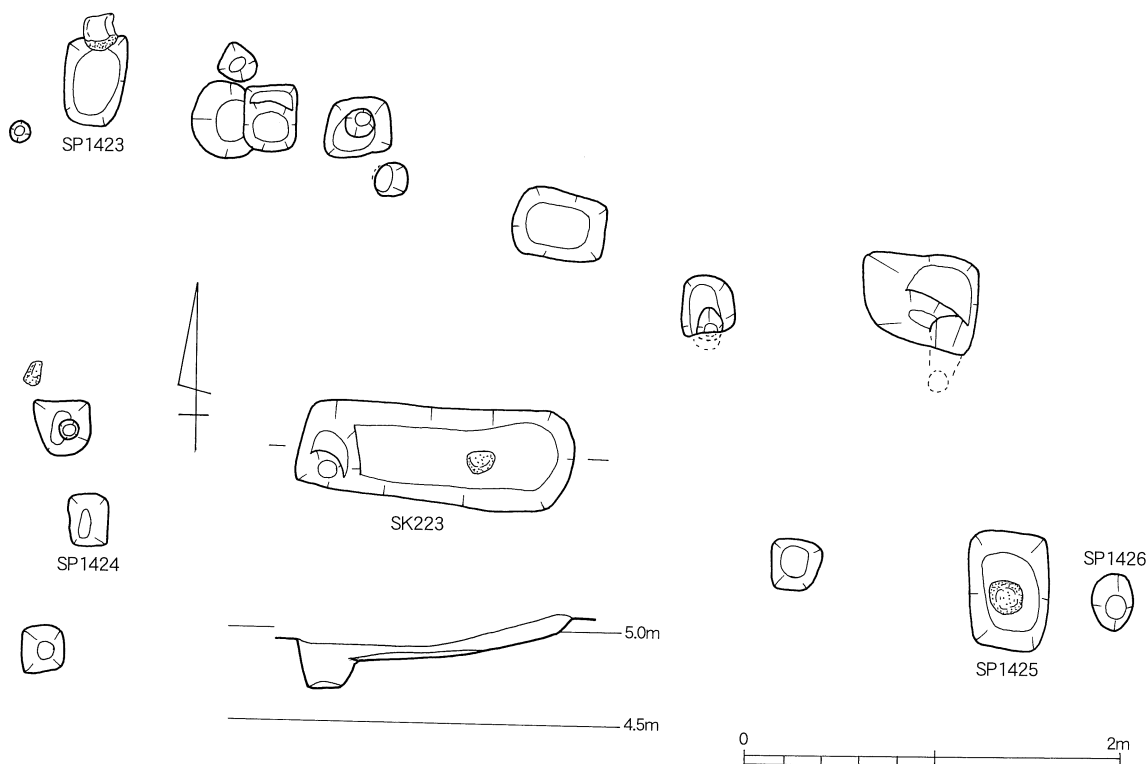
第312図SK218出土銭貨拓影



- 1: 茶色土(径3mm)を少量含む灰褐色土。
- 2: 炭化物・焼土微量。茶褐色土。茶色土も少量。
- 3: 灰炭化物・焼土を点々と少量。黒茶褐色土。
- 4: 黄褐色土を主体に炭化物少量。
- 5: 炭化物少量の黒褐色土。3R1と同色。
- 6: シルト質褐色土。



第313図 SK219～221と周辺実測図



第314図 SK223と同時検出面の柱穴類実測図

6は灰色を呈するうの瓦質土器の甕口縁部破片である。7は灰色を呈する常滑焼き甕で、口縁部内面上部から外面全体に自然釉が掛かっている。口縁部は外側に短く折り曲げて密着させている。8は東播系須恵器の鉢で、色調は灰白色を呈する。10は見込み中心部と高台畳付きから内部が露胎で、他は黄色味を帯びたオリーブ色の中国龍泉窯系青磁皿である。口径11.4cm、底径4.5cm、器高2.7cm。土師器坏・皿類は14世紀初頭頃の遺物である。

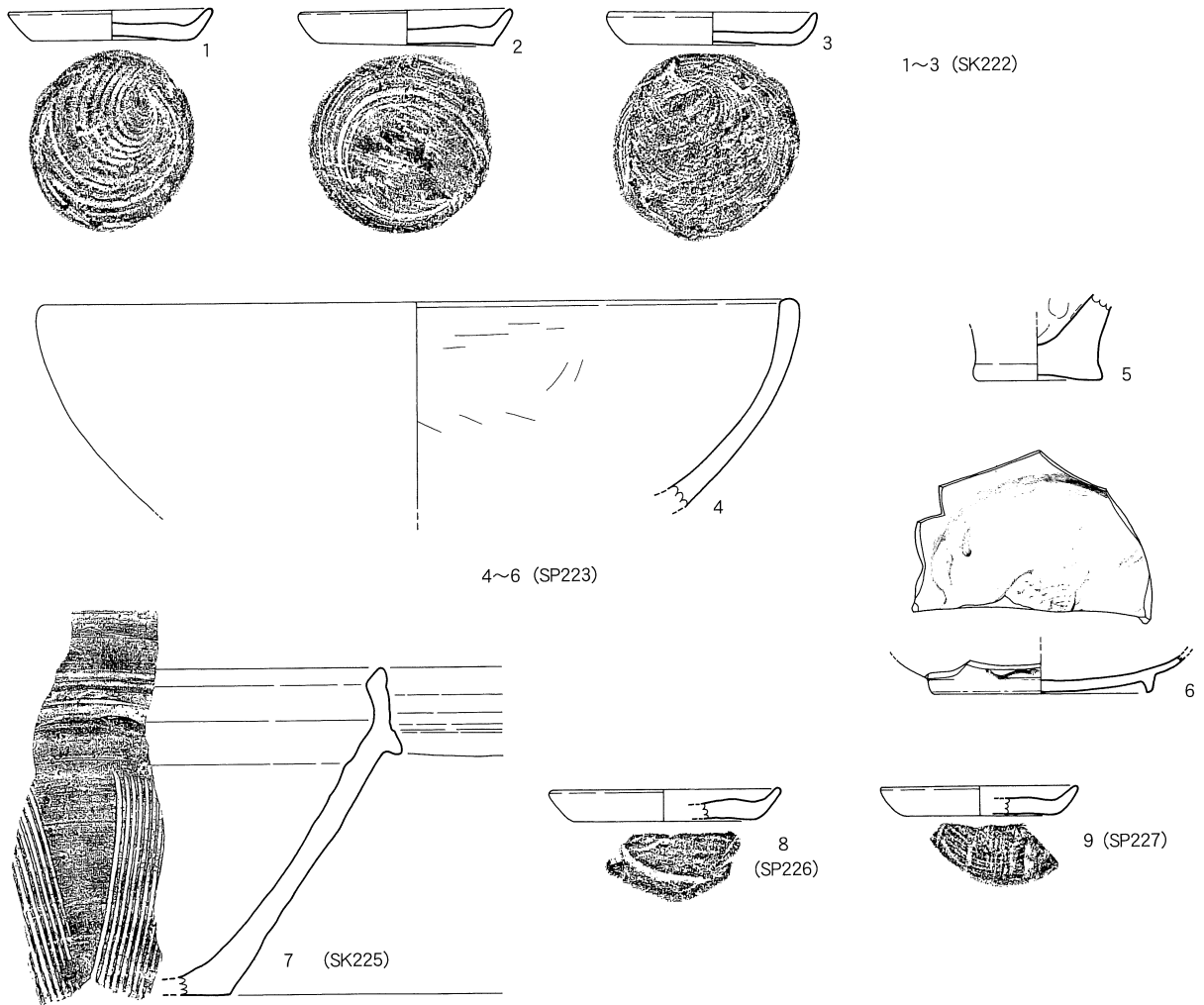
柱穴類出土遺物

柱穴類から出土した遺物を説明する。

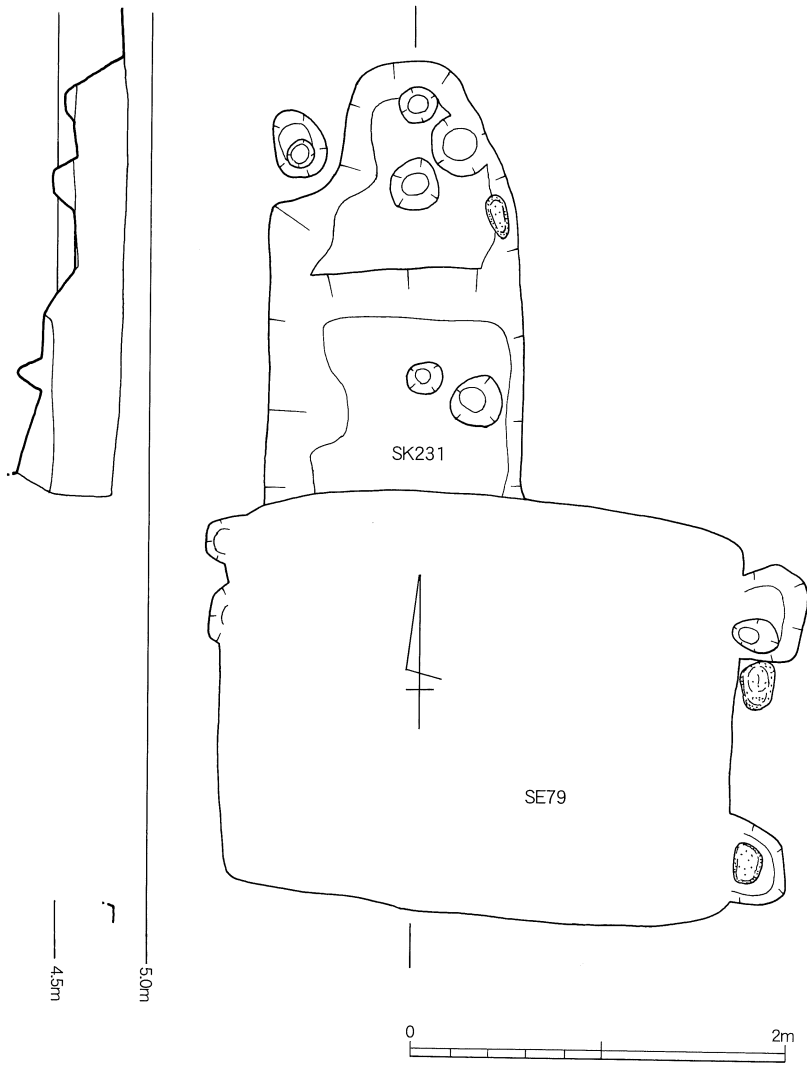
(第345図1～16) 1はSP1019出土の土師器皿である。体部が直線的に外反し、中位で厚みをもつ土師器皿で、口径12.7cm、底径9.0cm、器高3.6cmである。色調は淡い橙白色を呈する。14世紀中葉～後葉に属する。2はSP1035出土の体部が内湾気味に立つ坏である。口径8.2cm、底径6.5cm、器高1.4cm。3はSP1043出土の中国景德鎮窯系の青花皿で、高台の畳付き部だけが露胎、他は施釉している。底径6.0cm。4はSP1044出土の3期の京都系土師器である。淡灰黄色を呈する。口径10.7cm、器高2.1cm。5はSP1052出土の3期の京都系土師器である。黒褐色を呈する。6はSP1072出土の3期の京都系土師器である。口径は13.2cm、器高2.5cm。淡橙褐色を呈する。7はSP1072出土の3期の京都系土師器である。口縁部に煤が付着しており灯明皿として使われている。淡灰黄色を呈する。口径7.7cm、器高1.8cm。8はSP1075出土の3期の京都系土師器である。口径12.4cm、器高2.4cmで、暗灰褐色を呈する。9はSP1076出土の2期あるいは3期の京都系土師器である。口径12.8cm、器高2.6cmで、橙褐色を呈する。10はSP1076から出土した景德鎮窯系青花のB群皿である。畳付き以外は施釉している。口径12.3cm、

底径6.2cm、器高2.3cm。11は同じくSP1076から出土した白磁皿B群である。口径12.6cm、底径6.6cm、器高3.1cm。畳付き以外は施釉している。12~14はSP1077から出土した。12は底部を糸切り離し、内面にロクロ目を残す。口径8.0cm、底径4.8cm、器高1.7cm。淡灰橙色を呈する。16世紀前葉に属する。13・14は3期の京都系土師器である。口径12.3cm、器高2.1cmで淡橙灰色を呈する。14は口径12.4cmで、淡橙褐色を呈する。15はSP1084出土の3期の京都系土師器で、口径9.4cm、色調は淡橙褐色。16はSP1088出土で3期の京都系土師器である。淡灰黄色。

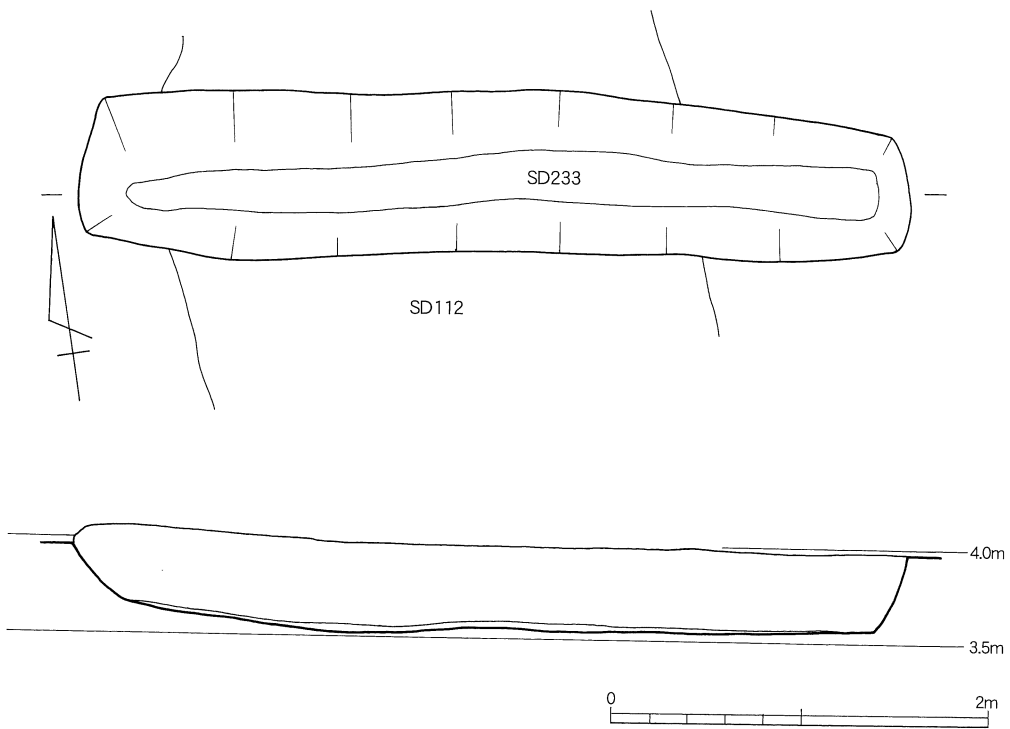
(第346図1~27) 1はSP1115出土の3期京都系土師器。2はSP1124出土の3期の京都系土師器で、口径11.4cm、器高3.1cm。3・4はSP1130出土の土師質土錘。5はSP1139出土の1期あるいは2期の京都系土師器で、口径12.4cm。淡灰黄色を呈する。6・7はSP1148出土で6は2期の京都系土師器で口径12.4cm。灰黄色を呈する。7は3期の京都系土師器である。灰黄褐色。8はSP1149出土の3期の京都系土師器である。9はSP1154出土の3期の京都系土師器で、口径11.2cm、器高2.2cm。灯明皿。10はSP1161出土の3期の京都系土師器。11はSP1178出土の3期の京都系土師器で、口径10.8cm。12・13はSP1203出土の3期の京都系土師器である。12は口径15.4cm、器高2.0cm。13は灯明皿で口径8.5cm、器高1.8cm。14はSP1214出土の在地系土師器の耳皿である。復元幅4.5cm、底径3.9cm、器高1.8cm。浅黄橙色。15はSP1241出土のガラス玉で幅4mm。緑色。16はSP1242出土のガラス容器破片である。縦2.5cm、横8mm、



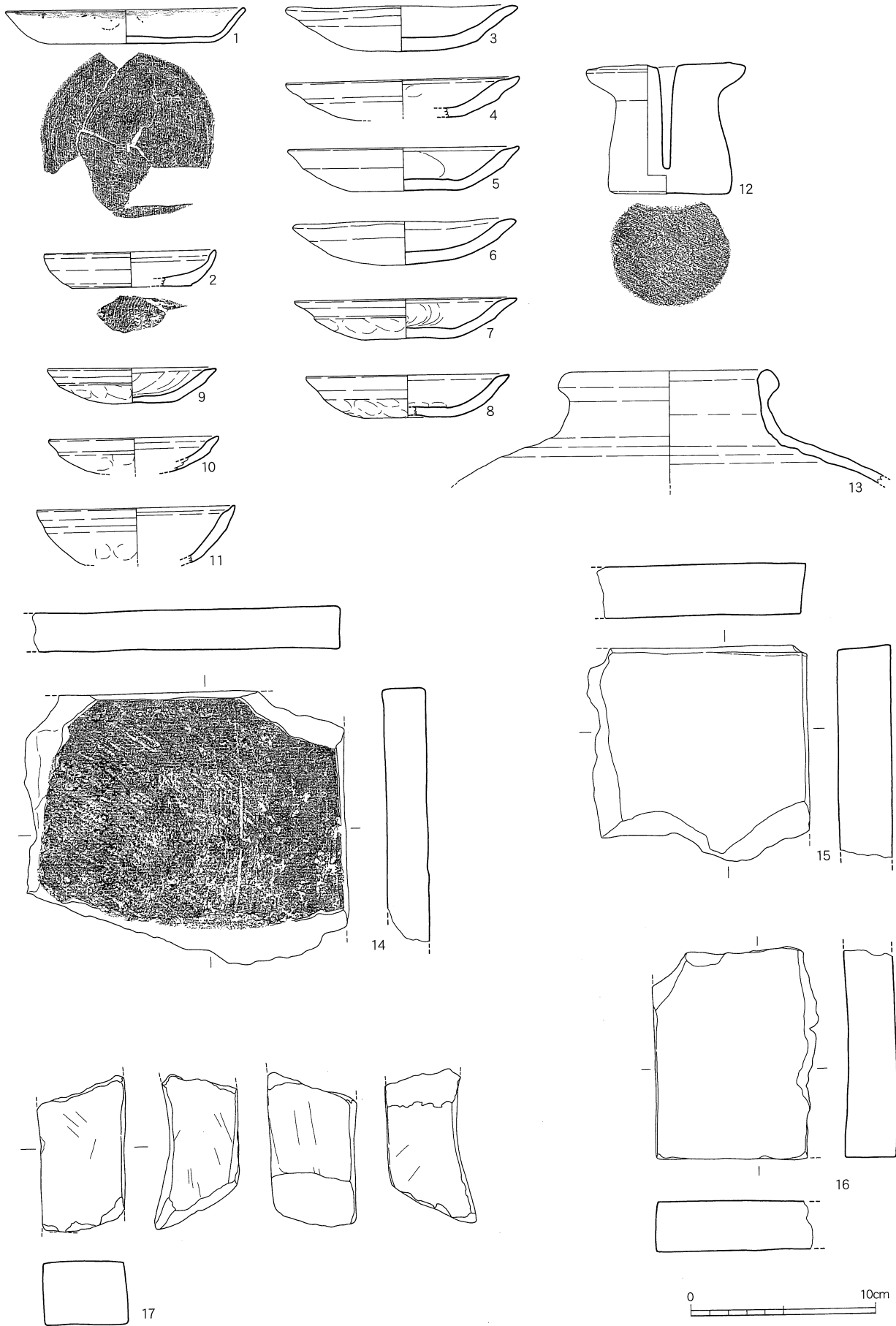
第315図 SP223~227出土遺物実測図



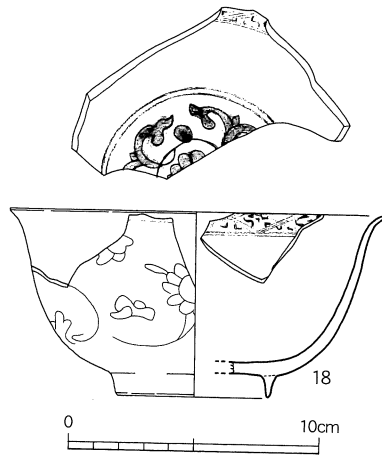
第316図 SK231実測図



第317図 SD233実測図



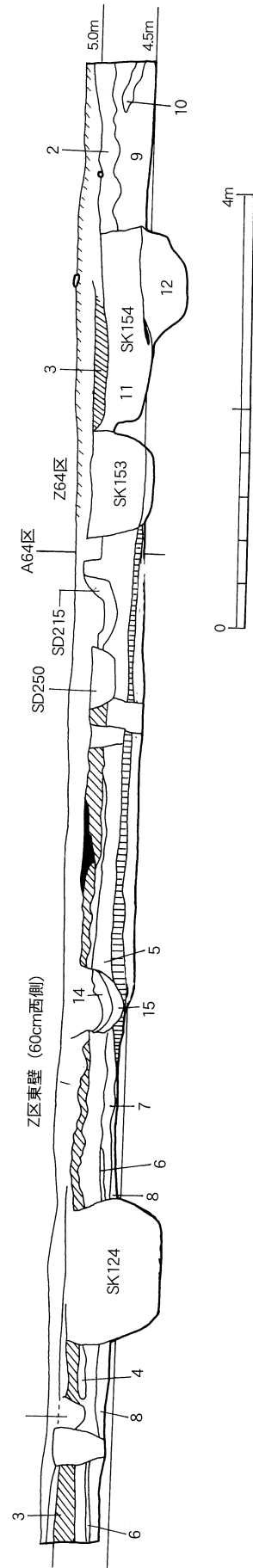
第318图 SD233出土遺物実測図



第319図 SD233出土遺物実測図

厚さ4mm、緑色である。17・18はSP1243出土。17は3期の京都系土師器。口径8.2cm、器高1.5cm。18は軒平瓦で、上面には布目痕が残り、下面は工具なで痕がある。軒の厚さは3.8cmである。19・20はSP1244出土。19は口径11.8cm、底径9.0cm、器高4.1cm。にぶい黄橙色を呈する。20は1期あるいは2期の京都系土師器の灯明皿である。口径14.6cm。21はSP1250出土の15世紀後葉の在地系土師器で、灯明皿である。口径8.4cm、底径5.2cm、器高1.8cmでにぶい橙色を呈する。22・23はSP1249出土の2期の京都系土師器で、にぶい黄橙色を呈する。22は口径14.6cm、器高1.7cmである。23は口径7.6cm、器高1.5cm。24はSP1256出土の在地系土師器である。口径8.2cm、底径6.8cm、器高1.5cm。25はSP1245出土の京都系土師器の小皿で、口径4.4cm、器高1.6cm。26・27はSP1260出土の在地系土師器でにぶい橙色を呈する。26は口径2.4cm、底径9.6cm、器高3.6cm。27は糸切り後の板状圧痕が残る土師器で、口径8.4cm、底径6.4cm、器高1.6cmである。

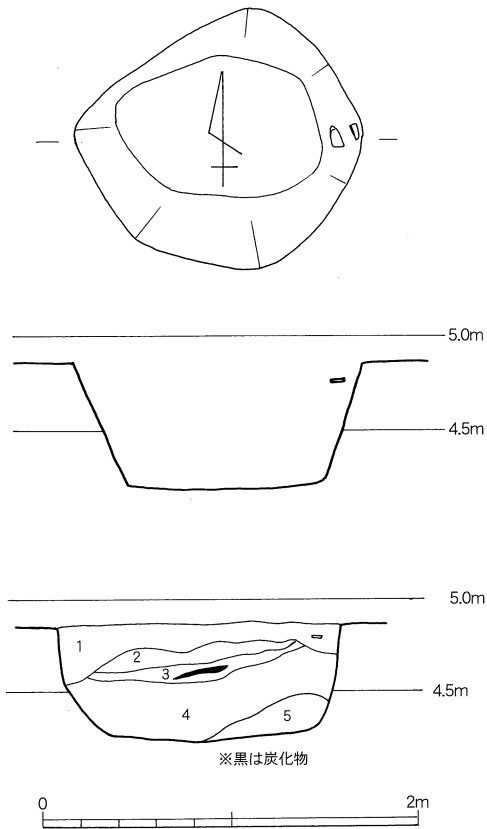
(第348図1～26) 1はSP1324出土の3期の京都系土師器である。口径13.0cm。2～5はSP1325出土の在地系土師器で、3～5は坏である。2は体部の中程に稜線を持つ皿で、口径14.0cm、底径10.1cm、器高3.0cm。口径・底径・器高は3 (8.8cm・7.4cm・1.2cm)、4 (8.8cm・7.2cm・1.3cm)、5 (9.2cm・7.4cm・1.3cm) である。SP1325の遺物は14世紀前葉頃である。6・7はSP1329出土の土師器で6は体部中位が厚い特徴を持つ。口径11.6cm、底径7.0cm、器高3.7cm。にぶい黄橙色を呈する。7は口径8.4cm、底径6.8cm、器高1.3cm。暗黄色を呈する。8はSP1338出土の土師質土錘。長さ2.7cm、幅1.3cm、重さ5.0g。9はSP1343出土の土師質燭台の上部である。10はSP1362出土の1期の京都系土師器で、口径16.0cm。黄橙色を呈する。



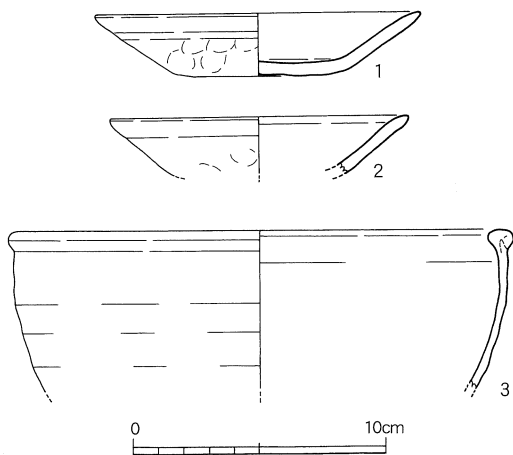
第320図 Z区東壁図

11はSP1364出土の3期の京都系土師器で口径12.6cm。淡黄色。12はSP1365出土の2期頃の京都系土師器である。灯明皿として使われている。口径17.0cm。暗灰色。13・14はSP1367出土の瓦質土器鍋である。13の器面調整は刷毛目である。口径28.0cm。外面は煤で黒く、内面は橙色。14は刷毛目調整後になで仕上げしている。口縁部は外湾する。15はSP1372出土の2期頃の京都系土師器で口径12.6cm器高2.3cm。淡黄色。16はSP1376出土の2期頃の京都系土師器で口径14.0cm、器高1.9cm。期橙色。17・18

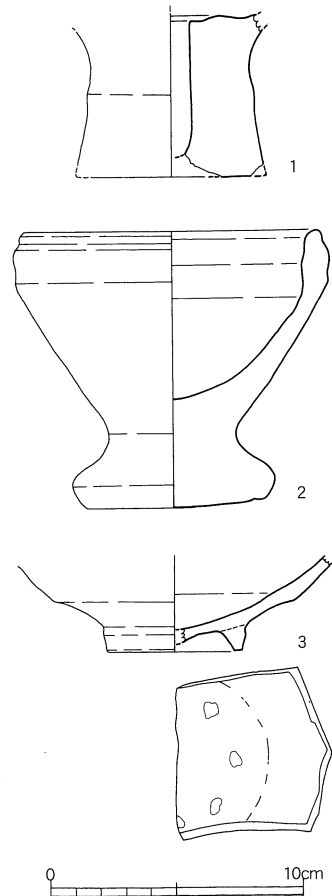
はSP1382出土の3期の京都系土師器で、17は口径10.6cm。淡黄色。18は口径10.0cm、器高1.9cm。黄褐色。19はSP1389出土の在在系土師器。口径7.6cm、器高1.5cm。淡黄色。20はSP1389出土の2期頃の京都系土師器である。口径12.8cm、器高2.2cm。淡黄色。21はSP1399出土の土師器坏で、口径8.0cm、底径7.0cm、器高1.2cm。淡黄色。22はSP1400出土の土師器坏で、口径7.6cm、底径6.9cm、器高0.9cm。明橙色。23～26はSP1403出土。時期坏である。口径・底径・器高は次のとおりである。23 (8.4cm・6.6cm・1.5cm)・24 (7.6cm・6.8cm・1.3cm)・25 (8.1cm・7.0cm・1.3cm)・26 (8.4cm・6.6cm・1.3cm)。



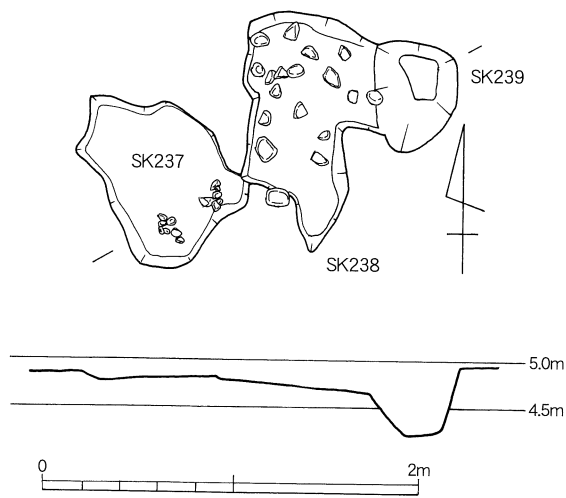
第322図 SK236実測図



第323図 SK236出土遺物実測図

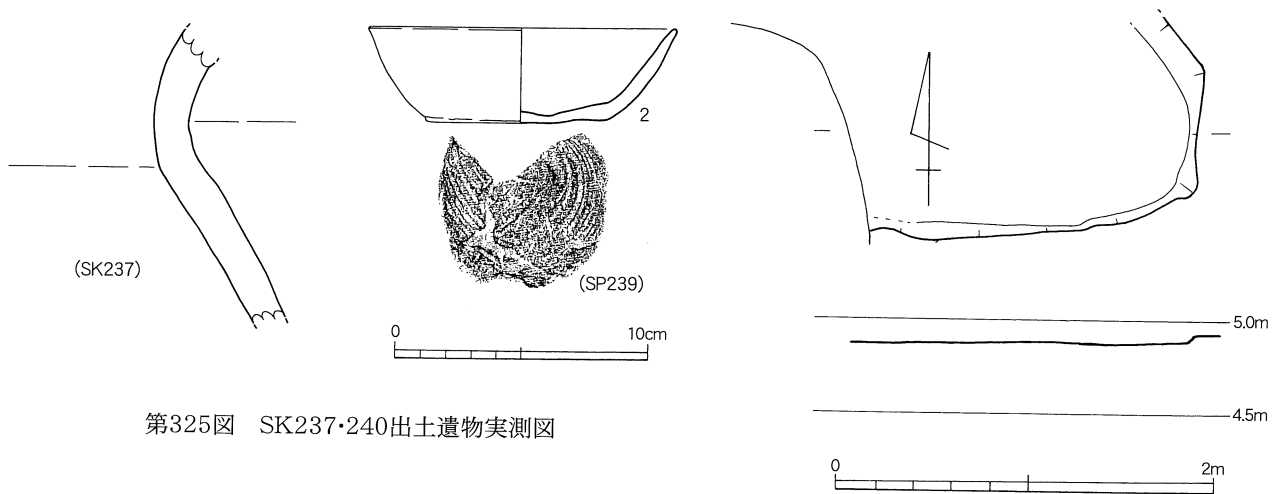


第321図 SP234・235出土遺物実測図



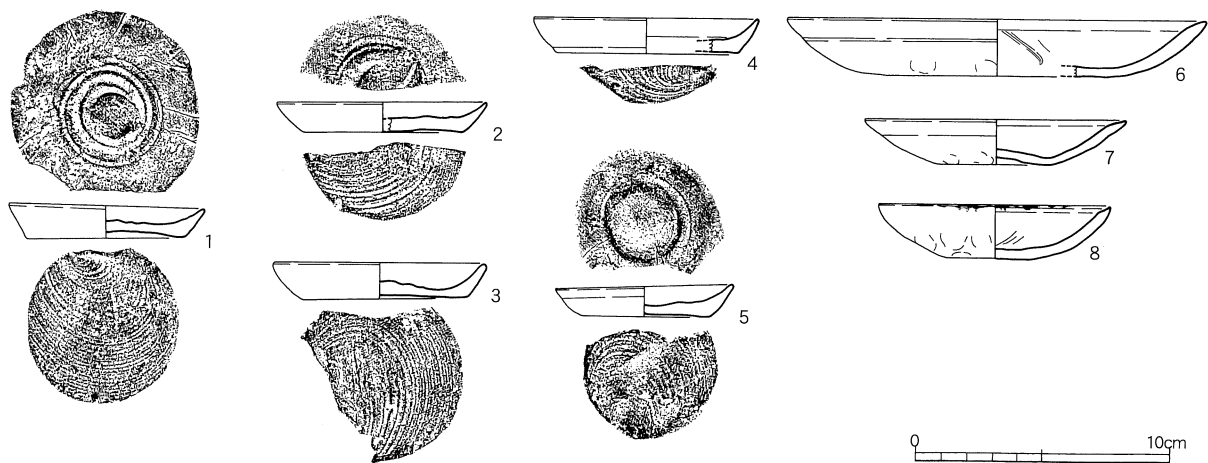
第324図 SK238・239実測図

(第349図1~17) 1はSP1408出土。口径7.7cm、底径6.5cm、器高1.3cm。淡灰橙色。2はSP1410出土の2期の京都系土師器で口径15.9cm、器高2.9cm。淡灰橙色。3はSP1411出土の在り系土師器で橙褐色。4はSP1413出土小皿で口径8.0cm底径6.6cm、器高1.3cm。明橙褐色。5はSP1422出土の在り系土師器である。6はSP1442出土の古墳時代土師器碗。7~9はSP1446出土。7は口径8.3cm、底径7.2cm、器高1.3cm。底は糸切り後に板圧痕がつく。淡灰黄色。8は底は糸切り後に板圧痕がつく。口径7.9cm、底径6.5cm、器高1.4cm。黄褐色。9は在り系土師器で、口径12.3cm。橙色。10はSP1449出土土師器で、口径12.8cm、底径7.9cm、器高3.5cm。黄褐色。11・12はSP1450出土。11は底は糸切り後に板圧痕がつく。口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.1cm。黄褐色。12は口径8.2

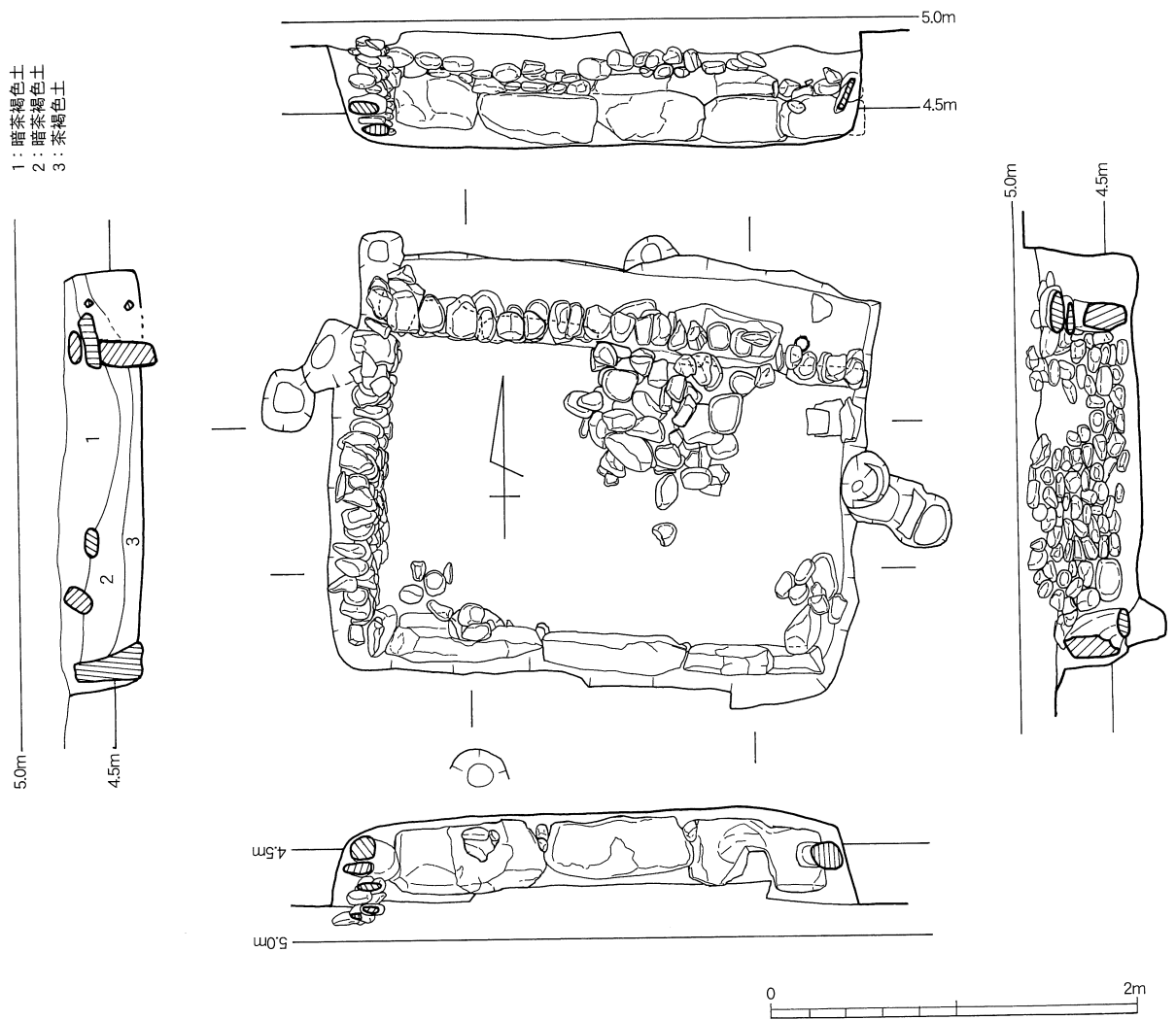


第325図 SK237・240出土遺物実測図

第326図 SK241実測図

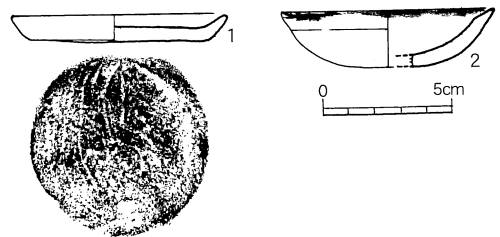


第327図 SK241出土遺物実測図



第328図 SK242実測図

cm、底径6.4cm、器高1.4cm。等褐色。13はSP1451出土土師器。口径12.0cm、底径9.2cm、器高3.1cm。橙褐色。14はSP1452出土土師器。口径14.8cm、底径11.0cm、器高3.5cm。黄褐色。15・16はSP1453出土。15は口径8.1cm、底径6.6cm、器高1.6cm。橙褐色。16は口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.4cm。17はSP1832出土の3期京都系土師器で口径13.0cm、器高2.3cm。黄褐色。



第329図 SK242出土遺物実測図

銭貨 (第350~373図) 包含層出土の銭貨については巻末の遺物観察表を参照願いたい。